



妄想アマガエル日記







妄想アマガエル日記－プロローグ

毎日、アマガエルを見かけるので、彼らは私にとってとても身近な存在である。しかし、その見かけた瞬間の彼らしか知らない。

だけど、彼らは私と同じ時空間を生きているわけである。

つまり、彼らを見かけた時だけが彼らがこの時空間にいるわけではなく、ずっと彼らはいるのである。

そんなことを考えていると、彼らが一日をどのように過ごして、どのように考えているのかを勝手に想像してみたくなった。想像というよりはただの妄想である。

そこで、あまり見てくれる人もいないので、このnoteを使って、架空のアマガエルの日記を妄想してみようと思った。主役はもちろんアマガエルである。名なんて無いが、そうすると区別するのが難しそうなので、『銀次郎』という名をつけることにした。意味はまったくないし、日記なのでこの名が出てくることはほとんどないと思う。

では、気ままに架空のアマガエルの日記を妄想していこうと思います。

豊田ホタルの里ミュージアム
学芸員　川野敬介

妄想アマガエル日記（1）－7月15日（土）くもり時々雨

カエルになって今日で10日目だ。

つい最近まで水の中にいたけれど、その時のことはあまり覚えていない。

ただ、水の中にいた時は音を聴いたことがなかったし、風を感じることもなかった。少しずつ脚がでて、尾にあったヒレがなくなっていくに従って、水の中では暮らしにくくなった。オタマジャクシの頃は尾のヒレを少し左右に動かすだけで簡単に前に泳ぐことができたが、それができなくなったし、脚が出てからは水の中で息が長く続かなくなった。脚が皮膚を破って出てきた時は不思議と少しも痛くはなかった。覚えていることと言えば、これくらいだ。

10日前の雨が降る夜、遂に尾のヒレがなくなったので陸に上がってみたら、普通に歩くことができた。だから、水の中での生活を終えて、陸で生活することを決めた。歩くだけでなく、ジャンプもしてみたが、これも案外簡単にできた。だから、元々いた田んぼから少し遠くに移動することにした。

少しでもよさそうなところを探して歩きまわっていたら、いい感じの隙間を見つけたので、とりあえず、そこでその日は夜を明かした。

その次の日、日が出て明るくなったので外に出ると、前の日の雨が嘘のように晴れていて、日の光が地面を照り付けていた。

水の中での生活をやめて陸での生活をはじめたものの、陸での生活はまったく違った。まず、音がうるさいし、風を感じるし、何より暑い。水の中もそれなりに暑かったが、陸では日の光が直接皮膚に当たって暑いというか痛いし、風が体を乾燥させてしまう。

前の日 隠れていたのは、どうやら朽ち木の隙間だったようで、その朽ち木は雑木林のようなところに無造作に置かれ、雑木林がいい具合に影を作ってくれて涼しかったようだ。

さて、あれから１０日、この居心地のいい朽ち木の隙間からあまり動かずにいたが、今晩少し移動してみるか。今日は夕方少し雨が降って、地面が湿っているし。

妄想アマガエル日記（２）－７月１６日（日）くもり

今日は朝からいい天気だ。

雲は多いが、日が照って、とても眩しい。そして、風が強く、体が乾燥してしまう。

さて、昨晩のことを記しておくことにしよう。

昨晩は、月もなく、風が心地よい涼しさで、冒険するには最高な夜だった。

朝からずっとあの居心地のいい朽ち木の隙間にいた。でも、夕方頃 少し雨が降ったので、外に出てみた。丁度、背中に卵を背負ったクモが目の前を走っていたので、飛びついてみたら運よく食べることができた。その後も、小さなコオロギがちょうど目の前に着地したので、その瞬間に飛びついて食べることができた。また、雨が降ったからなのか土の中からミミズが出て地面を歩いていたので、それも食べることができた。しばらくそのままじっとしてたら、アリやワラジムシも目の前を歩いていたが、クモとコオロギとミミズを食べてお腹がいっぱいになったので、それらはスルーした。少し食べすぎた。

やっぱり、クモとミミズは美味しい。なんといっても柔らかい。アリはどうも苦いし、たまに口の中を噛むからあまり食べたくはない。これまで食べて、吐き出してしまって、もう二度と食べたくないのはカメムシだ。あれは、食えたもんじゃない。特に、最初食べたのはマルカメムシという奴らしいが、あれは見たくもない。

さて、お腹がいっぱいになったので、暗くなるまであの居心地のいい朽ち木の隙間に戻ることにした。



昨夜は、月がなく暗くて、風が涼しくて、とても心地よかった。

そして、気づいたら、朝だった。

いつの間にか寝てしまっていたようだ。

なんてことだ！！

昼間は日が出ていて出歩くのは危ないからじっとするしかない。

今夜こそは！

妄想アマガエル日記（３）－７月１７日（月）晴れ

昨晩は、風がなく、じめじめしていて暑かった。カエルの私からしたら、最高の夜である。月もなく、暗い夜でもあったが、近くの街灯の光が一筋こちらに届くようで、この朽ち木の辺りは夜でも完全には暗くはならない。

一昨日は、いつのまにか寝てしまって、移動できなかった。

その反省を踏まえて、昨晩は暗くなるまでこの朽ち木の隙間の入り口付近でじっと身を潜め、暗くなったらすぐに出て行こうと準備していた。

いよいよ、大冒険だ！

そう思いながら、じっと入り口付近で暗くなるのを待っていると、どこからか何かの視線を感じた。

・・・・・

どうやらそれは、斜め右下に転がる石の下からこちらを見ているヌマガエルの視線だった。

「あっアイツは見覚えがある。確か、同じ夜に同じ田んぼから出てきたカエルだ。アイツもこんな近くにいたのか。」

「ところで、なんでアイツこっちを見ているんだ？」

ヌマガエルが隠れている石は、スイカ大くらいの大きな石で、ポツンとその石だけが転がっていた。そして、その石の下にはアリが列をなして入っていて、どうやらアリの巣があるようである。その右端の隙間にそのヌマガエルは隠れてこちらを見ていた。

「アイツも今夜あたりどっかに移動するのかな？さすがにアリがあれだけいっぱいいたら、噛まれたりして大変そうだしな、、日も当たって暑そうだし、よくあんなところに隠れるもんだ。」と思った瞬間、嫌な予感を感じた。

「まさかアイツ、この居心地のいい隙間を狙っているんじゃないか？今夜、私が出て行くのを待っているのではないだろうか？いや、間違いない」そう思い出すとソワソワしてきた。

「でも、今夜ここを出て行くのだから、別にアイツにここを取られてもいいじゃないか」そんな思いもした。

それから、「こんな居心地のいい隙間を他のカエルに取られるのは嫌だな～」、「でも、もっといい隙間を探す旅に今夜出るのだから関係ないことだ」、「いや、こんな居心地のいい隙間が見つからなかったら戻るところがなくなるんじゃないか」と自問自答していた。

そして、気づいたら朝になっていた。

なんてことだ！！

気づいたら、アイツはどっかに行っていないし。。。。（ここを狙っていたわけではなかったらしい）

今夜こそは！

妄想アマガエル日記（4）－7月17日（月）晴れ～ヌマガエル小太郎編～

俺の名前は小太郎。最近カエルになったばかりのヌマガエルだ。
俺は冒険家だ。だから、同じところにじっとしたりはしない。

カエルになってそれほど日数は経っていないが、これまで色々な世界を見てきた。もちろん、危険な目にもあったが、冒険家なのだから仕方がない。

田んぼから出てから、色々な物を食べてみた。何が美味しいか、よくわからないからだ。クモとミミズは美味しかった。アリは苦かった。ナメクジはベタベタして食べられなかった。

カエルになって4日目、草むらの中を歩いていると、クズが地面を這うように生えていて、その葉の上に丸い虫が何匹かいるのが葉の裏からシルエットで見えた。試しにそれを食べてみようと葉の表に移動しようとすると、1匹のアマガエルがそれを食べようとしていた。

「先を越されたか！まぁ、ここで隠れてアイツがいなくなったら食べてみよう。」

「おっ、アイツは同じ夜に同じ田から出てきたアマガエルじゃないか。アイツは気づいていないだろうが、田から出るときに俺の頭を踏み台にしたんだ。」

葉に開いた孔からそっと見ていると、そのアマガエルが悶絶して虫を吐き出しはじめた。とても苦しそうだ。

「うわ～　可哀そうにあの虫は不味いんだな～　食べなくてよかった～。にしてもアイツまだ悶絶してる。。。ふ～　あぁはなりたくないな～」

そして、そのまま草むらの中を進み、冒険を続けた。

一昨日の夜、この辺りを一周して雑木林に戻ってきた。その夜は、月もなく暗くて、風が心地よくて、とても冒険日和であった。色々な食べ物も食べることができた。雑木林を通り抜けようとすると、端っこに朽ち木が何個か転がっているのが見えた。ちょうど、この朽ち木の辺りだけ街灯の光がわずかに照らして完全には暗くならない。
そして、その一つの隙間からカエルの足が外に出ているのが見えた。

「ん？あれはなんだ？」

その朽ち木の隙間に近づいて見てみると、どうやらそれはアマガエルの足のようだった。隙間の奥を覗き込むと、

「あっ、このアマガエルは数日前に虫を食べて吐き出していた奴だ。なんて寝相の悪さだ。しかも、なんて無防備なんだ。ふ～、俺はこうはなりたくないな～」

そして、そのまま水たまりを泳いで、冒険を続けた。

昨日の夕方、この辺りを一周して雑木林に戻ってきた。日が当たるけど、まぁ暗くなるまでの間隠れるだけなので、大きな石の下に身を潜めることにした。

「さて、今夜はどんな冒険が待っているのだろう～」

ふと、上を見上げると、朽ち木の隙間からアマガエルが外を見ていた。

「またアイツだ。この前は虫を吐き出していて、昨日は朽ち木の隙間から足を投げ出して爆睡していたけど、今日はなんか真剣な顔しているな」

「うわっ、目が合ってしまった。まぁ、俺のことなんて覚えてもいないだろう～。さて、今夜の冒険が楽しみだ！」



暗くなってきたので、石の下から出ようと上体を起こすと、アイツが視界に入った。
「うわっ、なんてアホズラで、ぼ～としているんだ！」
「ほんと、あぁはなりたくないな～」
そして、そのまま近くのコンクリート製の側溝の中に入って、冒険を続けた。

妄想アマガエル日記（５）－７月１８日（火）くもり

今日は、朝から曇りで、時折雲の隙間から日が差していた。雨は降らなかった。
一昨日の夜は、ヌマガエルのせいで、色々考え過ぎて夜を明かしてしまった。だから、昨夜はその反省を踏まえて、暗くなる前に朽ち木の隙間を出ることにした。
まだ日が沈む前の紅い空を背にして、朽ち木を出た私は、とりあえず、草むらの中を進んだ。どれくらい進んだ頃だろう、その先には、小さな川があって、流されそうになりながらその川を越えた。
その先には地面がレンガで覆われた広大な大地があった。そのレンガはまだ昼の灼熱の余韻を残していて、とても熱かったがそんなこと気にしてはいられなかった。
そして、いつの間にか再び草むらの中を進んでいた。
草むらの中にはバッタやコオロギをはじめ、ゴミムシダマシとかカタツムリとか、これまで見たことがなかった生き物を見ることができた。

「なんて、勇敢なんだ！」
とても自分が誇らしく思えた。
「やればできるじゃないか！」

草むらをさらに進むと、草むらが途切れ、おもむろに雑木林が現れた。

「ん？なんか見たことがある雑木林だな、、」
「あっ、あの隅にある朽ち木は、いつもの居心地のいい朽ち木じゃないか！」
どうやら、一周してきたようだ。そして、朝になっていた。

結局、一応冒険はしたし、今日はまたいつもの居心地のいい朽ち木の隙間で休むことにしたのである。

少しは進歩した。

妄想アマガエル日記（６）－７月１９日（水）くもり

一昨日の夕方から昨日の明け方までの大冒険の影響で、脚が筋肉痛になってしまったので、昨日の朝から今日までずっとこの朽ち木の隙間でゆっくりしていた。

ただ、その間、私にとってとても大変なことがあった。

昨日の朝、大冒険の末にいつの間にか、この朽ち木に戻ってきてしまった私は、この隙間でじっとしていた。
ふと、右手を見ると手の甲が茶色になっているのに気づいた。

「ん？いつも手は緑色をしていたのに、なんで茶色になっているんだ？」
はじめてのことだったので驚いたが、大冒険のせいで少し疲れているからだろうと思った。そこで、少し寝ることにした。

どれくらい寝たことだろう。大冒険のせいもあって、昼過ぎまで寝てしまっていた。
「そういえば、寝る前に見た手の色はどうなっただろうか、、？」
「あれ？まだ茶色いままだ！」
「どうしてしまったんだ！」

そこで、首をよじって見える範囲の脚や肩を見てみた。
すると、見える範囲すべてが茶色くなっていた。
「なんてことだ！！　あの綺麗な緑色はどうしてしまったんだ！」

それから、自暴自棄になった私は草むらを彷徨い歩いた。

「私は、なんか大変な病気になってしまったんだ！」
草むらの中にいるアマガエルは皆、緑色をしている。
「私だけが茶色だ。」
「たぶん、このまま黒くなって、死んでしまうんだ。」

ふらふらと彷徨い歩き、疲れ果てた私はいつもの朽ち木の隙間に戻ることにした。

そして、ふと 朽ち木の傍のコンクリートブロックを見ると、茶色いアマガエルが張り付いているのが見えた。
「アイツも私と同じ病気で茶色くなっているんだな。。。」

朽ち木の隙間に戻った私は、うつ向いて下を見ると手の甲が緑になっているのに気づいた。
「あれ？戻ってる！！」

そして、さっき見たコンクリートブロックにいたアマガエルも今はクズの葉の上にとまっていて、よく見るとさっきより少し緑色に変化してるように見えた。

「ん？もしかして、体の色が変わるのか？」

「さっき草むらを歩き回ったから、周りの色に合わせて体の色が緑色になったのかもしれない。」

・・・・・

「なんてスゴイ体なんだーーーーーーーーー」

「まるで、魔法使いではないかーーーーーーーーー！」

・・・・・

「もしかしたら、口から火を吹いたり、指先からレーザー光線が出せたりするのかもしれない！！」

それから、一晩中、火を吹いたり、レーザー光線を出そうとしたり、思いつく限りの可能性を試してみた。

けれど、さすがに色が変わる以外は、できそうになかった。

だが、まだわからない。もしかしたら、その内、空を飛んだりできるようになるかもしれない。。

自分の能力が恐ろしい。。

妄想アマガエル日記（7）－7月23日（日）くもり～トノサマガエル八助編～

僕は、最近カエルになったばかりのトノサマガエルです。
生まれも育ちもこの小さな水路で、この水路はわずかな流れがあるけど、その一部に少し広くなったところがあって、そこは水が溜まって流れがありません。そこで、オタマジャクシの頃を過ごし、最近カエルになりました。

同じ夜に一緒に陸に上がってカエルになった七助と六助といつも一緒にいるけど、同じ卵塊から生まれたから兄も弟もありません。ただ、七助は少し太っていて、僕は中くらいで、六助は痩せています。六助は食べても食べても太らないようで、この中では一番よく食べるけど、痩せています。

さて、カエルになってからもずっとこの水路で過ごしているので、他の世界はよくわかりません。

この水路は便利なもので、餌となる小さな生き物は多いし、水路の上に木が覆っているところがあって涼しい。そして、隠れるところが多い。

数日前、1匹のアマガエルが水路を渡ろうと泳いでいました。

けれど、そのアマガエルが泳いでいたところは、この水路の中でも唯一流れが速いところで、そのアマガエルは苦労していました。

傍から見れば、少し上流に行けばピョンとジャンプするだけで渡れる幅が狭いところがあるのに、どうしてこのアマガエルはわざわざそんなところを泳いで渡ろうとしているのか？

七助と六助と一緒に、大きな石の上からその様子を見ていました。

「たぶん、あのアマガエルは体を鍛えようとしているんじゃないか？」

僕がそういうと、

「いや、見てみろよアイツの顔。体を鍛えようとしているんじゃなくて、困った顔してるじゃないか！」
七助が、アマガエルを指差して言ってきた。
「たしかに、、体を鍛えようとするなら、あんな困ったような表情はしないか、、」
僕がそれに納得すると、
「たぶん、あのアマガエルは、偶然、あそこを渡ろうとして、上流にそんなところがあるなんて気づいていないんだろ。」
六助が、アマガエルを擁護するように言った。
「でも、あそこ以外、ほとんど流れなんてないじゃないか。あそこだけ、あんなに流れがあるし、幅が広いんだ。なんか意味があるんだろうよ。」
と僕が、腕を組んで想像するように言った。
「あっ、ようやく向うの岸に泳ぎついた。なんてザマだ。疲れ切っているじゃないか！」
七助が少し呆れた感じで言った。
さて、これからあのアマガエルはどうするんだろうか？
その様子を見ていると、水路を上流側に移動していった。
そして、上流側の水路を見て、口と目を見開いて、ショックを受けていた。手で口を覆っている。
どうやら、泳がなくてもこの水路を渡れることを知って、ショックを受けているようだった。
六助が言っていたことが、合っていたのか。。。
皆がそう思った。



そのアマガエルの背中を見ながら、３人でしんみりとしてしまった。

そして、

「運が悪いアマガエルだな、、、」

３人同時に、そうつぶやいた。

妄想アマガエル日記（８）－７月２４日（月）晴れ～ツチガエル花子編～

私は最近カエルになったばかりのツチガエルです。

でも、産まれたのは去年の夏くらいで、オタマジャクシで冬を越したので、今年カエルになったアマガエルとかヌマガエルに比べると大きさは同じくらいだけど、人生経験が私の方が上かな、、。

こっちはあの寒い冬を越したのだからね。

だから、同じくらいの大きさの今年カエルになったアマガエルとかヌマガエルとかトノサマガエルを見ると、少し子供っぽく見えてしまいます。

私は、水路の近くの花壇に住んでいて、ここは、水辺にも近いし、餌も多いし、陰で涼しい。そして、眼下にはレンガで覆われた広大な大地が広がっています。

私のようなピチピチのギャルが住むにはまぁまぁのところです。

さて、数日前、夕方近くに涼しくなるのを待っている間、花壇からレンガの大地を見ていました。花壇はレンガの大地を一望できます。

その日は今日と同じで天気がよくてレンガの大地は昼の灼熱で熱せられていて、花壇から見ているだけでも熱そうでした。

そんな時に、水路の方からヘトヘトになった1匹のアマガエルがやってくるのが見えました。

「まさか、あの状態でレンガの大地に行くわけはないよね。」
と独り言を言いました。

でも、そのアマガエルは迷うことなくその大地を進んで行ったのです。

「えっ、あのレンガの上を歩くなんて、有りえないでしょ！」
私は驚きました。

どうして、そのアマガエルがあの熱いレンガの大地を進まなくてはいけないのか、私にはまったくわかりません。もう少し待ったらレンガは冷えるのですから。

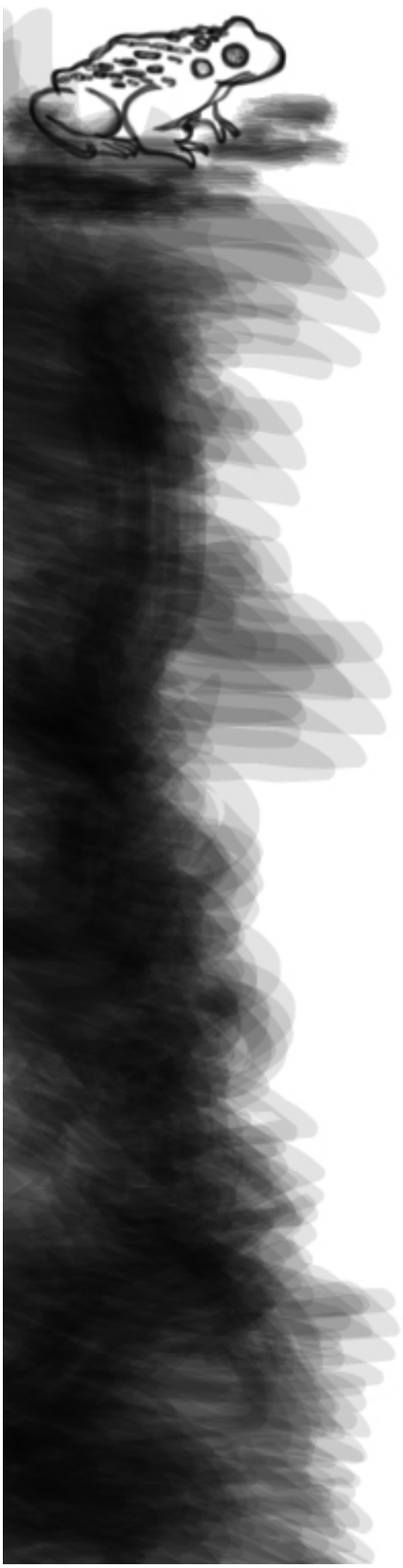
アマガエルはそのまま、陰を歩くわけでもなく、昼の灼熱で熱せられたレンガの上を一直線に進んで行ったのです。

私は、そのたくましい後ろ姿を見て、一目惚れしてしまいました。

これまで、同い年くらいのアマガエルやヌマガエル、トノサマガエルなんて子供っぽくて眼中になかったのですけど、あのアマガエル様だけは違ったのです。

そのたくましいアマガエル様は、その後 レンガの大地の先の草むらの中に消えて行ってしまわれました。
夕方の紅色に染められたあのアマガエル様の後ろ姿が未だに忘れられません。

いつかまたあのアマガエル様に、お会いしたい。



妄想アマガエル日記（９）－７月２６日（水）晴れ

　ここ数日、日記を書いていなかった。
それは、日記がどっかにいってしまって書けなかったからだ。

「はて？どこに置いただろうか～？」
数日前を思い出すことにした。

「確か、大冒険をした次の日まではあった。次の日に大冒険のことを書いたのは覚えている。その次の日に、体の色が茶色になって慌てたことも書いたからその次の日もあったんだ。。」
でも、その後に日記をどこに置いたのかまったく思い出せない。

「もしかしたら、寝ている時にどっかに蹴飛ばしたのかもしれない。。」
自分の寝相の悪さはなんとなくわかってきた。朝起きたら朽ち木の隙間から落ちていたこともあったし、どうしてだかわからないが、朽ち木の上で寝ていたこともあった。

　朽ち木の隙間から落ちたとしたら、その下にあるかもしれないと、隙間の下を探してみたけど、見つからなかった。

「いったい、どこにいってしまったのだろうか～？」

「そういえば、、、最後に日記を書いた夜に日記を持って散歩に出たな、、」
その夜は月が綺麗だったので、月を見ながらこれまでの日記を読もうと思ったのだ。

「散歩のときは確か、、、朽ち木から出て、近くのコンクリートの塀をよじ登って、塀の上を歩きながらヤナギの木の下に行ったな、、、」

「あっ、塀をよじ登った時に日記を近くのきのこの上に置いた気がする！」
すぐに、そのきのこがあったところに行ってみました。けれど、そこにはもうきのこはなくて、腐ったきのこだった物があるだけ。
「あっ、そういえば、このきのこの上に日記を置こうとしたけど、ナメクジがいたからやめたんだった」
そこで、改めて考えなおしてみました。
「ん～、塀の上を歩いている時に落としたのだろうか～？」
塀をよじ登って塀の上から下を見ながら探してみました。しかし、見つかりません。
「あっ、そういえば、塀の上から落ちたらいけないと思って、日記をいったん朽ち木の隙間に置きにいったんだった」
そこで、ふたたび、朽ち木の隙間に戻ることにしました。
「ん～、、いったいこの隙間のどこに置いたかな～」
いくら考えても思い出せません。
朽ち木の隙間は、ちょうど自分が立てるくらいの高さがあって、奥は少し腐っていて、湿っぽくなっていて、立って歩くと5歩くらいの奥行があります。途中には、何もありません。
その隙間をぐるっと見渡しても、日記はどこにもありません。それは、そうです。これまで何日もここは探してあるのですから。
「おかしいな～、、どこにいってしまったのだろうか、、？」
ただ、その隙間から外を見ると、少し風景が違うことに気が付きました。
「あれ？いつも見ているあの大きな石が見えなくなっているな。。」

そこで、朽ち木の隙間から外に出て、その隙間を見てみることにしました。
すると、朽ち木が少し動かされたみたいで、これまで使っていた隙間と位置は同じだけど、違う隙間にいたようでした。

朽ち木をよじ登って、これまで使っていた隙間に入ろうとすると、なんとその隙間には、私と同じくらいの大きさの青色のアマガエルが頭をこちらに向けて、寝転んでいたのでした。

「あの～すみません。。。」
「以前、この隙間にいたのですけど、ここ数日は間違って別の隙間にいまして、、この隙間を返して頂けないでしょう、、？」
と寝転んでいる頭の上を覆うように頭を出して、恐る恐る聞いてみました。

すると、その青いアマガエルは、
「わっ！驚いた。。突然なんなんだい？」
「・・・あっ、もしかして、この日記は君のかい？」
と、上半身を起こして、あくびをしながら日記を出して聞いてきました。

「はい」
間髪入れず、答えました。

「君は変な奴だな、、日記なんて書くなんて。なんのためにこんなもん書くんだ？」
と、青いアマガエルは姿勢を変えて、あぐらをかきながらまっすぐこちらを見て聞いてきました。

「特に、意味はありませんが、、しいて言えば、オタマジャクシの頃は毎日が楽しかったような気がするのですけど、、カエルになった時にその時の記憶をほとんど忘れてしまったのです。だから、記憶を留めるために日記を書こうと思ったんです。」
と、真面目に答えました。

「なるほどな、、確かに、オタマジャクシからカエルになった時に、俺も記憶を失われたな、、、」

青いアマガエルは私が言ったことに納得してくれたように見えました。
「気にいった。これから仲良くしようじゃないか！俺の名前は与助だ。」
青いアマガエルは右手を差し出してきました。
私もそれにこたえるように手を出して握手して、自己紹介をしました。
「じゃ、これからは友達ということで、よろしく！」
与助がニコニコしながら、そう言ってきました。
「あの～、ところで、この隙間は返してもらえるよね、、？」
友達になったので、気軽に聞いてみました。
すると、ニコニコしながら断られました。
あの笑顔はずるいな～、、何も言えないよ、、と思いながら、日記を持って、間違った隙間に戻りました。
「まぁ、いっか。この隙間も自分が数日気づかないくらい居心地がいいし。」
はじめて友達ができたので、いい一日になりました。

妄想アマガエル日記　登場蛙の紹介

妄想アマガエル日記は、空いた時間に何も考えずに書くので、自分でもどのような内容になるか、どのような登場蛙が出てくるかわかりません。
ただ、いつの間にか主人公以外に登場蛙が増えてきたので、主要キャストはこれくらいに留めるために一覧にしておきます。

まぁ、そもそも「いいね」もあまり付きませんし、知り合いから「読んでるよ」なんて声も聞こえてこない誰も読んでくれていないものなので、わざわざこんなことを書かなくてもいいのですけどね。。。
とりあえず、勝手に書いているものなので、勝手に紹介しておきます。

●主人公
名前：銀次郎（ぎんじろう）
種類：アマガエル
性格：一生懸命、おっちょこちょい、心配性

●友達
名前：与助（よすけ）
種類：アマガエル（先天的に黄色の色素がないので、体は青色）
性格：爽やか、元気

●今のところ不明
名前：小太郎（こたろう）
種類：ヌマガエル
性格：冒険家、強気

●今のところ不明
名前：八助（はちすけ）
種類：トノサマガエル
性格：優しい
※七助（ななすけ）と六助（ろくすけ）と一緒にいることが多い。水路に住んでいる。

●今のところ不明

名前：花子（はなこ）
種類：ツチガエル
性格：ギャル、銀次郎に一目惚れ

どうでもいいことですけど、当館の敷地内に生息しているカエルはこの４種（アマ、ツチ、ヌマ、トノサマ）なので、たぶんこの４種以上に増えることはないと思いますが、以前ヒキガエルを１匹だけ見たことがあるので、あとヒキガエルが増えるかもしれません。。。

妄想アマガエル日記（１０）－７月３０日（日）晴れ～アマガエル与助編～

俺は、小さな水たまりでオタマジャクシを過ごし、最近カエルになったアマガエルだ。

オタマジャクシの頃を過ごした水たまりは、俺がカエルになってすぐに干上がってしまった。
ただ、カエルになって数日はその水たまりから離れたところにいたが、数日後、雨が降った翌日に寄ってみたら、また大きな水たまりになっていたので、懐かしくて少しその水たまりに入っていた。

水面に写るカエルになった自分の姿を見ると、全身が綺麗な青色をしていた。その日は昨日の雨が嘘のように晴れていたので、空の青色が水面に写っていたので、その青色かと思ったが、どうやら俺は青色の体をしているらしい。
その時はじめて知った。

水面に写る空の青色と自分の青色がなんとも綺麗だと自分で見とれてしまった。

ただ、見渡しても周りにいるアマガエルはみんな緑色をしていた。



「どうやら、俺は他のアマガエルとは違うらしい。。」そう思った。

そこで、いろいろなアマガエルを見るために移動することにした。

まずは、地面がレンガで覆われた大地があったので、そこを通ろうと思ったが、昼の灼熱で熱くなっていそうだったので、すこし冷めるまで近くの花壇の陰に身を隠して冷えた頃を見計らって進むことにした。
進み終わった頃には、日が暮れていたが満月だったので周りは明るかった。そして、風がひんやりとしていて涼しかった。

レンガの大地の先には花壇があって、その下の草むらには、全身が緑色のアマガエルが何匹もいて、小さなコオロギを競うように食べていた。

「どうやら、この辺りにいるアマガエルはみんな緑色のようだな。」
確認するように独り言を言った。

そして、その先には水路があった。
水路は泳いで渡らないと向うにはいけそうになかったが、他に渡れるところがないか周りを見てみようと少し上流側に移動してみた。すると、ピョンとジャンプするだけで渡れる幅が狭いところがあったので、そこを渡ってみた。

その水路には、ツチガエルとトノサマガエルが多く、アマガエルはあまりいないように見えたが、水路の近くの草の上や花の上で何匹もアマガエルが寝ているのが目に入った。ただ、それらのアマガエルも全身緑色をしてた。

「そうか、、、アマガエルというのはどうやら緑色をしているのがふつうのようだな、、」
特別な色をした自分がなんとも誇らしかった。

その先の草むらを進んで行くと小さな雑木林があって、そこの縁を進むとコンクリートブロックの背丈の低い壁があった。

「よし、少しこの壁をよじ登って高いところから周りを見てみることにしよう」自分に言い聞かせるように言った。

壁をよじ登って周りを見渡すと、その壁のすぐ下にいい感じの朽ち木が何個か転がっているのに気づいた。そして、その一つの隙間には自分を誘うように近くの街灯の光が一筋射していた。

「おっ、なかなかよさそうな朽ち木だ！」

その朽ち木に近づくためにその壁を登り始めると、下から体の大きな茶色のアマガエルが1匹登ってきた。

すれ違う時に、

「君は、体の色が茶色をしているんだね！」

と、声をかけてみた。

すると、

「あ～、この色？君は最近カエルになったのかい？」

「なら、まだ知らないか。。俺たちアマガエルは周りに合わせて勝手に体の色が変わるんだ。だから、今は茶色だけど、草むらにいたら緑色になるし、白い壁にいたら白色になるんだ。」

さらっと教えてくれた。

「へぇ～、そうなんだ！じゃ、俺は今は青色をしているけど、それは空の青色が水面に映った水たまりにいたからなのか！」

自分の青色が気に入っていたので、他の色に変わるのは嫌だな～と思っていた。

「いや、君は青色なんだよ。」

「えっ、俺は青色以外の色に変われないの？」

「そうなんだ。君みたいな色のやつに以前会ったことがあるけど、そのカエルは色が変わらないって言ってたし、長い間一緒にいたけど、変わったところは見たことないから。。」

「そっかぁ。じゃ、青色のままなのか～！　よかった～！！」
「青色を維持するためにまたあの水たまりに戻らないといけないかと思ったよ～」
「教えてくれてありがとう！」
その大きなアマガエルに御礼を言って、朽ち木の隙間の前に行ってみた。

すると、その隙間はちょうど自分が過ごすには広さもちょうどいいし、風も涼しくよさそうなところだった。

「よし、当分ここで暮らそう。」
そう思った時、足元に、1冊の日記が落ちているのに気づいた。

妄想アマガエル日記（１１）－８月2日（水）晴れ～アマガエル与助編～

なかなかこの隙間は居心地がいい。
涼しい風が通るし、眺めもなかなかいい。

そんなことを思いながら、ゴロンと寝転んで天井を見ていても、ここに来た時に見つけた日記がどうしても気になってしまう。。。

「俺は人の日記を無断で見るなんてダサいことはしたくない！」
「どこにでもいる緑色のアマガエルとは違って、俺は青色をしたアマガエルだ。そんな俺が無断で日記を見るなんてありえない！」

壁に立てかけた日記にチラッと目をやったが、すぐに天井を見上げた。

「さて、今夜あたりどっかに行ってみるか、、その計画でも考えることにしよう」

日記のことを忘れるために、違うことを考えることにした。

「そういえば、これまで色々なことがあったな～。ここに来るまでもレンガの大地もあったし、水路もあった。大きな茶色のアマガエルにも会った。他のカエルも色々な経験をしているのかな～？」

そんなことをふと考えていると、また日記のことを思い出してしまった。そして、チラッと日記に目をやった。

「いかんいかん、、俺は無断で日記を見るなんてダサいカエルではないじゃないか！」

勝手に頭が日記のことを考えてしまうことにがっかりしてしまった。

「そうだ、じっとしているからいけないのだ。少し動いてみよう。」

この隙間の中をもう少し詳しく見てみることにした。

すると、隙間の奥までは歩いて5歩くらいはあろうかという奥行があって、その奥は少し腐っていて、湿っぽくなっていた。壁には黄色い粘菌が一部覆っていて、それが文字のように見えた。

粘菌というのは、文字のように見えるんだな～としばらく見ていると、ふと「あの日記はどんな奴が書いたんだろうな～。中をちゃんと見ていないけど、どんな風に書いているんだろうな～」とまたまた日記のことを考えてしまった。

「困ったものだ、、」

「ただ、俺は他のカエルのことを知るために、あの水たまりから移動してきたんじゃないか！少しくらい他のカエルのことを知るためにも日記を見てもいいかもしれない。。。いや、見ないとわからないじゃないか！」

「どんな風に書いているか自分も参考にするためにも、見てもいいのではないか。。。いやいや、見ないといけないじゃないか！」
と自分に言い聞かせるように、いろいろな理由が思いついた。

「まったく、困ったもんだ。本当は読みたくなんてないんだ！」
「でも、仕方がないか。。」

そこで、そろ～と壁に手を伸ばして、立てかけていた日記を手に取った。

そして、周りに誰もいないのを確認してから、ゆっくりページをめくって読んでみることにした。

・・・・・・

「字が汚すぎて、、、何んて書いてあるか読めんやないか～い」

妄想アマガエル日記（１２）－８月３日（木）晴れ～アマガエル与助編～

「まったく、なんて汚い字なんだ！」
「どうやったらこんな汚い字が書けるんだ！」
あまりの汚い字で書かれた日記に、見るのを躊躇していた自分が馬鹿らしく思えてしまって、怒りに変わっていた。

「いや、待てよ。。。」
「これは日記なのは間違いない。人に見られないために特殊な訓練をしたカエルが暗号で書いたものなのかもしれない。」

あまりの汚い字にそれに意味がある可能性を感じてしまった。

そこで、改めてその日記を見ることにした。次は、暗号を解読する気持ちで読んでみようと思ったのだ。

「まず、この数字みたいなのはもしかしたら、、、何かを表す記号なのかもしれないな、、」

数字ですら汚い字過ぎて、その形は何かに見えなくもなかったのである。

「数字の「7」に見えるけど、、、、もしかしたらこれは何か武器でも表しているかもしれない。。」

「いや、まてよ。。その次の「月」のようにも見えるが、、、これは武器を持つ人を表しているのかもしれない。」

見ればみるほど、文字と認識するよりも記号やイラストとして見えてくるのである。

「いやいや、これは日記帳なのは間違いない。やっぱり、これは文字なのかもしれないな。。」

さすがに自分でも考えが突飛すぎたと反省して、文字の解読に取り組むことにした。

「やっぱり、7みたいに見えるのは数字の「7」でいいだろうし、その次のは「月」でいいだろうから、ここは「7月」でいいのだろう、、」

「でも、その次がまったく読めない。。数字にすら見えない。」

7月ときたら次も数字が来て日にちを表すだろうけど、数字に見えないのである。

「なかなか難解だな〜。やっぱり、これは特殊な訓練をしたカエルの暗号のような気もしてきたな、、」

「もしかしたら、逆さにして読むのかもしれない。」

逆さにして読んでみたが、どうやら違うらしい。

「もしかしたら、あぶり出しのように下から火を当てたら何かが浮き上がって、この汚い文字のようなのが何かに見えるのかも

しれない」
「ただ、こんなところに火なんてない。。。」
「難しい。。。いったいどうやったらこれを解読できるのだろうか～？」
疲れてゴロンと寝転んで天井を見上げていた。
　すると、顔を覆うように入り口の方から、ぬっとアマガエルが顔を出してこの隙間を返して欲しいといってきた。
　ただ、その時は大変驚いたが、どうやらあの日記の持ち主らしいこと、そして、なんだかいい奴っぽいことがわかったので、友達になることにした。
　いろいろと話をしたが、この隙間は返さずに済んだし、日記を見たこともバレてなさそうだし、とりあえず、よかった。
「今度あったら、日記になんて書いてあったのか聞いてみよう。」
「あれはどんな特殊な訓練をして書いた暗号なのか、とても気になる。。」

妄想アマガエル日記（１３）－８月４日（金）晴れ

「ところで、与助くんはどうして青色の体をしていたんだろうな～？」
日記を書きながら、考えていた。
「アマガエルの体の色というのは周りに合わせて変わるはずだから、青色になるってことは、あの時青色のところにいたということだろうか～？」
考えれば考えるほど不思議でしょうがない。

「ただ、あの時は隙間にずっといたように寝転んでいたし、あの隙間から外に出るにはこの隙間の横を通るのが一番早道だけど、誰も通らなかった。遠回りして入って、すぐに寝転んでくつろいでいたのだろうか～？」
隙間の中にずっといたら、茶色になることもあるけど、基本的には緑色のままであることをこれまでの経験で知っていた。

「いや、そもそも青色ってどういう環境にいたというんだ！」
「この辺りに青色のところなんてないじゃないか！」
周りには草むらの緑色や雑木林の樹木の茶色、隣のコンクリートの壁の灰色などしかないのである。

「あっ、もしかしたら、いきなり顔出して驚かせたから、びっくりしたら一瞬で青色になったりするのだろうか？」
まだまだ自分の体のすべてをわかっていないから、その可能性も十分にあると思った。

「いや、でもあの時に話しかける前から青かったな～」

「じゃ、もしかしたら、、、私はまだできないけど、体の色は周りに合わせて変わるだけじゃなくて、自在に変えられるのかもしれない。。」

・
・
・

「あり得る！」
「十分あり得る！！」
「なんてスゴイ体なんだ！！！」

「今度会った時に、体の色の変え方を教えて貰おう！」
「そうだな、、まずはピンク色になってみよう！」

妄想アマガエル日記（１４）－８月８日（火）晴れ

一通り食事を済ませて戻ろうと朽ち木を登り始めたら、ちょうど上から与助が降りてくるところだった。

「おっ！どこ行くの？」
見上げて声をかけた。

すると、
「君に会いに行こうと思って隙間を覗いたらいなかったから、探しに行こうと思っていたところだったんだよ」
与助が嬉しそうに返してきた。

「へ～そうなんだ！」
自分に用があるなんて、、とても嬉しく思った。

「で？なんの用なの？」
嬉しく思っていたのと同時に要件がとても気になっていた。

「いや～大したことでもないんだけどね。。。まぁ、あそこが涼しそうだからあそこで話すよ」
コンクリートの壁の上を指差してそう言ってきた。
ちょうど、その場所は、大きなヤナギの木があって、陰になっていて涼しそうに見えた。

「わかった。ちょっと待ってて、この日記を置いてくるから」
脇に抱えていた日記を持って隙間に戻ろうとすると、
「いや、それ持ったままでいいよ」
与助がそう言ってきたので、持ったまま与助の後をついていくことにした。

コンクリートの壁をよじのぼって、ヤナギの木の下に歩いて行って、二人で並んで腰かけるとちょうど夕日が見えて雑木林も一望できて、とても気持ちがよかった。

「ここはいいところだな～」
与助が言ってきた。

「そうだね、涼しいし、眺めもいい！」

そして、お互い少し沈黙してから、
「あのさ～少し気になっていることがあるから教えて欲しいんだけど。。」
与助が言いづらそうに言ってきた。

「実はさ～　僕も教えて欲しいことがあるんだよね。。。」
モジモジしながら言ってみた。

「へ～、お互い聞きたいことがあるんだね。。」

・　・
・

再び沈黙が続いた後、
「体の色を・・」「暗号を・・」
お互い被ってしまった。

「あっ、いいよ先に言って」
与助が言ってくれた。

そこで、
「体の色を自在に変える方法を教えてくれない？」
意を決して聞いてみた

すると、
「いや、、、この体の色は生まれつきだから、、、」
「自在に変えたりなんてできないんだ」

「あっ、そうなの？」
「なんか特殊な訓練とかして、体の色を自在に変える方法があったりするんじゃないんだ！」
「そっかぁ、、」
少しがっかりしてしまった。。

「与助くんの質問はなに？」

「あのさ～、日記に書いている暗号を教えてくれない？」
すると、
「いや、、、この字は生まれつきだから、、、」
「暗号とかじゃないんだ」

「へっ、そうなの？」
「なんか特殊な訓練とかして習得した暗号じゃないの？」
「ちょっと日記見せてくれない？」
「これさ～、、自分じゃちゃんと読めるんだよね？」

「もちろんだよ！」

「ただ、調子が悪い時は読めないんだよ」

「ん？調子が悪い時って何なの？」

「調子がいい時は日記を書いた時のことを覚えているからだいたい読めるんだけど、調子が悪い時は書いた時のことを忘れているから、わからないんだ」

「それってさぁ、読んでるんじゃなくて、書いた時のことを思い出しているってことなんじゃない？」

「ん～、、、まぁそう言われたらそうかも。。。」

与助が呆れた顔で見てきた。

そして、お互い顔を見合わせて爆笑してしまった。

どれくらい笑っただろう、、久しぶりにこんなに笑った。

いや、カエルになって初めてかもしれない。。

「お互い変な勘違いしていたんだ！」

「暗号って、、ぷっ」

与助の肩を叩いて言った。

「ところでさぁ、、字が汚いのが生まれつきってなんだよ」

与助が真顔で言ってきた。

「ぷっ・・・」

また、笑いがこみあげてきた。

ヤナギの木の下に2匹のカエル。暗くなるまで笑い続けた。

妄想アマガエル日記（１５）－８月１４日（月）晴れ

「いや～笑った笑った。腹がまだ痛い」
与助と夜遅くまで笑って、ヘトヘトになって隙間に帰ってきた。

「この日記が特殊な訓練をして書いた暗号と思っていたなんて。。ぷっ、、」
思い出すだけでまた笑ってしまうので、腹が痛いから必死で我慢した。

少し隙間でゆっくりしようと横になった。
すると、いつの間にか寝てしまったようで、起きたら朝になっていた。

最近、夜も朝も涼しくなってきて、昨日の夜なんて少し寒かった。
だから、いつもは腹を上にして寝るのだけど、脚と手を縮めて座るような感じで寝たくらいだ。

ただ、昨日はだいぶ笑い疲れてしまって、与助くんに聞こうと思っていたもう一つのことを聞くのを忘れてしまっていた。

最近、オタマジャクシの頃を思い出そうとするのだが、水の中から陸に上がる少し前のことしか思い出すことができない。
ただ、オタマジャクシの頃は水の中で暮らしていて、今は陸で暮らしている。
ということは、、、「次は空で暮らすことになるのだろうか～？」
それを与助くんに聞こうとおもっていたのだ。

水の中から陸に上がる時に、お尻にあったヒレはなくなって脚と手が出た。

ということは、、「次は脚と手がなくなって羽根が生えるのだろうか～？」
最近、真剣にこのことを考えているのだ。

だから、空を飛んでいる生き物をよく見ている。
もしかしたら、あのトンボなどの群れの中に将来の自分の姿をしたカエルが飛んでいるかもしれないと思うのだ。。

ただ、いくら見ていても、羽根の生えたカエルのような生き物は見つからない。。

「時間が悪いのかもしれない」
いつも見ているのは明るい時が多いのだ。でも、夜は暗くて飛んでいる生き物が見えない。。。

「いったい、次はどんな体になるのだろうか～？」
「与助くんはいろいろと詳しそうだから、今度会った時に聞いてみよ！」

妄想アマガエル日記（１６）－８月１６日（水）くもり～アマガエル与助編～

今日は雲で日が遮られて、とても涼しい。

こんな日は朝からゆっくり隙間を出て、朝のジョギングをするかのように餌を探して歩き回るのがいい。

運がいいことに、美味しそうなミミズが土の上を歩いていたので、それを少し追いかけて食べることができた。

「やっぱり、ミミズが一番美味しい！」

結構大きなミミズだったから、お腹がいっぱいになってしまった。
なので、あの居心地のいい隙間に戻ることにした。

「さて、お腹もいっぱいになったし、風も涼しい。こんな時は少し昼寝をするに限る！！」

ただ、我々カエルは寝る時は決まりがある。
まず、体の下に脚と手を縮める。そして、体をなるべく低くする。さらに、鼻を開いて、匂いをいつでも嗅げるようにする。
くわえて、顎の下を常に動かして呼吸するのだが、その動きをなるべく小さく小刻みにする。
最後に、一番大事なのが「目を細くする」ことである。
目を完全に閉じることはしないのだ。でも、開けておくと寝れないから細くする。常に周りに敵がいるかもしれないから、いつ何時襲われるかもしれないから、目を細くは開けておくのだ。
これが、我らカエルが寝る時の決まりだ。

「さて、周りに敵がいないのかを少し確認してから、寝ることにしよう」
隙間から体を乗り出して、周りを見渡してみた。

すると、下の隙間からカエルの足がピーんと伸びて出ているのが見えた。

「おい、あれは何だ？」
「あそこは、銀次郎の隙間じゃないか！もしかしたら、アイツ食べられてしまって、脚だけ出ているんじゃないか！！」
心配になって、急いで下に降りて銀次郎の隙間を覗いてみた。

そこには、、、
手足をピーんと伸ばしている銀次郎がいた。

「おい、お前そんなことして何してんだ？」

与助が隙間の上から頭を出して聞いた。

「おっ、与助くん。」

「いやね。。。もしかしたら手足がなくなって羽根が出るかもしれないから、今の内に手足をよく見たり、動かしておこうと思ってね。」

銀次郎が手足を伸ばしながら言った。

「ん？どういうこと？」

与助が不思議そうに聞いた。

「あ～。ちょうど君に聞こうと思っていたんだけどね。。。オタマジャクシの時は水の中にいてヒレがあっただろ。そしてヒレがなくなって手足がでて陸にいるだろ。じゃ、次はさ、、、手足がなくなって羽根が出て空で暮らすんじゃないかと思うんだけど、、、合ってるよね？」

キラキラした目でこちらを見ながら聞いてきた。

与助は困ってしまった。

羽根なんて生えるわけないし、、、これはもしかしたらまた俺を笑わそうとしているのかもしれない。。いや、でも今ここに来たのは偶然だ。

ん～いったい、俺は何て言ってあげたらいいのだろうか、、、？

「ね～、、、合ってるよね？」

銀次郎が再び聞いてきた。

「わかんない」

とだけ言って、自分の隙間に戻った。

「いったい、なんて言うのが正解だったんだろうか～」
「ん～～～

「あ～いないな～。。。一人でどっか行ったのかな～」
「仕方がない。一人で行くか。」
朽木を降りて雑木林の奥に行ってみることにした。

これまで、この雑木林の奥に行ったことはなかった。
それは、鬱蒼とした森の奥は少し薄気味悪くて、一人で行くのは怖かったのだ。

恐る恐る奥に歩いていくと、次第に雨足も強まってきて、周りも暗くなってきた。

「なんだか怖いな～。雨も結構降ってきたし、、、このまま進むと迷って、帰って来れなくなりそうな気がするな～」
そこで、コンクリートブロックが2段ほど重ねて置いてある場所があったので、とりあえず、その一番下のコンクリートブロックの穴の中で雨宿りすることにした。

時折、カミナリも鳴ってきて、カミナリの閃光が周りを一瞬明るくした。
すると、その光に映し出されるように、奥の大きな石の下に大きなカエルがいるのが見えた。

「うわっ、化け物だ！！！なんて大きなカエルだ！見たことないぞあんな大きなカエル」
「あんなのに見つかったら、、、食べられてしまう。。。」
怖くて、動けなくなってしまった。

すると、そのカエルは何やら自分の皮を口で引っ張って剥がしているように見えた。
「おいおい、、、自分の皮を自分で剥いでるぞ・・・・」
「やっぱり、化け物カエルだ。。。」

そのカエルはどんどん自分の皮を剥いでいく。

「うわ～、、何しているんだあのカエル。。なんかとっても苦しそうだ。。」
「でも、、、そういえば、、あれは、、〝ヒキガエル〟というカエルかもしれないな。。。」
「なんか、前にそんな大きなカエルもこの辺りにいると聞いたことがある。。。」
「でも、なんであのカエルはあんなに苦しそうに、自分の皮を脱いでいるんだ？」

時折、カミナリがなり、その姿が一瞬映し出されるのだ。

「もしかしたら、、、、、カエルの次の形態に変わるところなんじゃないか！！！」
「オタマジャクシからカエルに変わったように、次は手足がなくなっていよいよ羽根がでるところかもしれない。いったい、どんなスゴイ姿になるんだ！！」
なんだか、ワクワクしてきた。

「カミナリよ、またあのカエルを映しだしてくれ。。。そして、カエルの次の形態を見せてくれ。。」
祈るような気持ちで次のカミナリを待った。

すると、カミナリが鳴った。
そして、ヒキガエルが皮をもう少しで全部脱ぐところが見えた。

「おいおい、、いよいよだ。。。」
「次のカミナリが映し出した時、カエルの次の形態。つまり、まだ知らない第3形態が見れるぞ。。」
「いったい、どんな形態なんだ。。。。。」
「カミナリよ、、頼む、見せてくれ。。。。」

その願いが通じたように、しばらくして大きなカミナリがなり、辺り一面が明るくなった。

そこに映し出されたのは、羽根などなく、ツルツルの綺麗な皮膚に変わっただけのさっきと同じ姿のヒキガエルだった。

・・・・

「変わってないやないか～～～～～～～～い」
一人で穴の中で叫んだ。
その声は、雨とカミナリにかき消された。

妄想アマガエル日記（１８）　－８月２２日（火）晴れ

「まったく、変なもん見てしまったな～」
雨がやみ、雲も晴れ、月明かりの中、トボトボと隙間に戻ろうと歩いていた。
「カエルは第２形態までということなのだろうな～。。。」
「しっかし、あのヒキガエル、遠目から見ても皮を脱いだらツルツルの皮膚になっていたな～。あれを美肌って言うんだろうな～」
「どうやって自分で皮を剥ぐんだろうな～」
そんなことを考えながら、来た道を戻っていると、後ろから与助が声をかけてきた。
「おっ、銀次郎じゃないか、どこ行っていたんだい？」
いつも通り、明るく笑顔で聞いてきた。
「あっ、与助くんじゃないか～。さっき、雨が降って来たから一緒にこの雑木林の奥に行こうと誘うとしたんだけど、隙間にい



なかったね。」
そして、ブロックの孔で雨宿りをしていた時に見たことを説明しながら一緒にテクテクと歩いていた。

「なるほどな～ヒキガエルの脱皮を見たんだな～。」
ふつうに答えながら、話しを聞いて、銀次郎がカエルに第３形態なんてものがないことにようやく気付いてくれたようだったから、内心ほっとしていた。

「そのヒキガエルとは何か話したりしたのかい？」
与助が話しを変えようと質問した。

「いや、、、少し遠いところにいたし。こっちのことはたぶん気づいていなさそうだったし、何より大きくて少し怖くてね。。。」

「そうか～。俺もはじめてヒキガエルを見た時は驚いたな～。なんて言ったって、大きいし、体が赤色していてイボイボしてゴツゴツしていたし、体からなんか白いベタベタする液体だしていたしな～」
思い出しながら、話しをした。

「白いベタベタする液体ってなに？」
銀次郎が不思議そうに質問した。

「あれ、見なかった？なんか体から白くてベタベタする液体だすんだよヒキガエルって。。」

「へぇ～、、そうなんだ。。」
銀次郎が見たヒキガエルはツルツルした皮膚で、風呂上りのようなすっきりした顔をしていた。

「でさ～　その白いベタベタが付くとなかなか取れないんだよ～」
与助がさらに詳しく説明した。

「へぇ～、、ヒキガエルって、皮膚を剥いて、白いベタベタする液体も出すんだ～」

「ん？もしかして、その白いベタベタって、美容パックなんじゃないの？」

「ヒキガエルって、、、皮膚を新しくしてツルツルにしたり、パックしたりして、、、美肌に熱心なカエルなんだな～」

銀次郎が真剣な顔で、つぶやいた。

「そうかな～」

与助がヒキガエルの姿を想像しながら、返事をした。

そして、また困ってしまっていた。

「コイツは何で、こんな変なことばっかり考えるんだろうな～。。。」

「第３形態が解決したと思ったら、今度はヒキガエルが美肌に熱心だなんて、、あんなイボイボでゴツゴツした皮膚のカエルが美肌に熱心なわけないだろう～。まったく、なんて答えてあげればいいのか。。」

２匹のカエルが真剣な顔をして、帰路についた。

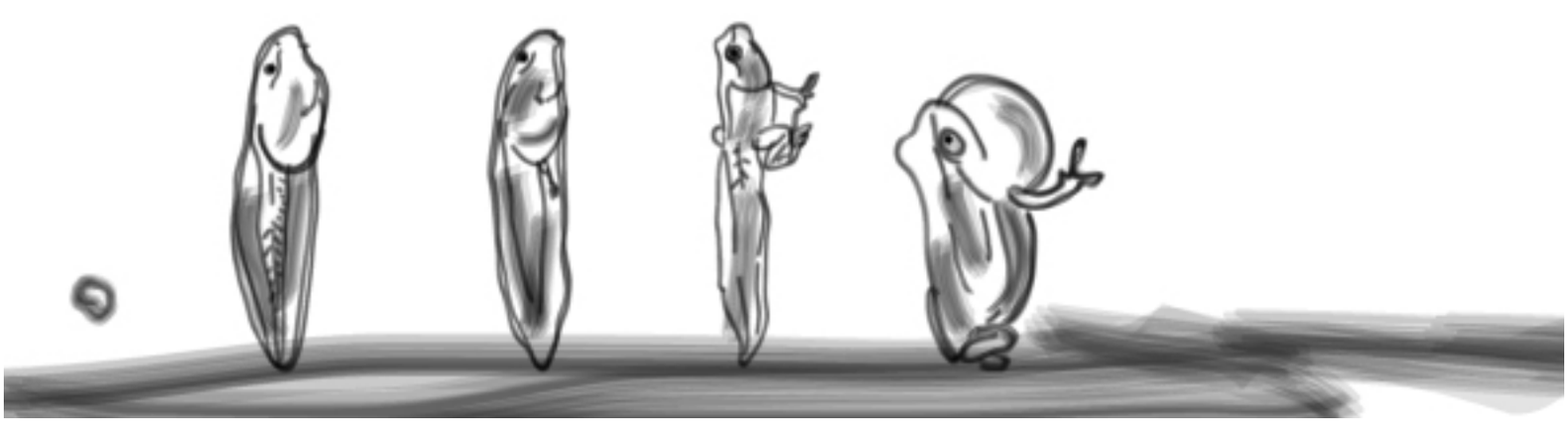
妄想アマガエル日記（１９）－８月２４日（木）くもり

与助と二人で朽ち木に戻ってきた。

すると、朽ち木の前に１匹のヌマガエルがいて、こちらを見ていた。

「あっ、あのヌマガエルはこの前 石の下にいたやつだ！」

銀次郎が思い出して、そう与助に小声で言った。



「ん？知り合いなのかい？」

「いや～知り合いってわけじゃなくて、この前朽ち木の隙間から外を見ているときに、そこの大きな石の下にいて目が合っただけなんだ。」

「ふ～ん、じゃ、知り合いってわけじゃないんだ。」

そのまま、そのヌマガエルの前を通り過ぎて、お互い隙間に戻ろうとしたところで、そのヌマガエルが声をかけてきた。

「俺は、小太郎っていうんだけど、お前、俺のことは覚えてないだろ？」

小太郎が聞いてきた。

「いや、、なんとなく、見覚えあるけど。。」

銀次郎がわざとらしく、どうにか覚えているような感じで答えた。

「お前は、水の中から陸に上がる時に、俺の頭を踏み台にしたのは覚えていないだろうけど、俺は忘れていないからな、、」

小太郎が恨めしそうに言ってきた。

「えっ、そうなの？確かに、あの時ちょうどいい石があると思って踏み台にしたけど、、あれは君だったのかい？」

銀次郎がまったく知らないって感じで答えた。実際に、知らないのだ。

「あ～、そうだよ。覚えていたのかい。」

「それは、話が早い。」

「お前は俺の頭を踏み台にしたんだから、一つお願いを聞いてくれ」

小太郎が、高圧的に言ってきた。

「えぇ、、、だって、わざとじゃないし。。。」
銀次郎が慌てているのを見て、与助が間に入って話しはじめた。
「まぁまぁ、話しはわかったけど、とりあえず、そのお願いというのを聞いてみようじゃないか。」
「俺は冒険家なんだ。だから、今日もいろいろなところを巡ってきた。ただな～～。あそこに黒い大きな建物があるだろ?あの上に行ってみたいんだけど、何度やっても登れないんだ。」
「そこでお願いなんだが、お前らは壁を平気で登るだろ?あれをどうやっているか教えて欲しいんだ」
・　・　・
銀次郎と与助がお互い顔を見合わせて考えていた。
というのも、壁を登るのに苦労したことがないからだ。
「どうやって壁を登るって聞かれてもね、、、こうやって壁に手を足を貼りついて登るだけだよ?」
銀次郎が身振り手振りで話した。
「いや、、そんな簡単に壁に手足なんて貼りつかないだろ?」
小太郎が自分の手足を見ながら言った。
「ちょっと手を見せてくれよ」
与助が小太郎に言った。
「ほら、お前らと同じ手だろ?特に、違いはないだろ?手じゃなくて、コツを教えて欲しいんだよ!!」
小太郎が呆れたように、手を二人に見せながら、言った。
その手を銀次郎と与助が覗きこんで、

「ん？、、、吸盤がないね～」
銀次郎が言った。
「たしかに、、吸盤がないね～」
与助も言った。

「ん？吸盤ってなんのことだい？」
小太郎が不思議そうに言った。

「ほら、見てみなよ。。。僕らアマガエルは手足に吸盤があるんだよ。この吸盤を壁に貼り付けて壁を登るのさ。」
銀次郎が自分の手を見せながら説明した。

「えぇ、、お前ら手に吸盤なんてついているのか！！」
「だから、あんな壁を平気で登れるのか。。。」
小太郎が少し悔しそうに言った。

「どうやったら、その吸盤　手につけれるんだ？」
小太郎が聞いてきた。

「そんなのわからないよ。。だって、オタマジャクシからカエルになった時にはあったからさ～」
銀次郎が少し困った感じで答えた。

「そうなのか、、、だから、何度壁に登ろうとしても登れないわけだ。。。」
小太郎が少し落ち込んでいた。

それを見て、銀次郎と与助は少し可哀そうに思えてきた。

「どうにかしてあげたいな～」
与助が銀次郎に話しかけた。
「確かにね、、じゃ、二人でおんぶしてあの壁登ってみようか？」
銀次郎が提案した。
「そうだな～。。。面白そうだからやってみるか！」
与助もその提案に乗った。
「どうだい？僕らが君をおんぶして登るから、あの建物を登って、あの高いところからの風景を見てみないかい？」
銀次郎が落ち込む小太郎に提案した。
すると、少し考えてから、
「いいのかい？そんな面倒なことをお願いしても。。」
「いいさ。同じ夜に同じ田から陸に上がった仲間みたいなもんだし、頭踏んだお詫びもかねて。。」
銀次郎が照れくさそうに答えた。
「じゃ、お願いするよ。。。冒険家の俺は前からあの建物の上に登って、あそこからの風景をどうしても見てみたかったんだよ。。」
小太郎が嬉しそうに答えた。
「よし、じゃ、とりあえず、この辺りで練習しないといけないな。。落ちたら危ないから。」
「今日はもう遅いから、一晩休んで明日の朝から練習はじめることにしよう！」
与助が提案した。
「じゃ、僕の隙間においでよ！」

「与助の隙間より地面に近いところにあるから入りやすいし、涼しいしさぁ。」
銀次郎が小太郎を明るく誘った。

小太郎は一瞬で考えた。
コイツの寝相の悪さは異常だ。もし、寝ている時に蹴飛ばされたりしたら、隙間から落ちて怪我するし、コイツはたぶん寝るまで話しかけてくるぞ。。。いや、寝ても話しかけてくるぞ。。
「いや、、、壁を登る練習も兼ねて、与助の隙間で寝させて貰うよ、、いいかい？」

与助はその答えを聞いてすべてを悟った。
ハハァ～ン。。コイツ、銀次郎の寝相の悪さを知ってるな、、、
銀次郎に気づかれないように答えないといけないな。
「わかった。じゃ、練習も兼ねて俺の隙間にいこう」

その答えを聞いて小太郎も悟った。
ハハァ～ン。。コイツも銀次郎の寝相の悪さを知ってるな、、、
そして、銀次郎を傷つけないように答えてくれたんだな。

「いい奴だ！」

妄想アマガエル日記（２０）－８月２６日（土）晴れ

「ドガッ、ドン！！　ドゴン、、」
おいおい、何の音なんだ？
小太郎は与助の隙間で、寝そうになっていたが、大きな音で起こされた。

「すぴ～～～、、、ドゴン、ドゲン、ドッカン、、、」
いったい、あの音はなんなのだ～？

「おい、与助。。起きているかい？」
小太郎が小さな声で与助に呼びかけた。

すると、与助が眠そうな声で
「ん～、、なんだい？もう寝そうになっていたのに・・」

「いや、、あの大きな変な音は何の音なんだい？気になって寝れないんだよ。。。」
小太郎が困り果てて、絞り出すように言った。

「あ～、、あの音か。君は知っているんだろ？」
「銀次郎の寝相の悪さを。」
与助が当たり前のように言った。

「おいおい、もしかして、あの音は銀次郎が寝ながら、壁にぶつかったり、蹴ったりしている音なのか？」
小太郎が呆れたように言った。

「あぁ、そうさ。はじめ俺もあの音を聞いた時は何の音かわからなくて、驚いたんだけど、音の鳴る方を見にいったら銀次郎が壁にぶつかっていたんだ。」
与助が淡々と説明した。

「あんな音を毎日聞いてよく寝れるな～」
少し呆れたように小太郎が言った。そして、銀次郎の隙間で一緒に寝なくてよかった～と内心ほっとしていた。

「いや、、あの音のお陰で、夜 外敵が近づかないんだ。みんな気持ち悪がってな。。」
「だから、あの音に慣れてさえしまえば、安心して寝れるんだよ。」
与助がこれまでを振り返って、説明した。

「なるほど～。。暗闇の中であんな変な音がしたら、みんな気持ち悪がって近づかないか～」
小太郎が納得して、感心して言った。

「でも、あんなドンドン壁にぶつかって、銀次郎は大丈夫なのか？」
小太郎が心配そうに言った。

「それがね～。。あいつがスゴイのは、あんなに寝相が悪いのに、隙間からは落ちることはないんだ。たまにこの朽ち木の上に登っていることはあるけど。あと、壁にぶつかっているんだけど、どうやらアイツの体がとても頑丈らしくて怪我一つしないんだ。」
「俺も最初の頃、そのことが気になって朝会った時に体を見たり、体が痛くないのか聞いたりしていたんだけど、本人はなんともないみたいなんだ。。」
与助がこれまでの経験を踏まえてわかりやすく解説した。

「へぇ～。。銀次郎という奴はスゴイな～。。」
そんな話しをしていると、音にも慣れてきたようで、いつのまにか寝てしまっていた。

・
・
・

どれくらい寝ただろう。久しぶりにこんなにぐっすり寝た。
これまでは、いつも初めてところで一人で寝ていたから、あまり十分に寝ることはなかったが、与助が言うように銀次郎の大きな音のお陰で安心して寝ることができた。

「いや～～、、よく寝た！！」

小太郎が朝日を浴びながら、外を向いて叫んだ。

「そうか。。。よく寝れたんならよかった。」

与助が奥から、声をかけてきた。

そして、与助を朝日が照らした。

「おいおい！！！お前、どうしたんだい？その色は。。。。（かっこいいけど）」

「全身青色じゃないか！！！（なんか羨ましいけど）」

「大丈夫なのか？（めちゃくちゃイケてるけど）」

昨夜は暗くて体の色はわからなかったから、小太郎がびっくりして、声をかけた。

「あ～。。この色は生まれつきなんだよ。俺は体の色を変えられないんだ！」

与助が説明した。

小太郎は思った。

おいおい、、銀次郎だけがスゴイ奴だと思っていたが、こいつもスゴイ奴だな。。

「変な奴らと仲良くなってしまったもんだ。。。」

「面白くなりそうだ！」

妄想アマガエル日記（２１）－８月２７日（日）晴れ

「あっ、おはよう！」

「昨日はちゃんと寝れたかい？」

銀次郎が小太郎に声をかけた。

「あ〜、とってもよく寝れたよ。」
「なかなか居心地のいい隙間だな。ここは。」
小太郎がぎこちなく答えた。

「そうだろう〜。ここはとても居心地がいいんだよ。涼しいし、静かだしね。」
銀次郎が自慢げに言い添えた。

「ところで、君は体が痛くないのかい？」
小太郎が恐る恐る聞いてみた。

「ん？体？全然なんともないよ！」
手足を屈伸しながら、ニコニコしながら答えた。

「ふ〜ん。君は本当に頑丈な体をしているんだな〜」
小太郎が銀次郎の体を見回しながら言った。

「朝っぱらから、変なことを言うな〜。。。。」
銀次郎が前にも同じようなことを言われたな〜と思いながら言った。

「だって、君は夜中ずっと壁にぶつかっていて、スゴイ音していたんだぜ。」
小太郎が呆れたように言った。

「あ〜、そういえば、与助が前にそんなこと言っていたよ。。」
「でも、本当になんともないんだよね。。」
「寝相が悪いのはわかっているけど、あの隙間から落ちたこともあまりないし、怪我したこともないんだよね。。」
「たぶん、音がするのは別の原因があると思うんだよ。。」

銀次郎が不思議そうに答えた。

「そっかぁ、、、まぁ、怪我がないならいいんだけど。」

与助が言っていたことが本当だったんだなと、思いながら返事をした。

「おっ、もう集まっていたのかい！朝の餌を食べるのに少し手間取ってしまって遅くなってすまない。」

与助が爽やかに言ってきた。

「ところで、今朝は何食べたんだい？」

銀次郎が与助に話しかけた。

「今日は、小さなキリギリスの幼虫とハエかな。ミミズは見つからなかったんだ。。探したんだけどね。。まぁ、それで少し時間かかったんだ。。。」

与助が少し残念そうに答えた。

「そうなのか～。。俺はさっきそこの田んぼの脇でミミズ食べたけどね～。」

小太郎がさらっと話しに入ってきた。

「いいな～。僕はクモを食べたんだけど、糸が口の中で絡まってね。。。それを取るのに苦労したよ。。」

銀次郎が困った感じで言った。

「さて、じゃ、練習してみるか。」

「まずはそこのコンクリートブロックを登ってみよう。」

与助が声をかけた。

「よし、じゃ、まずは僕が小太郎をおんぶして登ってみるよ！」

銀次郎が壁の下に登る体勢になって、背中を小太郎の方に向けて言った。

「じゃ、すまんが、背中に乗るよ。」

小太郎が銀次郎にそういいながら背中に乗った。

「じゃ、壁を登ってみるよ！」

銀次郎が小太郎をおんぶした状態で壁を登ろうとした。

すると、

「キャッ、キャキャキャ」

銀次郎がくすぐったそうに笑った。

「脇腹に足が当たって、くすぐったいよ～。。」

銀次郎が耐え切れずに地面に降りた。

「だって、どうやっても足が脇腹のところに当たってしまうだろう？」

小太郎が困ったように答えた。

「じゃ、今度は俺がやってみよう！」

与助が言ってきた。

「え～。。まだ全然登れてないんだけどな～」

銀次郎が悔しそうに言ってきた。

「まぁまぁ、とりあえず今は試行錯誤の最初だから、色々やってみようじゃないか！」

与助が銀次郎をなだめるように言った。

「わかったよ。」
銀次郎が渋々納得した。

「じゃ、乗っていいよ。」
与助が小太郎に背中を向けて言った。

「よい、しょっと！」
小太郎が銀次郎の背中に乗った。

すると、
「ウキャ、ウキャキャキャキャキャ」
与助がくすぐったそうに体をよじりながら、地面に降りた。

「すまない。。。。君の腹はなんかとてもツルツルしていて、柔らかくて気持ちいいんだな～。。背中がなんかすごくくすぐったくなるよ。。」
申し訳なさそうに言った。

「あ～。俺の腹は白くてツルツルしてて、柔らかいだろう。」
「俺たちヌマガエルはツチガエルに似ていると言われることがあるんだが、ツチガエルは腹に黒いシミみたいな模様があるし、皮膚が硬いんだが、俺たちは模様もなくて真っ白で、やわらかいんだ。。。」
小太郎が分かりやすく説明した。

「困ったな～。。。」
銀次郎と与助が、申し訳なさそうに顔を見合わせて言った。

「よし、じゃ、俺と銀次郎が何かを持って上がってさぁ、それに君が掴まって登ってみるというのはどうだい？」

与助が提案した。

「なるほど～。それならくすぐったくないし、２人で持ち上げれば重さも半分でよくなるし、さすが与助だ！」

銀次郎が納得して、感心した。

「じゃ、手始めにここに落ちているクヌギの枝はどうだい？」

与助が、落ちていた枝分かれたした、枯れた葉が数枚ついたクヌギの枝を手に取って言った。

「じゃ、こっちの枝を僕が持って、そっちを与助が持って、ここに小太郎がしがみついていたらどうだい？」

銀次郎が提案した。

「じゃ、とりあえず、銀次郎と登ってみるから、ある程度登ったところで、ここにしがみついてみてくれ。」

与助がさらに補足して、説明した。

「わかった」

小太郎が答えた。

「ん～。。片手で枝を持つのは少し難しいね。。」

銀次郎が実際にやってみて、この問題に気づいた。

「確かにな～。。。じゃ、この葉に穴をあけてそこに体を入れて、両手を開けた状態で登ってみることにしよう。」

与助が提案して、さっそく実際にやることにした。葉に穴をあけて頭をそこに入れてみた。案外うまくいった。

「うん。これなら両手が開いているから登りやすい。」

銀次郎が嬉しそうに言った。

「よし、じゃ、登ってみよう。。」
与助がそう言って登り始めた。それに合わせて銀次郎も登り始めた。すこし登った辺りで、小太郎が下の枝にしがみついた。
「よし、このまま上まで登ってみよう。」
与助が声をかけた。

しばらく、登っていくと、
「ちょっと待って、、、穴を大きく開けすぎたかもしれない。」
「こっちの葉が破れそうだ。。」
銀次郎が慌てて言った。

「じゃ、一旦降りよう。」
与助が言った。
そして、地面に降りて銀次郎が葉をのぞきこみながら、いろいろと問題点をお互い話し合った。

「この方法は危ないかもしれないね。。。」
「途中で葉が破れたら危険だ。」
銀次郎が答えた。

「確かに、、、ただ、2人で持っていれば、どちらかが外れても小太郎くらい一人で持てるから安全なのはわかったな。」
与助が、おんぶよりは、この方法をより試行錯誤する方がいいと結論をだした。

「何か、両手が使えて、2人で持てて、小太郎が安全に掴まれるものはないかな～」
銀次郎と与助が周りを見回して言った。

すると、

「そういえば、この前冒険しているときに、あそこの水路の手前に白いマスクが落ちていたんだ。。あれなら、輪っか状の紐が2つついているし、俺が乗れる部分もあるし、どうかな～？」
小太郎が提案した。

「なるほど～。。マスクか～。いいかもしれないな。」
与助が言った。

そして、小太郎がマスクを取りに行った。その間に銀次郎と与助はお互いに同じスピードで登る練習をしていた。
しばらくして、小太郎が戻ってきた。

「あったよ。。風で少し飛ばされていて、探すのに手間取ってしまった。」
小太郎が、白いゴムが1対ついたマスクを首に掛けながら持ってきた。

「お～！これならよさそうじゃないか。。首に掛けても痛くなさそうだし。」
与助が嬉しそうに言った。

「じゃ、さっそく、やってみよう！」
銀次郎が与助に言われる前に言ってみた。

まず、与助と銀次郎がマスクのゴムを首に掛けて、ある程度登って、ハンモックのような状態になったところで、小太郎がそこに乗った。

「なかなか順調にいけそうじゃないか！」
与助が嬉しそうにいった。

コンクリートの壁を半分くらい登ったところで、小太郎がマスクの上に立った。すると、マスクがひどく不安定になった。

「おいおい、立ったらダメだよ。そこで大人しく座っていてくれよ。。。」
与助が小太郎に言った。
「そうか、悪いな～。立った方がなんかカッコイイと思ったんだけどな。。」
小太郎がバツが悪そうに言った。
そのまま、大人しく座った状態でコンクリートの壁を上まで登った。最後は、立って、小太郎が自分で壁の上に立った。
「おーーーーーー！」
「スゴイなーーーー！こんな風景は初めて見た！！」
「いつも草の根際とか、土の中しか見たことないから、こんな高いところから見たのは初めてだーーーー」
小太郎が嬉しそうに叫んだ。
それを見て、銀次郎と与助は顔を見合わせて、笑った。
「じゃ、このままこの奥に歩いて行って、柳の木の下で少し休もうか！」
銀次郎が提案した。
与助、銀次郎、小太郎の順に連なって、柳の木の下までやってきた。
「おーーーー！！ここはまた涼しくて、快適な場所だな～」
小太郎がとても嬉しそうに叫んでいた。
「そうだろう～。ここは秘密の場所なんだ。」
銀次郎が照れくさそうに言った。

この前、与助とここに来た時にお互い笑った話しを一通りして、それを聞いた小太郎も大爆笑をして、しばらくの間を柳の木の下で3匹のカエルが笑って過ごした。

「いや～、、面白い！お前らはやっぱり変な奴だな～」
小太郎が嬉しそうに言った。

「じゃ、そろそろ降りようか！」
与助が提案した。。

「そうしよう！」
小太郎と銀次郎が相槌をした。

・　・　・

3匹のカエルが顔を見合わせて、言った。
「どうやって、降りようか。。。？」

登ることしか考えていなかったので、降りる方法は考えていなかったのだ。

3匹のカエルが柳の木の下で並んで沈黙した。
「ちーーーーん」

「どうやって降りようか、、、？」
銀次郎が腕を組んで与助に話しかけた。

「そうだな～、、、自分たちだけなら、簡単なんだけどね。。」
「小太郎を安全に降ろさないといけないし、ここはそんなに高くないから、どうやっても降ろせるけど、最終的な目標はあの大きな建物の上だからな～」
与助が黒い大きな建物を指差しながら言った。

「なんか悪いな～。。。」
小太郎が申し訳なさそうに言った。

「ところで、君たちは一人の時はどうやって、こんな壁を降りるんだい？」

「どうやって？と言われても、ほらっ、こうやって、こうやって、たまにジャンプして、こうやって降りるんだよ」
銀次郎が身振り手振りで説明した。

それを見て、与助がわかりやすく補足した。
「この手の吸盤を壁に貼れば体を固定できるんだ。しかも、全部の手足が貼りついていなくてもよくて、１つの手の吸盤だけで自分の体くらい支えられるんだ。」

「へぇ～、、、便利な手足をしているんだな～」
小太郎が感心して言った。

「じゃあさ、そんな体を支えることができる強い吸盤をどうやって、そんな簡単に剝がすんだい？」

小太郎が不思議そうに聞いた。

「剥がし方？」

銀次郎と与助がお互いを見て首をかしげた。

「だってそうだろう？片手だけで体を支えられるほど吸盤の吸着が強いんだろう？それを剥がすのはとても大変そうじゃないか。。。？」

小太郎が真剣な顔で聞いた。

「そういわれてもね～。。。。こうやって、こうやったら剥がせるんだよ。」

銀次郎が身振り手振りで説明した。

それを見て与助が補足した。

「手の吸盤は先にあって、なんかベタベタする感じなんで、それを手の根元から持ち上げると案外簡単に取れるんだよ」

「へぇ～、、、ベタベタするんだ！！」

小太郎が感心して言った。

「じゃあさ、泥の地面とか歩いていたら手足に砂とか土とかくっついて大変なんじゃないかい？どうやってくっつかないように歩くんだい？

小太郎が不思議そうに聞いた。

「砂とか土がくっつく？」

銀次郎と与助がお互いを見て首をかしげた。

「そういわれてもね～。。。。あまり付かないんだよね。。」

銀次郎が手を見せながら言った。
それを見て与助が補足した。
「手は触るとベタベタする感じなんだけど、一応小さな吸盤なんだよ。だから、ベタベタする感じはあるんだけど、ベタベタする粘液みたいなのが出ているわけじゃないから、砂とか土とかはあまり付かないんだ。」
「まぁ、詳しくはわからないけど、指の先に小さな小さな六角形の上皮細胞があってね、それがそれぞれさらに繊維状に枝分かれしていて摩擦力を高めて貼りつくんだ。」
「へ～～～？」
与助の説明を聞いて、小太郎と銀次郎がよくわからなくて、首を傾げた。
「まぁ、なんだかんだで壁にくっついて、簡単に剥がれるけど、砂とか土は付かないってことさ！！」
二人を見て、与助が簡単に説明を変えた。
「じゃ、とりあえず、銀次郎に一人で降りてもらってさ、それを見ながら、なんか降りるいい方法を考えようじゃないか！」
与助が小太郎に言った。
「そうだな。まぁ、吸盤のことはよくわからないけど、降り方を見て考えてみよう！！」
小太郎が与助に答えた。
「じゃ、銀次郎、降りてみてくれる？」
与助が銀次郎にお願いした。
「わかったよ。」
銀次郎が答えて、降りようと壁の淵に立った。
・

・・・

「あのさ～。。。与助がなんか手足の吸盤のことをなんか難しく言っていたからさ～、、、なんか貼りつき方がよくわからなくなっちゃったんだよね。。。」

銀次郎が困ったように答えた。

「えっ？」

与助と小太郎が驚いて、顔を見合わせた。

「どうやって、壁に張り付いて、剥がすんだっけ、、、？」

銀次郎が与助に聞いてきた。

「おいおい、、、どうやってって、こうやって壁に張り付けて。。」

「ん？どうやって貼りついていたっけ。。。？どっちの足が先だっけ、、？」

与助もいろいろ考え過ぎて、わからなくなってしまった。

・・・

「あれ？みんな降りれなくなっちゃったね。。。。」

銀次郎がつぶやいた。

３匹のカエルが柳の木の下で並んで沈黙した。

「ちーーーーーーーーーーーーん」

「どうやって降りようか、、？一応、吸盤の使い方はお互い思いだしたしさ、、」
「じゃあさ、こうやって、こうやって小太郎を支えて降りてみようか。。」
銀次郎が片足を上げて身振り手振りで与助に提案していた。

すると突然、突風が吹いて銀次郎が吹き飛ばされてしまった。

「あれ～～～～～～～～～～～～～～」

・　・　・

「ピタっ」
銀次郎は壁の下に落ちたが、何事もなかったように地面に着地した。

「お～～～い、大丈夫か～？」
小太郎が壁の上から身を乗り出して下にいる銀次郎に声をかけた。

「全然大丈夫～～。一応、降りれたよ～～～」
銀次郎が恥ずかしそうに言った。

「おいおい、、お前だけ降りてどうするんだい？」
「これは練習なんだよ。ほんと頑丈な体だな。。。」
与助が呆れるように言った。

「そんなこと言ったってさ～。。。風で飛ばされちゃったんだから仕方ないよ。。」

銀次郎が困ったように答えた。

「早く登ってこいよ～～。二人いないと練習にならないからさ～～」

与助が銀次郎に声をかけた。

「わかったよ～～。今すぐ行くよ。」

銀次郎が急いで壁をよじ登った。

・　・　・　・

「ハァハァ、登って来たよ！早かったでしょ。」

「確かに早かった。相変わらずスゴイ体しているな～」

与助が呆れたように褒めて、それを見て小太郎も頷いていた。

「じゃ、どうやって小太郎を降ろそうか。。？」

与助が銀次郎に聞いた。

「そうだね～。。。マスクをパラシュートみたいにして降りるってのはどうだろう？」

銀次郎が自信を持って提案した。

「いやいや、、、ここからならまだ大丈夫だろうけど、、、」

「最終的にはあの高い黒い建物の上から降りるんだぜ。。。さすがにあそこから落ちたら危険だろう～。今は練習なんだから、本番で使える降り方を練習しないといけないんだ。」

与助が銀次郎の提案をやんわりと断った。

「じゃさ、お互いの腰にマスクのゴムをかけて、小太郎はマスクの部分にどうにかしがみついて降りるってのはどうだい？一番シンプルだけど、小太郎はしがみつくの強そうだし、僕らも自由に降りれるしさ。。」

銀次郎があまり自信なさそうに提案してみた。

「なるほど！！それなら、お互い自由に降りれるから、難しく考えて降り方がわからなくなることもなさそうだな。」

「でも、小太郎は大丈夫かい？」

「大丈夫だ！あまり俺を見くびってくれるなよ。」

小太郎が胸を張って答えた。

「よし、じゃ、やってみよう！」

与助がいつものように声をかけて、ゴムを頭から通して腰のクビレのところに引っ掛けて、マスクの部分に小太郎がしがみついた。

まず、与助が壁を降り始め、続いて銀次郎が降り始めた。

壁の上にマスクと小太郎が残った。

「おいおい、、、ここからどうやって俺は動けばいい？」

小太郎が少し困ったように聞いてきた。

「まずは、マスクを壁に降ろしてそれに乗るか、このまま俺たちが下に降りてそのままマスクが引っ張られて降りるかだけど、引っ張った方が早くない？」

与助が小太郎に言った。

「でも、そうやったら、落ちた瞬間にゴムの力でビヨン、ビヨンと上下に動くんじゃないか？」
「下手したら上に飛ばされるんじゃないか？」
小太郎が少し心配そうに言ってきた。

「確かにね。。。じゃあさ、僕たちがもう少し上に登って、まず最初にマスクと小太郎を壁の外に降ろしてから、降りたらどうかね？」
銀次郎が提案した。

「よし！それでやってみよう」
与助が同意して、さっそくやってみることにした。

「どうだい小太郎？大丈夫かい？」
与助が聞いた。

「あ～、、、まぁ、大丈夫だけど、空中に浮いてる感じがなかなかスリルがあるな～。。。」
「まぁ、余裕だけどな。。」
小太郎が、怖がってるのがバレないように言った。

「よし、じゃ降りてみよう！」
与助と銀次郎がジャンプして、お互いいつも通り降りていった。

すると、
「ひゃ～～、、、、ひょぇ～～～」
小太郎はゴムで上下に大きくゆれて、落ちそうになる度に悲鳴が出てしまうのを必死にばれないように耐えていた。
・
・

そして、無事 地面に着いた。

「安全に降りることができたな！」

与助が銀次郎に声をかけた。

「そうだね。これなら小太郎も危なくなく降りれるよ！」

銀次郎が自信たっぷりに答えた。

「あぁぁ、そうだな。。これなら余裕だなぁぁあ。」

足の震えがバレないように一生懸命押さえて、小太郎が答えた。

「オエッ。」

妄想アマガエル日記（２４）－９月９日（土）晴れ

オタマジャクシの頃は水の中を泳いでいた。その頃は、水を吸いこんで呼吸していたし、水を吸いこんで餌を食べていた。それがある程度成長すると次第に頭の皮膚は硬くなり、ヒレはどんどん短くなって使えなくなっていった。ある夜、田んぼから陸に上がろうとした。その時、変なアマガエルに頭を踏み台に使われて、少し溺れそうになったが、どうにか陸に上がった。そして、俺は冒険家になった。色々なところを冒険した。まさに、怖いものなんて、何もなかった。でも、いつのまにか、手足がなくなって、背中から1対の大きな羽根が生えていた。そして、今は、大空を飛んでいる。今日も空高く飛んでいる。

「雲の上まで飛んでみよう！！」

ぐんぐん高く飛んでいる。もう少しで、雲まで届く。
すると、大きなジョロウグモの巣に引っかかってしまった。。。

「なんてことだ！！」
「クモの巣がこんなところにあるなんて、、、、」

もがいて、もがいてクモの巣から逃れるためにもがいた。
すると、糸が切れて、落下した。

「よし！糸から外れた！！」
「ん？？？羽根がない。。。」

飛ぼうとしても全然飛べない。体がカエルに戻っていた。
どんどん落下する。このままでは、地面に叩きつけられる。。。。。。

すると、
大きなアマガエルの柔らかい手の平に落ちた。

「はっ！！」
小太郎がその瞬間目を覚ました。

「大丈夫かい？だいぶうなされていたけど。。。」
心配そうに銀次郎が覗き込んでいた。

「夢か！」
小太郎がほっと安心してつぶやいた。



「どんな夢を見ていたんだよ、、丸2日もうなされて寝ていたんだよ。心配したよ～」
銀次郎がほっとしていた。

「今、与助は外に出ているけど、アイツもさっきまでここで心配していたんだ。」

「そうか、、、そんなに寝ていたのか。。。」
壁を登って降りる練習の後のことをあまり覚えていないのだ。

「おっ、起きたか！」
与助がちょうど隙間に入ってきた。

「なんか、、、心配させてすまんな。」
小太郎が申し訳なさそうに言った。

「いや、大したことないさ。。」
「でも、驚いたよ。」
「壁を降りてから皆でここに戻ろうとしたら、突然 君が倒れるんだから。。」
与助がその時のことを説明した。

「えっ？俺は倒れたのかい？」

「そうだよ～。。突然倒れてブルブル震えていたから、僕の隙間に与助と運んで寝かせたんだよ。」
銀次郎が付け加えるように説明した。

倒れたのか、、あの時のことはあまり覚えていない。

確か、降りる時にマスクにしがみついていたが、それが上下にゆれて生きた心地がしなかったのは覚えている。。
あれが原因で倒れたのかもしれないな。。。
でも、冒険家の俺が怖かったから倒れたなんて、この二人に知られるわけにはいかないな。

「そっかぁ。たぶん、あの日の朝に食べたミミズが毒ミミズだったのかもしれないな～」
「変な色していたし。。」
どうにか誤魔化すために、知恵を絞って説明した。

「そっかぁ、毒ミミズなんてのがいるんだな～」
「危ないね、、あんなに震えて、、落ちる～とかうなされるのは嫌だからな～今度いたら教えてね。」
「ちなみに、どんな色をしているんだろ？」
銀次郎が素直に、教えて欲しいと話した。

「まぁまぁ、食べ物には気をつけないといけないな。」
与助が、これ以上銀次郎が毒ミミズのことを聞かないように話しを変えようとつぶやいた。

小太郎が遠くを見るような顔で思った。
与助よ。。。。。君はすべてをわかっているんだな。。。
本当に、君はいい奴だ。
心の底から思った。

妄想アマガエル日記（２５）－９月１７日（日）曇り時々雨

「よし、小太郎も目を覚ましたし、どっか行こうか！」

銀次郎が二人に声をかけた。

「大丈夫かい？歩いたりできるかい？」

与助が小太郎を心配して聞いた。

「あぁ、全然問題ないさ。寝続けていたみたいだから少し外の空気を吸いたいしな。。。。」

小太郎が隙間の外をちらりと見ながら言った。

「じゃ、この前、雨の日に行ったこの雑木林の奥に行ってみない？」

銀次郎が提案した。

「あ～、、大きなヒキガエルが脱皮していたところだろ？」

「そうそう、、あの時は怖かったけど、３人で行けば怖くないし、今日は時折雨が降るから歩くのにちょうどいいからね。」

「大きなヒキガエルが脱皮？なんのことだい？」

小太郎が不思議そうに聞いた。

「あぁ～、君に出会った日にね、一人でこの雑木林の奥に行ったんだけど、その時に大きなヒキガエルが自分の皮を剥いて、脱皮していたんだよ！」

銀次郎がその時の様子やカミナリに映し出される姿や第３形態になると思って見ていたけどただ美肌になっただけだったことなどを嬉しそうに話した。

それを聞いた小太郎は腹を抱えて笑って、笑いすぎて、苦しそうになりながら、銀次郎が言う第３形態ってのをこの前夢で見たな～と考えていた。ただ、さすがにそんな夢の話しをすると銀次郎と同じように思われるから、やめといた。

「よし、じゃ、ご飯を食べてから、雑木林の奥に行ってみようよ。」
与助が二人に声をかけた。

「そうだね。毒ミミズは食べちゃだめだよ！」
銀次郎が小太郎に声をかけた。

「あぁぁ、そうだな。気をつけるよ。」
気まずそうに答えた。

しばらく、個々に餌を探して食べて、それぞれがお腹がいっぱいになった頃、３人が集まった。

「小太郎はずっと寝ていたから、お腹すいていたろ？」
「いっぱい、食べた？」
銀次郎が優しく声をかけた。

「あぁ、とりあえず、お腹もいっぱいになったし、気分もよくなったからよかったよ。」
小太郎が申し訳なさそうに言った。

「じゃ、雑木林の奥に行ってみよう！」
与助が声をかけて、３人で歩き始めた。
銀次郎がこの前一人で歩いていた時のことを話しながら、前と同じ道を歩くように思い出しながら先頭で歩いていた。その次に小太郎、与助の順で続いた。

しばらく歩いて行くと、この前雨宿りをしたコンクリートブロックが置いてあるところまでやってきた。

「へ～。。。この前一人で歩いて来た時はここまで来るのに結構時間がかかって、だいぶ遠くまで歩いてきたような気がしていた

んだけど、、案外近かったな～」
銀次郎が驚いたように言った。

そして、この前、この穴の中で雨宿りしている時にヒキガエルを見たことを説明した。

「ヒキガエルはどの辺りにいたんだい？」
与助が銀次郎に聞いた。

「そうだね～。。。ちょっと穴の中に入って思い出して見るよ。。」
「小太郎～～、、もう少し向うの木のところまで行ってくれる？見た位置を確認したいからさ～」

「この辺りかい？」
小太郎が後ろに歩きながら返事した。

「いや、もっと後ろ～」

「じゃ、この辺りかい？」
小太郎がさらに後ろに歩いて返事した。

「いやいや、もっと後ろだよ。奥に大きな石があるでしょ。その石の辺りだと思うんだよね。。」

「あ～、あの大きな石ね。。」
小太郎が急いでその大きな石の近くまで近づいて返事した。

「そうそう、、、その辺り。。。。。。。。。。。。。。。！」
銀次郎が返事をすると小太郎の背中の奥で黒い影がぬっと出てくるのが見えた。

「この辺りに、デカくて、自分の皮を剥ぐ、変なヒキガエルがいたんだな！」
小太郎が嬉しそうに返事した。

「しかし、こんなところにそんな変なヒキガエルがいるんだな～」
「冒険家の俺としては、一回見てみたいもんだよ！！はっはっはっ」
小太郎が大きな声でそういうと、強い風が吹いた。
そして、銀次郎と与助が何か言っているが、その声をかき消した。ただ、二人が何かを言いながら、後ろを指差していた。

「え？なに～？？聞こえないよ～」
小太郎が大きな声で聞いた。

すると、その瞬間風が止み、銀次郎と与助の声が聞こえた。

・
・
・

「後ろぉ、後ろぉ～」
「後ろぉ、後ろぉ～」

小太郎がゆっくり後ろを振り向くと、そこには、大きな大きなヒキガエルが自分を見下げているのが見えた。鼻の穴がひくひく動いていた。大きな腕をしていて、その腕の方が自分の体より大きいくらいだった。赤と黒のその模様とその大きな大きな姿は、まるで悪魔のように見えた。

・
・
・

「あへぇ」
気を失った。

妄想アマガエル日記（２６）　－９月２６日（火）曇り時々雨

　冒険家の俺は危険なところに色々行った。
時には、大きな石が落ちて来そうな崖を登ったこともあったし、ある時は真っ暗な洞窟の中を奥まで進んだこともあった。どんな危険なところでも後ろを振り返ることなんてありえない。冒険家の俺が通った後に道というのはできるのである。後ろを振り返っている暇なんてないのだ。どんどん進むんだ。時には大きな海原を泳いで進むことだってあった。

そして、今も、大きな大きな大海を泳いでいる。見渡す限り水平線だ。陸地は既に見えない。

「よし、もっともっと遠くまで泳いでいこう！！！」

どんどん泳いでいく。いつまで泳いでも陸は見えない。

すると、急に水が１ヶ所に吸い込まれはじめた。渦潮のように洗濯機のように回転する水の中央に吸い込まれいく。

「このままではいけない！！」

必死に吸い込まれないように逆に泳ごうとするが、流れが強すぎてどんどん吸い込まれてしまう。

「なんてことだ！！！」

「どんどん吸い込まれてしまうぞ、、、このままでは海底まで沈んで海の藻屑になってしまう、、、、」

もがいて、もがいて、どうにか流れに逆らおうとするがどうしても流れに逆らえない。
そして、渦潮の真ん中に吸い込まれてしまった。真っ暗な水の中を勢いよく流されていく。。。。

すると、遠くに明かりが見えて、

大きなアマガエルの鼻の中からポンッと、外に投げ出された。

「はっ！！！」

小太郎がその瞬間目を覚ました。

「大丈夫かい？だいぶうなされていかけど。。。。」

心配そうに銀次郎が覗きこんでいた。

「夢か！」

小太郎がほっと安心してつぶやいた。

「いや～心配したよ。。。」

与助も小太郎を覗きこみながら言った。

「すまないな～。。。何があったんだろう？」

「確か、雑木林の奥まで歩いて来て、、ヒキガエルの位置を銀次郎と確かめていたら。。。。」

「あっ、あの悪魔はどうなったんだい？」

小太郎が気絶する前のことを思い出して、むくっと起きて二人に聞いた。

「悪魔？」

「あ～　もしかして、ヒキガエルのことかい？」

銀次郎が優しく答えた。

「そうそう」

「彼なら君を抱っこしてくれているじゃないか。」

与助が指差して言った。

「！！！？」

小太郎は与助が言っている意味がわからなかった。しかし、周りを見渡してようやく自分が大きなヒキガエルに抱っこされていることを理解した。

「えっ。。えーーーーー」

「お前、俺をどうするつもりなんだよ！！」

小太郎が逃げようともがきながら、震える声で視線の先の大きな大きなヒキガエルに言った。

「あらまぁ～～、、元気な男の子ね～」

「肌も柔らかいし、、カワイイし、、、食べちゃおうかしら？」

ヒキガエルがニコニコしながら言ってきた。

小太郎は逃げようともがくけど、大きな腕に掴まれて身動きができない。

「冗談はやめてあげておくれよ。」

「小太郎が驚いてしまうじゃないか～」

与助がニコニコしながらヒキガエルを注意した。

「そうね。元気そうでよかったわ。」

ヒキガエルが小太郎を離して言った。

離された小太郎は、スゴイ勢いで逃げて近くの木陰に隠れた。

隠れた小太郎の近くに銀次郎が近づいた。

「お～い、、、小太郎～」

「この人は危険じゃないから、出ておいでよ～～」

「危険じゃない？」

「んなわけないだろう～。。。あんな化け物みたいな奴が。。」

小太郎が木陰の隙間からヒキガエルを指差して言った。

「本当なんだって。」

「あの人はとてもいいヒキガエルなんだよ。君が気絶して倒れて頭を石にぶつけそうになったから、そうならないように守ってくれたんだし、うなされてなかなか起きない君を涼しいこの場所まで連れて来てくれたのも彼なんだよ。」

「まぁ、彼というか、彼女というか。。その辺りはよくわからないんだけどね。。」

銀次郎が小太郎が気絶していた時のことを丁寧に説明して、ヒキガエルが危険じゃないということを説明した。

それを聞いて、ようやく小太郎が木陰から出てきた。

そして、銀次郎と一緒にヒキガエルと与助のところまで歩いて近づいた。

「銀次郎からいろいろと聞いたんだが、、、、なんか勘違いしてしまってすまない。」

小太郎がヒキガエルに謝り、それを見て与助と銀次郎はほっとしていた。

「まぁ、気にしていないから、全然いいわよ～」

「私はね、ヒキガエルの日出夫。まぁ、姿も名前も男だけど、心は乙女だから。。。。」

「ひでおちゃんって、呼んでね♡」

「ひでおちゃん。。。。。」

小太郎が唾をゴクリと飲んだ。

「そうそう、ひでおちゃん→って、最後は上げるのよ！」

「ひでおちゃん→」

「そうそう、それでいいわよ！」
小太郎を持ち上げた日出夫が小太郎の腹をほっぺにすりすりしながら答えた。

「ほんと、あなたのお腹の皮膚は、柔らかくて、すべすべしていて綺麗だわね～」
「私は、美肌に熱心だから、あなたのこのお肌がとっても羨ましいわぁ」
「どうやったら、こんな美肌になるのかしら～？」
日出夫が小太郎を持ち上げながらいろいろと質問したが、小太郎はとても嫌がってもがいていた。

それを見ながら、与助は思った。
このヒキガエル、、、美肌に熱心なんだな。。。
銀次郎の想像も、まんざら間違えではなかったのか。。。。
そんなヒキガエルがいるんだな～。。。

妄想アマガエル日記（２７）－１０月４日（水）晴れ

「まったく、なんなんだよ、、、あのヒキガエルは。。」
小太郎は本当に迷惑そうにつぶやいた。

そりゃ～、、気絶している時に助けてくれたのはありがたいけど、そもそも気絶するくらい驚かしたのはアイツじゃないか。。。
アイツに近づくとまた腹をほっぺたに擦りつけるから、近づかないようにしよ。。アイツのほっぺはジャリジャリして、こそばゆいんだよ。。。
そんなことを考えながら、日出夫が与助と喋っている隙に離れることにした。

銀次郎は日出夫と与助の間でニコニコしながら2人の話しを聞いているから、どうにかしてあの2人に声をかけて、あのヒキガエルから離れないといけない。

「いったい、どうやったらあの2人にここから離れて帰ろうと伝えられるだろうか～？」

小太郎は少し離れた石の裏に隠れて考えていた。

「そうだ！まず銀次郎をどうにかしてこっちに呼んで、帰ろうと与助に伝えてもらおう！」

隠れているの石からチラッと顔を出して、銀次郎がこちらを見るのを待つことにした。

・
・
・

「おいおい、、、アイツは何であんなにニコニコしながら2人の話しを聞いているんだよ。。。」

銀次郎の能天気で楽しそうな顔を見て、だんだんイライラしてきた。しかし、その内周りを見るだろうから、もうしばらく待つことにしよう。

・
・
・

「いつまで話しを聞いているんだ。。。こっちを見ろよ。。。」

「せめて、こっちじゃなくてもいいから、周りを見ろよ・・」

全然周りを見ない銀次郎に、さらにイライラしてきた。

ダメだな。銀次郎は自分で話しをするのも好きだけど、人の話しを聞くのも好きな奴だからな。。。別の方法を考えるとするか。

「よし！じゃ、俺は一人で帰るから、ここに帰ることを記した置き手紙を書いておこう！」

なんか書けるものはないだろうか。。。
周りを見渡すとヨモギの葉くらいしかなかった。
葉の裏に文字を書いて、ここに置いておいてもアイツらがそれに気づくとは思えない。与助はもしかしたら気づくかもしれないけど、銀次郎が気づくはずがない。ただ、もし気づかなかったら心配をかけることになるな。。。
別の方法を考えるとするか。

「仕方がないが、ヒキガエルにばれないように少しずつ近づいて、耳元で伝えるしかないな！」

そこで、日出夫と与助は向かい合ってしゃべっているから、銀次郎の後ろから近づいて、日出夫に見えないように銀次郎を楯にして近づくしかない。

そろ〜り、そろ〜り、遠回りしながら銀次郎の背中側に移動した。途中、チラッと日出夫を見たが、おしゃべりに夢中になっていて、こちらにはまったく気づいていない。

「よしよし！この調子！」
そこからは身をかがめ、日出夫と銀次郎が一直線になって、自分の姿が日出夫に見えないように銀次郎の陰のように少しずつ歩きはじめた。その姿はまさに鳥を捕らえようとする猫、いやカエルを捕らえようとするヘビのようだと自分で思いながら少しづつ近づいた。

冒険家の俺からしたら、こんな特殊任務は朝飯前だ。これまでの冒険の成果だな、なんてことを思いながら、今の自分はなんてカッコイイんだ〜なんてことを思いながら、さらに進んだ。

そして、ようやく誰にもバレずに銀次郎の背中まで来ることができた。ここまで来たら、あとは銀次郎の耳元で声をかけるだけだ。

「さすが、俺だな。」

自分が誇らしかった。

息を殺して、銀次郎の後ろから耳元に向けて
「帰ろう～」と伝えた。

すると、
「ぎゃ～～～～～～～」
銀次郎が飛びあがって驚いた。

そして、日出夫と与助がこちらを振り向いた。

「どうしたんだい？銀次郎？」
与助が声をかけた。

「お化け？そんなもんがこんな昼間っからいるわけないだろ？」
「ん？後ろにいるのは小太郎じゃないか！」

銀次郎が振り返って
「おっ、ほんと。小太郎なにしてんだい？」
「びっくりした～。。驚かさないでくれよ。。。」

「お化けみたいな声がしたんだよ！！」

すると、日出夫が嬉しそうに目を輝かせて
「あら♡　小太郎ちゃん、そこにいたのね♡」
そういうと、のしっのしっと小太郎に近づいてきた。そして、小太郎を両手で持ち上げて、小太郎の腹をほっぺにスリスリし

はじめた。

「くそ～、、またこうなってしまった。。。」

小太郎は、一人で帰ればよかった、と思った。

妄想アマガエル日記（２８）－１０月６日（金）晴れ

「話しは聞いたわよ。小太郎ちゃん♡」

「あんた、あの建物を登りたいらしいわね。。。」

「そんな無謀なことを考えるなんて、さすが私が惚れた腹の持ち主だけあるわ♡」

日出夫が小太郎を持ち上げながら嬉しそうに言った。

「あ～そうですか。。。。」

小太郎はなされるがまま腹をほっぺにすりすりされ過ぎて、遠い目をして言った。

「じゃ、私もあなたのその無謀な夢を叶える手伝いをしてあげようじゃないの！！」

日出夫が小太郎を地面に降ろして、胸を叩いて言った。

「えぇ～～。。いいよ。。。もう俺たち帰らないといけないし。。」

「なぁ、なぁ、もう帰るもんな？」

与助と銀次郎にどうにか、うんと言ってもらおうと必死で聞いた。

「それがね。。。日出夫も俺たちが住んでるあの朽ち木を見たいって言うんだよ。。」

「だからね、これから帰るんだけど、日出夫も一緒なんだよ。」

与助が申し訳なさそうに答えた。

「え～～。。そりゃないよ～～」

「だって、あの隙間にはこんな大きなヒキガエルは入れないじゃないか。。」

小太郎はとてもショックを受けて、２人を日出夫から遠ざけて３人で話すことにした。

・

・

「あっ、住んでるところを見るだけって話しか！」

与助が言ったことをもう一度思い出して、一緒に住むことではないことを確認した。

「まぁ、、一緒に住むわけではないんだけどね。。」

銀次郎が申し訳なさそうに言った。

「でもね、、、朽ち木の前に大きな石があるでしょ？あそこに住むことになるかもしれないんだよね～」

銀次郎がさらに申し訳なさそうに言った。

「おいおい、、どうして、そんな話しになるんだよ！」

小太郎が銀次郎を日出夫に聞こえないように小声で問い詰めた。

「こいつが、誘ったんだよ。」

与助が銀次郎を指差して言った。

「いやいや、、、誘ったわけじゃないんだよ。」

「僕らが住んでいる朽ち木の居心地の良さを話してね。そして、ちょうど日出夫が住めるような大きな石が朽ち木の前にあってね。そこは今は誰も使っていないんだよって言ってね。あの辺りは常に湿っていて餌も豊富だよって言ってね。小太郎があの建物に登りたいって言うから手伝って欲しいんだよね。って話しただけなんだよ。。。。」

銀次郎が身振り手振りで2人に弁明した。

「いや、それを誘ってるって言うんだろうが～」

小太郎が銀次郎に近づいて睨みながら言った。

「まぁまぁ、日出夫もここは乾燥していて、あまり餌がないから引っ越し先を探していたみたいだしさ。。小太郎が登るのを手伝ってくれるって言ってるしさ。。悪い奴じゃないしさ。。いいじゃないか！」

与助が銀次郎をかばうように言って、小太郎をなだめた。

「いやだ！ぜったい嫌だ！」

小太郎が、もし一緒に住むくらいなら、建物を登るのは諦めて出て行くとぐちぐち言い始めた。

すると、ノシッノシッと日出夫が3人のところに近づいてきた。

「どうしたのかしら?小太郎ちゃん。そんなに嫌がらなくてもいいじゃないの。」

3人の様子を遠くから見て、たまに漏れてくる単語を聞いて、だいたいの話しの内容を察して言った。

さらに、

「あなたは冒険家なんでしょ。なのに、1回決めたことを諦めるの？」

日出夫が上から見下ろして小太郎に言った。

「あと、あなたは高いところが怖くなってしまったんでしょ？」

「与助ちゃんから内緒で聞いてしまったのよ。」

「与助～～。。。」

小太郎が与助を睨みながら言った。

与助は申し訳なさそうな顔をして、謝る身振りをした。

「だから、私があなたの高いところが怖いというのを治してあげようじゃないの！」
日出夫が小太郎に提案した。

皆が呆気に取られた。

「ん？どうやったらそんなことができるんだい？」
銀次郎が小太郎に代わって聞いてみた。

「ん～～そうね、、、」
「とりあえず、私の頭の上に乗っていたらいいんじゃないかしら？」
日出夫は思い付きで言ってみた。

「なるほど！！日出夫の頭の高さは相当高いから、そんなところにいつも乗って移動していたら、高いところなんて怖くなくなるかもしれないな！！」
与助が感心して、言った。

「そんなんで、高いところが怖くなくなるかね？」
小太郎が信じられないといった顔で与助を見た。

「まぁ、とりあえずさ～。日出夫ちゃんの頭の上に乗ってみたら？」
銀次郎が小太郎を促した。

「まぁ、冒険家の俺が高い所が怖いままってのも情けないし、、治せるのならありがたいからな。。。」
小太郎がしぶしぶ日出夫の提案に乗ることにした。

「どうやって、乗ればいいんだ？」
小太郎が日出夫に聞いた。

「そりゃ、私がいつもみたいに持ち上げてもいいけど、それもなんかあなたのプライドが許さないみたいだから、自分の力で私の背中から登ってみたらいいんじゃないの？」
日出夫が背中を指差して言った。

「よし、じゃ、そうさせてもらおう！」
そう言うと、日出夫の後ろに回りこんだ。

へぇ～～、、初めて背中を見たけど、、これは小さな山みたいだな～
小太郎は思った。

「じゃ、失礼させてもらうよ！」
小太郎は日出夫に言って登り始めた。

登り始めてわかったことだが、ちょうど、自分が登るための足場のように、ちょうどいいところにちょうどいい大きさのイボが配置されていたのである。そして、するすると簡単に頭の上まで登ることができた。

「上手じゃない！！」
日出夫が嬉しそうに言った。

「ほんと、上手だったね！」
銀次郎も褒めた。

それを聞いて、少し嬉しくなった小太郎は日出夫の頭の上に立ってみた。そこは、まさに今までとはまったく違う世界だった。

なんて高くて、遠くまで見渡せるんだ！確かにここからの風景に慣れたら、高いところなんて怖くなくなるかもしれないな！
心の中でとても感動していた。

「よかったじゃないか！それくらいの高さに慣れたら、高いところなんて怖くなくなるさ！」
与助が嬉しそうに言った。

「じゃ、帰ろう。」
銀次郎が提案して、皆で帰りはじめた。

しばらく、歩いていくと
「うぇ、、オェ。。。」
「もう少し振動を抑えて歩いてくれないかい？」
小太郎が日出夫の歩く上下の振動に酔ってしまっていた。

「立っているからよ♡」
日出夫が上を見て、小太郎に言った。

「じゃ、どうしたらいいんだよ。。オェ」
小太郎が少し不機嫌に言った。

「頭の上にあなたの腹を付けて、身をかがめて乗るのよ♡」
日出夫が真面目にアドバイスした。

「こうか？」
小太郎は日出夫に言われる通りにやってみた。

「いや、もっと腹を押し付けないと振動を吸収できないでしょ！まったく世話が焼ける。。」
日出夫が少し怒って言った。

「あぁ、わかったよ。。こうだね？」

「そうそう、それなら振動を吸収して酔わないでしょ？」
日出夫が少し動きながらそう言った。

「確かに、これなら振動は感じないけど、高さは立っているのとあまり変わらないから慣れることができそうだよ。ありがとう。」
小太郎が日出夫に感謝した。

それを見ていた与助は、銀次郎に小声で言った。
「日出夫はさぁ～、ただ小太郎の腹の柔らかさを感じたいだけなんじゃないか？」

そう言われて、銀次郎が日出夫を見ると、とても気持ちよさそうな顔をしていた。
「確かにね、、あれはただ小太郎の腹の柔らかさを感じたいだけみたいだね。」

「まぁ、お互い嬉しそうだから、このことは小太郎には内緒にしておこう！」
与助が銀次郎に小声で言った。

「そうだね」

２匹のアマガエルと１匹のヒキガエル、そしてその頭の上に身をかがめたヌマガエルが１匹。
ゆっくりと雑木林を後にした。

「着いたよ～」
先頭を歩いていた銀次郎が振り返って、日出夫に言った。

「へ～　ここがあなたたちの暮らしている居心地がいいと言っていた場所なのね！」
「確かに、ここは湿っているし、近くに田んぼがあって小さな生き物も多そうね！」
日出夫が嬉しそうに言った。

「ここの一番上の隙間が与助と小太郎が住んでいて、そこの隙間が僕が住んでいる隙間なんだよ。」
銀次郎が朽ち木を見上げて、指差しながら説明した。

「あら？小太郎ちゃんは与助ちゃんと一緒に暮らしているの？」
日出夫が頭に乗っている小太郎に聞いた。

「あ～そうなんだよ。でも、俺は冒険家だから、ずっとここにいるというわけではなくて、一時的に今だけ居候しているだけなんだ。」
小太郎が答えた。

「ふ～ん。でも、そろそろ寒くなって来たから、早くあの建物に登って、冬を越す居心地のいい場所を探さないといけないわね？」
日出夫が皆に言った。

「ん？どういうこと？」
皆が首を傾げて言った。

「あら？あなたたちはまだ冬を越したことがないのかしら？」

「そうだね。俺たちは今年カエルになったばかりだから、まだ冬を越したことはないんだ。」
与助が説明した。

「そうだったのね。」
「私たちカエルはね。寒くなると動けなくなるのよ。だから、土の中とか落ち葉の下とか朽ち木の下とか、多少寒さを防げて、外敵から見つからないようなところでじっと寒い冬を耐えないといけないのよ。」
日出夫が皆にわかりやすく説明した。

「えーーーー！！」
皆が目を大きく見開いて驚いた。

「知らなかったぁ～」
「寒いと動けなくなるんだ～！！」
銀次郎がびっくりして声を上げた。

「じゃ、急いであの建物を登らないといけないじゃないか！」
与助が日出夫の頭の上にいる小太郎に言った。

「本当だな～。ところで、いつくらいになったら動けなくなるんだい？」
小太郎が日出夫に聞いた。

「そうね～。。カエルにもよるのよね。。。ツチガエルのように冬でも水の中にいるのもいるけど、あなたたちだとだいたい１１月くらいには姿を見なくなるわね。」

「じゃ、あと1ヶ月くらいしかないじゃないか～。」
与助が小太郎を見上げて言った。

「でも、冬を越すためには、やることが色々とあるのよ。」
「餌を食べておいたり、冬を越す居心地のいいところ探したり、お肌の手入れをしたり、ほんと忙しいの。」
「そんなにいろいろなことをやらないといけないの！！！」
「肌の手入れなんて、やったことないよ！！」
銀次郎が驚いて答えた。
「肌の手入れは日出夫だけだろうけど、他のことはやっておかないといけないね。特に、冬を越す場所を探すだけ探しておかないといけないな！」
与助が皆に言った。
「ところで、これまで ひでおちゃんはどんなところで冬を越していたんだい？」
銀次郎が日出夫に聞いた。
「そうね～。。だいたい大きな木の下の根の奥の隙間とか、大きな石の下の隙間とかかしら～。。」
「そうそう、ここの大きな石の下の隙間なんかちょうどいい感じよ。」
日出夫は新しく住むことになる自分の石の下を指差して言った。
「じゃ、みんなでここで一緒に冬を越したらいいんじゃない？」
銀次郎が提案した。
小太郎はその様子を想像した。
たぶん、ずっと日出夫に腹を触られるぞ。。寒くて動けないというから逃げることもできないぞ。。。いや、でも日出夫も動けないのか？？？
いやいや、コイツなら動けるのかもしれないぞ。。

与助はその様子を想像した。
たぶん、銀次郎は動けないと言っても寝るんだから、寝相悪いぞ。。。寒くて動けないというから逃げることもできないぞ。。いや、でも銀次郎も動けないのか？？？
いやいや、コイツなら動けるのかもしれないぞ。。

銀次郎はその様子を想像した。
みんなで冬を越すのか～。楽しそうだな～～～～。

そして、与助が提案した。
「まぁ、まだ時間はあるから、もう少し冬を越す場所は探してみようじゃないか！」

それを聞いた小太郎が
「そうだな。きっともっといいところがあるかもしれないな！！」
すぐに同意した。

与助は思った。
はは～ん。小太郎は日出夫に腹を触られるのを想像したんだな。

小太郎は思った。
はは～ん。与助は銀次郎の寝相の悪さを想像したんだな。

お互い思った。
どうにか、みんなで冬を越すのだけは回避するぞ。

「どうだった?あの石の下は?」
銀次郎が日出夫に聞いた。

「とっても、よかったわよ♡」
「いいところを教えてくれてありがとうね」
とても嬉しそうに、満足気に答えた。

「それはよかったよ!」
「そんなにいいのなら、みんなで一緒にそこで冬を越したらいいね?」
銀次郎が嬉しそうに言った。

「ほんとね~。ここなら4人分の空間は十分にあるし、寒さもしのげそうだし、みんなで一緒だったら楽しそうだしね。」
「あと、1匹で冬を越すと危険が多いから、イモリとか見ていると何匹かで冬を越すようにしていたから、安全のことも考えたらあなたたちは単独よりは複数で冬を越した方がよさそうだしね。」
日出夫が銀次郎の提案に賛成して、さらに先輩としての助言もして、それを聞いた銀次郎は大いに感心した。

2人の会話を隙間から耳を澄まして聞いていた与助が、まだ寝ている小太郎を起こした。
「おい、そろそろ起きろよ~」

「ん~~。もう朝か~。。。」

「あの2人がさっき話していたんだけど、、、4人であの石の下で冬を越そうって言っていたんだよ!」

「えーー。それはどうにか阻止しないと!!」

それを聞いて、小太郎は一気に目が覚めた。

「どうやって、阻止するか考えないといけないな！！！」

与助が提案した。

「そうだな～。。」

「あの隙間は４人には狭いから、銀次郎と日出夫はあそこで、俺らは別のところでって提案するのはどうだい？」

「いや～、、、それがね。。。さっきの２人の会話だと、４人が入るのに十分な広さがあるみたいなんだよ。。。」

「そうか、、じゃダメか～」

腕を組んで小太郎が考えを巡らした。

「じゃさ、２人とかにすると何か言われるかもしれないから、みんながそれぞれ別々に冬を越すように提案したらどうだろう？」

小太郎がいいアイデアが思いついたという顔で提案した。

「いや～。。それがね。。日出夫が何度も冬を越していて、その経験から単独で冬を越すより集まって冬を越した方が安全だと言っていたんだよ～」

「特に俺ら小さなカエルは。。」

与助が困ったように答えた。

「そうなのか～」

小太郎は腕組をしながら、考えた。

「じゃさ、日出夫の石の下の隙間の中に部屋をどうにか作って、銀次郎の寝相の悪さとか、日出夫が腹を触ってくるのを阻止するようにするってのはどうだい？」

小太郎は身振り手振りで説明した。

「それはとてもいいアイデアだけどさ、、、あいつらが、部屋を作るのを嫌がると思うんだよね。。」

与助が提案した時の2人の態度を想像して答えた。

「確かにな～。。銀次郎はみんなで楽しく過ごすとか言っていたからな～」

小太郎が斜め上を見上げながら言った。

「困ったな～。。」

2人が同時に言った。

・　・　・

「まぁ、とりあえず、まだ時間はある訳だし、あいつらも冬を越す場所のことなんか、ずっと覚えているわけじゃないだろうから、少し様子を見ることにしよう。」

与助が提案した。

「そうだな。さすがにすぐに冬を越す場所を決めるなんてことは言いださないだろ。」

「まぁ、とりあえず腹が減ったから、何か食べに行こうか？」

「そうだな。」

2人が朽ち木の隙間から出て行くと、朽ち木の陰から日出夫と銀次郎が2人を待ち構えていた。

「ん？どうしたんだい？」

与助が銀次郎と日出夫を交互に見て言った。

「あのさ～、、、冬を越す場所についてなんだけどさ～。。日出夫ちゃんの石の下の隙間がとてもいいらしんだよね～。みんなであそこで冬を越すのを決めない？」

銀次郎が2人に提案した。その横にはニコニコしながら日出夫が見下ろしていた。

「え！！だって、まだ寒くなるまで時間があるから、もう少し考えるって話しだったじゃないか！」

与助が困りながら返事した。

「でもね。探している時間があったら、早くあの建物を登った方がいいんじゃないかと思うんだよね。。」

銀次郎がまともなことを言って来たので、与助も小太郎も返答に困ってしまった。

「まぁ、その石の下の隙間は行ったことがないから、よくわからないから、とりあえず、一回見るだけ見てみようか？銀次郎、君は見たのかい？」

与助が冷静を取り繕いながら銀次郎に答えた。

「そういえば、まだ見ていなかったよ。」

「じゃ、とりあえず、腹減っているから、何か食べたらまた集まって、皆であの石の下の隙間に行ってみようじゃないか。」

与助が提案した。

「そ、そうだな。」

小太郎が答えた。

さて、どうする？行ってしまったらもう逃げられないぞ。

与助と小太郎は目を合わせた。

妄想アマガエル日記（３１）－１０月１５日（日）晴れ

「ちゃんと食べれたかい？」
与助が小太郎に聞いた。

「あ～まぁ、それなりにな。」
「でも、どうやって一緒に冬を越すのを回避するのか考えていたから、何を食べたのかあまり記憶にないんだよ。たぶん、なんか、小さなハエみたいなのを食べたと思うんだけどな。」
小太郎が困ったように言った。

「君もか～　実は俺もいろいろ考え過ぎて、何をどうやって食べたのかあまり覚えていないんだよ。。」

そして、待ち合わせの石の前に２人は来てしまった。２人でいろいろと相談したが、逃げるアイデアが何も思いつかなかったのである。
すると、石の下の穴の中から日出夫と銀次郎が一緒に出てきた。

「銀次郎、君は中に入ったんだ！」
与助が少し驚いて聞いた。

「あ～そうなんだよ。僕はもう朝は食べていたし、待っている間　時間があったし、ひでおちゃんも朝はもう食べたって言うからさ～」
銀次郎が日出夫を見ながら言った。

「でも、この中すごく広くて快適だったんだよ～。驚いたよ。この石の下がこんなに広くて快適だったなんて！！！」
「これなら4人どころか、１０人くらい冬を越すことができそうだったよ！！」
銀次郎が嬉しそうに言った。

「そっかぁ。。。。まぁ、とりあえず、見てみるか。」
与助が小太郎を見ながら言った。

「そうだな。。とりあえず、見るだけ見てみよう。。。」
小太郎がいやいやそうに返事した。

銀次郎たちが住んでいる朽ち木の前にある幹の細い木の下に、スイカ大の石があって、その石を取り囲むように朽ち木が積み重ねられ、石に直接雨や風が当たらないようになっている。その石の下にちょうど日出夫が１匹入れるくらいの拳大の穴が下に向けて開いていて、その入り口の穴の手前には土の山が出来ていて穴に雨が入らないようになっているのである。おそらく、この穴は何かの動物が掘った穴であるようで、その穴を掘った時の土が入り口に積み上げられているのであった。

「じゃ、中に入りましょうか♡」
日出夫が先頭で穴に入っていった。

その後に、銀次郎が嬉しそうについて行って、与助と小太郎がしぶしぶついていった。

穴に入ると外とは違い少し暖かくて、外の温度とは少し違うことがわかった。

「どう？いいでしょ？」
銀次郎が振り返って2人に聞いた。

「いやいや、まだ入ったばっかりだろ。」

与助が答えた。

そのまま奥に進むと、広い空間が広がっていた。そこは日出夫が5匹は入れるほどの広い空間だった。

「ほほ～～、これは、なかなかいい空間だな～」

与助が見まわしながら感心した。

「でしょ～。あそこから小さな光が差し込むから、真っ暗にもならないんだよ！！！」

銀次郎が光の先を指差しながら言った。

「ほぉほ～～。。いいね～～すごいね～～」

与助が感心して言った。

さらに、その奥に進むと、小さなトンネルにつながっていた。たぶん、それはモグラのトンネルのようだったが、今は使われていないもののようだった。トンネルを少し進むと泥が湿っていて、小さなミミズが這い出てきた。

「どう？ここは餌にも困らないんだよ！！！！」

銀次郎がさらに嬉しそうに言った。

「ほぉほっ～～。。これは素晴らしいね～～」

与助がさらに感心して言った。

「おいおい、お前。何そんなに感心してんだよ。」

小太郎が後ろから与助に小声で言った。

「あっ！そうか。すまんすまん。あまりに素晴らしすぎて、忘れていたよ。」

与助が我に返って、少し反省しながら言った。

「さらに、このトンネルは朽ち木の隙間からこの大きな石の上に出れるトンネルがあって、この石の上からの景色は絶景なんだよ！！！！！」

銀次郎が案内しながら、嬉しそうに説明した。

その景色を見た与助は

「いやぁ～～。これは素晴らしいですね～。本当に素晴らしいですね～。」

と感心して言った。

小太郎は与助を見ながら思った。

たぶん、皆で一緒にここで冬を越すことになりそうだな。。。

まぁ、仕方ないか、、、なかなかよさそうなところだしな。。

どうにか日出夫から離れる方法を考えるとしよう。

それよりも、、、与助 こいつ、、、、

建もの探訪の時の渡邊篤史みたいだな。。。最後の方なんか自分から渡邊篤史に寄せにいっていたしな。。。

やっぱり、面白い奴だ。

妄想アマガエル日記（３２）－１０月２１日（土）晴れ

「とりあえず、冬を越す場所は決まったことだし、あの建物を登る練習をはじめないといけないな。。。」

与助が朽ち木の部屋で横で寝転んでいる小太郎に言った。

「そうだな～。。でもな。。。」

「あの穴の中は本当に冬を越すのに最適な場所というのはよくわかったんだけど。。。日出夫からどうやって俺は逃げたらいいのだろうか？」
天井を見ながら独り言のように言った。

「あ～、、そうだな～。。」
「俺も、銀次郎の寝相の悪さというか、あの危険をよく知っているから、あれからどうやって身を守ればいいのかと、、考えているところなんだよ。。。」
与助が寝転んでいる小太郎を見ながら呟くように言った。

「そうだよな～。。。」
「日出夫から腹を触られるのを避けながら、銀次郎の寝相の悪さからも逃れる方法を考えないといけないな～」

「ほんとだな～どうしたもんかね～。。。」
「まぁ、俺は日出夫から腹を触れる心配はないのだけどね。」

「羨ましいよ。。」
「日出夫はどうしてあんなにも俺の腹が好きなんだろうな～。。」

「小太郎の腹が柔らかくて、ツルツルで、美肌だからだろ？」
「確かに、前に背中に乗られた時に君の腹は本当に柔らかくて、気持ちよかったもんな～。。」

「そうか～？俺にはわからんな～」

「でも、どうにかして、触られないようにしないとゆっくり寝てられないよね？」

「そうなんだよな～。。」

「日出夫のほっぺたはなんかざらざらしてて、こそばゆいんだよ、、、」

「じゃ、触られないようにするしかないけど、それには何か理由が必要になるね。」

「例えば、地面に腹を付けていないと寝れないとか、、、腹を触られると体がだるくなるとか、、、寝ている時に腹から毒が出るから危ないとか。。」

与助が腕を組みながら、ゆっくり考えながら提案した。

「それだ！！」

「まだ寝ている時に腹を触られたことはないからさ～。。寝ている時に腹から毒が出るってのはいいんじゃないか！！！」

「いいこと思いつくじゃないか！！！さすがだ！！」

小太郎は飛び起きて、与助に向って言った。

「そうか～？　じゃ、まぁそれでどうにか乗り切ってみようじゃないか。」

「次は、銀次郎の寝相の悪さをどうするかだな？」

「確かにな～。。でも、銀次郎にはいつも寝相の悪さについては言っているわけだし、、、アイツにちゃんと言ってさぁ、個室で寝て貰うとか、体があまり動かないように固定するとかしたらいいんじゃないかい？」

「そうだね。日出夫と違って、銀次郎なら、どうにかなるか！！」

その日は、そのまま2人は解決策を思いついて、安心して寝ることができた。

そして、次の朝。

隙間から降りたところにちょうど銀次郎と日出夫が話しをしていた。

「おはよう！銀次郎と日出夫は最近よく一緒にいるね。もうなんか食べたのかい？」

与助が2人に聞いた。

すると、銀次郎が

「そうだね。今ちょうどミミズを食べて戻ってきたところなんだよ。」

「昨日は早速、ひでおちゃんの穴で一緒に寝たんだけど、本当に寝心地がよくてね～よく寝れたよ！！」

「そうなんだ。。。」

与助は日出夫をチラリと見た。

日出夫は体中、あざだらけで目の上に大きなたんこぶが出来ていた。

「大丈夫かい？日出夫。。。」

与助は心配そうに聞いてみた。

「え～、、、」

日出夫は目を逸らして返答した。

その間に銀次郎が自分の隙間に戻ったので、その隙に与助が日出夫を少し離れたところに連れていった。

「大丈夫かい？その体のアザは銀次郎の仕業だろ？」

日出夫はうなずいた。

「やっぱりな～、、銀次郎の寝相の悪さは異常なんだよ。。」

与助は日出夫を同情して言った。

「ほんと！！すごかったわよ～。。昨晩の銀次郎ちゃんの寝相の悪さっていったらね！！」
「もう、、、逃げても逃げても付いてくるって感じなのよ～」
昨晩の暗闇の恐怖を説明した。
そして、
「与助ちゃんはあの寝相の悪さを知っていたのね？」

「そりゃそうさ！！」
「だから、一緒に冬を越すのをどうにか回避しようと考えたくらいなんだよ。」

「そうなのね！！あれはどうにかしないとみんな冬の間に寒さじゃなくて、銀次郎の寝相の悪さにやられるわよ！！」

「じゃさ、小太郎も銀次郎の寝相の悪さを知っているからさぁ。３人で銀次郎の寝相の悪さで危険が及ばないように、どうにかしないかい？」

「そうね！！いいわよ！」
「銀次郎ちゃんもちゃんと話して、説明したら理解してくれるわよ！」

「じゃ、３人で少し戦略を練ろうじゃないか！」
「あと、これも言っておかないといけないかもしれないけど、小太郎は寝ている時は腹から毒が出るから気を付けた方がいいよ！」
与助がどさくさに紛れて小太郎の腹の嘘も言った。

「えーーーーーーーーそうなのぉ？」
「今年の冬は小太郎ちゃんの腹を触りながら冬を越せると思っていたのにーーー」
日出夫は心底がっかりしながらも、銀次郎の寝相の悪さを知ったからなのか、仕方がないと理解したようだった。

それを見て与助は思った。
フォ～～～～～！！
２つの問題が一気に解決するかもしれないぞ！！俺って天才！！
早く小太郎に話してあげたいなぁ～。

妄想アマガエル日記（３３）－１０月２３日（月）晴れ

ニヤニヤしながら与助が小太郎を探していた。
「いったい、どこに行ったんだろう～な～」
「早く、俺の素晴らしい天才ぶりを教えてあげたいんだけどな～」

その頃、小太郎は餌を探して少し遠くまで来ていた。

与助は朽ち木の周りを探していたが、なかなか小太郎の姿を見つけることができなかった。そこで、少し水路側を探していくことにした。たぶん、餌を探して移動しているだろうと予想して、餌が多い水路に向かったのである。

その頃、小太郎は水路を離れて雑木林の前に広がる草原で餌を探していた。

やっと水路に着いた与助は周りをぐるっと見渡したが、どこにも小太郎の姿はなかった。仕方なく戻ろうとした時、小太郎の後ろ姿を見つけた。

「お～い、、小太郎～」

与助が近づいていくと、それは小太郎ではなく別のヌマガエルだった。

「あっ、すまない。知り合いのヌマガエルを探していて、間違えてしまった。」

そのヌマガエルに謝って、雑木林に戻ろうとすると、銀次郎が雑木林の前の草原にいるのが見えた。

あいつはあんなところで何をしているんだ？

気になった与助は銀次郎を遠くから、少し眺めてみることにした。

銀次郎は、一人でニコニコしながら何かを集めているように見えた。

ん？アイツはあんなところでいったい何を集めているんだ～？

気になった与助は気づかれないように少しずつ近づいて行った。

すると、銀次郎が何かをまとめて、雑木林の方に走って行った。

与助は銀次郎に気づかれてはいなかったようではあるが、ちょうどどこかに行ってしまったのである。とても気になったので、銀次郎の後を追いかけることにした。

そこは、いつもの朽ち木とは違う雑木林の少し陰になったところにあった朽ち木であった。

銀次郎の奴、、、いったいこんなところで何をやってんだ、、？

与助は銀次郎が何をしているのかとても気になってしまった。

息を殺して隠れていると、背中から

「おい！与助、こんなところで何してんだ？」

小太郎が声をかけてきた。

「しーーーー、今、銀次郎が変なことをして、あの見知らぬ朽ち木の中に入っていったから見張っているんだよ。」
与助が小太郎に身を隠すように身振りして小声で言った。

「変なことってなんだい？」
小太郎が小声で言った。

「あそこに草むらがあるだろ？あそこでなんかを集めていたんだよ。食べ物とかじゃなくて、なんか物を集めていたんだ！」

「物？その物は見ていないのかい？」

「気になって近づいて見ようと思ったんだけど、ちょうど走っていってしまって、後を追ったらここに着いたってわけさ。」

「そういうことか～～。いったい何を集めていたんだろうな～？」
「ところで、この朽ち木って初めて知ったな～。こんなところにこんな朽ち木があったんだな～」
小太郎が見まわしながら言った。

「ほんとだよな～。案外近いところにあったのに、あの大きな木の陰になっていたし、地面が少し凹んでいるから、全然気づかなかったよ。」

「アイツはいったいこんなところで何をしているんだろうな～？」
「俺も気になってきたよ。。」

2人でこそこそと話していると、朽ち木の隙間から銀次郎がニコニコしながら出て来た。

「おい、出てきたぞ。」
与助が小太郎に小声で言うと、小太郎が静かにうなずいた。

銀次郎がどこかに行くのを身をかがめて気づかれないようにやり過ごした2人は、身を上げた。

「おい、どうする？」

与助が小太郎に聞いた。

「そりゃ、アイツがいたあの朽ち木の隙間を見にいくだろ！」

「そうだな。どうしても気になる。」

2人は周りを見渡しながら、少しずつその朽ち木に近づいて行った。そして、銀次郎が入っていた隙間を覗いた。

2人同時に声が出た。

「おっ、これは、、、」

妄想アマガエル日記（３４）－１０月２７日（金）晴れ

「おっ、これは、、、」

与助と小太郎を顔を見合わせた。

そこには、小さな丸い小石や植物の葉が置いてあった。また、隙間の奥にはクヌギのドングリの帽（殻斗）が３つ裏返して置いてあった。

「おいおい、、、これらはいったいなんなんだ？」

小太郎が与助に聞いた。

「さぁ～。わからないよ。。この丸い小石をさっきは集めていたんだな。」
小石を手に取って与助が答えた。
「でも、こんなものをアイツは何でこんなに集めているんだろうな～？」
「確かにな～～」
「あの奥に3つ並んで置いてあるドングリの帽はいったいなんなんだろうな～～？」
小太郎が指差して言った。
「確かにな～。。。なんであんなもんをあそこに並べて置いているんだろうな～」
与助が腕を組んで考えながら言った。
「もしかしたら、あれは座るためのものかなんかなんじゃないか？」
小太郎が思いついたような顔で言った。
「いやいや、、よく見てみろよ～。あれはモケモケした毛みたいなトゲみたいなので覆われているじゃないか！あんなもんの上に座ったらお尻が痛いじゃないか。」
与助がすぐに否定した。
「じゃ、あれはいったいなんだっていうんだい？」
小太郎が不満げに答えた。
「あれは何かを隠すために被せているんじゃないか？」
与助が色々と考えて言った。

「確かにな～。。じゃ、何を隠しているか見てみないか？」
「そうだな～。。ここまで来たら見てみるか！あまりいいことじゃないけど。。」
そして、２人でゆっくりと奥に進み、一番左側のクヌギの帽を小太郎が持ち上げた。
「ぎゃっ！！」
与助がびっくりして声を出した。

「おいおい、これは、、ナメクジじゃないか！！」
「なんでこんなもんをこんなところにアイツは入れているんだろ？」
「もしかして、これはペットか何かなんだろうか？」
小太郎が持ち上げたクヌギの帽の裏を見ながら言った。

「確かに、、まさかナメクジが出てくるなんて思ってなかったから、びっくりしたよ～。。他の２つのも見てみるか。」
そういうと、与助が残りの２つも持ち上げて見てみると、その２つにも同じように小さなナメクジが何匹も入っていた。

「銀次郎の奴、、、こんなにいっぱいナメクジを飼育して何をしようというんだろう～？？？　あの大量の葉やら小石はこのナメクジの飼育に使うのだろうかな～？？？」
与助がクヌギの帽を元通りに戻しながら言った。
「ほんとだな～。。。まったくわからないな。。。」
「でも、そろそろ出るか！！　アイツがいつ戻ってくるかわからないからな。」
小太郎が提案した。
「そうだな！じゃ、バレないようにすべてを元に戻して、ずらかるとしよう。」

いつもの朽ち木に戻ってきた2人は銀次郎の姿を探した。でも、そこに銀次郎の姿はなかった。

「アイツいったいどこに行ったんだろうな～」

与助がそう言いながら周りを見渡していると、日出夫の穴の中から銀次郎が出てきた。

「おっ、そんなところにいたのかい！」

与助が銀次郎に言った。

「そうなんだ～。ひでおちゃんにいろいろと教わっていてね。」

銀次郎が嬉しそうに答えた。

「へ～～。これからどっか行くのかい？」

小太郎が銀次郎に聞いた。

「そうね。ちょっと、やることがあるからね！」

「ふ～ん」

与助と小太郎は同時に言った。

「じゃ、またあとで！！」

そういうと、銀次郎は草むらの方に走っていった。

その後ろ姿を見た2人は、何も言わずに頷いて、銀次郎のあとを追い始めた。

見つからないように追った2人は、途中で銀次郎の姿を見失ってしまった。

「どこいったんだろうな～。。さっきまで姿見えていたのにな～」

小太郎が周りを見渡しながら言った。

すると、与助が

「ここはさっきのあの朽ち木に近いだろ?アイツはあそこに行ったんじゃないか?」

「確かに、、その可能性はあるな。」

2人は朽ち木に周りこみながら隙間の反対側からゆっくりと登り、朽ち木の上に登った。そして、隙間の中を上から覗きこんだ。

すると、そこには銀次郎がこちらを背にして何かをしているところだった。

右手にはナメクジを持っていて、左手には小さな丸い石を持っている。それを時折、体や顔にひっつけて何かしていた。また、よく見ると体に植物の葉を貼っているように見えた。

「おいおい、アイツなにやってんだ~?????」

小太郎が与助に小さな声で聞いた。

「わからないな、、、いったいあれは何やってんだろ?」

「おい!もう少しこっちを向いてくれないかな、、、よく見えない。」

小太郎が頭を穴の奥にぐぃと伸ばしてみようとしていた。

「おい、小太郎、そんなに首を伸ばしたらバレてしまうだろ!!」

「もう少しで見えそうなんだよ。。もう少し、もう少し」

小太郎が銀次郎が何をしているかよく見ようと、首を伸ばして力を入れていると力が入り過ぎたのか、乗っていた隙間の上の

部分がくずれて、隙間の中に2人とも落ちてしまった。

ドスーーーン

「イテテ、、、、」

与助と小太郎がくずれた木くずをのけながら見上げると、
こちらに背を向けていた銀次郎がゆっくりこちらを振り返った。
そして、低い声で言った

「見たな～～～」

妄想アマガエル日記（３５）－１０月３１日（火）晴れ

「お前、、いったいそれは、、、何やってんだ、、、？？？」
落ちた朽ち木の残骸をのけながら、うつ伏せになった与助が体を起こしながら銀次郎を見上げて言った。

「・・・・」

数日前の夜　＠日出夫の石の下の穴の中ーーーー

日出夫と銀次郎は並んで寝ようとしていた。その夜は満月で月の明かりが隙間から2人を照らしていた。

「ひでおちゃんはさ～。どれくらい生きているんだい？」

銀次郎が天井を見ながら聞いた。

「そうね～。。オタマジャクシからカエルになってたぶん、、６年くらい経つのよね～。早いわよね～」

「これまで、冬はどうやって過ごしていたんだい？」

「冬ってのは、寒いんだろ？体が凍ったりするんだろうか？」

「そうね～。とても寒いのよね～。。でも、寒い時はほとんど動けなくなるのよ。。。だから、あまり覚えていないのよね～。。考えることもあまりできなくなるのよ。。。まぁ、ここにいたら敵も来ないだろうし、寒さも多少しのげるから心配ないわよ！！」

「そうそう、敵って言えばね。ヘビも冬は動けなくなるみたいだから心配ないのよ！！」

「へ～～そうなんだ～。動けなくなって、考えることもできないんだ～。あと、ヘビも動けなくなるのはよかったよ！じゃ、心配ないね！！」

銀次郎が何度も頷きながら、真剣に返事した。

「ただね、、、私たちヒキガエルは、あなたたちアマガエルとか小太郎ちゃんみたいなヌマガエルと違って、２月とか３月とかの寒い時期に産卵するのよ～。。あれがキツイわよ～。。水が超冷たいのよ。。」

「まぁ、私は産卵はできないのだけどね。。。」

「そうなんだ～。僕がオタマジャクシだったのは６月くらいだったから、そのくらいに産卵するんだろうけど、ヒキガエルってそんな寒い時期に産卵するんだ～。。違うもんなんだね～！！」

銀次郎は日出夫が話すことが知らないことばかりで、感心しっぱなしだった。

「あとさ～。。この前さ～　冬を越すためにやっておかないといけないことがあるって言ってたでしょ？？　確か、、、餌をいっぱい食べるとか、冬を越す場所を探すとか、肌の手入れとか。。。」

「そうね～。場所はもうみんな決まったし、餌はここは豊富だから心配ないとして、肌の手入れを教えておかないといけないわね！！」

「肌の手入れってのは大事なのかい？」

「そりゃ～もちろんよ！！！冬は乾燥するから肌の手入れをちゃんとしておかないと肌がボロボロになって春に起きた時にミイラみたいになるのよ！！そして、水分がなくなって干し柿みたいになることもあるのよ！！一番ひどいのは、、水分が抜けてペッちゃんこになって落ち葉みたいになったりするのよ！！！」

「えぇーーー。。そうなの？？　じゃ、肌の手入れってとても大事じゃないか！！！　落ち葉って、、あんなペラペラになるのかい？？」

「そうよ！！」

「じゃ、どうやって手入れしたらいいんだい？？頼むから教えてくれよ～」

「いいわよ！！銀次郎ちゃんだけに特別にひでおちゃんオリジナルの肌の手入れを教えてあげるわよ！！！」

それから、日出夫先生の肌の手入れの説明と実践が繰り広げられ、銀次郎はそれをメモにとり真剣に聞いた。

そして、気づいたら2人は寝落ちしていた。

次の日、銀次郎は昨夜聞いた肌の手入れに必要な物を集めて、それらを探している途中で見つけた朽ち木の隙間にそれらを隠した。ただ、必要な物はだいたい揃ったが、使い方がわからなかったので、再び日出夫先生の元を訪ねた。

しばらく講釈を受けて理解して、朽ち木に戻り肌の手入れを始めた。

「さっそく、日出夫先生に教えて貰った通りやってみよう！！」
美肌になる自分を想像するとワクワクしてきた。
丸い小石で美顔ローラーのように肌を転がし、美肌に効くと日出夫が言っていたナメクジの粘液を体中に塗り、それをヨモギの葉で覆った。
なんか、肌がツルツルしてきたような気がするぞ～と内心とても嬉しくなってきた。そこで、さらに丸い小石を顔に転がして、ナメクジの粘液を体中に塗っていると、後ろから
「ミシッ ミシッ、ドスーーーーン」
と大きな音と振動がした。
振り返るとそこには、朽ち木の残骸とともに与助と小太郎の姿があった。
銀次郎は、日出夫から内緒で教えてもらった肌の手入れを2人に見られてしまったと思った。
そして、声が出た。。。
「見たな～」

妄想アマガエル日記（３６）－１１月５日（日）晴れ

「お前、、いったいそれは、、、何やってんだ、、、？？？」
落ちた朽ち木の残骸を除けながら、うつ伏せになった与助が体を起こしながら銀次郎を見上げて言った。

「・・・・・・」

「その体中に貼っている葉とか、その手に持っている小石とか、、それはなんなんだ？」
起き上がった小太郎が銀次郎に聞いた。

すると、
「これはね。。。本当は内緒なんだけどね。。日出夫先生に教えて貰ったお肌の手入れなんだよ。。」
銀次郎が少し恥ずかしそうに言った。

「肌の手入れ？んなもん、なんでやっているんだ？」
与助が体についた朽ち木の粉をはたきながら起き上がって聞いた。

そして、日出夫と一緒に穴に泊まった時に聞いた、肌の手入れをしないと冬を越した時に大変になることや、その後に肌の手入れの仕方や必要な物を教えて貰ったことなどを説明した。

それを聞いた与助と小太郎は2人で顔を見合わせた。

「んなわけないだろ？肌の手入れしている蛙なんてアイツだけだろ！」
「銀次郎、、、お前は騙されているんだよ！」
与助が少し呆れて言った。

「そうそう、肌の手入れなんてする蛙なんて、アイツだけだろ。」
小太郎も与助に同調して言った。

「そうなのかい？？だってちゃんと肌の手入れしないと落ち葉みたいにペラペラになるなんて言っていたんだよ！！」
銀次郎が困ったように言った。

「んなわけないだろ？」
「ペラペラになるって、、ど根性ガエルじゃあるまいし。。」
与助が呆れて言った。

「じゃ、なんで日出夫先生はそんなことを言ったんだい？」

「そのさ～、、先生ってのやめろよ～」
与助が嫌そうに指摘した。

「ひでおちゃんはなんでそんなことを言うんだい？」
銀次郎が言い直して言った。

「わからないけど、、、たぶん悪気はないんだろ。確かにそれをやったら多少肌にはいいのかもしれないし。。」
「銀次郎の肌も美肌にして小太郎だけじゃなくて、2人の肌を触りたいんじゃないか？」
与助が冷静に想像した。

「なるほどな～。。」
銀次郎が少し納得して返事をした。

「まぁ、とりあえず理由は後で日出夫に聞いてみるとして、とりあえずその体に貼ってる葉っぱとか取ろうじゃないか。」
与助が銀次郎に提案した。

「そうだね。でもね、、、さっきから取ろうとするんだけど、このナメクジのぬめりってなかなか取れないんだよね～」
銀次郎が困ったように言った。

「そうなのかい？」

小太郎がナメクジを触ってぬめりを確かめた。
「ほんとだな～。。全然取れないな。」

「日出夫に取り方は教わってないのかい？」
与助が銀次郎に聞いた。

「そうなんだよ～。。使い方は習ったんだけど、取り方を習うの忘れていたんだよ。。」

「じゃ、とりあえず日出夫に聞きに行こうじゃないか。」
与助が提案した。

そして、集めて置いたナメクジを逃がして、３人で朽ち木に戻ることにした。

途中、銀次郎がぎこちなく体を動かしながら
「なんだか、、ぬめりがなくなってカピカピに固まってしまったよ～」
と困りながら言うと、
与助が「困ったな～、、、これじゃなおさら簡単には取れないな。。。このままだと体が動かせなくなるんじゃないか？」と心配して言った。

どうにかいつもの朽ち木に戻った３人は、日出夫の穴に入って日出夫を呼んだ。
でも、いくら呼んでも日出夫の姿はなく、出て来なかった。

諦めて戻ろうとすると、穴の奥にいた小太郎が落ちていた報告書のような冊子を拾い上げて、２人に見せて言った。
「おい！見てみろよ！これを！！！！！」

その表紙にはこう書いてあった。

『蛙第３形態計画（秘）』

「おい、、、これは？」

３人が、つぶやいた。

妄想アマガエル日記（３７）－１１月１１日（土）晴れ

「蛙第３形態計画（秘）」？？？？

皆が顔を見合わせた。

「おい、、これは一体なんなんだ？」

「ちょっと、中を見てみようじゃないか！！」

与助が小太郎の手から取って言った。

「でも、これさっき中を見ようとめくってみたんだけどな、、ページの端が貼りついていて開くことができなかったんだ。」

小太郎が与助が持っている報告書の小口（背表紙の反対側）の部分を指差して言った。

「あっ、ほんとだ！！貼りついているね。。」

与助が試してから言った。

「じゃ、この貼りついていない上か下から見てみたらいいんじゃない？」

銀次郎が提案した。

「そうだな！」
与助がそう言って上の隙間から最初のページを覗くと、そこには文字やイラストが書いてあるのが見えたが、ちゃんと読むことはできなかった。しかし、かろうじて読める部分が見えた。
・・・アマガエルを食べやすい大きさに切って・・・
「え！！！アマガエルを食べやすい大きさに切ってって書いてあるぞ！！！」
与助が怯えながら言った。
「え！！どういうことだい？日出夫は僕らを食べようとしているっていうのかい？」
銀次郎もビックリして与助を見て言った。
「これは、大変なことになったな、、、だから、俺は最初っからアイツはヤバい奴だって言ったんだ！！」
小太郎が大きな声で言った。
すると、その時入り口からの日差しを覆うように、黒い影がヌッとでて日差しを遮った。そして、黒くて大きな大きな影が日差しを遮って、穴の中は暗くなった。
「・・・・・・」
3人は振り返り、その黒い大きな大きな影を見て声が出なくなってしまった。
日出夫が帰ってきた。
でも、まだ穴の奥にいるこちらの存在には気づいていない。
どうにか、ここから逃げなくてはいけない。。。
3人はアイコンタクトをした。
少しずつ、少しずつ、、音を立てずに暗い暗いトンネルの奥に進んだ。

少し進んだところで、銀次郎の体がナメクジの粘液が固まってきて、次第に動けなくなってしまった。
「もうダメだ！！僕は歩けない。。。せめて君たちだけでも逃げてくれ。。。」
銀次郎が小さな声で言った。
「いやいや、何言っているんだ！！」
「俺がおぶっていくから大丈夫だ！」
与助が銀次郎を背に載せようとしたが、銀次郎の体が固まって背に載せることができなくなっていた。
「じゃ、２人で持っていこう！」
小太郎がそういうと、銀次郎のぴ～んと伸びた脚を持った。
そして、与助が頭を持ち与助を先頭に１列になってトンネルを進むことにした。
「すまない。。。」
銀次郎が申し訳なさそうに小さな声で言った。
ようやく、トンネルの奥に石の上に繋がる隙間が見えてきて、そこから光がトンネルの先を照らしていた。
「あの隙間から外に出られるぞ！！」
先頭を行く与助が嬉しそうに先を指差して言った。
その時、後ろの少し離れたところからノシッノシッと大きな生き物が歩く音が聞こえてきた。それは次第に近づいて来ていた。
「おいおい、、、日出夫が気づいて追ってきているんじゃないか？？後ろの遠くからなんかでかい生き物の歩く音が聞こえてくるぞ！！！」
小太郎がその音に気付いて小さな声で言った。

「！！！大変だ、、あの隙間からの光に照らされると、ここにいることがバレてしまうぞ。。。。」
与助がそう言ってトンネルの脇の窪みを指差して
「ひとまず、あそこに隠れよう。」
小さな声で小太郎に言った。

3人はどうにか、トンネルの脇の窪みに隠れた。
次第に大きな生き物の足音が大きくなってきた。

ノシッ　ノシッ　ノシッ

妄想アマガエル日記（３８）－１１月１６日（木）曇り

ノシッ、ノシッ、ノシッ

歩く音が次第に大きくなってきた。
そして、ぬっと大きな体が視界に入った。
やはり、日出夫だ。
大きな体をゆっくりと前進させている。
息を殺して通り過ぎるのをじっと待った。

ノシッ、ノシッ、ノシッ

どうにか気づかれず通り過ぎて行った。
「ほっ。。」

皆が安堵した。

まず与助が窪みから頭を出して周りを見渡した。

「どうやら、姿が見えないから、隙間の上に行ったようだな。もう大丈夫だろ。」

小さな声で2人に言った。

「そっかぁ～。。。よかった～」

銀次郎が脚をぴ～んと伸びた状態で仰向けで言った。

「ほんと、改めて見ると日出夫って大きいよな～。。あんなのに襲われたらひとたまりもないや。。」

小太郎が身振り手振りしながら2人に小声で言った。

「よし！じゃ、隙間の上には日出夫がいるかもしれないから、来た道を戻って穴の出口から出るか！！」

与助が提案した。

2人がこくりと頷いた。

そして、銀次郎を2人でタンカのように持って、与助が前で小太郎が後ろで窪みから出て方向を変えようとした時、左奥の大きな岩が動いたように見えた。

そして、その岩がぬっと近づいてきて

「あら！！与助ちゃんと、銀次郎ちゃんと、小太郎ちゃんじゃないの！！！」

日出夫が3人の後ろから声をかけてきた。

その瞬間、小太郎が腰を抜かして銀次郎を落としてしまった。そして与助が必死に2人を引っ張ろうとするがさすがに2人は

動かせなかった。

「どうしたのよ～。。なんで、そんなに私を怖がるのよ～」
日出夫が困ったように言ってきた。

「だって、だって、だって、お前、、、俺たちを食べようとしているんだろ？」
与助が地面に尻を付けて震えながら言った。

「ん？？？私がなんであんたちを食べるのよ！」
日出夫が唖然とした。

「俺は知っているんだぞ！！お前の報告書を見たんだからな！！」
与助が日出夫を指差して言った。銀次郎と小太郎は身動きできずに与助を見ていた。

「報告書？？？なんのことよ！！」
日出夫がさらに唖然とした。

「その穴のところにあった、お前の蛙第３形態計画ってやつのことだよ！！」
与助が少し冷静になってきた。

「蛙第３形態計画？？？？？？　なんのことよ！！」
日出夫はわけのわからないことを言われ過ぎて、少し呆れてきた。

「だから、、、この報告書のことだよ！！」
与助が少し戻って、穴の脇から報告書を取ってきて、報告書をパンパン叩きながら日出夫に見せた。

「ん～？？？これのどこが報告書なのよ？」
「これはただの私のメモ帳よ。」
日出夫が頭をかしげて困ってしまった。

「ん～？？？メモ帳？」
与助も少し困ってきた。でも、こいつは俺たちを騙そうとしているにちがいないから、騙されるもんか！と思った。

「そうよ！！どう見てもこれはメモ帳でしょうが。。。どこにそんな蛙なんとか計画なんて書いてあるのよ。。」
日出夫が本当に困ったように言った。

「じゃ、ここは暗いから外に出て話しを聞こうじゃないか！！」
与助が提案するように見せかけて、逃げる機会を作ろうとしていた。

「そうね！！じゃ、外に出ようじゃないの！！小太郎ちゃん大丈夫なの？銀次郎ちゃんもどうしちゃったのよ！！まぁ、とりあえず、出ようじゃないの！！」
日出夫も少しムキになってきた。

「小太郎、大丈夫かい？銀次郎を持って外に出れるかい？」
そう言いながら、外に出たら逃げるぞとアイコンタクトを送った。

「あぁ、、、大丈夫さ。少し足をくじいただけだからな。。」
少し震える声で、強がった。

与助、銀次郎、小太郎、日出夫の順で穴の中を進み、外に出た。
ただ、小太郎がまだぎこちなくしか歩けずに少し時間がかかった。
この状態だと３人で逃げるのは難しいなと与助は思った。

もう少し日出夫の話しを聞いて、その間に時間を稼いで、逃げる機会を待とう。

「ほら、どこにそんな蛙なんとか計画なんて書いてあるのよ！！」

日出夫が与助が持っている冊子を指差して少し怒っていた。

「どこって、ここの表紙にバッチリ書いてあるじゃないか！！」

与助が明るいところでその表紙を指差して言うと、暗いところでよくわからなかったが、このように書いてあった。

蛙が快適に越冬するために準備するもの。
第一にすることは、銀次郎たち
３人の部屋を作らないといけない。部屋の
形は色々ある考えられるけど、まずはちゃんと
態勢を整えないといけないから、穴の中を
計測しとかないといけない♡
画用紙に部屋の仮の設計図を書いとこう♡
秘）ある程度態勢が整えられるまでは、部屋のことは皆に内緒にしておこう♡

「ほら、そんなことどこにも書いてないじゃないの！！」

「これは、あの穴の中で皆で一緒に冬を越すためには各部屋を作らないといけないと思ったから、あなたたちにサプライズで準備しようと思っていた時に書いたメモ帳よ！」

日出夫は怒っていた。

「あれ～～　あ～最初の一文字目以外はナメクジが這ったからか、少し薄くなっていて暗闇では見えなかったんだ！！」

与助がとても恥ずかしくなっていた。

「でも、この中にアマガエルを食べやすい大きさに切ってとか書いてあったじゃないか！」

与助が、いや、騙されるもんかと思いながら、返した。

「アマガエルを食べやすい大きさに切って??そんなこと書いていた？」
「ちょっと、見せてくれる？」
日出夫が与助が持っていた冊子を手に取った。

「あれ？？なんでこれ開かなくなっているのかしら？？」
「たぶんナメクジが歩いて開かなくなったのね。」
そう言って、少し破きながら、無理やりページを開いた。

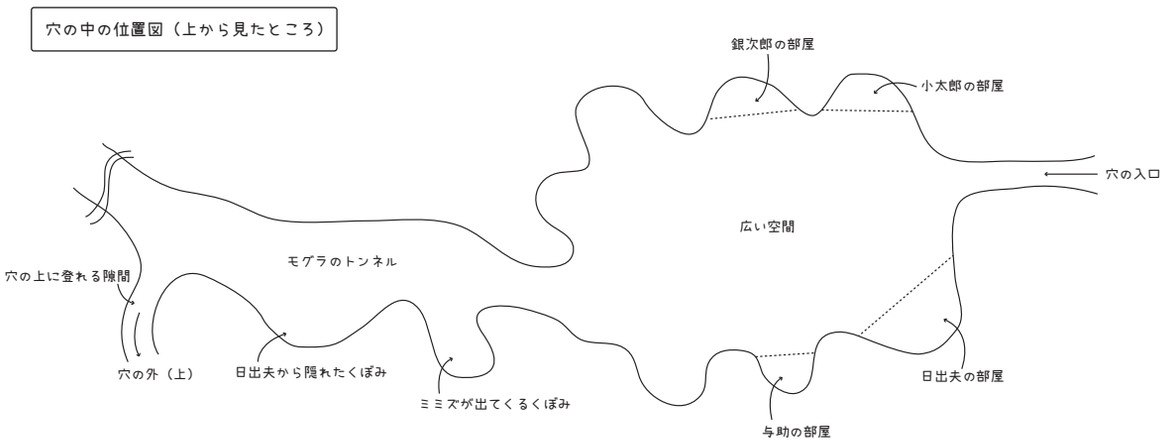
「もしかして、ここの　～アマガエルが食べやすい大きさに切って～　のとこを見間違えたのかしら？」
「アマガエル〝を〟じゃなくて、アマガエル〝が〟よ。〝が〟」
日出夫は指差しながら説明した。そして、少し面白くなってきていた。

「ん？？　〝を〟じゃなくて、〝が〟？」
「どういうことだい？」

「だからね、これは何度も言っているけど、あなたたちと一緒に冬を越すために準備するものをメモしたメモ帳なのね。」
「あなたたちに栄養のあるものを食べてもらいたいと思ったから、簡単なレシピみたいなものをアマガエル用のとヌマガエル用のを作っていたのよ♡」
日出夫が笑いながら言った。

「でも、銀次郎をこんな目に合わせて、動けなくして本当は食べようとしているんじゃないのか？」
与助が騙されるもんかと思った。

「だからね。。。銀次郎ちゃんのことだから、ちゃんと用法・用量を守らないかもしれないし、ナメクジの粘液を取る方法を教え



ていなかったから、心配して探していたところだったのよ♡　いつもの隙間にもいないし。。」

「想像してた通り、ナメクジの粘液塗り過ぎてるし。。。」

日出夫が銀次郎を見下ろして、ため息交じりで言った。

「でも、肌の手入れなんて俺たちには必要ないだろ！なんかあるんだろ？」

「肌の手入れしないくらいでペラペラになんて、なる訳ないじゃないか！！」

与助が未だに疑いを持って言った。

「あ～。。まぁ、あれは大げさに言ったかもしれないけど。。でも、肌の手入れは大事なのはほんとよ。。」

日出夫が目を逸らして、少し遠くを見た。

「ほら！！なんかあるんだろ？」

「まぁ、、与助ちゃんならわかると思うんだけどね。。」

日出夫が与助に少し近づいて、与助にだけ聞こえる声で言った。

「銀次郎ちゃんの反応が良すぎるから、、、なんか嘘とか言って、反応みたくなるでしょ♡驚くところがとても可愛くて見たくなるのよ、、、茶目っ気よ茶目っ気♡」

それを聞いた与助は

「うん、、、まぁ、、、、わからないでもない。アイツはとても反応がいいからな。。。」

小声で日出夫に言った。

「ん？？？何を話しているんんだい？」
銀次郎がボソボソと話している2人を下から見ながら言った。

「どう？誤解は解けたの？」
日出夫が元の位置に戻って与助に聞いた。

「ん～～。。。わるかったよ。。誤解していた。。。ごめんよ。」
与助が納得して、謝った。

「じゃ、とりあえず、冬を越すための部屋を作るサプライズはバレてしまったから、これからみんなで相談しましょ♡」
日出夫が嬉しそうに言った。

「そうしよう。」
与助が日出夫のメモ帳をパラパラ見ながら答えた。

「あの～～、、その前にさぁ、この体を動けるようにしてもらえない？」
銀次郎が脚をぴ～んと伸ばした状態で申し訳なさそうに言った。

「あ～、、そうね。そうしましょ♡」

「あの～、、、俺もさぁ、びっくりしすぎて、未だに脚がちゃんと動かないのだけど、、これもどうにかしてくれないかい？」
小太郎も申し訳なさそうに言った。

「ん～～。まぁ、それはその内 治るわよ♡」
「それまで私の頭の上に乗っていたらいいじゃないの♡」
そう言って、小太郎をヒョッイと持ちあげて頭の上に置いた。

アマガエル2匹とヒキガエル1匹、そしてその頭の上にヌマガエル1匹。
元通り。

妄想アマガエル日記（３９）－１１月２４日（金）晴れ

「ところで、なんで部屋なんて作る必要があるんだい？」
銀次郎が不思議そうに日出夫に聞いた。

「えっ！！それはね、、ほら、一応プライバシーってのがあるでしょ。だからよ。」
「銀次郎ちゃんの寝相が悪いとかは関係ないのよ！！！ほんと！」
日出夫がアワアワしながら答えた。

「ふ～ん、そうなんだ～。。」
「せっかく、みんなでしゃべりながら冬を越せると思っていたのにな～」
銀次郎ががっかりしていた。

「いや、この穴の中は暖かいから、体が動けなくなるなんてことはないと思うわよ。だから、しゃべりたくなったら、各部屋からここの広いところに集まってしゃべったらいいじゃないの！」
日出夫が慌てて与助と小太郎を見ながら言った。

「そうなんだ～！！なら、よかったよ～」
銀次郎がほっとした。

「ところで、この穴の中をある程度測ってはみたけど、どうやって各部屋を作ろうかしらね？」

「そうだな～。。とりあえず、日出夫の部屋は大きくして、その横に銀次郎の部屋を作って、向いに俺と小太郎の部屋を作るってのでいいんじゃないかい？」
与助が穴の凹みと日出夫のメモを見ながら提案した。

「えっ、どうして、小太郎ちゃんが向いなのよ！！私の横に小太郎ちゃんで、向いに与助と銀次郎の部屋でいいじゃない？同じアマガエルなんだし。」

「まぁ、それでもいいけど、、、」
与助が銀次郎の寝相の悪さを思い出しながら渋々納得した。

「いや、、、俺は銀次郎は日出夫の横がいいと思うな～。。仲いいしさ～」
小太郎がどうにか日出夫から離れようと提案した。

「お前はどっちが、いいんだい？」
与助が銀次郎を指差して聞いた。

「まぁ、僕はどこでもいいんだけどね、、たぶん、ずっとこの広いところにいると思うからさ～」
銀次郎は皆としゃべりたくて仕方がない。

「いやいや、寝る時はちゃんと自分の部屋にいけよ。マジで」
与助はこんな広いところで銀次郎を寝かすわけにはいかないと思って、強く言った。

「う～ん、、、わかったよ。。」
銀次郎が渋々答えた。

「よし、じゃ、日出夫の横が俺で、向いに小太郎と銀次郎の部屋を作るってので問題ないだろ？」

「ん～。。。まぁ、仕方がないわね。そうしましょ。」
日出夫が渋々納得して、皆も納得した。

「じゃ、日出夫が測ってくれたこの穴の中の図を使って、各部屋の形を作ろうじゃないか。」
与助がそう言って、日出夫のメモ帳に各部屋の簡単な設計図を書き出した。それを皆で覗きこむように見て、あ～でもない、こ～でもないと言いながら、少しずつ完成していった。

その後、与助と銀次郎がその設計図を見ながら、地面に線を引いて部屋の形を作りはじめた。

「そうそう、もう少し左」
与助が線を引く銀次郎に指示を出した。

「これくらいかい？」

「そうそう、そのまま まっすぐ」

徐々に各部屋の形が出来ていく様子を日出夫と日出夫の頭の上の小太郎は見ていた。穴の中はぽかぽかと暖かく、日出夫も小太郎も眠くなってきた。

「ちょっ、ちょっと、小太郎ちゃん、、、私の頭の上で寝ようとしているんじゃないの？」
日出夫が小太郎が寝ると毒が出ることを思い出して慌てて聞いた。

「ん～？？なに？」
小太郎がウトウトしていた。

「毒よ！毒！小太郎ちゃんは寝ている時に腹から毒が出るの知っているのよ！！」

「毒？なんのことだい？」
小太郎は呆気にとられて返答した。
与助は銀次郎と線を引いていて、２人の会話は聞こえない。
「ん？与助ちゃんから聞いたのよ。あなたが寝ている時に腹から毒が出るってことを！」
その瞬間、小太郎の頭の中のスーパーコンピューターが物凄いスピードであらゆる状況を計算した。
カタカタタ・・・・・　カタカタタ・・・・・
与助
腹から毒
寝ている時
カタカタタ・・・・・　カタカタタ・・・・・
チン！！
弾きだした答えは。
「そうなんだよ。俺は寝ている時に腹から毒が出るんだ！！だから、一緒に冬を越す時は一人で寝ないといけないんだ。」
「そうでしょう～。。だから、あたしの頭の上で寝ちゃダメよ！！」
「そっ、そうだね。」

そして、小太郎は与助に心から感謝した。

その後、このことを与助に小声で言うと、

「そうだった～、、小太郎にそのことを言おうと探していた時に、銀次郎が変なことしてるの見つけて、色々あったろう～？、、言いそびれてしまってたよ～　ごめんよ～」

「いやいや、ほんとにありがとうな！お前は天才だ！」

小太郎が小声で与助を褒め、それを聞いた与助は嬉しそうにほほ笑んだ。

妄想アマガエル日記（４０）－１２月３日（日）曇り時々雨

穴の中のくぼみを利用して、部屋を作るための線も引き終わって、少し休んでいた。

「まぁ、とりあえず、線は引いたし、あとはこの線にどうにかして壁を作ったらいいけど、どうやって作るかだな。。。」

与助は独り言のように呟いた。

「そうだね～、、葉っぱを重ねて置いたらいいんじゃない？」

銀次郎がニコニコしながら言った。

「いや～それじゃ、、、風が吹いたら飛んで行ってしまうだろ？」

与助が優しく否定した。

そして、次に腕を組みながら小太郎が考えて提案した。

「そうだな～、、、じゃ、石を重ねて壁を作るってのはどうだい？」

「いや～それは、、、運ぶの大変だろう？」
「それ作っている間に冬が終わっちゃうさ！！」
与助がまた優しく否定した。

そのやり取りを上から見下げていた日出夫が
「そうね～、、、じゃ、外に朽ち木がいっぱい落ちていたから、あの朽ち木の樹皮を剥いでとってきて、くぼみの入り口を覆うってのはどうかしら？」

「なるほどな～、、確かに朽ち木の樹皮は簡単に剥がれるし、色々な大きさがあるし、簡単に加工できるし、軽いし、頑丈だし、、、ん～　すんばらしい！さすが、日出夫だ！！」
与助は心底感心して、膝を手を叩いた。

それを見ていた銀次郎と小太郎が顔を見合わせて、少し悔しそうな表情をした。

そして、３人の様子を上から見ていた日出夫が２人をフォローしようと、
「でもね。。銀次郎ちゃんが言っていた葉っぱも、小太郎ちゃんが言っていた石もどっちも併用したら、よりいいのができるんじゃないかしら？」と
気を遣って言った。

すると、与助が
「なるほどな～、、、確かに、朽ち木の壁の下に石をわずかに積んで、扉などを落ち葉で作ればいいってことか、、、ん～すんばらしい！さすが、日出夫だ！！！」
膝を２回叩いて、感心した。

それを見ていた銀次郎と小太郎が、顔を見合わせて、すねた。

そして、３人の様子を上から見ていた日出夫が、心の中で少し思った。
この子たちは、、、ほんと、、、、
めんどくさい子たちだわ♡

妄想アマガエル日記（４１）－１２月１０日（日）晴れ

「よし、じゃ、穴の外に出て朽ち木の樹皮を集めに行ってから、部屋を作ろうじゃないか！」
与助が、元気よく皆に声をかけた。

でも、なかなか銀次郎と小太郎が動いてくれない。

「おいおい、どうしたんだよ～」
与助が２人に声をかけた。

でも、２人とも口をとがらせて目を合わせようともしない。

「おいおい、、俺がなんかしたっていうのかい？」
与助が困って、２人に聞いた。

「だって、、なぁ？」
小太郎が銀次郎に言った。

「そうだよね～」

銀次郎も口をとがらせて小太郎に返事した。
「なんだよ、、俺がなんかしたか？」
与助は困ってしまった。
「僕らが言ったことは何も聞いてくれないけど、いつもいつも日出夫が言ったことだけは物凄く賛同するじゃないか！！」
銀次郎が口をとがらせて言った。
「ほんと、そう」
小太郎も口をとがらせて言った。
「そんなことないさ。ただ、日出夫が言うことがいちいち的確だからさぁ～」
「やっぱり、俺らより長く生きてるだけあるな～って感心して賛同してしまうだけさ。」
与助が少し呆れて答えた。
「まぁまぁ、、、銀次郎ちゃんも小太郎ちゃんも言ったことはちゃんと与助ちゃんも賛同していたじゃないの♡」
「だから、ほら、銀次郎ちゃんが言った落ち葉にしても、小太郎ちゃんが言った石も、今から取りに行くって与助ちゃんが言っていたでしょ！」
日出夫が2人をなだめるように言った。
「いや、与助は朽ち木の樹皮を取りに行こうとは言ったけど、落ち葉と石は言っていなかったよ！」
銀次郎が、さらに口をとがらせて、与助を指差しながら言った。
「そうだ！そうだ！与助は樹皮のことしか言っていなかったぞ！！」
小太郎も口をとがらせて、与助を指差しながら言った。
それを見ていた与助が2人のとがった口をつまみながら、

「まったく、お前らは、、、こんなに口とがらせながら言うことじゃないだろ？」
「俺が悪かったよ。樹皮と落ち葉と石を取りに行こう！」

そして、ようやく2匹のアマガエルと1匹のヒキガエル、そしてその頭の上にヌマガエル1匹が穴から外に出て樹皮と落ち葉と石を集めに行くことにした。

数時間後‥‥

「よし！これだけあれば十分部屋を作ることはできるだろう！」
与助が皆で集めたものを見ながら言った。

「そうね。取って来過ぎたかもしれないけど、まぁ、銀次郎ちゃんはたぶん壊すだろうから、その補修用に予備で置いておかないといけないから、これくらいは必要ね。」
日出夫が悪気なく言った。

すると、また銀次郎が口をとがらせようとしたので、与助がその口をつまんで、
「まぁ、まぁ、日出夫も悪気はないんだ、落ち着いてくれ！」

それを聞いて、ゆっくりと銀次郎の口が元に戻ったので、皆で部屋の壁を作りはじめた。

まずは、各部屋のくぼみの前に引いた線の上に取ってきた石を積んでいった。腰の辺りまで石を積んで、その石垣で挟むように樹皮を立てた。ちょうど、穴の高さまである大きな朽ち木をとってきたので、それを穴の天井にはまるように加工して立てると、ちゃんとした壁を作ることができた。

「お～！！なんかちゃんとした壁になったね！！」
銀次郎がそれを見て喜んだ。

「ほんとだな～。。ちゃんとした部屋になったな！！」
小太郎もそれを見て感心した。

「じゃ、次は落ち葉を壁と穴のくぼみの壁のところにぶらさげて、扉にしようじゃないか！それぞれ好きな落ち葉を選んでつけよう！」
与助が皆に提案した。

「そうね～。。私はこの大きなホウノキの葉にしようかしらね♡」
日出夫が選んでとりつけた。

「おれは、このギザギザしてかっこいいからクヌギの葉をつけよう」
小太郎が選んでとりつけた。

「じゃ、俺は、この葉が肉厚だし、艶があるからカキノキの葉をつけよう」
与助が選んでとりつけた。

「みんなどんどんつけていくね。。。じゃ、僕はこの 色が綺麗だからイロハモミジの葉っぱにしようかな？」
銀次郎が選んで取り付けようとした。

すると、与助が、
「おいおい、、そんな薄いペラペラの葉じゃ、寝相の悪いお前は部屋から出てきてしまうだろ？」
「この頑丈なモクレンの葉にしなよ！ほらっ。」

それを聞いた銀次郎は、
静かに、そして少しずつ、口がとがりはじめた。



妄想アマガエル日記（４２）　１２月１５日（金）雨

「まったく、、、お前はいつまでたっても子供だな、、、」
「いちいち、口とがらせてすねるなよ。。。」
与助がそう言いながら、銀次郎の部屋の扉を付けるのを手伝っていた。

「与助が、いつも日出夫にばっかりいい顔するし、僕が言うことをいつだって否定するからさ。」
銀次郎が口をとがらせながら、モクレンの葉の下を持ちながら言った。

「いやいや、別にお前のことを否定したり、日出夫にいい顔しているってわけじゃないんだ。ほんと！信じてくれよ。。」
「なんか嫌な思いをさせたんなら、謝るからさ～。」
与助は本当に誤解を払拭しようと丁寧に説明した。

「まぁ、、いいんだけどね。与助はいい奴だから、悪気がないのは知っているからさ。。」

「なら、よかったよ。これからは、少し気を遣うようにするよ。」

「いや、気を遣われるのは嫌だな～」
扉をつけ終わって、片づけをしながらつぶやいた。

「わかったよ、、、じゃ、気を遣わないでおくよ。」

「ん～～、、それもまた嫌な思いするかもしれないよ。。」

「じゃ、どうすればいいんだよ！！」
与助が困ってしまった。

「そうだね。。とりあえず、僕がいうことを1回受け入れてみるってのはどうだい？」

「ん？どういうこと？」

「だからね。僕が何かを提案してみるでしょ。やる前にそれを否定するんじゃなくてさ、、1回やってみてから決めるってことだよ。」

「ん～～、、まぁ、よくわからないけど、とりあえず、今日だけはそうしてみようか。」

与助がしぶしぶ銀次郎の提案を受け入れてみた。

「そうそう、そんな感じでさぁ。1回受け入れてみて欲しいんだよ！！」

銀次郎がとても嬉しそうに与助を見た。

それぞれ部屋もできたので、また広い空間の中央にみんなで集まった。

「じゃ、とりあえず、みんなの部屋も完成したし、これからどうしようか？」

与助がみんなに相談した。

すると、小太郎が、

「じゃさ、まずは自分の部屋に冬を越すために落ち葉を敷いたりして、居心地のいい部屋にするってのはどうだい？」

「そうだな。じゃ、そこに落ち葉とか石とかはいっぱい取ってきてあるから、それを自由に使って、部屋を居心地いいように準備することにしよう。」

与助が小太郎の提案を受け入れて、皆に促した。

一時間後……

「だいたいいい感じの部屋になったよ！！」
小太郎が自分の部屋から出てきて、既に出て来ていた与助に言った。

「そうかい。俺もいい感じにできたよ。」
「俺の部屋は上の隙間から光も入るから、なかなかいい感じだし。」

「へ～。光が入るってことは、風も入って寒いんじゃないかい？」
小太郎が少し心配そうに聞いた。

「俺もそう思ってさ。さっき、そこを落ち葉で光だけ透けて、風が入らないようにしたんだよ。」
与助が嬉しそうに言った。
小太郎と話していると、銀次郎と日出夫も部屋から出てきた。

「2人とも案外時間かけて準備していたんだね。」
与助が2人に話しかけた。

「そうね～♡　私の部屋は、ほらっ 広いから～」
日出夫が自分の部屋を指差しながら答えた。

「確かにね。。。。」
与助はその指差す方向を見ながら相槌をした。

「僕の部屋もなかなかいい感じになったよ。」
銀次郎が嬉しそうに言った。

「へ〜。どんな風にしたんだい？」
与助がなんとなく聞いてみた。

「僕の部屋はね。。。与助がたまに遊びに来て、一緒に寝れるように寝床を２つにしたんだよ！」
銀次郎が嬉しそうに部屋の間取りを地面に書きながら言った。

「ん？？？どういうことだい？」
「なんで、俺がお前の部屋で寝るんだい？」
与助は理解できずに聞いた。

「だって、寝る時はこの広いところではダメで、自分の部屋で寝ろって言ったろ？」
「でも、一人で寝るのはつまらないでしょ。だから、与助の寝床も作って一緒に寝れるようにしたってわけさ！！」
自信満々に銀次郎が言った。

「いやいや、、、あんな狭い空間でお前と寝るなんて、、お前の寝相の悪さのせいで、俺が怪我してしまうだろ？」
「ぜったい、、、嫌だ！！」
与助が必死に否定した。

「ふ〜〜ん。。。さっきさ、、、与助はさ、、、、僕の提案をさ、、、１回は受け入れるってさ、、、言っていたじゃないか。。。」
「もう、約束を破るのかい？」
銀次郎が恨めしそうに言った。
「あっ」
全身青色の与助が、全身真っ白になった。

妄想アマガエル日記（４３）－１２月２８日（木）晴れ

「わかった、わかった」
「約束通り、お前が言ったことを１回は受け入れることにするから、今夜は一緒に寝ようじゃないか。。」
与助はしぶしぶ受け入れた。でもまぁ、銀次郎が寝たら自分の部屋に戻ればいいやと思った。

「おっ、そうなの。約束守ってくれるんだ！さすが、与助だ。約束を破ったりはしないと思っていたよ！」
銀次郎が嬉しそうに言った。

「まぁ、とりあえず、部屋もできたし、外も寒くなってきたから、入り口を塞いでここでの暮らしを始めようか？」
与助が皆に提案した。

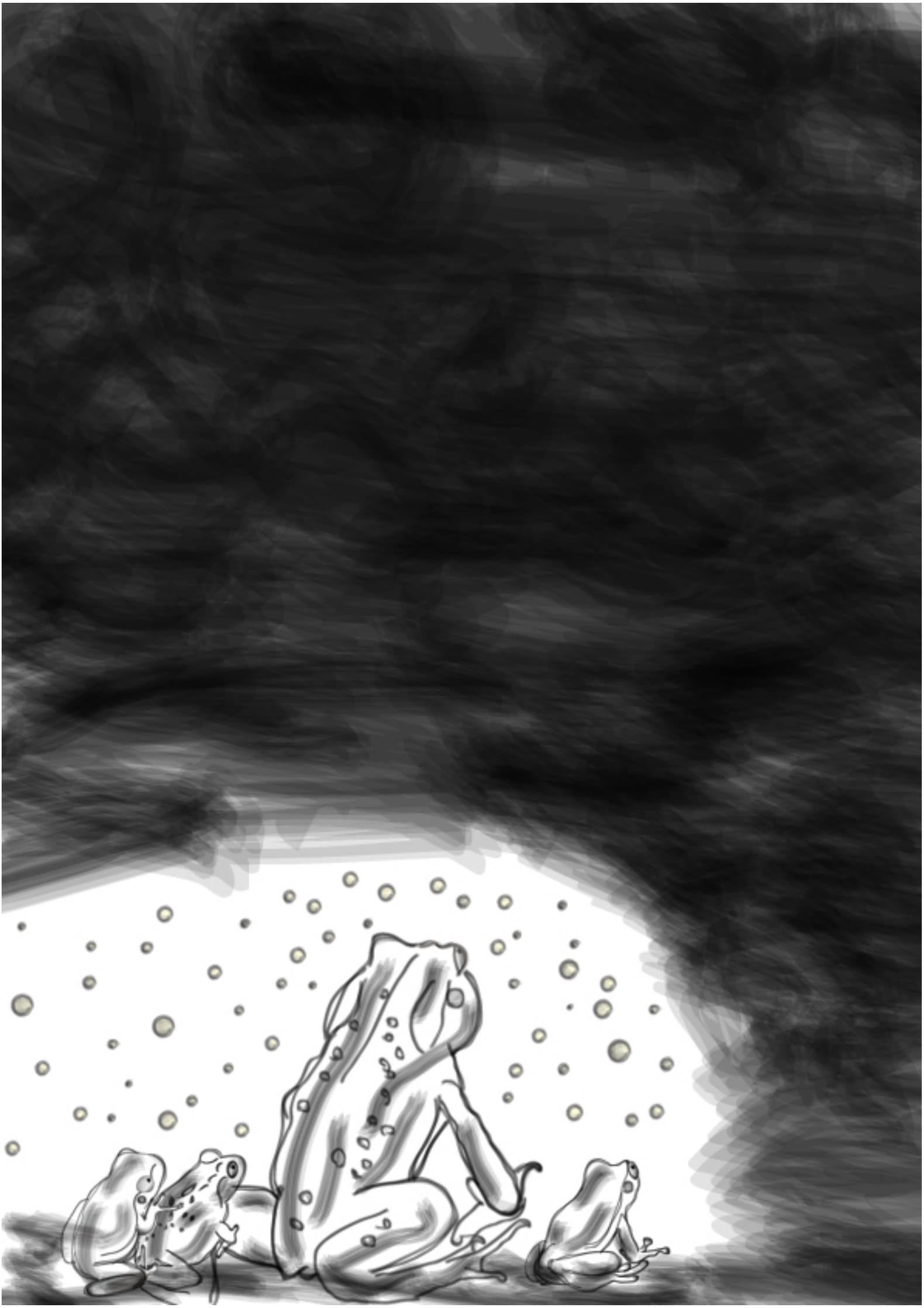
穴の入り口から外を見ると雪が降っていた。そして、はじめて見る雪を見ながら入り口を朽ち木の樹皮や石、土などで塞いで冷たい風が入ってこないようにした。ようやく穴の入り口を塞ぐことができた頃には夜になっていた。

そこで、各自部屋に戻って寝ることにした。
穴の中は真っ暗になったが、天井に開いた隙間から入ってくる月の明かりがところどころを照らして、完全には暗くはならない。

「じゃさ、与助は僕の部屋で寝るんでしょ？」
銀次郎が嬉しそうに聞いた。

「あぁ～、、そうだな。」
与助がしぶしぶ答えた。

銀次郎が嬉しそうに部屋に案内すると寝床が２ヶ所用意してあって、奥に銀次郎が寝て、手前に与助が寝ることにした。



「いや～、、今日は疲れたね。。とりあえず、入り口は塞いだし、ここは寒く無いし、これで冬を越すことはできそうだね。」
「そういえばさ、、ペラペラ、ペラペラ。。。。この前なんてさ、、ペラペラ、ペラペラ。。。」
銀次郎がただひたすらにしゃべり続け、それをうんうん言いながら与助が相槌した。

コイツはいつになったら寝るんだろうな。。。
与助は思った。

もしかしたら、コイツが興味ないような嘘の話しでもしたら眠くなるかもしれないな。。。
そう思った与助は、
「そういえば、地底蛙って知っているかい？」
と明らかなつまらない嘘の話しをしてみた。

「地底蛙？聞いたことないよ。」
銀次郎があまり関心ないような感じで返事した。

よしよし、関心なさそうだな、
「地底蛙ってのはな、、俺たちのような地上にいる蛙と違って、とても危険な蛙でずっと地底で暮らしているらしいんだ。地底にはその蛙たちの世界があるらしくて、たまに地上に出て来て地上の蛙を食べるって噂だ。」
与助がちょっと嘘が多すぎたからバレてしまうと思った。

しかし、銀次郎が
「えぇえぇぇ、、なんて危険な！！！もしかしたら、この穴の中にいたら地底蛙が来るなんてことがあるんじゃないか！！！」
与助の話しを信じてしまって、話しに食いついた。

あれ？明らかな嘘なんだけど、コイツ信じてしまったのではないか？

いやいや、まさかな。。
「でさ、、その地底蛙ってのは、目が6個あって、体には日出夫とか小太郎みたいなイボがあるらしいんだ。口も大きいらしい。」
まぁ、こんな嘘を言えば、そろそろ嘘と気づいて呆れて寝るかな？

「えぇぇえぇぇ、、なんて姿をしているんだい？？？目が6個も？大変だ！！寝てる場合じゃないじゃないか！！！」
銀次郎が飛びあがって、慌て出した。

そして、再び横になった銀次郎は怖くなって与助の手をぎゅっと握った。

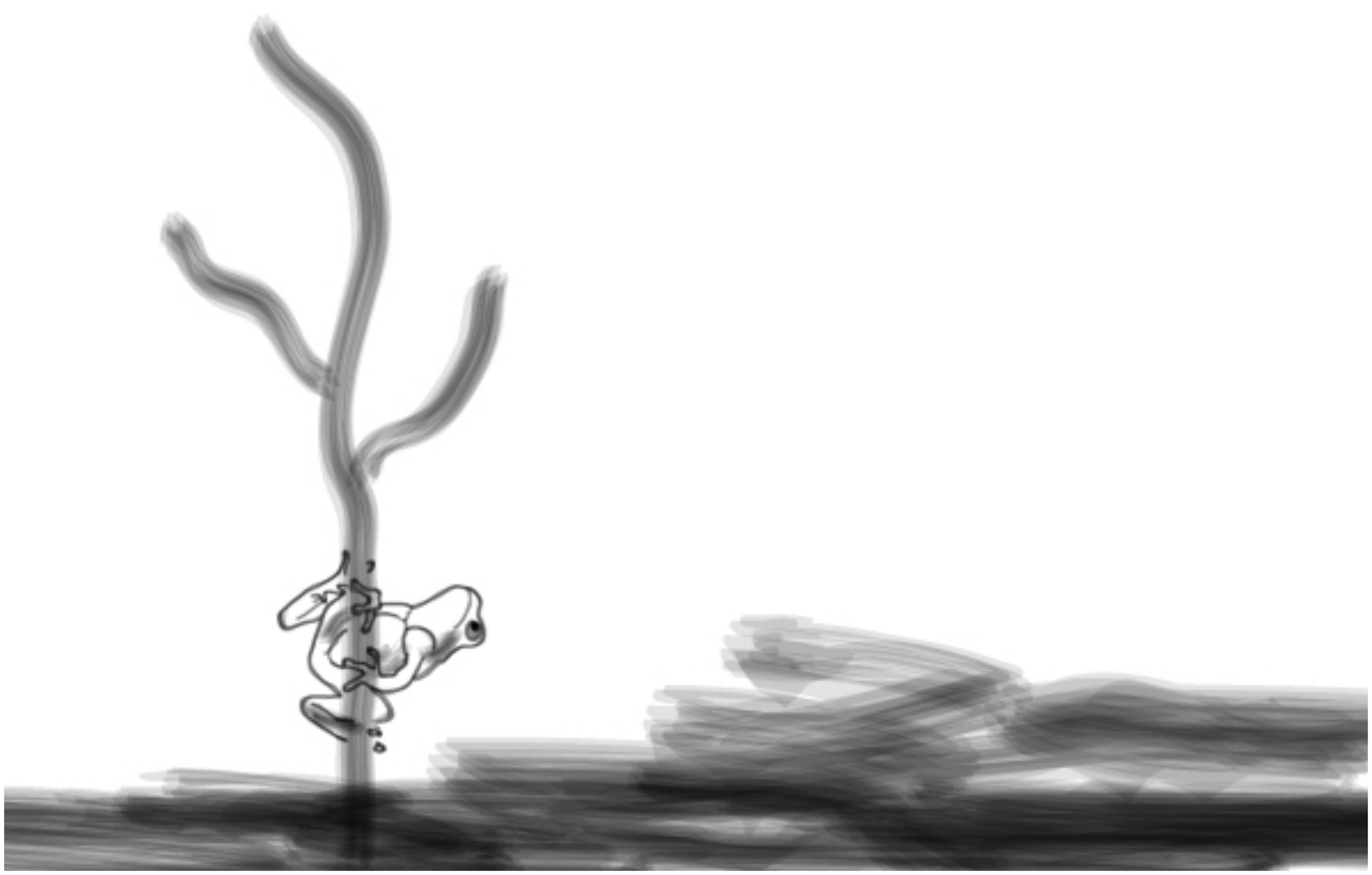
それを横目で見た与助は思った。
そうだった、、、コイツはこういう奴だった。。。
これじゃ、逃げれない。。。。

妄想アマガエル日記（４４）－１月７日（日）曇り

「まったく、、、なんでついて来るんだよ～」
与助がずっとついて来る銀次郎を振り返りながら言った。

「だって、、、与助が地底蛙なんで怖い話しをするから仕方ないじゃないか。。。」

「いやいや、、、だから、あれは嘘だって言ったろ？あんな生き物がいるわけないじゃないか！変な嘘ついてほんとごめんって。。。昨晩も謝ったろ。。。」
与助が申し訳なさそうに言った。そして、昨晩、嘘をついたことを後悔していた。



結局、昨晩は銀次郎に掴まれて自分の部屋に戻ることができなくなってしまったが、銀次郎が寝た後に相変わらずの寝相の悪さで暴れている際に手が離れたので、その隙に自分の部屋に戻ったのだった。ただ、朝起きると部屋の入口に銀次郎が待っていて、このザマだ。。

ほんと、なんであんな嘘をコイツは信じてしまうんだろうな～？

与助は銀次郎の素直さにすこし呆れていた。

「じゃ、どこに行くんだい？」

銀次郎が前を歩く与助に聞いた。

「昨日、自分の部屋で寝たんだけど、もう少し落ち葉があった方がいいと思ったから、それを取りに穴の奥に行くだけさ。。。。」

与助が穴の奥を指差しながら言った。

「そうか！！じゃ、僕も手伝うよ」

「あ～、、なんか悪いけど、じゃお願いしようかな。」

与助がしぶしぶ受け入れた。

コイツのいうことを否定するんじゃなくて、１回は受け入れるって約束したしな、、、と考えていた。

「ところでさ～。さすがに地底蛙なんてのは、この穴の奥から出てくるなんてないよね～。あれは嘘だもんね～。」

銀次郎が与助に何度も確認した。

「そりゃ、そうさ！！そんな地底蛙なんているわけがないさ。だってあれは、俺が考えた完全な嘘なんだからさ！！」

与助が自信たっぷりに答えた。

「そうだよね～！！ふ～。目が６個もある蛙なんているわけないもんね！」

銀次郎が心底安心していた。

ようやく、穴の奥のトンネルのところにある窪みに着いた。ここには、多めに取ってきた落ち葉や石、朽ち木の皮などがだいぶ置いてある。

「さて、じゃ、落ち葉を取って、戻ろうか。」
与助が言いながら、落ち葉を選んでいた。

すると、穴の奥から何やら音が聞こえてきた。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・・・・

「ん？なにか音がしないかい？」
与助が銀次郎に聞いた。

「確かにね。。。小太郎と日出夫はまだ寝ていたから、他にこの穴の中に蛙はいないはずだけど、、、なにか蛙が歩く音のようなのが穴の奥から聞こえたような、、、、？」
銀次郎が少し怖がりながら言った。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・

「やっぱり、何かが近づいて来ているような音がするな～。」
与助が落ち葉を一旦地面に置いて耳を澄ました。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・

「もしかして、本当に地底蛙が穴の奥から来ているんじゃないのかい？？？」

銀次郎が与助の手を掴んで身を隠した。

すると、穴の奥から、何かの姿が少しずつ見えてきた。
黒いシルエットに目が６個、それが少しずつゆらゆらと近づいてきた。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・

それを指差して銀次郎が与助に言った。
「目が６個あるよ！！！あれは、、、地底蛙だ～～。」

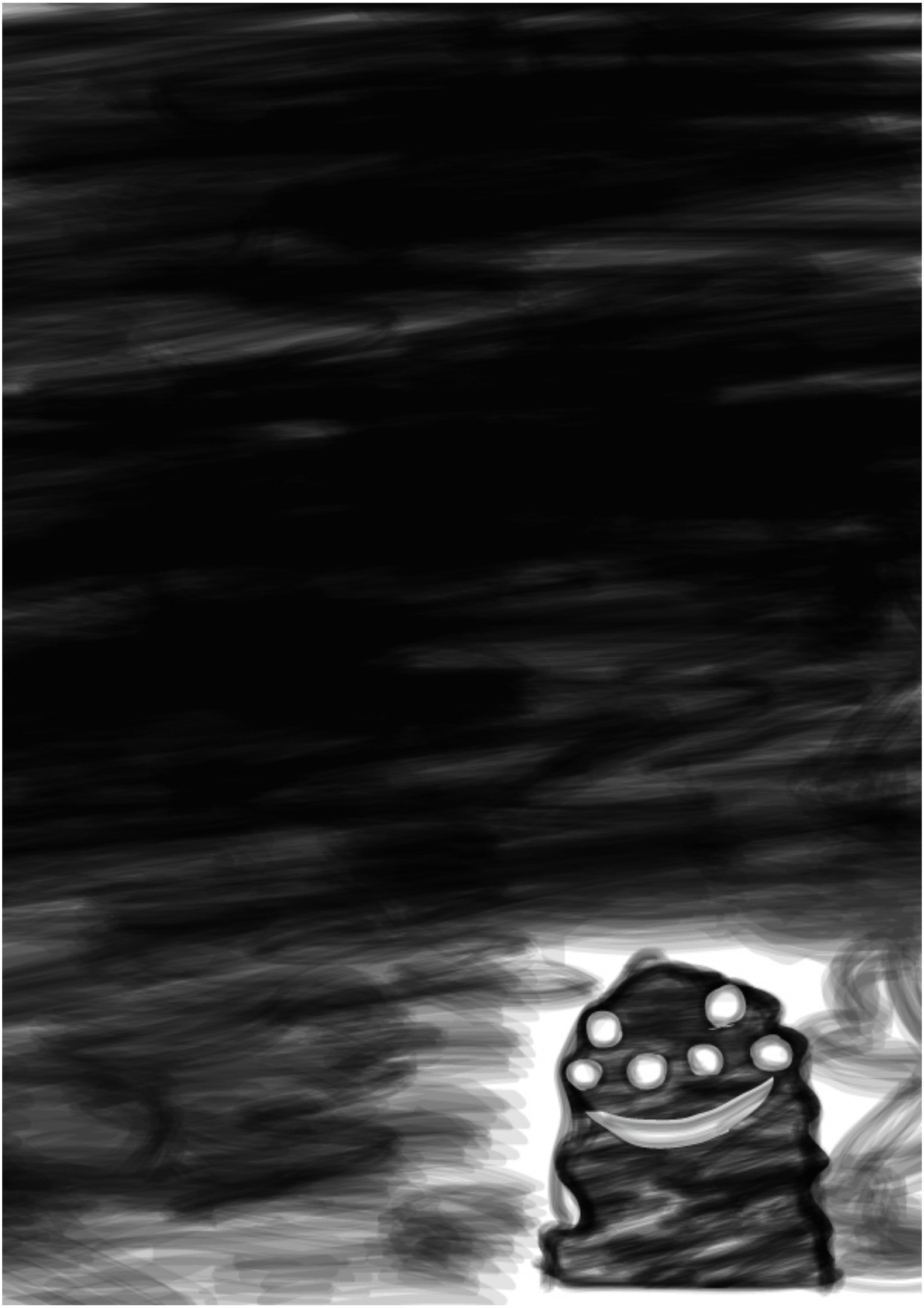
妄想アマガエル日記（４５）　１月８日（月）晴れ

「目が６個あるよ！！！あれは、、、地底蛙だ～～。」
銀次郎が叫んた。

そして、与助もそう思った。
オカシイ、、なんで俺が考えた嘘の地底蛙が本当にいるんだ？？

ペタ、ペタ、ペタ・・・・・

その黒い影が少しづつ近づいて来た。
ちょうど、穴の上に上がれる隙間から日の光が差し込み、その黒い影を照らしだした。



その姿を見た銀次郎と与助が2人同時に声が出た。
「えっ！！」

遡ること1時間前　@水路‥‥‥

「確かに、、、あれは案外大きな穴だったから、セミじゃなくて、モグラか～」
六助が納得した。

そして、３人でその穴のところに行ってみた。
そこは、大きな木の根が二又に分かれたところで、その間に拳大の穴が開いていた。

「確かに、これなら3人で入れそうだな！」
七助が穴に首を突っ込んで奥をみながら後ろの2人に言った。

「よし、じゃ、とりあえずこの中に入ってみるか！」
八助が提案した。

「でも、この穴の入り口が崩れたら、出れなくなるかもしれないだろ？」
「大丈夫なのか？」
六助が心配そうに言った。

「大丈夫だろ。だって、この穴を見つけたのは夏だったろ？あのころからずっと開いてて壊れてないんだし、木の根が穴を守っているようだからさ～。」
八助が六助を安心させるように言った。

「そうだな。じゃ、行ってみるか。」
六助もようやく納得した。

「じゃ、俺が先頭で行くから。」
七助がそう言って先頭を歩いた。次に八助、最後に六助の順に穴に入った。

穴の中は思った通りモグラの穴のようで、トノサマガエル３人にはとても広い空間であった。ただ、ところどころ崩れていて、今ではモグラが使っていないようだった。そのため、ところどころ上からの日の光が差し込み、完全には暗くならずに済んでいた。

「へ～～。こんな穴が結構奥まで続いているんだな～。」
八助が感心するように言った。

「本当だな～。。。ちょうど、この上辺りがいつも俺たちがいる水路の脇の石のところくらいじゃないか！！」
七助が上を指差しながら言った。

「確かにな～。。あの下にこんなトンネルがあったなんて、、知らなかったな～」
六助が感心するように言った。

「おっ、なんか二又に分かれているけど、、、どうする？どっち行く？」
七助が先を指差しながら言った。

「どうしようかね～。。右のトンネルはなんか地面がジメジメしているけど、左の方はそうなっていないから、左に行こうか。」
八助が提案した。

「そうだな。まぁ、どっちが正解かはわからないけど、左に行ってみるか！」
七助がそう言って左のトンネルに進んだ。

「おっ、正解だったかもしれないな。なんかまっすぐのトンネルになったし。」
八助が嬉しそうに言った。

「でも、まぁ、そんな奥まで行かなくても、この辺りでもいいのかもしれないな。ここならそんなに寒くないし、冬を越すには

十分な広さもあるからな～。」
六助が歩くのがめんどくさくなったので、言った。

「まぁ、もう少し見てみようじゃないか！」
「なんか、この奥にもっといいところがあるかもしれないし。」
八助が六助をなだめた。

「でも、このまま進んで、ヘビとかいたらどうするんだよ！！」
六助が心配そうに言った。

「大丈夫だろ。ヘビはこの寒さで動けないらしいし。」
七助が振り返りながら六助に言った。

「この穴の中は寒くないから動けるかもしれないじゃないか！」
六助が口をとがらせて言った。

「わかった、わかった。じゃ、あのトンネルの先の角を曲がって、その先を少し見たら歩くのやめてそこで冬を越すことにしようじゃないか。」
七助が仕方なく、提案した。

「なら、いいよ。」
六助が安心した。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・
穴の中には3人が歩く音だけが鳴り響いた。

角を曲がると、その先には少し光が差し込んでいるのが見えた。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・・・

ある程度進むと、日を遮っていた曇が晴れて、日の光が強さを増し、差し込んでいた光が強くなった。そして、周囲を一気に明るく照らし出した。

ペタ、ペタ、ペタ・・・・・・

そして、少し先からカエルの声がした。

「えっ！！」

妄想アマガエル日記（４６）－１月１４日（日）晴れ

「えっ！！」

銀次郎と与助が光が当たって暗闇から浮かび上がった３匹のトノサマガエルを見て同時に声がでた。

「地底蛙じゃなくて、ただのカエルだね？」

銀次郎が与助の後ろから出て来て言った。

「そうだな。。まぁ、地底蛙なんているわけないから、地底蛙なんて疑ってもいなかったけどな。。。」

与助が少し地底蛙と思ったことを誤魔化すように言った。

３匹のトノサマガエルが少しずつ近づいてきたので、与助と銀次郎も近づいた。

「君たちはいったいどこから来たんだい？」
与助が聞いた。
「俺たちは水路の上流のところから使われなくなったモグラのトンネルを歩いていたら、ここに着いたんだよ！」
七助が代表して答えた。
「へ～。。あんな遠くまでこのトンネルは続いていたのか。。水路の上流って結構遠いもんね～。」
銀次郎が思い出すように言った。
「へ～。。君も水路に行ったことがあるのかい？」
七助の後ろにいた八助が横に出て話しかけてきた。
「そうだね。。。前に、少し冒険したことがあってね。。」
「その時にあの水路を渡るのに苦労してね。。。何度も溺れそうになりながら、苦労して渡ったらさぁ～、、少し上流見たら泳がなくても渡れるところがあってさ～（笑）心底自分の運の悪さにガッカリしたんだよね～。。」
銀次郎が頭をかきながら情けなさそうに言った。
それを聞いた七助と八助は顔を見合わせて、思い出していた。
あっ、、あの時の運の悪いアマガエルだ！
「へ～。。そうなんだ～。あそこ以外は流れ速くないからね～。。運が悪かったね。。。」
八助がフォローするように言った。
「ん？よく今の話しで詳しい場所までわかったね？」
与助が気になって指摘した。

「んん～。。そう？俺たちはずっとあの水路に住んでいるから、ちょっとの話しで場所もわかるのさ。あははは・・・」
八助が必死に誤魔化した。

その様子を見て与助は、銀次郎が苦労して泳いでいたことをこの３人が見ていたのだろうと一瞬で感じとった。そして、そのぶざまな姿を見たのにそれを銀次郎のために隠しているのに気づいた。そして思った。
彼らはいい奴らだ。

「ところで、君たちはどこに行こうとしていたんだい？」
与助が質問した。

「あ～。寒くなってきたから、冬を越す場所を探していたんだよ。」
六助が後ろから前に出て来て言った。

「そうなんだ～！！じゃ、ここで一緒に冬を越したらいいんじゃないかい？」
与助が提案した。

「えっ。いいのかい？そんな広い空間があるようにも見えないけど。。」
七助が周りを見ながら言った。

「この奥にね、俺たちが冬を越すための広い空間があるから、そこで冬を越したらいいさ。ちょうど、窪みは３つ空いてるし、そこを部屋にする朽ち木の樹皮も落ち葉も石もまだいっぱいあるし。。」
与助が朽ち木の樹皮や落ち葉を指差して言った。

「窪みに朽ち木？よくわからないけど、その空間をまずは見せてくれないかい？」
七助が与助に聞いた。

「おっ、そうだね。こっちだよ。」
与助、銀次郎、七助、八助、六助の順にトンネルを歩いて広い空間まで進んだ。
「おっ～！！これはいい空間だね～！！」
七助が空間を見渡して喜んだ。
「本当だね～！！これは素晴らしい！！」
八助も同調した。
「そして、ここに窪みが3つあるでしょ。ここをほらっ他の窪みが部屋みたいになっているでしょ。あんな感じで部屋にして各自部屋で寝るってことさ！」
与助が他の部屋を指差しながら言った。
「なるほどね～。。。これはいい！！」
六助が心底感心して言った。
「じゃ、とりあえず、君たちを日出夫と小太郎にも紹介しないといけないから、まずは名を教えてくれないかい？」
与助が3人に聞いた。
「あっ、そうだったね。」
「俺は八助で、こっちが七助、そしてこっちが六助」
「俺たちはトノサマガエルなんだ。君たちはアマガエルだね。じゃ、その日出夫と小太郎ってのもアマガエルなのかい？」
「いや、俺たちはアマガエルだけど、日出夫と小太郎はアマガエルではないんだ。」
「銀次郎、2人を呼んで来てくれよ。」

与助が銀次郎にお願いした。

「うん。わかったよ。」

その間、与助と3人が色々な話しをしていた。すると小太郎が部屋から出てきた。

「あっ、あれがね。ヌマガエルの小太郎なんだ。冒険家なんだ。」

与助が小太郎を指出して紹介した。

そして、日出夫が部屋から出て3人の後ろに歩いて近づいてきていた。

しかし、小太郎の紹介をしている与助の方を3人は見ていた。

「あっ、そして、君たちの後ろにいるのがね。日出夫なんだ。」

与助が指差して言った。

3人のトノサマガエルがゆっくり振り返るとそこには壁があるだけだった。

「ん?どこにいるんだい?」

六助が不思議そうに言った。

「いやいや、君たち見てるじゃないか。。。」

「あっ、じゃ上を見上げてごらんよ。」

そう言われて、3人がゆっくり見上げると、天井から空いた小さな穴から一筋の光が大きな大きなカエルの顔だけを照らしだし、大きな大きなカエルが自分たちを見下げているのが見えた。

壁と思っていたのが、大きなカエルの腹だったことにその時気づいた。

それを見て、３人が目を丸くして、心の中で叫んだ。
カッチョイーーーーーーーー！！

妄想アマガエル日記（４７）－１月１８日（木）雨

カッチョイイーーーー！！！
八助と七助と六助が大きなカエルを下から見上げて心の中で思った。

オイオイ！！なんなんだこのカッコよさは、、、この大きさ！！顎のライン！！黒と赤のまだらな模様！！無駄のないイボの配置！！
どれをとってもカッコよすぎだろ！！！
八助が見上げながら感嘆していた。

そして、七助もまた、
オイオイ！！なんなんだよ！このライティングは～～。わざとか！！かっこよく見えるように日の光までも加勢するのか！！？
と思っていた。

さらに、六助もまた唾を飲み込んで、
オイオイ！！こんなカッコイイ蛙見たことないぞ！！水路から出て来てよかった～！！！
と思っていた。

３人が惚れ惚れしながら、見上げたカエルがこちらに視線を落とした。

「お！こっち見たぞ！！」
八助が小さな声で言った。

「うわ～、、すげ～なぁ～。。。」
六助もその声を聞いてつい声に出た。

「本当だな～。。。なんか言ってくれるのかね。。？たぶん、カッコイイ声して、カッコイイこというんだろうな～！！」
七助が２人に耳打ちして、２人もまたそれに頷いた。

「ゴクっ」
３人同時に唾を飲みこんだ。

「あっら～～～♡♡　カワイイ！！トノサマガエルね～～♡♡」
日出夫が嬉しそうに甲高い声を出した。

「えっ！！！」
３人が目を大きく見開いて口をあんぐりと開けて立ち尽くした。

それを見て、与助が声をかけた
「まぁまぁ、、、こちらがね、、、ヒキガエルの日出夫で、こちらがね、、一緒にここで暮らすことになったトノサマガエルの八助と六助と七助なんだ！！」

すると日出夫が、
「そうなの～～♡　こんなカワイイ蛙が３人も増えるなんてね～♡」
「私はね。日出夫。みんなひでおちゃん→って呼ぶから、そう呼んでね♡」
自己紹介をした。

「ひでおちゃん」
3人が唾を飲みながら言った。

「いやいや、違うわよ。。最後は上げるのよ！ひでおちゃん→って」
日出夫が上から見下げて説明した。

「ひでおちゃん→」
3人が立ちすくみながら、言われる通りに言った。

「そうそう。それでいいのよ！！」
日出夫が嬉しそうに3人を見下げた。

「とりあえず、自己紹介は済んだことだし、八助たちの部屋を作ろうか！」
与助が提案した。

「あっ、、、そうだね。。。。なんか悪いね。。。」
立ちすくんでいた八助がはっと我に返って与助の方を振り返って言った。

八助と与助がしゃべる様子をニコニコしながら日出夫が見ていた。

「じゃ、とりあえず部屋を決めようか。ちょうど窪みが3個余っているから好きなところを選んでいいよ！」
与助が3人に窪みを指差しながら言った。

「じゃ、俺はここの角がいいな！」
七助が一番に選んで決めた。

「なら、俺はここがいいな！ちなみにこの隣は誰の部屋なんだい？」
八助が隣の部屋を指差しながら言った。

「あっ、そこは俺の部屋なんだ。」
与助が答えた。

「そっかぁ。よろしくね。」
八助が嬉しそうに言った。

「じゃ、余ったところはここしかないから俺はここにするよ。」
六助が窪みの中に入って言った。

「隣は僕の部屋だからよろしくね。」
銀次郎が嬉しそうに近づいてきた。

「君の部屋だったんだ。よろしくね。」
六助が嬉しそうに言った。

そして、皆で3人の部屋を作ることにした。

一時間後----------

「ようやく3人の部屋が出来たな～。。これまで4部屋も作ったから3部屋作るのは案外簡単に早くできたね。」
与助が皆に言った。

「ほんと、これで安心して冬を越せるよ！！」
八助が嬉しそうに部屋を見ながら言った。

「ところでさ～。。さっきからずっと気になっていたんだけど、、、ヌマガエルの、、小太郎君だっけ？」
「君、どっかで会ったことないかい？」
七助が小太郎を指差して言った。

「えっっ、、会ったことなんてないけど。。。」
小太郎が目を泳がせて答えた。

小太郎のその様子を見て、「名探偵 与助」が何かを察した。
ん？？

そして、その助手の銀次郎もまた何を察した。
ん？？

妄想アマガエル日記（４８）ヌマガエル小太郎編 ― 1月２７日（土）晴れ

遡ること1時間と少し前・・・

「いったい、どうしたんだよ。。。わかった、わかったよ。。」
小太郎がもう少し寝たいのに、、と思いながら部屋から出た。

部屋から出ると、少し先に与助と3人のトノサマガエルがなんかしゃべっているのが見えた。
ん？なんなんだ？あのトノサマガエルは。。。
そう思いながら銀次郎に言われるまま与助の方に近づいていった。

すると、そこにはどっかで見たことがあるような3人のトノサマガエルがいた。

与助が自分のことを紹介してくれたが、そのカエルたちは特に俺のことに気づいていないようだから、たぶん俺の勘違いだな。
と思った。

この3人のトノサマガエルも一緒にここに住むことになって、部屋を作ることになった。その時、この3人の声や動きを見ながら気づいてしまっていた。

こいつらは、、、あのトノサマガエルたちだ！！

そう、あれは夏頃の話しだ。。。
冒険の一環で水路に行った時のことだった。水路に行く手前に大きな石が落ちて来そうな崖があった。ただ、冒険家の俺からしたら、そんなもの何も怖くないと思って登っていたが、足を滑らせてしまって、その振動で大きな石が落ちてきた。転がる石から一生懸命逃げてヘロヘロになった時に、あのトノサマガエルたちがその石を抑えてくれて、無事に逃げることができた。
あの時は口からよだれを流しまくって、ひどいあり様だったと思う。。。

また、それから少し後に、暗い洞窟を進んでいた。冒険家の俺からしたら洞窟なんて、何も怖くないと思っていたが、何も見えない暗黒で途中で怖くなってしまった。天井から小さな光が漏れているところがあったので、どうにかそこに口を差し入れ

て助けを呼んだ。その時に助けてくれたのもあのトノサマガエルたちだった。あの時は怖くて泣いていたので、無様な姿であったと思う。。。

そして、その少し後に、水路の近くで大きな岩を登っていた。冒険家の俺からしたら高いところなんて、何も怖くないと思っていた。実際、登っている時は何も怖くなかったのであった。しかし、いざ頂上まで登ってその高さを見ると降りれなくなってしまった。大きな岩の頂上からひたすら助けを呼んだ。でも、周囲には誰もいなかった。日も照り付け、2日目の夕方、もう干からびて死んでしまいそうだと思った時、ちょうど岩の下を3人のカエルが歩くのが見えた。そこで最後の力を振り絞って、助けを呼んだ。その時に助けてくれたのもあのトノサマガエルたちだった。あの時は体の水が抜けて干からびて死にそうだったので、見るも無残な姿であったと思う。

アイツらだ！！！何度も助けてくれたトノサマガエルたちだっ！！！
そして、俺のもっとも情けない姿を何度も見ているあのカエルたちだ！！！

小太郎は悩んでいた。
あの時の御礼は言いたい。。。でも、あのことを言うと与助や銀次郎にあの時の情けないことを知られてしまう。。。どうしたらいいものか～。。

そんなことを色々と考えている時に、トノサマガエルの1人が気づいてしまった。

どうしたらいいんだろうか～～？？？
ん～～？？？

「えっっ、、会ったことなんてないけど。。。」
と、つい言ってしまった。

ヤバっ、、、

〝見た目は蛙、頭脳も蛙〟で有名な「名探偵 与助」と「助手の銀次郎」がなんか察しやがったな。さて、どう切り抜けるか。。

妄想アマガエル日記（４９）名探偵　与助編－１月２８日（日）曇り

俺の名は与助。全身青色をしたアマガエルだ。

これまで、多くの難事件を解決に導いてきた。あの有名な「スダジイの洞（うろ）密室事件」とか、「枝に串刺しアマガエル事件」などの私の推理によって解決された事件だ。詳しく話すには時間が足りないから、割愛させて頂く。

そのため、周りからは「名探偵」などと呼ばれることがあるような、ないようなである。

そして、俺には助手がいる。

まぁ、助手といっても特に何もしないけど、ただいつも一緒にいるというだけだが、名を銀次郎と言う。

そして、また俺の前で難事件が発生した。

それは、あるトノサマガエルが言った一言から始まった。その一言で、とあるヌマガエルが目を泳がせて、「知らない」と言ったのだ。

その瞬間、俺の青色の脳細胞が一気に動きだし、ある一つの答えを導き出した。

これは、何かある！

そして、その俺の直観を見ていた助手の銀次郎もまた異変に気付いたようだった。

さて、まずはこの容疑者をどうやってその犯行を実証するべきか、、、

まずは、質問をしてみることにした。

「おい、小太郎、どうしたんだい？なんでそんな目が泳いでいるんだい？」

すると、その容疑者はこう言った。

「ん？目なんて泳いでないけど。。。。？」

ふん、想定内だ！

そういう回答が来ることなんて、簡単にわかっていたさ。なんといっても俺は名探偵なのだからな。。。

「そうかい？なんか、さっきからトノサマガエルたちのことをチラチラ見ているし、なんか考えているように見えたから、本当は彼らのことを知っているんじゃないかと思ったんだけど、違うのかい？」

「え？　そう？知らないよ。知らないから、これから一緒に住む人たちがどんな人か気になるから見ていただけさ。」

ふん、そう来たか！

まぁ、それも想定内の回答だ。じゃ、次は助手に少し調べさせておこう。

小声で銀次郎にいくつかのお願いをした。

すると、銀次郎が八助と七助と六助に近づいてそれぞれに耳元でいろいろと説明して話しを聞いた。

それを横目で見ながら、与助が小太郎に聞いた。

「いいのかい？」

「俺の洞察力と推理力、そして銀次郎の調査力（ただの話し好き）を侮っていませんか？」

「下手人さんよ。。。」

それを聞いた小太郎が少しうろたえ始めてきた。
そして、助手の銀次郎が仕入れて来た情報を与助の耳元で説明して、それをうんうん頷きながら聞いた。
すべての情報を総合して「名探偵 与助」は一つの答えを導きだした。
「なるほどな。」
「お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。この難事件、この名探偵がすべて解決しました。」
「そう、小太郎はウソをついている！！！！！」
ピシっ～と小太郎に指差して言った。
「えっ！！」
「えっ！！」
「えっ！！」
「えっ！！」
「えっ！！」
一同が驚愕した。
「なんだってそんなことを言うんだい？」
「証拠も何もないだろ？」
小太郎が必死になって言った。
「いや、君はウソをついている。君は彼らのことを知っている。」
遠くを見ながら与助が言った。その脇には銀次郎が頷きながら聞いている。

「そんなことないさ。今日はじめて会ったんだ。」
小太郎が答えた。

「いや、銀次郎が彼らに聞いたところ、君は水路の崖で岩が落ちて来た時に助けられたり、洞窟から助けられたりしたはずだ！！！」
「それを俺たちに気づかれたくないから、ウソをついたんだ！！！」

「証拠がないじゃないか！！」
小太郎も食い下がらない。

「そうか。まだ白を切るんだな？」
「じゃ、これを聞いてもウソだというんだな。」
与助が銀次郎に日記を出させた。

「銀次郎、言ってやりな。」

「うん、わかったよ。」
「以前、君から聞いた話しの中で、水路で石が落ちて来そうな崖を登った話しも、真っ暗な洞窟を冒険した話しも聞いているんだよ！！！この日記にちゃんとそれが記されている！！（２６話でも触れている）」

「そっ、それは。。。」
小太郎が答えに詰まってしまった。

それを見て、与助が小太郎の肩を叩きながら言った。
「もう、楽になりなよ～。小太郎さんよ。。。。」

「ん～～、、、」
「はい、、、、ウソをついていました。彼らのことを知っています。」
小太郎ががくっと膝をついて言った。

「よし、それでいいんだ！」
与助がニコッと微笑んで言った。
・
・
・
「って、君たちはいったい何してんだい？その茶番はなんなんだい？」
七助が少し呆れて言った。

「まぁ、ただの遊びさ！」
与助が少し恥ずかしそうに言った。

「ありがとな与助。。。これですっきりしたよ。。。」
小太郎も嬉しそうに言った。

「まったく、世話がやけるよ。。。」
与助が小太郎の肩を叩いて言った。

「これで、一緒に住みやすくなったよ。」
小太郎が言った。

そして、小太郎が七助と八助と六助に知らないフリをしたことを謝って、以前助けて貰った御礼を言った。そして、皆でその

時の話しで盛り上がった。

話しが一段落した頃に、小太郎がポツリポツリと話し始めた。

妄想アマガエル日記（５０）－１月２９日（月）晴れ

小太郎がポツリ、ポツリと話し始めた。

「大きな岩の上に登った時は雨が降っていたんだ。だから、調子よく濡れた岩の窪みを利用して登っていたんだ。頂上に登って周りを見渡してみたらすごく高くて、足がすくんでしまった。頂上は自分一人が座れるくらいしかなくて、そこでしばらく悩んでいた。まぁ、誰か通って、助けてくれるかもしれないとその時は待っていたんだ。でも、誰も通らなくて、しばらくしたら日が暮れて夜になってしまった。その日はそこで夜を明かした。次の日は、昨日の雨が嘘のように朝からカンカン照りでね。。。日が皮膚を焼くように照り付けるんだ。影になるところなんてないし、下には降りれないし、誰も通らないし。。。」

「大変だったんだな～」

与助が相槌をした。

「そして、日が照り付けて来て、水分がどんどん抜けてしまってな。。。もう座ることもできなくて、腹を上にして仰向けで空を見ていたんだ。。。もうダメだと思ってな。。。」

「そしたら、次第に意識がなくなってきて、走馬灯のようにこれまでのことを思い出したんだ。銀次郎に頭を踏まれたこととかな。。。」

銀次郎が頭をボリボリかいて申し訳なさそうにしている。

「よくそれで生きていたね。。」
八助が思わず声に出した。

「ほんとだよ。。。もうダメだ、、、と思った瞬間。あの大きな建物が日を遮ってくれたんだよ。。。たぶんあと数分でも日を浴びていたら間違いなく死んでいたと思うんだ。そして、そのまま仰向けで日陰の中、空を見上げながら、決めたんだ。」

「もし、ここから生きて帰れたら、あの建物に御礼も兼ねて登ろう。」と

「そう考えていた時にちょうど、君たちが下を通りかかってくれて、精一杯声を出して助けてもらったんだ。」

「へぇ〜〜、そんなことがあったのか〜。」
七助が声をかけた。

「ほんと、あの時に君たちがあそこを通らなかったら間違いなく死んでいた。あの時は本当にありがとうな。」
小太郎が深々と感謝した。

「そして、君たちのお陰で生きて帰れたから、あの時の約束を果たすためにあの建物を登ろうと何度もチャレンジしたんだが、、まったく登れなくてな。。。」
「でも、アマガエルがあの建物の壁の高いとこに張り付いているのが下から何度か見えて、、アマガエルに登り方を習おうと思ったんだが、、アマガエルの知り合いなんていないから困っていたんだ。」
「そしたら、お前のことを思い出してな。」
そういって、銀次郎のことを指差した。

「えっ、僕？」
銀次郎が戸惑った。

「そうさ。お前は知らないだろうけど、あの朽ち木にいたのを何度か通った時に見ていて、住んでいるところを知っていたんだ。だから、あの日、お願いしに行ったらちょうど留守にしていたら、外で待っていたんだ。」

「あっ、あの時はそういうことだったんだ！」
銀次郎が納得して答えた。

「確かに、待っていたな。。。」
与助も思い出しながら答えた。

「そして、お願いしてみたら、二人ともいい奴で協力してくれるって言うからとても嬉しくてね。。。あと、日出夫も手伝ってくれるって言ってくれたしな。。」
小太郎が恥ずかしそうに言った。

「そうか、、、あの建物に登りたい理由にそんな想いがあったなんて、知らなかったよ。。」
銀次郎が驚いて言った。

「まぁ、岩の上で干からびて死にそうになって、建物に登ることを決めたなんて情けない話しをお前らに知られたくはないからな。。。」
小太郎が恥ずかしそうに言った。

「小太郎も色々なことがあったんだな。。春になったらまた練習してさ～今度こそあの建物に登ろうよ。」
銀次郎が小太郎の肩を叩いた。

「そうだな。とりあえず、塀は登れたから、暖かくなったらもう少し練習したら、あの建物も登れるさ。」
与助も小太郎の肩を叩いた。

「そうだな。まぁ、いろいろ迷惑をかけるけど、よろしく頼むよ。。。」
それから、話しがとまらなくなった小太郎が、練習の時の話しをポツリポツリとして、これまでの他の危険な目にあった時の話しもポツリポツリと続けた。

「そしてな～。。あの時も本当に危なくて、、与助も行ったみたらいいよ。」
小太郎がそう言って、与助を見ると与助は地面に這いつくばって寝ていた。
その横で銀次郎が口を開けて寝ていて、その横で日出夫が丸まって寝て、その奥に七助と八助と六助が重なるように寝ていた。

・
・
・

「せっかく人がいい話しをしているのに、、、この蛙どもは～～」
小太郎が小さな声でそう言って、皆を見てほほ笑んだ。

妄想アマガエル日記（５１）　－２月２日（金）晴れ

「まったく、、、、こいつらは、、、気持ちよさそうに寝やがって。。」
「いい話しを子守歌とでも思っているんだろうか。。。」
小太郎がブツブツいいながら、見まわしていた。

ただ、このままここで寝ると夜になると急激に寒くなるから風邪引いてしまうな、、、どうしようかな。。。と考えていた。
すると、日出夫がもぞもぞ動きだして、むくっと起き上がった。

「おっ、日出夫起きたのかい！」
小太郎が少し嬉しそうに言った。

「あら、小太郎ちゃん、、、」
「私、、どうしたのかしら、、、何か催眠術のようなのかかけられて眠らせたのよね。。。」
日出夫が思い出そうと右上を見上げながらボソボソと言った。

「あっ、、、そうそう、小太郎ちゃんのオチがないダラダラとした話しを聞いていたら、まず与助ちゃんが気を失って倒れてね。
次に、銀次郎ちゃんが倒れて、、、トノサマガエルちゃんたちが次々に倒れてね。。」
「私は必死で頑張って聞いていたんだけど、いつのまにか気を失ったんだったわ♡」
思い出して嬉しそうに日出夫が言った。

「あ〜〜、、、そうかい。。。悪かったな。。。」
小太郎が口をとがらせて言うと、日出夫がはっと気づいて申し訳なさそうに頭をかいた。

「ところで、こいつらをこのままここに置いておくわけにはいかないからさ。。。部屋に運ぶの手伝ってくれないかい？」

「そうね♡」
「じゃ、どんどん運んでいきましょ♡」

まずは与助を部屋の入口まで日出夫が運び、そこから小太郎が部屋の中の寝床に運んだ。日出夫は体が大きすぎて他の蛙の部屋の中には入れない。

次に、トノサマガエルたちを同じように日出夫が入り口まで運んで、各部屋の中に小太郎が運んだ。

最後に、銀次郎を同じように部屋の前まで日出夫が運んで、小太郎が寝床に置いた。

「はぁ～～、、疲れた。。。 銀次郎の奴め～寝言言いながら顎を蹴りやがって。。。」
顎を抑えながら銀次郎の部屋から出て、広い空間の中心に戻ってきた。

「まぁ、とりあえず、これで、みんな冬を越す準備もできたし、みんな寝たし、冬を越せそうね♡」
日出夫が手をパンパン叩いて言った。

「あ、、、あのさ～。。。」
小太郎がもぞもぞしながら、言いかけた。

「どうしたの？小太郎ちゃん♡」

「あの、、いろいろとよくして貰って、、ウソをついたまま冬を越すのはなんんだかモヤモヤするんで言っておきたいことがあるんだ。。。」

「あっ、腹から毒が出るって話しでしょ♡」

「えっ、知っていたの？」

「そりゃ、知っているわよ～♡　あなたたちより何年長く生きているというのよ～（笑）」

「そうだったんだ。。。。最初っから？」

「いや、、与助ちゃんに聞いた時は信じていたのよ！！」
「でもね、寝る前に少し考えていたら、確かに私たち蛙は皮膚にどの蛙も毒を持つんだけど、この辺りにいる蛙で一番強い毒を持つのは私たちヒキガエルなのよね。そして、毒が多く出るのがここの耳の後ろにある耳腺っていう膨らみなのよ。」

そう言いながら耳の後ろの膨らみ部分を指差した。

「確かに、皮膚から強い毒が出る蛙は海外にはいるのは聞いたことがあるのだけど、この辺りにはいないと聞いていたし、耳腺のような毒が出る部分が小太郎ちゃんの腹にはないでしょ。だから、あれはウソだって気づいたのよ。」

日出夫が申し訳なさそうに言った。

「そうだったんだ。。。気づいていたんだね。。」

「ウソついて、なんか申し訳なかったね。」

小太郎も申し訳なさそうに呟いた。

「全然いいわよ♡」

「気にしていないから♡」

「腹を触ろうとした私が悪いのだからね」

「じゃ、ウソついたのを許してもらう代わりもあるからさ〜。寝る前に少しだけ腹を触ってもいいよ。」

小太郎が腹を見せながら言った。

「えっ♡ほんと♡」

そう言って嬉しそうに小太郎を持ちあげて腹をほっぺにスリスリした。

「ほんと、、、気持ちのいい美肌だわね〜♡」

「あ〜そうかい。。」

なされるがまま、遠い目をして小太郎が言った。

「は〜、、気持ちよかった。これでゆっくり寝れそうよ♡」

小太郎を地面に降ろして日出夫が言った。

「そりゃ、、よかったよ。。。」
「じゃ、俺たちも寝ようか。。。」
「おやすみな、、ひでおちゃん→」

「あらっ、はじめてちゃんと呼んでくれたわね♡」
「おやすみなさい。また、暖かくなったら腹触らせてね。」

「それは、、、どうかな。。」

2人も部屋に入って寝床に着いた。
ちょうど日が暮れ、穴の中も暗くなった。
地面の上から次第に冷たくなり、穴の中もじわじわと寒くなり、土の中の水がパキパキと凍りはじめ、地面の上には霜が出始めた。

妄想アマガエル日記（52）－3月27日（水）晴れ

3カ月後

ここ数日は冷たい雨が降っていた。しかし、今日はここ数日がウソのように雲一つない晴天だ。
地面を春の日が照らし、サクラが蕾を膨らまし、せっかちな蕾がポツポツと花を開いている。モンシロチョウがどこからともなく舞飛び、セイヨウタンポポも黄色い花を目いっぱい広げている。

春の風景が顔を出し始めた。

そして、そんな春の匂いを嗅ぎつけて、地面の下では小さな虫たちがゴソゴソと動き始め、まさに、蠢き始めた。

カエル達が寝ている穴の中にも、小さな虫たちの忙しない足跡や春の匂いが漂い始めた。

「いや〜〜！！！よく寝たーーーーーーーー！！」

与助が体を伸ばしながら大声で叫んだ。

「おっ！なんだ？？」

与助の声にびっくりして、隣の部屋の八助が起きた。

そして、何の音だったのかわからない八助が確認するために部屋の外に出てみると、ちょうど隣の部屋から与助が出て来た。

「おっ！！八助！！」

「よく寝れたかい？」

与助が嬉しそうに聞いてきた。

「あぁ、、今まで寝ていたからね。」

「でも、なんか声？みたいなので起きてしまってね。。なんだったんだろう？」

八助が訝しそうに与助を見つめた。

「あっ、、、たぶん、それは、、俺がさっき、〝よく寝たーーー〟って叫んだ声じゃないかな？」

与助が申し訳なさそうに頭をかきながら言った。

「あっ、あれは君の声だったのか、、」

「起きた瞬間だったしさ、、、別の部屋から聞こえて来た声だったからさ、、ちゃんと聞き取れなくて、、〝よく寝たーー〟が、、〝ヘビ来たーーー〟みたいに聞こえて、びっくりしたんだよね。。」
八助がほっとした。

そんな二人の会話が聞こえたのか、向いの部屋から六助と小太郎も出て来た。

「おっ！みんなもよく寝たみたいだな？」
与助が2人に嬉しそうに声をかけた。

「ほんとによく寝たよ～。初めての冬眠だったけど、あっという間だったね。ただ寝ていただけだったし。。。」
小太郎が自信たっぷりに答えた。

「ほんとだね、、よく寝た。寝違えたのか、少し肩が痛いけどね。」
六助が少し肩を回しながら答えた。

「じゃ、あとは七助と銀次郎と日出夫だけか！！」
与助が周囲を見渡しながら言うと、ちょうど七助が部屋から出て来た。

「おっ！！そろそろ暖かくなってきたし、少し腹も減ってきたから起きようと思っていたら君たちの声が聞こえてきたから出てみたら、みんなもう起きていたんだね！！」
「いつから起きていたんだい？」
七助がみんなに聞いた。

「いや、僕たちもちょうど今、起きて部屋から出てきたばっかりなんだよ。」
六助が久しぶりに会えて嬉しそう答えた。

「あっ、そうなんだ！やっぱりみんな暖かくなってきたから起きるタイミングは同じなんだな！！」
七助も嬉しそうに答えた。

「じゃ、、、あとは日出夫と銀次郎だね。」
与助がもう一度確認するように言うと、ちょうど日出夫の部屋の扉が少し動いた。

「ん？？日出夫も起きたのかな？」
与助が日出夫の部屋に近づいて行った。

「お～い、日出夫～。起きているか～い？」

すると、
「あっ、、、起きているわよ♡」
「でも、今は肌のお手入れ中だから、部屋にはいっちゃダメよ～～♡」
「越冬直後の肌の手入れは、ほんと大事だから～♡」
日出夫が部屋の奥から叫んできた。

「あっ、そうなんだね～」
与助が答えた。

そして、その場にいたカエルたちは想像した。
日出夫の肌の手入れって、、いったい何をしているのだろう～？？
そもそも、なんでそんなに肌の手入れをする必要があるのだろう～？？
ダメと言われると、、、、見てみたい。

「ゴクッ」

その場にいたカエル達が見てみたい好奇心と葛藤していた。
それに気づいた与助が声をかけた。
「あっ、あっ、そうだ。」
「銀次郎も起こさないといけないね！！そうだ、そうだ。」
そして、与助が皆の背中を押して、銀次郎の部屋に押していった。
「お～い！！銀次郎～～。春が来たぞ～～」
「まだ寝ているのか～？？」
与助が銀次郎の部屋の入口から中に声をかけた。
しーーーん
「ん？返事がないな？？まだ寝ているのかね？」
小太郎が不思議そうにつぶやいた。
「ほんとだよな～。アイツのことだから、一番に起きていると思ったんだけど。」
与助が不思議そうに小太郎に相槌した。
「ん？？その扉、おかしくないかい？」
七助が扉を指差して言った。
「確かに、、、扉がボロボロになっている。」
六助が扉を確認しながら言った。

「ほんとだな～。。まぁ、アイツは寝相が悪いから、扉くらいこんな感じになっても不思議じゃないんだ。」
与助が七助と六助を安心させるように説明した。

「にしても、何の音もしないのは、おかしいな？」
小太郎が与助に言った。

「たしかにな、、、ちょっと失礼して中に入って様子を見て来よう。」
与助がそう言って部屋の中に入った。

「なんじゃこりゃ～！！！」
部屋の中から、与助の叫び声が聞こえてきた。

「ん？？どうしたんだい？」
小太郎がそう言って、皆が同時に部屋にはいった。

すると、そこには、銀次郎の姿はなく、壁がボコボコに凹みだらけになり、寝床はボロボロになっていた。

「オイオイ！！これは、ヘビか何かに襲われたんじゃないのか？？？」
八助が怯えながら叫んだ。

「ほんとだ、、これは、カエルの仕業ではないぞ！！」
七助も怯えながら叫んだ。

「銀次郎は跡形もなく食べられてしまったんじゃないか！！」
六助も怯えながら叫んだ。

「どうかな～？？？君たちは銀次郎の寝相の悪さを知らないから、これを見たらそう思うかもしれないけどね。。。」
「アイツならやりかねないのだよ。。。」
与助が腕を組みながら冷静にそう言った。

「ほんと、与助ちゃんの言う通りよ♡」
「銀次郎ちゃんだったらこんなの不思議じゃないのよ♡」
日出夫が顔だけ部屋の中にぬっと入ってきて、ツルツルの肌を揺らしながらそう言った。

「あっ、日出夫も出てきたんだね。肌ツヤツヤだね！」
与助が少し驚いて、明るく声をかけた。

肌のことを褒められて、嬉しそうに日出夫が顔をひっこめた。

「でもね、、、じゃ、銀次郎はいったいどこに行ったというんだい？」
六助が不思議そうにつぶやいた。

「そうだな～。。」
腕を組みながら部屋を出て周囲を見渡しながら与助が指差した。
「あっ、ほら、あそこの壁が凹んでいる！！」

「ほんとだ！！寝る前にはあんな凹みはなかったね。」
小太郎が自信たっぷりに言った。

みんなでその壁の凹みまで行ってみた。

「確かに、こんな凹みはなかったな。」

七助が凹みを触りながら言った。

その凹みのところで周囲を見渡すと、
「あっ、あそこにも同じような凹みがあるっ！」
六助が見つけて、指差した。

そして、その凹みに皆で近づいて行くと、八助が、
「あっ、あの穴の奥にも凹みがある！！」
そう言って、指差した。

「オイオイ！！もしかしたら、銀次郎の奴、、、寝ている間にあの穴の奥に転がっていったんじゃないか？」
与助が腕を組みながら言った。

それを聞いた日出夫と小太郎は、与助と同じように腕を組みながら与助の後ろから穴の奥を見つめて同時に呟いた。
「あり得る！！！」

妄想アマガエル日記（５３）　－４月１日（月）晴れ

「あり得る！！」
日出夫と小太郎がつぶやいた。

「じゃ、アイツの跡を辿って、探しに行くか！」
与助が後ろを振り返りもせず、穴の方に進んだ。

八助、七助、六助、日出夫、小太郎の順番で、与助のあとをついていった。

「あっ、あの壁のところが凹んでる！！」

先頭を歩いていた与助が指差して近づいた。

皆でその凹みを見ながら、その周囲をぐる～と見渡した。

その場所は部屋を作るための朽ち木の樹皮や落ち葉、石が置いてあった場所の近くであった。

「なんか、ここの倉庫さ～。。最後に来た時によりも物が少なくなっていないかい？」

八助が首をかしげて言った。

「確かにね、、君たちの部屋を作った時に最後に少しここを整理したけど、もう少し落ち葉とか朽ち木とかあったような気がするな。」

与助が近づいて行って、八助の言うことに頷きながら答えた。

「もしかしたら、銀次郎は寝相が悪くて転がって行ったんじゃなくて、何か考えがあって、樹皮とか落ち葉を何かに使って、何かしているんじゃないかい？」

「だから、この壁の凹みも何か意味があるんじゃないかい？」

六助がひょいと七助の後ろから首を出して与助に言った。

「まぁ、、、そんなこともあるかもしれないけどね。。」

「銀次郎って奴はね、、、君たちが想像する以上の寝相の悪さだし、なにより寂しがり屋なんだ。。」

「だから、一人で早く起きて、何かをするなんて、ちょっと考えられないんだよね。。」

与助が腕を組みながら、トノサマガエルたちに言った。

「でもな～。。ほらっ、この前なんて、アイツは、一人でナメクジとか石とか隠してさ、俺たちには内緒の秘密の部屋にいたこ

とがあったろ？」
「また、何か変なことしてんじゃないか？」
小太郎が与助に近づきながら言った。

「そういえば、、、そんなこともあったか。。。」
「じゃ、この壁の凹みも、落ち葉とかがないのも、アイツがまたなんか俺たちに内緒でなんかしてるんかね？」
与助が、小太郎に言われて、納得して、小太郎に聞いた。

「どうだろうな、、、？」
「アイツのことは未だによくわからないからな～」
小太郎が腕を組みながら答えた。

「あっ、でもあそこにまた壁が凹んでるところがある！！」
六助が指差した。

皆でぞろぞろと歩きながら近づいた。そこは、穴の上に上がれる隙間の入り口だった。

「もしかして、この穴から外に出たんじゃないかい？」
七助が穴の上の先を指差して言った。

「まぁ、確かにな、、皆の部屋がある穴の入り口は塞いだままだから、あそこからは外に出ていないと思うけど、ここは塞いでいないから出たかどうか、わからないな。。」
与助が腕を組んで考えながら言った。

「でも、ほらっ、トンネルのあの先に落ち葉と朽ち木が落ちてるし、壁に凹みがあるよ！！外に出たんじゃなくて、あのトンネルの先に行ったんじゃないかい？」

六助が指差して言った。

また、皆でぞろぞろとその凹みと落ちていた落ち葉や朽ち木のところに行った。

「あっ、トンネルの奥のあの壁にもまた凹みがあるぞ！！」

「いったい、どういうことなんだ？この凹みは何なんだ？」

小太郎が少し困った感じでつぶやいた。

トンネルの奥の凹みまで進むと、そこはＹ字に分かれていた。

「あっ、俺たちはあっちから来たんだよ！！」

六助が右側のトンネルを指差して言った。

そして、左側のトンネルは地面が少し湿っていた。

「どっちに行ったんだろうな～？？」

与助が困ってどちらも少し進んで凹みを探した。

「あっ、凹みはないけど、こっちのトンネルの地面はね、なんか最近通ったような跡があるわよ♡」

日出夫が言った。

「さすが日出夫だな～。俺たちの視点の高さじゃ、それはわからないよ。。。」

与助が感心して言った。

「ちょっと、失礼するよ。」

そう言って、小太郎が日出夫の頭の上に背中から登った。

「ほんとだ！！何かが通ったような跡が結構遠くまでついているよ！！！」
小太郎が少し興奮して言った。

そして、
「久しぶりに、このまま頭に乗らせてもらっててていいかい？」
小太郎が日出夫に聞いた。

「もちろんよ♡」
日出夫も嬉しそうに答えた。

「じゃ、こっちの湿った地面の方に行ってみよう！！」
与助が皆に提案して、先頭を進んだ。

湿っていた地面のトンネルは真っすぐで、時折、天井から光が漏れて完全には暗くならず、少し登り坂になっていた。

「さすがに、いくら寝相が悪いって言ってもこんなジメジメした地面の、しかも登り坂を登れるわけないか。。。」
与助が少し恥ずかしそうに独り言を言った。

「あっ、あの坂の上の壁に凹みがあるぞ！！」
小太郎が日出夫の頭の上から見て、指差した。

皆でその凹みに近づくと、その先にトンネルの出口があるようで、強い日差しが差し込んでいた。

「いったい、、、ここはどこに出るんだ？？」
与助がそう言って、その光の先に進んだ。

それに続いて皆も、逆光で黒い影しか見えない与助の後に続いて、真っ暗な穴の中から、明るい光に包まれた外に出た。

そして、皆が口を揃えて驚いた。

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」「えっ！！！！！」

妄想アマガエル日記（５４）－４月２０日（土）雨～ツチガエル花子編～

遡ること、数日前　@水路近くの花壇ーーーーー

「いやーーーー、今年も寒かったぁ～～」

「でも、まぁ、他のカエルほどは寝ずに、水の中で過ごしたり、落ち葉の下で過ごしたりと、今年も寒い冬をそれなりにエンジョイできたわ→♡　今年で冬は２回目だけど、去年はまだオタマジャクシだったからね！！」

いつもの水路近くの花壇から外を見ながら独り言を言った。

花壇の上から水路の方を見下ろしながら。

ようやく暖かくなってきてから、アマガエルやヌマガエルなんかが出て来たわね～。

あっ、あそこにいるアマガエルは腹が大きいから、もう少しして田に水が入ったらすぐに産卵するのかしらね。。？

あっ、あのヌマガエルは体にまだ土が付いているから、穴から出てきたばっかりかしらね、、、？

あっ、あのトノサマガエルは体が大きいから、３年目くらいかしらね。。？

行き交うカエルたちを見ながら、いろいろと想像していた。
そういえば、あのお方は、今はどこにいるのかしら？？？
以前見た、まだ熱いレンガの大地を堂々と、力強く進んでいた1匹のアマガエルのことを考えていた。
あのお方も、そろそろ出て来ているのかしら、、？？
そう思うと、じっとしていられなくなってしまった。

「なまった体をほぐすために、少し散歩でもしようかしらね→♡」
花壇から降りて、水路の方に行こうとした。
すると、目の前に大きな石があって、それと地面との隙間の窪みに何やら〝きな粉餅〟みたいなのが、挟まっているのが見えた。

「あれ？あんなところに何で〝きな粉餅〟が挟まっているのかしら？？？」
首を傾げながら、少し距離を置いて眺めていた。
ただ、その〝きな粉餅〟を眺めていると、時折ゆっくりと上下に動いているように見えた。

「あれ？？私の目の錯覚かしら、、、なんかあの〝きな粉餅〟みたいのは動いているように見えるわね？？」
少し気になってしまった。
恐る恐る、近づいて行くと、それは長い棒が付いた、〝きな粉餅〟
であった。

「あら～～？やっぱり、〝きな粉餅〟だわね？？？」
そう言って、足でつんつんと餅の部分を触ってみた。

すると、その餅が、
ぶるん、ぶるんと左右に動き始めた。

「え！！！なんなのこれ？？動くの？？？」
今度は触るのは気持ち悪いので、落ちていた棒を拾って、その物体をツンツンしてみた。

すると、その物体が、
ぐるん、ぐるんと転がり始めた。

「え～～！！！なんなの？？」
「でも、そっちは水路よ！！！」
そう言った直後、その物体が、「ボッチャ～～ン」と水路に落ちてしまった。

「大変！！！大丈夫かしら。。。？」
少し心配になって、その物体が落ちたところに近づいていくと、それが水底からゆ～くりと浮いてきた。

「あら？カエルだったのね！」
そこには、緑色をしたアマガエルの姿があった。
泥や砂が付いていて、カエルには見えなかったが、それは紛れもなくアマガエルであったのである。

「あら～？？？このカエル死んだのかしら？？」
手に持っていた棒で岸から浮いているそのカエルの腹をツンツンしてみた。

すると、そのカエルから
すぴー→♡、すぴー→♡と寝息が聞こえてきた。

「え！！！このカエル、、、まだ寝ているの？？」

長い脚を引っ張って、陸に上げた。

「まったく、、、なんなの？？このカエルは！！」

そう言って、ほっぺたをピシ、ピシと叩いて起こすことにした。

「ほぉら～～、、もう春よ～。。。起きなさいよ～～」

ようやく、そのカエルが大きなあくびと共に目を覚ました。

「は～～、よく寝たーーーーーーーーー！！！！！」

「えっ、あなたは！！！」

妄想アマガエル日記（５５）－４月２５日（木）晴れ～アマガエル銀次郎編～

遡ること数週間前　@穴の中から穴の外へ----------

すぴ～→♡　すぴ～→♡　すぴ～→♡

んがっ！！

ドッゴン！！！

すぴ～→♡　すぴ～→♡

ゴロゴローーーードン！

すぴ～→♡　すぴ～→♡

ゴロゴローーーードン！

すぴ～→♡　すぴ～→♡

ゴロゴローーーードン！

すぴ～→♡　すぴ～→♡

んがっ！！

ビチャ、ビチャ！

ゴロゴロ、、、

ビチャ、ビッチャ！！

ゴロゴローーーーゴロゴローーーーゴロゴローーーードン！

ドーーーーーーーン！！！！！

ヒュ～～ン、、、スポっ。

すぴ～→♡　すぴ～→♡　すぴ～→♡

すぴ～→♡　すぴ～→♡　すぴ～→♡

すぴ～→♡　すぴ～→♡　すぴ～→♡

ムニャムニャ♡

妄想アマガエル日記（５６）－５月２日（木）晴れ

そして、皆が口を揃えて驚いた。

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」

「えっ！！！！！」「えっ！！！！！」

「これは、いったいどうなっているんだ？？」

先頭にいた与助が穴の外の光景を見て、ポツリとつぶやいた。

そこには、見える範囲すべてを赤色や白色の大きなツツジの花が咲き乱れ、この世のものとは思えないとても美しい光景が広がっ

ていた。
真っ暗な穴の中から出て来たカエルたちにとって、その赤色と白色の美しく派手な色の大きな花は、とても とても美しく、そして初めて見る光景だった。

特に皆が驚いたのは、その咲き乱れるツツジの下で、銀次郎らしいアマガエルがその赤色の大きなツツジの花を帽子のように頭に被り、白色のツツジの花をスカートのように腰に履いて、楽しそうに踊り、それを1人のツチガエルが腹を抱えて、爆笑しながら見ている光景だった。

穴の中から出たカエルたちが、ゾロゾロとその綺麗なツツジの花を口を大きく開けながら、見渡しながら銀次郎のところに近づいて行った。
そして、どうやらここは水路の近くらしいことがわかってきた。

「しっかし、、、なんて！！綺麗な花なんだ～！！！」
「はじめて見たな～、、こんな綺麗な光景は！！！」
与助が感動しっぱなしで皆に話しかけた。

「確かにな～、、去年のこの時期はまだ生まれていなかったからな～。」
小太郎が相槌をうった。

「ほんっと！！この水路には去年ずっといたけど、その時は花は咲き終わっていたんだな～。」
八助が七助や六助を振り返りながら話しかけた。

「なんて！！綺麗なんだ！！　ここはただの緑色の葉っぱだけの花壇だったからね。」
六助が頷きながら答えた。

「いや～、、スゴイわね♡　綺麗だわね～♡」

「私はずっと雑木林の奥にいたから、この辺り来たことなかったから、初めて見たわ♡」
「こんな美しい光景が見れるだなんてね～♡」
日出夫が目を輝かせて、周りを見渡しながら喜んでいた。

「あっちの奥も地面を芝桜が地面を覆っていて、全体がピンク色や紫色をしているし、、、ほんと、見渡す限りカラフルで、綺麗だな～！！」
与助が手を広げて、久しぶりの外の空気をいっぱい吸い込み、花の匂いを体全体で感じていた。

そうこうしていると、銀次郎のところまで歩きつき、ツツジを被って周りが見えない変な踊りをしている銀次郎の肩を、与助が後ろからツンツンして話しかけた。
「オイオイ！」
「銀次郎、、お前も起きたばっかりだろうに、いったいこんなところで、何してんだ？？」

「・・・・・・」
顔を隠していた赤色のツツジを持ちあげながら振り返り銀次郎が声をだした。
「ん？？」
「あれ？？君たちいったいどうして、こんなところにいるんだい？？」

「いや、それはこっちのセリフだろ？」
与助が頭を掻きながら答えた。

「ん？僕は、ほらっ、花子ちゃんとただ遊んでいただけだけど？」

「花子ちゃん？？？」
与助が訝しそうに聞き返した。



「あっ、私が花子。ツチガエルの花子っていいまーす！」
ツチガエルが銀次郎の近くに来て、２人の話しを聞いて間に割り込んできた。

「あっ、あなたが花子、、さんね。」
与助がちょっと驚いて、聞き返した。

「んで？なんで、お前はこんなところにいて、そんな格好をして、そんな変な踊りをしているんだ？って聞いているんだよ！」
小太郎が与助の後ろから銀次郎に聞いた。

銀次郎が思い出しながら答えた。
「あ～、、まぁ、寝ていたからよく覚えてないんだけどね。。」
「どうやら、寝ている時に寝相が少しだけ悪かったみたいでね。部屋から出たみたいなんだよね。穴の中をコロコロ転がって、目が覚めたらここにいたんだよ。」
「穴の中のどこかが、地面が濡れているところがあったと思うんだけど、そこで濡れたり、転がったりしていたら体中 土だらけになったみたいでね。。花子ちゃんが見つけてくれた時は〝きな粉餅〟と間違えたくらいだからね。」

そう言うと、〝きな粉餅〟だった姿を思い出した花子が
「プっ、、きな粉餅ってwww」と思い出して吹き出して笑い始めて、それを見た銀次郎もまた同じように笑った。

「まぁ、そんなことだろうとは思ってな。お前が蹴って壁に凹みが出来ていたから、それを辿って来たら、ここに着いたってわけさ。」
与助が爆笑している２人を見ながら、少し呆れて言った。

「なるほどね～。しっかし、壁にそんな凹み作った記憶はまったくないけど、、少し踵（かかと）が痛いから、コロコロ回転しながら壁を〝踵落とし〟みたいに蹴っていたのかもしれないね。」
銀次郎が踵を触りながら言った。

それを聞いた花子が
「プっ、、踵落としってwww」とまた吹き出し、笑い始めて、それを見た銀次郎もまた同じように笑った。
「わかった、わかった。」
与助が、くだらないことで笑いあっている2人を見ながら、少し前まで銀次郎のことを心配したことを馬鹿らしく思えてきた。
「まぁ、それはわかったけど、倉庫から落ち葉とか無くなっていたけど、あれもお前の仕業か？」
与助が笑い疲れて静かになった銀次郎に聞いた。
「そうそう！！花子ちゃんに僕らの部屋の話しをしたら、自分も作って欲しいなんていわれちゃてさ～」
銀次郎が照れくさそうに答えた。
「ほんと！！銀ちゃんは、器用で、力持ちで、、カッコよくて♡」
花子が銀次郎を見ながら、嬉しそうに言った。
「そう？？」
銀次郎が照れながら喜んでいた。
「わかった、わかった。」
与助が呆れ始めた。
「まぁ、みんなせっかく来たんだしさ、、、冬を無事に超えることもできたわけだからさ、、、パッと花見でもやろうよ！！」
銀次郎が嬉しそうに皆に提案した。
「まっ、そうだな！！」

与助も嬉しそうに頷いた。

ちょうど、日も暮れはじめ、夕焼けがツツジの花の赤色と白色、そして葉の緑色を際立たせ始めた。

銀次郎が、与助と小太郎に赤いツツジの花を被らせ、白いツツジの花をスカートみたいに履かせて、３人で銀次郎の変な踊りを一緒に踊らされ、最初は嫌がっていた与助も小太郎も次第に楽しくなり、踊りはじめた。

そして、その３人の変な格好の変な踊りを見ながら、他の皆は腹を抱えて笑い、日が暮れるまでカエル達の笑い声がツツジの花とともに、その一帯を覆った。

妄想アマガエル日記（５７）－５月２０日（月）晴れ

「いや～～～楽しかったな～～！！！」

与助はまだ余韻に浸っていた。

「たしかにな～～、、冬を越してすぐにあんな変な踊りをあんなに踊るなんて思ってもいなかったけど、楽しかったな～！！」

小太郎も与助に相槌を打った。

最初、銀次郎と与助と小太郎が踊っている様を日出夫や花子など皆で腹を抱えて笑っていた。すると、次第にその笑い声に引き寄せられて、水路にいたカエルたちが集まって来て、最終的には盆踊りのように、大きな石の上で銀次郎が踊り、その石を取り巻くようにさまざまなカエルたちも石の周りを頭に赤色のツツジの花を被り、スカートのように白いツツジを履いて踊り歩いた。

いつしか、銀次郎がいる大きな石を中心にグルグルと１００匹を超えるカエル達が皆変な格好をして、３日３晩代わる代わる踊り続けたのであった。

「体が全身痛くない？」
「私は越冬直後にあんな運動したことなんて、これまでなかったから、全身筋肉痛よ～！！お肌もガサガサになってしまったわ！！」
日出夫が少し困ったように与助に言った。

「ほんとだよね！！俺も筋肉痛になってしまったよ！！」
「銀次郎、お前が一番長く踊っていたから、筋肉痛がひどいだろ？」
与助が銀次郎に聞いた。

「ん？？筋肉痛？？全然痛くなんて、、、ないけど？？」
「僕は、まだまだ踊れるよ！！」
ケロッとした感じで銀次郎が与助に答えた。

あっ、そうだった、、、コイツの体力は化け物級だったな。
与助と小太郎は細い目をして、同じことを思っていた。

周囲には筋肉痛で動けないカエルたちが多数転がっていた。

「まぁ、そろそろ俺たちも帰らないといけないな！」
与助が振り返り、八助と七助と六助に言った。

「そうだな、、、でも、俺たちはここが居場所だから、、、ここで君たちとはお別れだな！！」
八助が与助に言った。

「え！！そうなの？？」
銀次郎が寂しそうに言った。

「まぁ、また会えるさ！！俺たちはここにいるし、君たちがいるあの雑木林にもたまに遊びにいくよ！」
七助が後ろから銀次郎に声をかけた。

「そうだね！！そんな遠いわけでもないから、ちょっと走ったらすぐに会えるか！！」
銀次郎が嬉しそうに言った。

まぁ、、、確かにコイツの体力だったら、すぐ来れるな。。
八助、七助、六助は3日3晩踊り続けていた銀次郎の凄まじい体力を目の当たりにして、同じことを考えていた。

「じゃ、帰ろうか！」
銀次郎が与助と日出夫、小太郎、花子に言った。

「えっ、私、、どうしようかな～～↗」
「案外ここ気に入っているのよね、、、、」
花子が悩んでいた。

「えっ？花子ちゃん来ないの？」
銀次郎が寂しそうに言った。

「そうね、、、」
「どうしようかしら。。。」

「僕たちのいる雑木林も餌は多いし、静かだし、なかなかいいところだよ！！」
銀次郎が自分たちの居場所の良さを身振り手振りでプレゼンした。

「そうなの？」
花子が悩んでいた。

「おいでよ！！僕たちがいる雑木林はね、、、、、、、、、いいところなんだよ！！」
銀次郎が他の良さをプレゼンしようとしたが、何も思いつかなった。

「まぁ、、、そんなに言うのならね。。あと、銀ちゃんと離れるのは嫌だからね、、、私も一緒に行こうかしらね↗！！」
花子がいろいろと考えて決めた。

それを聞いた銀次郎は
「やったーー！」
飛びあがって、喜んだ。

与助と小太郎は、その２人のやり取りを見ながら同じことを思っていた。
あの２人、、、くだらないことで爆笑するから、それにつられてこっちも爆笑してしまうから、、賑やかになりそうだな。。。。

日出夫もその２人のやり取りを上から見下げながら思っていた。
あの小娘に、小太郎ちゃんの腹の気持ちよさを気づかれないようにしないといけないわね。。。。油断できないわ♡

その様を八助と七助と六助は見ていて思っていた。
やっぱり、面白い奴らだ！！また、会いたいな。

妄想アマガエル日記（５８）　－５月２９日（水）晴れ

「じゃぁ、またな～」
八助と六助と七助が大きく手を振って見送ってくれた。

「また会おうな～」
与助が振り向いて、３人に声をかけて手を振った。
他の皆もそれに合わせて、手を振った。

そのまま、暗い穴の奥に進んでいった。穴は下り坂になっていたので、穴に入って少し進むと穴の外の八助たちの姿は見えなくなってしまった。

「いや～～、別れは寂しいものだな～」
小太郎がしみじみ言った。

「確かにな、、、特に小太郎はあの３人には特別な想いがあるようだしな。。。」
与助が振り返りながら一番後ろを歩く小太郎に声をかけた。
小太郎は一番最後まで手を振っていた。

「まぁ、確かにな、、、彼らがいなかったら、俺はとうの昔に死んでいただろうからな。。。」
小太郎が少し遠くを見るように言った。

「まぁまぁ、、、小太郎ちゃんはそんなに寂しいのなら、、、あまり歩くのも嫌なんじゃないの？私の頭に乗って帰る？♡」

日出夫が寂しそうにトボトボ歩く小太郎に声をかけた。
「そうだな。。いいかい？」
小太郎が申し訳なさそうに、返事をした。
「もちろん♡　いいわよ♡」
日出夫が嬉しそうに返事をして、背中を向けた。
小太郎が慣れたように日出夫の背中のコブを足場にスルスルと登っていき、いつもの頭の上に腹をくっつけて座った。
そのまましばらく穴の奥に進んでいた。
一番先頭の歩く銀次郎に、後ろから花子が小声で声をかけた。
「あのさ～～。なんで小太郎ちゃんはさ～　日出夫ちゃん→の頭の上に乗っているの？？」
「あ～。。それはね、、、あの大きな黒い建物に登る練習をしていた時に小太郎が高い所が怖くなっちゃってね。それで、日出夫の頭の上は高いでしょ。」
「だから、高い所に慣れるために、あそこに乗って、高いところに慣れる練習をしているんだよ！」
銀次郎が嬉しそうに教えてあげた。
「へ～～。。でもさぁ、日出夫ちゃん→はさ～、なんか小太郎ちゃんの腹が頭にくっついていると気持ちよさそうな顔していない？」
「あれはなんでなの？」
花子がチラチラと後ろを振り返りながら小声で銀次郎に聞いた。
「あ～。。あれはね、、、日出夫は小太郎の腹の柔らかさとか美肌な感じがとても好きでね。あ～やって自分の体のどこかに小太

郎の腹が当たると気持ちいいみたいで喜ぶんだよ！」
またまた聞かれて嬉しそうに銀次郎が振り返りながら教えてあげた。

「へ～～。。。小太郎ちゃんのお腹って、、そんなに気持ちがいいんだ～」
花子がチラチラと小太郎の腹を見ながら独り言を言った。

しばらく進むと、花子が歩く速度を落とし、与助に抜かされ、日出夫の前まで下がった。

「日出夫ちゃん→、、あのさ～私も頭の上に乗ってもいい？小太郎ちゃんの横あたりに。。」
後ろを振り返りながら、そして上を見上げながら花子が日出夫に聞いた。

「えっ！！どうしてあなたも乗りたいのよ？」
日出夫がびっくりして質問した。

「どんな高さなのか見てみたいしさ～。小太郎ちゃんの話し相手になってあげようかと思ってね。」
花子が小太郎の腹をちらっと見ながら言った。

その視線を日出夫は見逃さなかった。
この小娘、、、小太郎ちゃんの気持ちのいい腹を狙っているんじゃないの？？
日出夫は花子がチラチラと視線を自分より上に逸らすのが気になってしまった。

「あなたも乗りたいのなら、まず小太郎ちゃんに降りて貰って、あなただけを乗せてあげるわ♡」

それを聞いた花子は
「いや、、、それはなんか小太郎ちゃんに悪いからさ～。２人くらい乗せれるでしょ？」
「私はピチピチのギャルだし、痩せてるしさぁ～」

花子が少し甘えた感じで答えてきた。
ん？？この小娘、何を考えている？
やっぱり、小太郎ちゃんの腹ね。
「まぁ、2人乗せてもいいけどさ～。。あなたは鼻の上ね、小太郎ちゃんはいつも眼と眼の間の窪みに腹をくっつけて乗らないといけないから。」
日出夫が小太郎の腹に近づけまいと提案した。
ん？？このでかガエル、なんか察しやがったな。
花子は瞬時に感じとった。
「オホホ、じゃ、それでいいですわよ♡」
花子がそう言って背中から登って日出夫の鼻の上に乗った。
「オホホ、どうかしら？高さはわかったかしら？」
「わかったんなら、もう降りてくださる？」
日出夫が鼻の上に乗った花子に声をかけた。
「もう少し、ここからの景色をみたいわ。オホホ」
花子はそう言って、少しずつ後ろに下がって、小太郎の腹を触ろうとした。
それに気づいた日出夫は、
ヘックショーーーーーーーーーーン
大きなくしゃみをして、頭を下げて花子を地面になすりつけるようにして地面に置いた。



「あら？？もういいのかしら？？オホホ」
日出夫がわざとらしく、地面にいる花子に声をかけた。

「あら？まだまだこれからよ♡」
花子が悔しそうな顔がバレないように、笑顔を引きつらせて答えた。

「オイオイ！あの２人なんかバチバチじゃないか？」
与助が前を歩く銀次郎に声をかけた。

「そう？？花子ちゃんは日出夫の頭に乗りたいのでしょ。」
銀次郎が呑気に答えた。

「いや、あれは〝女と女の闘い〟という奴だぞ！！」
与助がキリっとした顔で銀次郎に言った。

妄想アマガエル日記（５９）－６月６日（木）晴れ

「まぁまぁ、、、二人とも、、落ち着いて・・」
与助が花子と日出夫の間に割り込んで仲裁をした。

すると、花子が
「えっ！！私は落ち着いているわよ！」

少し怒った感じで与助に言った。

そして、日出夫も
「そうよ♡、私もとっても落ち着いているわよ♡」
少し怒った感じで与助に言った。

「そうなのね。。」
与助が少し困ったようにオロオロしてしまった。

その様子を日出夫の頭の上から小太郎が見下ろして見ていた。
「まったく、花子も日出夫もどうしたんだい??」
「花子はさ~、、日出夫の頭に乗りたいんだろ??さっきみたいに鼻の先だとまた落ちるかもしれないから、代わってあげるからここに来なよ?」
花子に自分のいるところ指差して言った。

そして、日出夫に対して、
「いいだろ?日出夫。。。ダメなのかい??」
日出夫の左の耳に向けて聞いた。

「そりゃ、、小太郎ちゃんがそう言うんなら、私はそれでいいわよ、、♡」
日出夫が小太郎の言うことをしぶしぶ受け入れた。

一方、それを聞いた花子は、
「私は別にさぁ、、日出夫ちゃん→の頭の上にそんなに乗りたいわけではないのよね。。。」と小太郎の腹をチラッと見ながらボソッと呟いた。

まったく、、、この小娘はやっぱり小太郎ちゃんの腹を狙っているのね。小太郎ちゃんの優しい申し出を断るなんて、、まったく困った子だわね。
日出夫が花子を見ながら思った。

まったく、、、このでかガエルも他のカエルたちも、女心がわからないものね。。まったく困ったカエルたちだわね。
花子が日出夫とその上の小太郎を見ながら思った。

その皆の様子を先頭にいる銀次郎はニコニコしながら見ていた。
「まぁ、よくわからないけどさ～。日出夫の頭には与助が乗ってさ～、花子も小太郎も一緒に歩こうよ！」
突然、変な提案をしてきた。

「えっ！！なんで俺が日出夫の頭に乗るんだよ？？別に俺は乗りたいなんて言ってないだろ？？」
与助が突然の提案に驚いた。

「まぁまぁ、与助が日出夫の頭に乗れば、すべてが丸く収まるんだよ。あと、さっき筋肉痛が痛いってしきりに言っていたろ？」
銀次郎がニコニコしながら与助に言った。

「そうだな。じゃ、俺が降りるから、ここに来てみろよ！！」
小太郎が嬉しそうに言って、降り始めた。

「そうね。まだ与助ちゃんは乗ったことなかったわね？乗ってごらん？」
日出夫が小太郎が降りたのを確認してから、与助に背を向けて言った。

「ん～～、、まぁ、なんだかよくわからないけど、じゃ乗ってみるか。」
そう言って、日出夫の背中を登り始めた。

へ〜〜、、ほんと、日出夫の背中って小さな山みたいなんだな〜。。ゴツゴツしているし、デカいし、、、
少しずつ背中を登って頭の上までよじ登った。

「はーーーー、こりゃ高いもんだな！！」
「日出夫はいっつもこんな視点の景色を見ていたのか！！！」
与助が日出夫の頭の高さからの風景を見て感嘆した。

「スゴイだろ？？」
小太郎が嬉しそうに言った。

「あ〜〜、こりゃスゴイ！！」
与助が嬉しそうに返事した。

そして、日出夫の頭に与助が乗った状態で、銀次郎、花子、日出夫、小太郎の順に穴の中を進んだ。

日出夫の頭に乗っている与助の目の先には自分の手のひらほどの大きさの一対の穴が、開いたり、閉じたりを繰り返していた。
時折、そこから透明な風船の玉みたいなのができては弾けてを繰り返していた。それは、日出夫の鼻の穴だった。
それが気になった与助はずっと見ていた。

ヒクっヒクっ、ヒクっヒクっ、ピ〜〜パンっ！
ヒクっヒクっ、ヒクっヒクっ、ピ〜〜パンっ！

同じタイミングで開いたり、閉じたりを繰り返すその穴をずっと見ていると眠たくなってしまった。
そして、いつの間にか眠ってしまっていた。

いつも理知的に皆を先導していた与助が眠ってしまって、先頭を歩くのは銀次郎である。穴の中は暗く、通り慣れた穴でもない。

与助は寝てしまった。

スヤスヤ。。。

妄想アマガエル日記（６０）－６月１１日（火）晴れ

ユサッ、、ユサッ、、

ほどよいゆれと柔らかい皮膚とコブの感触、そして大きな体からわずかに伝わる温かさ。越冬からあけてすぐに変な踊りを踊り続けて疲れていたため、揺り籠のようにとても気持ちよく、深く眠りについていた。

スピ～　スピ～、、、

ドスン！！

気持ちよく、深く眠りについていた与助はその音と振動で目を覚ました。

「ハッ！！！」

「なんだ？？　あっ、、、寝ていたのか。。。」

あまりに深く寝ていたので、寝ていたことさえ気づいていなかった。

「いや～～、、日出夫ぉ～ごめんよ。。。俺はいつの間にか寝てしまっていたようだよ。。。」

そう言って、周囲を見渡した。

「えっ！！これはいったい？？？」

与助は目の前に広がる風景を見て、びっくりした。

遡ること1時間前----------

「銀ちゃん、、、まだ着かないの～～？？」

「私、、疲れたわよ、、、」

花子が先頭を歩く銀次郎に後ろから声をかけた。

「まぁまぁ、そろそろ着くと思うから、もう少し頑張ってよ。。」

銀次郎が申し訳なさそうに声をかけた。

「おい！銀次郎、、、さっきのところ、左だったんじゃないか？？」

小太郎が先頭を歩く銀次郎に後ろから声をかけた。

「えっ？？そう？？？」

「来た道はこっちだったと思うけどな～。。だって、ほら、木くずや落ち葉が落ちているでしょ。これは、花子ちゃんの部屋を作った時に僕らの穴からもって来た材料の残骸だと思うからさ～」

銀次郎が自信たっぷりに答えた。

「いやいや、こんなもんどこにでも落ちているだろ？？」

「だって、木くず自体 穴の周囲で見つけて来たもんを取ってきただけじゃないか。」

小太郎が銀次郎を疑いながら言った。

「まぁまぁ、僕を信じてさ～。もう少しで着くような気がするんだよ！！」
銀次郎が自信たっぷりに答えた。

そのまま、トンネルを進んで行くと急な登り坂に差し掛かった。

「オイオイ！！銀次郎。坂なんて、こちら側になかったろ？」
「向うの出口の近くには緩やかな坂はあったけど。。」
小太郎が再び、銀次郎を疑って言った。

「まぁまぁ、、、ちょっと通らなかった間にモグラが穴を少し変えたんでしょ。」
「方向はこっちで合っているから、もう少しで着くよ！！」
銀次郎の自信はゆらがない。

「お前のその自信はいったいどこから出てくるんだよ。。いつものことだけど。。。」
小太郎が呆れて、呟いた。

しばらく歩いて行くと、トンネルの出口が見えて、光が射しこんでいた。

「おい！！銀次郎！！やっぱり、全然違う方向に来たじゃね～か～。」
「俺たちの穴じゃないところじゃね～かよ。。」
小太郎が出口の光を指差して言った。

「ほんとだね～。。。まぁ、とりあえず、出てみようよ。」
銀次郎が頭をポリポリ掻きながら進んだ。

銀次郎が穴の出口に差し掛かり、その黒い影が外に出て、続いてみんなも外に出た。

「えっ！！」
皆が驚いた。

「ここはいったい、、どこなんだ？？見たことないぞ、、こんなところ。。。そして、あのカエルみたいな、カエルじゃないみたいなのは、なんなんだ？？」
小太郎が呟いた。

妄想アマガエル日記（６１）－６月１３日（木）晴れ

穴から出ると、そこには大きな湖が広がっていた。
とても綺麗な水で底まで透けて見えている。あまりに綺麗な水で湖全体はコバルトブルーに光り輝いていた。

「なんて！！！！！綺麗なんだ。。。　！！」
銀次郎が口をあんぐりと開けて、感動していた。

そんな湖には中央に大きな岩がニョキリと突き出ていて、その上に何かが横たわっているように見えた。そして、その岩の根元付近の水の底には何やらカエルのようなカエルじゃないようなのが、遊んでいるようであった。

「おいおい！！ここはどこなんだ？？？」
小太郎が銀次郎に声をかけた。

「ほんとだね。。。こんな綺麗な光景は見たことがないし、あの水の底でユラユラと優雅に泳いでるのはいったいなんなんだろう

な。。。？？」
銀次郎も驚きを隠せないでいた。
「日出夫ちゃん→はなんか知らないの？？」
花子が見上げて日出夫に聞いた。
「そうね～～。。ここは来たことがないけど、、、あの人たちはどっかで見たことがあるような気がするのよね。。。♡」
日出夫が思い出そうと右上を見ながら考えた。
「とりあえず、聞いてみようよ。」
銀次郎がそう言って、その湖に近づいて行って岩の上に横たわっている人に近づいて行った。
岩の上には、下半身はオタマジャクシのような姿をして、上半身はカエルような姿をした人が、こちらを背にして艶（なま）めかしく横たわっていた。
「もしかしたら、、、あれが噂に聞く、、、、人魚って奴なんじゃないか？？」
小太郎が唾を飲みこみながら呟いた。
「あの～～すみませ～ん。。」
銀次郎が大きな声で声をかけた。
皆が、唾を飲みこんだ。
「ゴク！」
すると、
「えっ、、、な～に？？」

体を動かさず、上半身を捻じってこちらを向いて返答した。

「えっ！！背中は真っ黒いのに、腹は赤色と黒色をしている！」

「ちょ～→　ちょ～→　おしゃれ～！！！」

花子はその姿を見て、テンションがあがった。

「あの～～、、ここはどこなのでしょうか？？」

「あと、あなたたちは誰なんでしょうか？？？」

銀次郎が大きな声で質問した。

「え～、、どこって言われてもね～～。。」

「ここは湧き水の湖で、あたしたちの住処だし、、、誰って言われもね、、あたしはアカハライモリの真矢だけど～～」

そう言って、少し困ったように答えた。

「へぇ～～アカハライモリって初めて見たよ！！！」

銀次郎が嬉しそうに言った。

「そうそう！！アカハライモリよ♡　アカハライモリ♡」

「いつも冬を越す時に朽ち木の中で見るから、水の中にいるところなんて見たことないから、わからなかったわーー♡」

日出夫が手を打って、思い出してすっきりした感じで言った。

「ところで、、、あなたたちはどこから来たの？」

「で、、あなたたちは、どなたなのかしら？？」

真矢がこちらに体を向けて、赤色と黒色の腹をこちらに向けて、横たわったまま質問した。

「あっ！！私たちは、カエルでありまして！！」

「あっしはツチガエルの花子と申します！！以後、お見知りおきをよろしく頼み申し上げまする！！」
花子が緊張して、ビシッとして返答した。

ん？？
花子の緊張している様を横目で見ながら銀次郎が皆を簡単に紹介した。

「へ～～。あなたたちはあの黒い建物のところに住んでいるカエルなのね。」
「あたしたちも冬はあそこの朽ち木のところで冬を越すのよっ♡」
真矢がふつうに答えたが、皆にはその様がとても艶めかしく見えた。

「あの～～、、お姉さまは、、、どうしてそんなに艶っぽいのでありますでしょうか？？」
花子が緊張した状態で質問した。

「えっ！！そう？？あたし、、、艶っぽい？？」
真矢が突然の質問に少し驚いた。

「へい！！艶っぽいであります！！」
「その艶っぽさを教えて欲しいであります！！」
花子が真面目な顔で質問した。

何でこんな変な言葉を使っているのだろう～？
銀次郎と小太郎が花子を両脇から横目でじっと見ながら思った。

「まぁ、よくわからないけど。。。」
「せっかく来たんだから、、あたしの友達にも紹介するから、ゆっくりしていきなさいな♪　なんかわかったら教えたげるから♪」
真矢が声をかけた。

そして、真矢に呼ばれたアカハライモリたちが続々と水の中から上がって来て、銀次郎と小太郎もその美しい水の中に入って、皆で楽しそうに遊んだ。

日出夫と花子は水には入らず、岸で真矢と美肌談義をしていた。

「そういえば、この時期だけ生えているこのカワモズクがね～。越冬開けの美肌には一番効くのよ♪」

真矢が、湖の岸の水の中に生えているカワモズクを指差して言った。

「あら?そうなの♡」

日出夫が嬉しそうに、それを取ろうとした時に、カワモズクのヌメリで滑ってしまって、尻もちをついた。

ドスン！！

その音と振動で頭の上で寝ていた与助が目を覚ました。

「えっ！！これはいったい??」

与助は見たことがないとても綺麗な湖で、見たことない人魚みたいな生き物と銀次郎と小太郎が楽しそうに水を掛け合って遊んでいる様子を見て思った。

あっ、、、、ここは天国か。。

寝ている間に、俺は死んでしまったのか。。

妄想アマガエル日記（６２）－６月２３日（日）雨

「あっ、、、俺は死んだのか。」
与助は周囲を見渡して、ポツリと独り言を言った。

「いたたぁ・・・」
頭を掻きながら日出夫が上体を起こすと、間違えて与助も一緒に掻いてしまった。

「いてて、、」
日出夫の大きな大きな手に体を押しつぶされながら、与助が声を出した。

「あらっ。。。ごめんね♡」
「与助ちゃんまだ乗っていたのね♡　すっかり忘れていたわよ～♡」
日出夫が与助に謝りながら言った。

「いてて、、痛いよ～。。なんて力なんだよ～。」
「でも、痛いってことは、俺は死んだわけではないんだな！！」
与助は痛がりながらも、喜んで言った。

「死んだ？？なんのことよ？」
「与助ちゃんはただ寝ていただけよ♡」
日出夫がそう言って、さらに安心させた。

「暗い穴の中にいたはずなのにさ～。。起きたらなんかとても綺麗な天国みたいなところにいたしさ～。。見たことないあの人魚みたいなのと銀次郎たちが楽しそうに戯れているだろ？？」
「こんなの見たらだれでも、天国に来たって思うだろ？？」
与助がそう言って、周囲を見渡した。

一方、日出夫の足元にいた真矢は見上げながら、
「あらっ?あの方はどなたなのかしら??」
日出夫の上に乗った与助を指差しながら、花子に聞いた。

「あ〜、、あれは与助っていう。ただの青色のアマガエルなんです。」
花子が真矢に聞かれて、少し嬉しそうに答えた。

「へぇ〜〜。。。青色のアマガエルなのね♡」
「あんな綺麗な色のカエルなんて、、、見たことないわ♡」
真矢は独り言を言った。

真矢には、日出夫の頭の上に乗った与助は雲一つない晴天の青空に溶け込み、さらに光が与助を逆光で照らし、とても輝いて見えた。

「なぁ〜、日出夫。。。」
「ところで、ここはどこなんだい?そして、あの人魚みたいなのはいったい誰なんだい?」
与助が日出夫の耳元で質問した。

「あ〜、、、そうね。まだ言ってなかったわね♡」
「銀次郎ちゃんを先頭に歩いていたらね。道を間違えたみたいでここに出て来たのよ。ここは湧き水の湖らしくて、そこに暮らしていたアカハライモリちゃんと仲良くなって、銀次郎ちゃんたちは遊んでいて、私たちは真矢ちゃんと美肌について話していたってだけなのよ♡」

「へぇ〜、、あれがアカハライモリなのか〜。」
「名前は聞いたことがあったけど、初めて見たよ!!」

そう言って、湖で水を掛け合っている銀次郎と小太郎とアカハライモリをぼ～と眺めて言った。

「ん？？ところで、真矢ってのは誰なんだい？？」

与助が日出夫に聞いた。

「あっ、真矢ちゃんはね。私の足元にいるこちらのアカハライモリのことなのよ♡」

日出夫がそう言って指差した。

日出夫に言われて、与助は下を向いてアカハライモリの真矢を見た。

「あっ、あれが真矢さんね。とっても長いんだね～」

与助がポツリと、アカハライモリの姿をはじめて見た感想を言った。

一方、真矢の視点‥‥‥

日出夫があたしを指差したわ。

なにかしら？？
その次の瞬間、与助が顔を下に動かして、こちらを見た。
その動きはスローモーションのようにゆ～～くりに見えた。

そして、こちらを向いた与助の独り言がかすかに聞こえた。
「「あっ、あれが真矢さんね。とっても綺麗だね～」」
えっ！！！なんて？？
あたしを見て、とっても綺麗って言ったわ！！間違いなくとっても綺麗って聞こえたわ！！
えっ！！あの王子様はあたしのこと気に入ったの～～♡

王子様～～♡

妄想アマガエル日記（６３）　－６月３０日（日）曇り時々雨

「あっ、日出夫ごめんよ。こんなに長い間 頭の上に乗っていて。。」
与助はそう言って、日出夫の背中からスルスルと地面に降りた。
すると、そこには初めて見るアカハライモリがこちらを見ていた。

「はじめまして。俺は与助っていうんだ。あなたは、、確か、、あっ、真矢さんだったね。」
「そうそう！日出夫からさっき聞いたんだった。」
与助がニコニコしながら気軽に声をかけた。



真矢はその爽やかなしゃべり方や日出夫の背中をスルスルと降りてくる様を見て、さらに見惚れてしまっていた。

「ん？？大丈夫かい？？」

返事をしてくれない真矢を見て、与助が少し心配になって声をかけた。

それを横で見ていた花子が

「姉さん、、真矢姉さま、、どうしたんですか？？」

と小声で言って、横からちょんちょん指でさした。

「はっ！！！なんでもございませんわ♡」

「考え事をしていまして、、、すみません。。」

真矢が我に返って、与助と花子に少し恥ずかしそうに返事をした。

「あっ、そうなんだ。なら、よかったよ。」

「じゃ！」

与助はそう言って、銀次郎たちの方に走っていった。

その後ろ姿を真矢は、じ～と眺めていた。

「いったい、どうしちゃたんですかい？？」

花子が心配になって声をかけた。

「えっ！！あたし、、与助さまに一目惚れしたみたいなのよ、、、」

真矢が恥ずかしそうに、うつむいて答えた。

「えっ！！！　あの青色だけが取り柄の与助に一目惚れ？？？」
花子が驚いて、つい思ったことを呟いた。

「そうなのよ。。」
「さっき、日出夫ちゃん→の頭にいた時に、あたしのことを〝綺麗〟とか言っていたでしょう？？」
「もう、、彼も私に一目惚れしたみたいなのに、あんなにそっけない素振り見せて、、そこがまた素敵よね。。」
真矢が花子に嬉しそうに言った。

ん？？与助が〝綺麗〟なんて言っていたかしら？？
花子はさっきのことを思い出していた。
たしか、、あの時、、、あいつは、、、真矢さんのことを、、〝長い〟とか、なんかそんな感じのこと言っていたように思うけど。。。？？
真矢さんのことを〝長い〟とは失礼な！！と内心思っていたから、その時の記憶に関しては自信があった。

「ね〜〜、見た？」
「さっきの、与助さまの私に対する心配の仕方。。そんなにあたしに関心あるのかしらね〜？？」
真矢がその時のことをうっとりと思い出していた。

ん？？心配の仕方、、、？？
花子はまたさっきのことを思い出していた。
たしか、、、あの時、、、あいつが、、真矢さんに自己紹介をして、、真矢さんの返事を待っていたけど、真矢さんが答えないのを見て心配していただけだったと思うけど。。。？？
真矢さんに気軽に話しかけるなんて失礼な！！と内心思っていたから、その時の記憶に関しても自信があった。

「まったく、、、彼ったら、、あんなに無邪気に彼らと遊んで、、」
「ほらっ、またチラっとあたしのことを見たわ！！」
「かわいい〜」

真矢がうっとりした顔で花子に言った。

ん？？

今のはただ、銀次郎たちがかけた水をよけるためにこちらを向いただけだと思うけど、、？？

そして、花子は真矢を横目で見ながら思った。

なるほど、、、この人のこの艶っぽさは、この異常に高い自己肯定からにじみ出てくるものなのかもしれないわ。

私にこの人みたいな艶っぽさが出るのは、無理そうね。

妄想アマガエル日記（６４）－７月８日（月）曇り

「いや～～楽しかったな～」

小太郎が嬉しそうに言った。

「ほんとだな～、、与助もあとから来たけど、楽しかったろ？」

銀次郎が嬉しそうに与助に聞いた。

「あ、、あぁ、、楽しかったは、楽しかったんだけどよ。。」

「あの、、陸にいるアカハライモリの、、真矢さんがさ～、、なんだかずーーと俺のことを見ていてさ～、、、なんか悪いことしたのか、、？ってのが気になってな～～」

与助がまだこちらを凝視している真矢を見ながら、小声で言った。

「ん？？そう？」

銀次郎がそう言って真矢の方を見ようとした。

「おい！！あまり見るなよ！！」
与助が銀次郎が振り向く前に声をかけた。

「考えすぎだろう？？」
小太郎が与助に言った。

3人が話しているのを聞いていた一緒に遊んでいたアカハライモリたちが、何やらボソボソと話しはじめた。

「ん？？どうしたんだい？君たち？？」
銀次郎が不思議そうに思って、聞いた。

「さっき、与助くんが言っていたろ？？真矢がずーーと見ているって。。。」

「あぁ、、そんな気がするんだよ。。」
与助がすぐに答えた。

「それは、、、まずいぞ～～。。真矢ってのはなぁ、、悪い人ではないのだけど、、なんて言うか、、惚れっぽいというか、、思い込みやすいというか、、、まぁ、なんだな。。ちょっと厄介なんだ。。」

「そうなの？？」
銀次郎が不思議そうに聞いた。

「与助くんは真矢になんか言ったりしたんじゃないか？」
「綺麗とか、なんか褒めるようなことを。。」

「いや、、、言ってないけどな。。。」
与助は真矢と会話した時のことを思い出して答えた。
「確か、、あの時、、俺が自己紹介をしたんだけど、、その時になんか返答も相槌もなくて上の空って感じだったから、心配して声をかけたくらいだったんだけど。。。」
与助が続けて思い出して言った。
「そうなのか〜。。その程度なら特に勘違いすることもなさそうだけど、、」
「でもまてよ！！君が自己紹介した時に、既に上の空だったって言ったろ？？」
「あっ、その前に何か言ったんじゃないのかい？」
アカハライモリたちが腕を組んで各々推理して、質問してきた。
「そう言われてもな〜。。確か、、、あの時、日出夫の頭の上にいて、日出夫に色々と聞いてて、、、そしたら真矢さんのことを言ったから、覗き込んで下にいるのを見て、、、初めて見るアカハライモリだったから、、上から見ると、、アカハライモリってとても長いんだな〜って独り言を言っただけだけどな〜。。」
与助が腕を組んで右上を見上げながら言った。
「あっ！！それだ！！」
「そうだ！！きっとそれだ！！」
「間違いないな！！」
アカハライモリたちが顔を見合わせて言った。
「ん？？どういうことだい？？」
与助が不思議そうに、聞いた。
「君はさぁ、〝とても〟長いんだな〜って言ったんだろ？」

「たぶん、それを真矢は、とても綺麗だな～とか、とても美しいな～とか、とてもエレガントだな～とか聞き間違えたんだよ！！！」
アカハライモリたちが皆　頷きながら言った。

「まさか、、、そんな聞き間違いするわけないだろ？？ないない」
与助が顔の前で手を振りながら言った。

「いやいや、、、真矢ってのはね～、〝とても〟なんて言葉がつくとその後に自分に都合のいい言葉に聞き間違えるという特技を持っているんだよ。」
「これまでもそれで、ここに来た多くのカエル達がその餌食になったんだ！！」
アカハライモリたちが可愛そうな人を見る感じで与助を見ながら言った。

「えっ！！餌食っていったい何されるっていうんだい？」
与助が恐れながら聞いた。

「そうだな～。。前に来たアマガエルの時は、コソコソとストーカーみたいにつけられて、、突然消えてしまったんだ。」
「その前に来たトノサマガエルの時は、四六時中、付け回して、それで餌の昆虫なんかも逃げてしまうもんだから、そのトノサマガエルは餌にありつけなくて、どんどん痩せていってな～～突然消えてしまったんだ。」
「その前に来たツチガエルなんてな、、」
そう言いかけた時に小太郎が
「もういいよ！！わかった、、よし、逃げよう！！」
与助の肩を叩いて言った。

「危険な時は逃げる、というのも冒険家からしたら当然の判断なんだ！！」
小太郎が与助の肩を叩きながら言った。

それを聞いて、与助も頷いた。

「まずは、陸にいる日出夫と花子にどうやってこのことを伝えて、真矢から離れるかだな～。。」

小太郎が腕を組みながら言った。

「まぁ、でも、そんな悪い人には思えないよ～　悪い人ではないって言っていたし、、」

銀次郎が真矢を見ながら言った。

「お前は相変わらず呑気だな～」

小太郎が銀次郎に言った。

「とりあえずさ～。あっちに行って、話してみようよ！！」

銀次郎がニコニコしながら提案した。

「まぁ、、、そうだな！！逃げるのは、その後で考えるか！」

与助も頷いた。

小太郎は口をとがらせて、不服そうにしていた。

一緒に遊んだアカハライモリたちに別れを告げて、日出夫たちのところに近づいていった。

「あら、なんだか、いっぱい遊んでいたわね♡」

日出夫がニコニコしながら言ってきた。

「あ～、楽しかったよ！日出夫も来たらよかったのにね！」

銀次郎がニコニコしながら言ってきた。

「じゃ、そろそろ、俺たちの雑木林に戻ろうか？」
与助が日出夫に声をかけて、ちらっと真矢を見た。
そこには、うっとりとした顔をした真矢がこちらを見ていた。
えっ！！ほんとに、俺のことをなんか勘違いして惚れているっぽいぞ。。さて、どうやって、逃げるか、、考えないといけないぞ！！
与助は銀次郎と小太郎を見て思った。

妄想アマガエル日記（６５）　－７月１１日（木）曇り時々雨

「じゃ、そろそろ、雑木林に戻ろうか！！」
与助が皆に声をかけた。
「そうだ！そうしよう！！」
小太郎もそれにすぐに同調して答えた。
「え～～、、まだ来たばっかりだし、、もう少しここにいてもよろしいのじゃありません？」
真矢が与助を見つめながら甘えた声で言ってきた。
「でもっ、、ほら、、もう暗くなってきたしね、、そろそろ、鳴く練習とかもしないといけないからね。。」
「ねっ、、」
与助が銀次郎を振り返りながら言った。

「まぁ、そうだね。暗くなってきたから、そろそろ帰ろっか。」
与助に言われて、特に何も考えずに銀次郎が答えた。

「じゃ、帰ろう！！」
与助が皆に言った。

「でも、、、ね。。。」
「ここがどこかもわからないから、どうやって雑木林に戻るんだい？？」
小太郎が少し困った感じで質問した。

「あっ、、そうだったな。。。俺はここまで来る間ずっと寝ていたし、、、いったい、どこにあの雑木林はあるんだ？？」
与助も困ってしまった。

「あっ、、与助さま、、雑木林への行き方なら、あたしわかりますわよ。。」
真矢が与助の後ろから声をかけた。

「えっ。。そうなの？？」
与助が少し戸惑いながら答えた。

「え～、、まぁ、、あたしたちも冬の間はいつもあそこの朽ち木の中で過ごしますから。。。」
真矢が与助に見つめられて少し恥ずかしそうに答えた。

「じゃ、教えてくれないかい？？」

与助がそういうと真矢が湖の右奥を指差して言った。
「あそこに壁みたいなのがありますでしょう？あれを越えると大きなヤナギの木がありまして、その奥が雑木林になんですわ♡」

「えっ！！そんな近いの？？」
与助が驚いて答えた。

「じゃ、帰ろう。真矢さん、色々と教えてくれてありがとう！」
与助がそそくさと御礼を言って、皆に声をかけた。

「あの～～、、あの壁は迷路みたいになっていますから、あたしも一緒に途中まで行きましょうか？？」

「いや、、、大丈夫、大丈夫！ありがとう」
与助がすぐに断った。

「でもですね、、この前もアマガエルがあの壁に向かってから消えてしまいましてね。。。その前はトノサマガエルも、、そしてその前はツチガエルも消えまして、、危険なんですわ。」
真矢がポツリポツリと説明した。

いや、、、それは、あなたが付きまとったから消えたんじゃないのか。。
与助はそう思っていた。

「なんでそのカエルたちは消えたんだい？」
銀次郎が素直に不思議そうに聞いた。

「そうですね。。まぁ、あたしが悪いと言えば悪いのですけどね。。」
「とてもイケメンたちでしてね。。。いつも近くでチラチラ見ていたのです。まぁ、あたしとしてはただ見ているだけでよかったのです。でも、相手はそれが気持ち悪かったみたいで、、、あたしの忠告を聞かずにあの壁に一人で行ってしまうものだから、、、」
「あの壁はほんと迷路みたいなので、危ないのですよ。。。。」

真矢が申し訳なさそうに答えた。

「へ～～、そうなんだ～～。じゃ、真矢さんに案内をお願いしようよ。」

銀次郎がニコニコしながら与助に言った。

「そっ、そうだな。。」

与助もしぶしぶ受け入れた。

それから、真矢を先頭に銀次郎、花子、与助、小太郎、日出夫の順にその壁に近づいて行った。

その壁はコンクリート製の小さな倉庫のようなもので、その下に小さな隙間が空いていた。その隙間は日出夫がギリギリ入れるくらいの大きさで、どうにか皆、中に入ることができた。

「さて、ここからが迷路みたいになっていましてね。もし、行き方を1回でも間違えると一生ここから出れなくて、干からびてしまいますから、いいですか？」

「ただ、あたしはこれ以上は行けませんから、行き方を説明しますので、皆さん覚えて行ってくださいね。」

「いいですか。まず、最初を右、突き当りを左、その先を上に登って、途中に横穴がありますから、そこに入って突き当りまで行って、突き当りを右です。」

「覚えましたか？」

真矢がゆっくりとわかりやすく説明した。

「え～と最初が右で、その先を左で、突き当りを左だったかな？」

銀次郎が一生懸命思い出した。

「違うだろ。最初が右で、次を左、その先を上に登って、途中の横穴に入って、突き当りを右だろ。」

与助が自信満々に答えた。

「さすがですわ～♡」
真矢がうっとりした顔で与助を見つめた。
そう言われて与助が少し照れくさそうに答えた。
「まぁね、、」
もう真矢のことをストーカーだとか、変な風には思っていなかった。親切に教えてくれる姿を見て、逆に好感を持っていた。
「じゃ、大丈夫そうですわね♡」
「気をつけていってらっしゃい。たまには遊びに来てくださいね（特に与助さま♡）。」
「あと、何度も言いますけど、、絶対に今の道順を間違えたらダメですからね！」
真矢が最後に釘をさして、別れを告げた。
皆で真矢に御礼を言って、真矢に見送られながら、暗い倉庫の中に歩みを進めた。

妄想アマガエル日記（６６）－７月１５日（月）雨

真矢と別れて穴の奥に進んで行くと、その先は光がまったくない真っ暗闇であった。外からの音も聞こえず、ヒンヤリとしたコンクリート製の地面は、さらさらとした細かい砂埃を覆っていて、その感触のみが感じとれた。カエルたちのピタっピタっと歩く音のみが響いていた。
先頭を歩く与助が周りを見回した。
「そろそろ右に曲がらないといけないと思うんだけど、なかなか道がないな。。。」

「ほんとだな～～、、これまでの道には横道らしいのはなかったからね。」
銀次郎も周りを見回していた。

少し進んだところで銀次郎が座り込んだ。
「あっ、ここに小さな穴が開いているけど、、、もしかして、これが横道なんじゃない？？」

「えっ、、こんな小さな穴が？」
与助が振り返って、座り込んでいる銀次郎の上から覗き込むようにして言った。

「とりあえず、入って確認してみるよ。」
銀次郎がそう言って、頭を無理やり押し込んで、その後　体をまっすぐにしてヘビのように体をくねりながら穴に入っていった。

「あっ、、穴の中は立てるくらい広くなっていて、結構先まであるみたいだよ！！」
その小さな穴から顔を出して、伝えてきた。

「でも、、、こんな穴だったら、日出夫は入れないだろ？」
「真矢さんも、日出夫がいるのは知っているわけだから、こんな穴だったら最初に言うだろ？」
小太郎が後ろから与助と穴の奥にいる銀次郎に言った。

「まぁ、そうだよね。。。」
与助は小太郎が言う前から同じことを考えていたが、一応、納得したような返事をした。

「まぁ、でもさ、、、せっかく入ったからさ～。。少しこの穴の先を見てくるよ！！」
銀次郎がワクワクしている様子を他の皆はわかっていたので、誰もそれをとめることはなかった。

・

・　・

「なかなか帰ってこないな～。。。」
与助が銀次郎の帰りが遅いので、少しイライラしてきていた。
「ほんとだな～。。もう１５分くらいは経つよな～。。」
小太郎もイライラしてきていた。

「でも、、、もしかして、道に迷って、、干からびてしまったんじゃないの？？」
花子が心配そうに、イライラしている与助と小太郎に声をかけた。

「えっ！！！さすがに１５分くらいだよ？干からびはしないでしょ？？」
「なぁ、、小太郎？」
与助が少しうろたえながら答えた。

「あ、あぁ、、、。さすがにそんな短時間で迷子になって、干からびるなんてことはないだろ？？」

「でも、、、ほら、真矢さんが言っていたでしょ。道に迷ったら干からびるって、、、確かに、この地面はコンクリート製で砂埃がすごくて水分持っていかれるわよ！」

確かに、、、もしかしたら、、この穴の奥はもっと乾燥しているかもしれないな。。
与助と小太郎は花子の言うことに納得して、少しずつ心配になっていた。

「おーーーい！！銀次郎～～」
「大丈夫かーーーー」

「おーーーい！！」
与助と小太郎が穴の中に向かって声をかけた。

シーーーーーーン

まったく、返事がない。
「ちょっと、俺が見てくるしかないな！！」
与助が意を決して、穴の中に入ろうとした。
その時、穴の奥から何やら、音がした。

ザー、ザー、ザー、、

「ん？？なんか、、、音するな？」
穴に入ろうとした与助が振り返って小太郎に言った。

「ほんとだ！！何かを引きずっているような音だな！！」
「もしかしたら、体が干からびた銀次郎が匍匐前進みたいな感じでここに戻ってこようとしているんじゃないか！！」

「確かに、、、ありえる！」
与助が振り返って小太郎にそう言って、穴に入ろうとした時、穴の中からヌッとカエルの脚が出て来た。
「オイオイ！！本当に脚が干からびているじゃないか！！」
与助が驚いて、腰を落とした。

「ほらっ、引っ張り出してやろう！！」
小太郎がそう言って、その脚の足首を持って引っ張った。案外重たく、穴に引っかかってしまって小太郎だけではなかなか引っ

張り出せなかった。それを見ていた与助が小太郎の腰を持って、花子は与助の腰を持って、日出夫は花子の腰を持って、皆で力を合わせて引っ張りだした。

ウン、トコ、ドッコーーイ
ウン、トコ、ドッコーーイ

小太郎が変な掛け声を言って、皆がそれに合わせて引っ張った。

ウン、トコ、ドッコーーイ
ウン、トコ、ドッコーーイ

そーーーーれ！！

ポンっ！！

ようやく、穴から体が抜けて、全身が出てきた。
それは、銀次郎ではなく、見たことない大きなトノサマガエルであった。でも、干物みたいな状態だった。

「えっ！！！銀次郎じゃないじゃないか！！！」
皆でその干からびたトノサマガエルを見ながら、小太郎が言った。

「おっ！！！みんな、引っ張り出してくれてありがとう！！」
そう言って、穴の中から銀次郎が顔を出し、ヘビのように体を細くして出て来て、体に付いた砂埃をパンパンと手が叩いて落としながら、立ち上がった。

「おい！！これはどういうことなんだ？？この干物みたいなトノサマガエルはなんなんだ？」

小太郎が銀次郎に問いただした。

「まぁまぁ、、説明はあとで。とりあえず、このトノサマガエルに水をあげないといけないね。」

銀次郎はそう言って、来た道を急いで戻り穴の入り口に行った。そこには既に真矢の姿はなかったが、ツユクサがいっぱい生えていた。その茎を何本か急いで取って、戻った。

そして、ツユクサの茎を1本絞り、水をトノサマガエルにかけた。

すると、

「ぶはっ！！！」

干乾びていたトノサマガエルが水を吸い、一気に膨らんで、上体を起こした。

「おっ、よかった～、生きていていたか！！」

銀次郎がほっとして、声をかけた。

妄想アマガエル日記（６７）－７月２５日（木）晴れ

干乾びていたトノサマガエルが、周りを見渡した。

「おっ、、、俺は、、助かったのか。。。？？？」

「よかったよ～～、、穴の奥で干物みたいになっていたから、もうダメかと思ったんだけど、ダメ元で水を掛けたら一気に水を吸って生き返ったみたいだ！！！」

銀次郎が嬉しそうにトノサマガエルの肩を叩いて言った。

干乾びていたトノサマガエルを皆で囲み、生き返ってよかったと安堵して、皆で顔を見合わせて喜んだ。

「いや～～、、ほんと、、、もうダメかと思ったんだよ。。。」
「ほんと、ありがとう！！」
「穴の中で迷子になってさ～。。彷徨っていたらこの珪藻土みたいなコンクリートにどんどん水分とられちゃってさ、ミルミル干からびてしまってさぁ～」
銀次郎を見ながら早口で一気に説明した。

「いや～～、、ほんと、君のお陰だよっ、、、」
「えっ！！！！」
銀次郎に御礼を言って、自分を見ている他のカエルに目をやって驚いた。

「あぁ、日出夫は大きいから驚くよね。。。」
「でも、心配ないよ。彼は、、彼女か、、？？まぁ、日出夫はいい人だから何も心配はないからね。」
銀次郎がトノサマガエルを安心させるように言った。

「ん？日出夫？大きい？」
「あ～あのヒキガエルのことね。いや、、、俺が驚いたのはそれじゃなくてな。。。その横にいるツチガエルガールなんだ。」

「ん？ツチガエル？？ガール？？　あっ花子のことかい？」
銀次郎が日出夫を見ていた目線を下に落とし、日出夫の足元にいた花子に目をやった。

「あ～、、、あのガールは、、、、俺のことを見ているな～。。。」
「ほんと、、、困るよ。。。俺があまりにカッコイイから見とれてしまっているんだな、、ふっ」
そう言って、右手で頭にかかった水を後ろに流し落とした。

「まったくね、、、俺はあまりにかっこいいから、、、この前もアカハライモリに惚れられてしまってね、、、彼女から逃げるため

にここに入ったらこのザマさっ。。ふっ」
干乾びていたトノサマガエルが小石に腰かけ、脚を組み、顎に手を置いて遠くを見つめるように言った。

「ん？？何コイツ？？」
「コイツは何言っているの？」
花子が指差して、真顔で銀次郎に言った。

銀次郎は少し困ったように、そのトノサマガエルを見ていた。

「あのさぁ～、、私、、あんたのことなんて別になんとも思ってないけど？？」
花子が干からびていたトノサマガエルに言った。

「まぁ、まぁ、、、、こんなカッコイイ俺の前だからって、強がらなくてもいいんだぜ。ふっ」
そう言って、遠くを見つめなおした。

皆が、その様子を見て少し呆れ始めていた。

「まぁさ、、生き返ってよかったよ。。うんうん！！」
「じゃ、早くここから出ようか！！」
与助が皆に促した。

「ん？君たちはここからの出方を知っているのかい？」
干乾びていたトノサマガエルが皆に言った。

「まぁね。教えて貰ったからね。」
与助があしらうように即答した。

「そうなのか。」
「それを早く言ってくれよ。。。また皆で迷子になると、その間にあのガールが俺にドンドン惚れてしまうから、大変だと思っていたところだったんだ！！　ふっ」

まったく、、、銀次郎、、なんでこんな奴助けたんだよ？
与助が銀次郎の耳元で小声で言った。

だって、干からびている時にこんなナルシストのトノサマガエルだなんて、、わからないもん。。

妄想アマガエル日記（６８）－７月２５日（木）晴れ

「オイオイ、、最初を右に曲がってからだいぶ歩いたけど、まだ突き当りに着かないな～」
先頭を歩く与助が後ろにいた銀次郎に声をかけた。

「おい！！聞いているのか？」
与助が返事をしない銀次郎に再度言った。

「あっあ～、、、」
上の空といった返事であった。

「どうしたんだい？？銀次郎？？」

「いやね～、、一番後ろを歩くさっきまで干からびていたトノサマガエルのさぁ～歩き方がなんか、、変じゃないかと思ってさぁ」

銀次郎が見ている先に目をやって、与助も一番後ろにいるトノサマガエルを見た。

トノサマガエルは、日出夫にコソコソと隠れるように歩いていて、チラチラと花子を見て、少し距離をとりながら探偵のようについて来ていた。

「ほんとだな～、、、あれは、あれなんだろ？」

「ほらっ、花子の視界に少しでも自分が入ると惚れられてしまうと思い込んでいるから、視界に入らないように歩いているんだろ？」

与助が少し呆れて言った。

「まぁ、アイツのことは気にするなよ。。。おっ！突き当りだ！！ここを左って言っていたな。」

「そして、その先を上に登って、、、と言っていたけど、、」

与助がそう言って、２又に分かれた道の片方を指差していった。

そこには、急な坂道のように上に伸びる道とまっすぐな道があった。

「真矢さんは、突き当りを左に行って、その先を上に登って、途中の横穴を進むって言っていたから、、、こっちでいいんだよな？？」

後ろにいる銀次郎に声をかけた。

「でも、、、、ほら、この天井の部分に穴が開いているよ！」

そう言って、天井を指差した。

「あっ、、ほんとだ！！」
「でも、この穴は小さいし、なにより、吸盤がない小太郎とか花子とかは登れないし、日出夫なんて入れないから、真矢さんがこんな道を言うわけないだろ？こっちのこの坂道を上って言ったんだよ！！」
与助が腕を組みながら、少し考えて言った。
「でも、、上に登るって言っていたんだよ。もし、この穴のことだったらいけないからさぁ～」
「とりあえず、入って確認してみるよ。」
ワクワクしている銀次郎をもはや与助が止めることはなかった。
壁をスルスルと登り、天井に開いた穴に頭を突っ込み入って行った。
・
・
・
「なかなか帰ってこないな～。。。」
与助が銀次郎の帰りが遅いので、少しイライラしてきていた。
「ほんとだな～。。もう１５分くらいは経つよな～。。」
小太郎もイライラしてきていた。
「でも、、、もしかして、道に迷って、、今度こそ干からびてしまったんじゃないの？？」
花子が心配そうに、イライラしている与助と小太郎に声をかけた。
さすがに、さっきは大丈夫だったけど、今回こそは何かあったのかもしれないと与助も少し心配になり、スルスルと壁を登り、その穴に頭を突っ込んで声をかけた。
「おーーーい！！銀次郎～～」

「大丈夫かーーーー」
「おーーーい！！」

シーーーーーーン

まったく、返事がない。
「ちょっと、俺が見てくるしかないな！！」
与助が意を決して、穴の中に入ろうとした。
その時、穴の奥から何やら、音がした。

ザー、ザー、ザー、、

「ん？？まさか！！またか？」
「または、、、本当に今回は干からびて体を引きずっているのか？？」
与助が心配と呆れの両方の感情の中、穴を見つめていた。

すると、穴の中からヌッとカエルの脚が出て来た。

「おい！！これは、また干からびたカエルの脚だけど、、、アマガエルの脚だぞ！！」
小太郎が見上げながら、指差して言った。

「えっ、、、もしかして、銀次郎なのか！！それはいけない、引き出そう！！」
そう言って、その穴からでたアマガエルの脚にぶら下がり、与助の脚を小太郎が持って、小太郎の腰を花子が持ち、花子の腰を日出夫が持ち、少し離れた岩陰で干からびていたトノサマガエルが傍観していた。

ウン、トコ、ドッコーーイ

ウン、トコ、ドッコーーイ

また、小太郎が変な掛け声を言って、皆がそれに合わせて引っ張った。

ウン、トコ、ドッコーーイ
ウン、トコ、ドッコーーイ

そーーーーれ！！

ポンっ！！

ようやく、穴から体が抜けて、全身が出てきた。
そして、小太郎の上に与助が落ちて、引っ張っていた花子と日出夫も腰ついた。

「いてて、、、、」
みんな踏みつぶされたり、腰を付いたりして痛そうにしたが、すぐに干からびた銀次郎に集まった。

「ん？？？このアマガエル、、、黄色いね～」
「アマガエルって干からびると黄色くなるのかい？」
小太郎が与助に聞いた。

「どうなんだろうな～？？干からびたことないからな。」
与助が首をかしげて言った。

すると、天井の穴から、ピョンと銀次郎が降りてきた。

「ん？？あれ？？銀次郎～。お前、無事だったのか。じゃ、このアマガエルは誰なんだい？」
与助が銀次郎に声をかけると
「まぁまぁ、、説明はあとで。とりあえず、このアマガエルに水をあげないといけないね。」
銀次郎はそう言って、さっき取ってきたツユクサの茎を絞って水をかけた。
すると、
「ぶはっ！！！」
干乾びていた黄色いアマガエルが水を吸い、一気に膨らんで、上体を起こした。
「おっ、よかった～、生きていていたか！！」
銀次郎がほっとして、声をかけた。

妄想アマガエル日記（６９）－７月２５日（木）晴れ

干乾びていた黄色いアマガエルが、周りを見渡した。
「おっ、、、俺は、、助かったのか。。。？？？」
「よかったよ～～、、穴の奥の壁の窪みで干物みたいになっていたから、もうダメかと思ったんだけど、さっきもうまくいったから、ダメ元で水を掛けたらまた生き返ったみたいだ！！！」
銀次郎が嬉しそうに黄色いアマガエルの肩を叩いて言った。
干乾びていた黄色いアマガエルを皆で囲み、生き返ってよかったと安堵して、皆で顔を見合わせて喜んだ。少し離れたところでその様子を干からびていたトノサマガエルが傍観していた。

「いや～～、、ほんと、、、もうダメかと思ったんだよ。。。」
「ほんと、ありがとう！！」
「穴の中で迷子になってさ～。。上に行ったら出れると思って登って行ったら、両手両足からどんどん水分とられちゃってさ、ミルミル干からびてしまって、、途中でもう動けなくなったんだ～」
銀次郎を見ながら早口で一気に説明した。

「いや～～、、ほんと、君のお陰だよっ、、、」
「えっ！！！！」
銀次郎に御礼を言って、自分を見ている他のカエルに目をやって驚いた。

「あぁ、日出夫かな？今度こそ日出夫だよね？大きいでしょ。。でも、大丈夫だよ！！」
銀次郎が黄色いアマガエルを安心させるように言った。

「ん？日出夫？大きい？」
「あ～あのヒキガエルのことね。いや、、、俺が驚いたのはそれじゃなくてな。。。その横にいる青色のアマガエルなんだ。」

「ん？アマガエル？？青色？？　あっ与助のことかい？」
銀次郎が日出夫を見ていた目線を下に落とし、日出夫の足元にいた与助に目をやった。

「あ～、、、あの青色、、俺のことを見ているな～。。。」
「ほんと、、、青色より黄色の方が珍しいからな～。。。」
そう言って、右手で頭にかかった水を後ろに流し落とした。

「まったくね、、、俺はひじょ～に、珍しい、、めったにいない、、、黄色の、、いや金色のアマガエルだから、、、この前もアカハライモリに羨ましがられてね、、、、彼女から逃げるためにここに入ったらこのザマさっ。。へっ」

干乾びていた黄色のアマガエルが立って、壁に右手をかけて、全身を見えるようにして言った。

「ん？？何コイツ？？」

「コイツは何言っているの？」

与助が指差して、真顔で銀次郎に言った。

銀次郎は少し困ったように、その黄色いアマガエルを見ていた。

「あのさぁ～、、俺、、黄色い体なんて、まったく羨ましくないけど？？」

「青色の方が綺麗だし。。。」

与助が干からびていた黄色いアマガエルに言った。

「まぁ、まぁ、、、俺は、ひじょ～に、珍しい、、めったにいない、、黄色の、、いや金色だからって、強がらなくてもいいんだぜ。青色もそれなりに珍しいんだぜ。へっ」

そう言って、見下すように顎をあげて座っている与助を見ながら言った。

皆が、その様子を見て少し呆れ始めていた。

「まぁさ、、とりあえず、、生き返ってよかったよ。。うんうん！！」

「じゃ、早くここから出ようか！！」

銀次郎が皆に促した。

「ん？君たちはここからの出方を知っているのかい？」

干乾びていた黄色いアマガエルが皆に言った。

「まぁね。教えて貰ったからね。」

銀次郎があしらうように即答した。

「そうなのか。」

「それを早く言ってくれよ。。。また皆で迷子になると、その間にあの青色が俺のこの黄色を羨ましがって、何してくるかわからないと思っていたところだったんだ！！へっ」

・
・
・

まったく、、、銀次郎、、なんでこんな奴助けたんだよ？

与助が銀次郎の耳元で小声で言った。

だって、干からびている時にこんな偉そうなアマガエルだなんて、、わからないもん。。

妄想アマガエル日記（７０）－７月３１日（水）晴れ

「オイオイ、、上に上がってきたけど、なかなか横穴ってないな～」

先頭を歩く与助が後ろにいた銀次郎に声をかけた。

「おい！！聞いているのか？」

与助が返事をしない銀次郎に再度言った。

「あっあ～、、、」

上の空といった返事であった。

「どうしたんだい？？銀次郎？？またさっきまで干からびていたトノサマガエルが変なことしたのか？」

「いやね～、、一番後ろを歩くさっきまで干からびていた黄色いアマガエルがさぁ～歩き方がなんか、、、変じゃないかと思ってさぁ」

銀次郎が見ている先に目をやって、与助も一番後ろにいる黄色いアマガエルを見た。

黄色いアマガエルは、壁に当たらないようにひょいひょい体を動かして、なるべく真ん中を歩こうとしているように見え、前を歩くトノサマガエルが探偵のような動きで左右に隠れながら歩くのを真ん中を取られまいと肩で押して阻止しようとしていた。

「ほんとだな～、、あれは、あれなんだろ？」

「ほらっ、壁に当たるとあのご自慢の黄色い体が汚れるだろ。だから、壁に当たらないように避けながら真ん中を歩こうとしているんだろ。」

与助が少し呆れて言った。

「まぁ、アイツのことは気にするなよ。。。おっ！横穴だ！！ここを突き当りまで行って、突き当りを右って言っていたな。」

「もうすぐだよ！！」

与助がそう言って、横穴を指差して後ろを歩く皆に声をかけた。

その横穴は真っ暗で光はまったく入らなかった。しかし、アマガエルたちは暗闇でも色がわかる特殊な目をしているから、暗くてもそれほど問題なく進むことができる。

横穴を進んで行くと、突き当たりが見えてきた。ただ、突き当りの手前の右下に小さな穴が開いているが遠くからでも見えた。

その小さな穴からは少し光が漏れていたので、特に遠くからでもよく見えたのだ。

「オイ！銀次郎、、あそこに小さな穴があるだろ？？」
「そして、その先に突き当りが見えるだろ？いいか？ぜったいにあの穴には入るなよ」
「また変な干からびた奴連れて来たら、嫌だから。」
与助が後ろを振り向いて、銀次郎に念を押した。

「うん。わかっているよ。。。僕ももう懲りたよ。」
銀次郎も変な2人を助けて、花子と与助にグチグチ言われたのに懲りていた。

「よし！わかればいいんだ！！」
与助はそう言って、その小さな穴を見ないように通り過ぎようとした。
すると、
その小さな穴から、干からびたカエルの脚の先がチョイチョイ出たり、ひっこめたりしているのが視界の片隅に見えた。

オイオイ！今度は自分から足を出しているくるのか？？
与助はその干乾びた脚を横目で見ながら通り過ぎようとした。
すると、
その小さな穴から、干からびた脚がより激しくチョイチョイ出たり、ひっこめたりし始めた。

「与助、、、どうする？これ？」
銀次郎がその穴の前で止まり、チョイチョイ出たり、引っ込めたりしている脚を指差して聞いた。

「いや、、、またどうせ、、、変な奴だろ？」
「関わらないで行こうよ。干からびているけど、元気そうだし。」

与助がそう言うと、その脚がぐったりと動かなくなってしまった。

「ほら～、、与助、、可哀そうだよ～。助けてあげようよ。。。」
銀次郎がぐったりとした脚を指差して言った。

すると、うんうんと同意して頷くように、その干乾びた脚がまたチョイチョイ動くようになった。

「わかった、わかった。」
「じゃ、、助けよう！」
と与助が言った。

そして、しばらくそのままその脚をみんなで眺めていた。

・
・
・５分経過
・
・
・１０分経過
・
・
・

「オイオイ！！助けろよ！！！」
穴の中からカエルの声が聞こえてきた。

そして、穴の中から干からびたカエルが自分の力で這い出てきた。

「オイ！助けるって言ったろぉ～が～！！！」

干乾びたツチガエルが這いつくばった与助を見上げながら叫んだ。

「いや、、、なんか元気そうだし。。。ほらっ自分で出て来たし。。。」

与助が這い出てきたツチガエルを見下ろしながら呟いた。

「いやいや、、、こんな可愛そうな干からびたカエルがいたらふつう助けるだろうぉが〜！！！」

「でもね、、、ここに来るまでに2人助けたし、、、君はなんか元気そうだったしからね。。。」

「あと、これまで助けた奴がなんかね、、、あんなのでね。。」

「助けるのが少し嫌になっていたんだよ。。。」

そう言って、一番後ろの遠くにいるトノサマガエルと黄色いアマガエルを指差して言った。

干乾びているツチガエルが与助が指差した方向を見ながら

「そんなの関係ないだろ？？ふつうは助けるものだろぁが〜。。」と

強気に言ってきた。

「そうね〜。。。ごめんね！」

「じゃあ！」

そう言って、その場を去ろうとした。

「おいおい！ちゃんと聞いていたのか？ふつうは助けるだろ？？」

「うん。でも、ほら君は元気そうじゃないか。」

「どこが元気なんだよ。こんなに体が干からびていて。。。」

「わかった、わかった。。じゃ、水をかけてあげるからそれでいいかい？」

「最初っから、そうしてくれればいいんだ！！」

干乾びたツチガエルがプンプンしながら這いつくばっていた。

「銀次郎～。さっきのツユクサまだあったよね？あれを絞ってあげてよ。」

与助が後ろにいる銀次郎に声をかけた。

「わかったよ。」

そう言って、銀次郎がツユクサの茎を絞って、その干乾びていたツチガエルに水をかけた。

「ぶはっ！！！」

干乾びていたツチガエルが水を吸い、一気に膨らんで、上体を起こした。

「じゃ！」

与助がそう言って、その水を吸って膨らんだツチガエルに声をかけて先を進もうとした。

「いやいや！！ちょっと待てよ！！」

「なんだい？助けたからもういいだろ？」

「えっ！！そんな感じ？ふつうはさぁ～」

「助かってよかったね～　とか、生きていてよかったよ～とか、なんかそんな感じの会話みたいなのがあるもんじゃないのかい？」

「まぁ、ふつうはね。。。でも、ここに来るまでにもうそんなのは2回やったからね。。。」

与助がブツブツ言った。

「いやいや、そっちは2回かもしれないけど、俺からしたら初めてのことなんだ！！」

「助けてくれてありがとうよ～　みたいな感動的なセリフを言うチャンスだろう？？」

「まぁふつうはね。。。でもね～。。。もうそれは2回やったからね。。。」

「助かって、よかったよ。」

「じゃ！」

与助がそう言って先を進もうとした。

「オイオイ！なんなんだよ、、その感情のない棒読みの言い方は！！」

「もう、、よかったよ。ほんと！、よかったよ。じゃぁな！」

与助が先を進もうとすると、そのツチガエルがポツポツと話しはじめた。

「ここに来る前にはアカハライモリに惚れられてしまってな～。俺はほんとよくモテるんだ。それから逃げるためにここに入ったら迷ってしまってな～。俺は動きが速すぎるから、ふつうのカエルと違ってこんな狭い道は通り過ぎてしまうんだ。そして俺は体が大きいから、アマガエルにはわからないだろうけど、これまでも色々なところで危険な目にもあったけど、全部力で解決してきた。少しだけ俺の自己紹介をさせてもらったぜ。」

「ふ～ん。じゃ、もういいかい？」

与助が長い話しを一応聞いてから、聞いた。

「ん？？今の話しを聞いて、俺に関心持たないのか？？」

「関心？まぁ、なんとなくどんな人かはわかったからね。」

「そうか！！俺のことをわかってくれたんだな！」

「あ～、、まぁね。。。ただの、、、、、」

「見栄っ張りだね！」

「ん？？？」

妄想アマガエル日記（７１）－８月８日（木）晴れ

「オイオイ！俺のどこが見栄っ張りなんだ？？」

干乾びていたツチガエルが与助に言ってきた。

「まぁ、そう思ったんだからいいじゃない。あと、助かったんだしさ～」

「じゃ！」

そう言って、先を進もうとした。

「おい、ちょっと待てよ。なんなんだよ、、、その言いぐさは、、、」

「ところで、お前はここの出方を知っているのか？」

「まぁね。。。教えて貰ったからね。」

「それを早く言ってくれよ、、、」

「では、お供します！」

「・・・・まぁ、勝手にしてくれよ。」
与助は頭を掻いた。

与助を先頭に、銀次郎、小太郎、花子、日出夫、そして助けた変なカエル３人が後を付いて進んだ。

ペタペタ

穴の中はカエルの歩く音だけがこだましました。穴の先には小さな光が漏れていて、出口が近いことがわかった。

ペタペタ

まったく、、、真矢さんはなんであんな変な奴ばっかり好きになったんだろうな～、、
ナルシストのトノサマガエル、偉そうな黄色いアマガエル、そして、見栄っ張りのツチガエルか～、、、
与助は一番後ろについてくる３人のカエルをちらっと見て思った。

まぁでも、外に出たらアイツらにもう会うこともないから、、まぁいっか。と思っていた。

ペタペタ

出口が見えてきた。

そこは、木の根がコンクリートを割っていて、木の根とコンクリートの間に日出夫が通れるくらいの隙間が出来ていた。

「やっと出られるぞーーーー」
そう言って、与助が嬉しそうに後ろを振り向いた。

タッタッタッ

一番後ろを歩いていた3人のカエルが与助を追い越して、その穴から我先に出ようと走っていった。

タッタッタッ

あらーーー、そんな走らなくても、出られるだろうに、、
与助はその3人の後ろ姿を見て思っていた。

穴から3人のカエルが勢いよく飛び出し、光の中に消えて行った。

「せっかちなもんだね～。。」
銀次郎が先頭を歩く与助に呟いた。

「ほんとだよな～。」
与助も頷いた。

その瞬間、穴の先から
「ギャーーーーー」
という声が聞こえた。

「え？？アイツらどうしたんだ？？」

みんなで急いで出口に近づき、穴の外を見た。

「えっ！！」

妄想アマガエル日記（７２）　－８月１４日（水）晴れ

「えっ」

穴の外を見て、皆が声を合わせて驚いた。

穴のすぐ下に底が見えないくらい深そうな大きな井戸が口を開けていた。

「助けてくれ＝＝＝＝＝＝」

穴の底から黄色いカエルの声が反響しながら聞こえてきた。

「君はアマガエルだろ？？吸盤使って登れるだろ＝＝＝＝＝＝？」

与助が井戸の底に向けて体を井戸の縁から乗り出して声をかけた。

「それがな＝＝＝＝、さっきまで干からびていたらか、、吸盤が効かないんだ＝＝＝＝＝」

「あらま、、、、じゃ、水に体をつかってから吸盤が戻るのを待てばいいだろ＝＝＝＝＝！」

「他のツチガエルとトノサマガエルは大丈夫なのかい＝＝＝＝＝？」

与助がまた穴の底に向けて声をかけた。

「一応、大丈夫だけどな～。この壁は俺たちは登れそうにないな＝＝＝＝。ふっ」

確か、、あの最後のカッコつけて「ふっ」はトノサマガエルか。。。

与助は返事せずに、どっちが言ったのかを考えていた。

「聞こえているのか！！オイ！！」

今の偉そうな言い方は、、ツチガエルだな。。。

与助はまた返事もせずに、どっちが言ったのかを考えていた。

「お＝＝＝＝い。。。聞こえていますか＝＝＝＝？ちゃんと、まだそこにおられますか＝＝＝＝？」

「あぁ、、聞こえているよ。」

今のはツチガエルだな。与助は反響する井戸の中からの声の違いはわからないけど、言い方の違いで区別できるようになっていた。

「じゃ、、とりあえず、紐みたいなのを探してくるからさ～。。。もう少し、そのまま待っていてくれ！！」

与助が穴の底に向かって声をかけた。

「早くしてくれよ＝＝＝＝＝。。ここには何かがいるみたいなんだ！ふっ」

「あ＝＝＝＝、、わかったよ！」

与助はそう言って、後ろを振り返った。

「ということみたいなんだ。紐みたいなの探さないといけない。」

「そういわれてもね。。。ここはいったいどこなんだろ？」

花子は周囲を見渡して言った。

「そうだね～。。井戸があるなんて知らないよね～？？」

「小太郎、、、君は冒険家なんだから、知らないのかい？」

銀次郎が小太郎に聞いた。

「いや～、、、井戸なんて見たこともないよ。。。」

小太郎が申し訳なさそうに答えた。

「じゃ、日出夫は何か知っているんじゃないかい？」

与助が日出夫を指差して聞いた。

「それがね～♡　なんかあの柳の木は見たことがあるような気がするのよね。。。？」

「でも、井戸があるなんて、聞いたこともないのよね。。？」

日出夫も申し訳なさそうに答えた。

「柳の木ね～～？？」

与助は腕を組んで、その柳の木を見上げた。

「ん？？？」

与助と銀次郎が同時で目を見開いて、気づいた。

「オイ！！この柳の木は、あの柳の木じゃないのか？？？」

与助が銀次郎に聞いた。

「そうだよね？僕も今、ちょうどそう思っていたんだよ！！」

銀次郎も嬉しそうに答えた。

「ん？お前らはこの木を知っているのか？？」

小太郎は二人を見て聞いた。

「いや、、、小太郎も知っているだろ？？壁を登る練習をした塀を覆っていたあの柳の木だよ！！」
与助が柳の木を指差して言った。

「えっ！！そういわれたら、塀があるな、、」
小太郎は驚いた。

「ちょっと、その塀を登って向う側を見てくるよ！」
銀次郎がそう言って、塀をスルスルと登っていった。

「あーーーーー！！！！僕らの雑木林だ！！僕らの朽ち木もあるよ！！」
銀次郎が塀の上に登って、大きな声で叫んだ。

「真矢さんの言う通りだったんだな！！」
「本当に雑木林に着いたんだ。でも、こんな近くにこんな井戸があったなんて気づかなかったな！！」
与助が大きな声で塀の上にいる銀次郎に声をかけた。

「ほんとだねーーー。でも、この塀の上から見ると、その井戸はちょうどそこの草が邪魔になってまったく見えないから、気づかなくても仕方ないよーー。」
銀次郎も大きな声で返答した。

「なんか紐みたいなのは、そこから見てなんかないのかーーい？」
与助が銀次郎に大きな声で聞いた。

銀次郎が塀の上から下を見渡して、紐になりそうなのを探した。

「あっ！！日出夫の後ろにクズのツルが伸びているけど、あれは使えないかね？」
銀次郎が日出夫の後ろを指差して大きな声で言った。

与助が井戸から日出夫の後ろに移動して、そのクズを引っ張った。
「まぁ、これくらい頑丈で、長ければ使えるかもな！！」

「じゃ、皆でこのクズを引っ張って、井戸の中に垂らそうか！」
「銀次郎～～手伝っておくれ～～」
与助が皆に声をかけ、塀の上にいる銀次郎にも大きな声で声をかけた。

スルスルと地面に降りてきた銀次郎が、草木をぴょんぴょん飛び越えて、戻ってきた。

「よし！じゃ、このクズのツルを井戸の中に垂らそう！」
与助がそう言って、皆でクズのツルを井戸に運んだ。

「お＝＝＝＝い。今から紐を垂らすけど、、、いいか＝＝＝＝＝い？？」
与助が井戸の底に向けて声をかけた。

シーーーーーーーーん

「ん？？聞こえないのか＝＝＝＝＝？？」

シーーーーーーーーん

「ん？返事がない」
「何か、、あったのか？」

妄想アマガエル日記（７３）　－８月１５日（水）晴れ

「お＝＝＝＝＝い！！」
「なんかあったのか＝＝＝＝＝＝＝＝？？？？」
与助が穴の底に向かって、身を乗り出して声をかけた。

シーーーーーーーーん

「どうしたんだろう？？返事がないな～？？」
与助が振り返って、皆に言った。

「ちょっと、、見て来るしかないか。。。」
与助が腕を組んで少し悩みながら呟いた。

「そうだね。じゃ、僕も一緒に行くよ！！」
銀次郎が与助に向かって、一歩踏み出して言った。

「え！！あぶないんじゃないの？」
花子が銀次郎と与助を心配して声をかけた。

「まぁね。。。でも、僕らじゃないと、こんな壁は登ったり降りたりできないからね。」
銀次郎が井戸の中を覗きながら呟いた。

花子はその穴の底を覗く銀次郎の横顔を見て、惚れ直していた。

「じゃ、僕らに何かあったら、このクズのツルを3回引っ張るから、その合図が来たらツルを引っ張り上げてくれ。」
与助が、日出夫と小太郎に向かってお願いして、クズのツルを日出夫に手渡した。

「うん♡　わかったわ♡」
「でも、気をつけてね。何かあったら、私が飛び込んであげるわ♡」

「ハハハ、、、日出夫が飛び込んだら、井戸の水が飛び散って大変なことになるね。。あと、日出夫を井戸の底から引っ張り上げることなんて、俺たちにはできないよ（笑）」
与助がニコニコしながら日出夫に御礼を言った。

「よし、じゃ、銀次郎降りようか！！」

「うん、そうしよう。」

井戸の中は少し降りるとすぐに真っ暗になっていて、上を見上げると井戸の口に日出夫と小太郎と花子が心配そうな顔をして覗いているのが見えた。内壁にはコケが生えていて、岩の隙間からはシダも伸びていた。

スルスルと穴の底に向かって降りていった。

だいぶ下まで降りて来たようで、井戸の口はとても小さく、わずかに光が入っているのがわかる程度で、3人の顔は小さくて表情は見えなくなっていた。

「だいぶ、下まで降りてきたね。。」
銀次郎が与助に言った。

「ほんとだよな、、、そろそろ底についてもよさそうだけどな。。。」

その時に、掴んでいた岩が外れて落下して、与助は片手でクズのツルを命綱に体を支えいた。

ヒューーーーーん、、、チャッポン！

岩が落下して、溜まった水に落ちた。

「やっぱり、水はあるみたいだね。大丈夫かい？」

銀次郎が与助を見下ろしながら言った。

「そうみたいだな！ふ～あぶなかった。。クズのツルがあってよかったよ。」

与助は体をちゃんと支えて、底を見て言った。

スルスルとそのまま穴の底まで降りた。

「ん？？誰もいないね？？」

銀次郎が周りを見渡した。

「本当だね。。。お＝＝＝＝＝い！！」

「クズのツルはここに引っ掛けておこう。」

与助が周りを見渡して声をかけ、クズのツルを岩の隙間に引っ掛けた。

「返事がないね。。。」

「この水の底に沈んでしまったのかな、、、？」

井戸の底にはとても綺麗な透明な水が満々と溜まっていた。光はわずかに上から1本の光の線となって注ぐだけで、ほとんど真っ暗であった。

「ん？？あの底の脇になんか穴みたいなのがあるね！！」
銀次郎が水より少し高いところに横穴があるのを指差して言った。

「ほんとだね！！他に出口みたいなのはないから、あそこから出たのかもしれないな！」
「行ってみよう！」

そこは井戸の底の水が溜まったところの少し上で、井戸の壁の岩が崩れて開いた、横穴のような空間であった。

「おっ、、これは一応トンネルみたいになっているね。。」
銀次郎が周りを見渡しながら呟いた。

井戸の水面に当たった光がこのトンネルの奥まで反射して、ユラユラとした光がトンネル全体を照らしていた。トンネルの奥には少し広い空間が広がっているように見えた。

ペチャペチャ

2人の歩く音だけがトンネルの中に鳴り響いていた。
トンネルを銀次郎と与助がゆっくりと歩き、奥までついた。

そこには、あの3人のカエルが並んで座っていた。

与助がその3人を指差した。
「おっ！！いたいた！！」

「ほんとだ！！よかった、よかった！！無事そうだね！」
銀次郎も嬉しそうに答えた。

与助が３人のカエルに後ろから声をかけた。
「オイ！！大丈夫か？？」

３人が座っているその先に、ユラユラと光る光が差し込み、何かを浮き上がらせた。
銀次郎と与助はそれを同時に見て、同時に驚いた。
「ん？？？？？？？ありゃなんだ？」

妄想アマガエル日記（７４）－９月６日（金）晴れ

「ん？？？？？？？ありゃなんだ？」

銀次郎と与助は、３人のカエルの前にいる黒い影にゆらめく光が射しこんで、その黒い影の姿を浮かびあがらせ、その姿を見て驚いた。

そこには、真っ白い体をして、目が赤いカエルが立っていた。それが、こちらを向いていたのである。

「オイオイ！ありゃ、、トノサマガエルだよ、、、な？」
与助が銀次郎の顔を見ないで口をあんぐりとあけて小さな声で呟いた。

「そうだよね。。。？形は確かに、、、八助とかと同じだから、、、トノサマガエルだと思うけど、、、？」

「なんで、、あんなに全身真っ白いで、しかも、、、目が赤いんだろうね？？」

「そうだよな。。。でも、あれは、トノサマガエルなのは、間違いないよな。。。」

２人がコソコソと話しをしていると、２人に気づいたトノサマガエルが指差してきた。

「Hey！！、そこの青と緑のボーイ。なに、勝手に俺の部屋に入ってきて、コソコソ話しているんだい？？」

「ん？？俺がかっこよすぎて見とれていたって？？？」

「はぁ～～、、、まったく、、、それなら仕方がないか！！」

「まったく、、、俺のこのカッコよさは罪だぜ！！ケっ」

壁に手をかけ、反対側の手で頭を前から後ろに拭うように髪をかき上げるようにして斜め上を向いて遠い目をしながら呟いた。

「ん？？？俺たち、なんか言ったか？」

「いいや、、、何も言ってないよね。。」

２人が顔を見合わせてコソコソと小声で話した。

「Hey！！、青と緑。どうせ、俺様のことをまた褒めているんだろうから。もっと大きな声で話してもいいんだぜ！！けっ」

「いや、、、何も言ってないんですよね。。」

銀次郎が申し訳なさそうに答えた。

「Hey！！、緑、そんなに恥ずかしがらなくてもいいんだぜ！！」

「正直になればいいんだ！！俺は超超超珍しいアルビノだぜ！！」

「ほらっ、こいつらも、もう俺にメロメロなんだ。」

そう言って、座っている３人を指して胸を張った。

「オイ！お前らはいったい、そこで何してんだよ？」
「助けに来たんだぜ！！」
与助が3人に近づいて声をかけた。

「いや～～、この方があまりに素晴らしくてな、、見とれていたんだよ。」
ツチガエルが座りながら答えた。

「ほんと、、、俺なんか、、、黄色だからって自信もっていたんだけど、、こんな珍しいアルビノのカエルがいるなんてな、、なんか自信なくしちゃってさ～」
黄色いアマガエルが下を向いて落ち込んでいた。

「ほんとだよな、、、俺は、、この世で一番かっこいいトノサマガエルだと思っていたんだけどな、、上には上がいるってことさ。。。はぁ。」
トノサマガエルも下を向いて落ち込んでいた。

「Hey！！緑と青。君たちも俺にひれ伏せよ！！」
「俺の、このカッコよすぎる姿や珍しい体の色なんて見たら、もう足がすくんでうごけないだろ？？」
「まったく、、、困ったもんだぜ！！けっ」
上を見上げながら、頭を掻いて、目を二重にしながらこちらを見つめてきた。

「はぁ、、、、じゃ、帰るか。」
与助が振り返って銀次郎に言った。

「そうだね！じゃ、あとは4人で仲良くやってね！」

「おいおい！！お前らは、俺のこの素晴らしい姿を少しでも長く見ていたいとか、俺と仲良くなりたいとか、俺のことを教えて欲しいとか、、ないのか？」
トノサマガエルが少しうろたえながら与助に聞いた。

「そうだね、、、、、、、」
「ない！」
「まったく、興味ない！」
きっぱりと答えた。

ガーーーーーーーーン！！！！
アルビノのトノサマガエルが初めてのことでショックを受けて口を大きく開けて立ちすくんだ。

「じゃ、帰ろう。」
与助が銀次郎に呟いた。

「ちょっと、待てよ！！」
「無理しているんだろ？？本当はこの方をもう少し見ていたいだろ？？」
黄色アマガエルが立ち上がって聞いてきた。

「いや、、、、本当に、興味ないよ！！」
「な？銀次郎？」

「そうだね。あの人には悪いけど、、、、興味ないんだよね。ごめんね。」

ガーーーーーーーーーン！！！！
黄色のアマガエルもショックを受けて立ちすくんだ。

黄色アマガエルの姿を見たアルビノのトノサマガエルが我に返って、もう一度与助に聞いてきた。
「君たちは、俺のこの透けるような綺麗な皮膚を見て、何も思わないのかい？見たことないだろ？？」

「そうだね、、、」
「君は手に吸盤がないからたぶんこの井戸から外に出たことがないのだろう？たぶん、日光に当たったことがないから、そんな不健康な色をしているんじゃないかと思ったよ。」
「どうだい？一緒に外に出てみないかい？協力するよ？」

銀次郎も与助が言ったことに頷きながら
「そうだね。。。出てみようよ。」
「このままだと、君は、、ずっと井の中の蛙だよ？」

妄想アマガエル日記（７５）－１０月５日（土）曇り

「井の中の蛙？」
「Hey! 青、、、、井の中の蛙ってのはどういうことだ？」

「いやね、、君は生まれてずっとこの井戸の中にいるんだろ？」

「まぁ、そうだな。」
「俺はこの井戸でオタマジャクシの頃を過ごして、ここでカエルになったからな。」

「つまり、君はさぁ、、、この井戸の中の世界からしか知らないだろ？」

「ん～、、まぁ、そういわれたらそうだな。」

「でも、まぁ、井戸の中と外なんて、たいして違いなんてないだろ？」

「いやいや、、、世界は広いのだよ！！」

「井戸の外には、赤や白の綺麗な花が咲き乱れる花壇があったり、とてつもなく大きな黒い建物があったり、いろいろな虫や草があるんだ！」

「そうか。。。まぁ、そうかもしれないな。。。」

「でも、俺はここから出られないんだ！！」

「君の手には吸盤がないから、この井戸を登れないってことだろ？？」

「まぁ、、、それもあるな。」

「ん？？他にも、ここから出れない理由があるのかい？」

「まぁな、、、、、」

「何があるんだい？」

「まぁ、言いにくいことだったら、別に無理に言うことはないのだけど。。」

アルビノのトノサマガエルは天井を見上げて、眉間にしわを寄せて、腕を組んで、真剣な顔で考え始めた。

「まぁね、、、無理に出る必要はないさ！！」

考え込むトノサマガエルを見て、銀次郎がとっさにフォローした。

「そうだな！別に無理に出ることはないか！」

「まぁ、君はここから出なくても困ってないのなら、他人の俺らがとやかく言うことじゃなかったな！！なんか、、変なことを言って悪かったな。」

与助がトノサマガエルの肩を叩きながら、謝った。

トノサマガエルは与助の声が聞こえないほど、眉間にしわを寄せて、うなりながら考え込んでいた。

「おい、、、与助。。。あんなに考え込んでさぁ。。。たぶん、ここから出れない理由ってのは、俺らに言えないような、、相当大変な理由なんだろうな。。。」

「変なこと言っちゃたね。」

「そうだな。。。。」

トノサマガエルは、さらに頭を左右に振りながら、眉間に指を当てて、さらにうなりながら考え込んでいた。

「おい、、、大丈夫かい？？」

与助が考え込むトノサマガエルを心配して声をかけた。

「どんな理由か知らないけどさぁ、、、何か力になれるかもしれないから、僕たちに言ってみるってのも一つの方法かもしれないよ！」

銀次郎はそれほど考えこむ井戸から出れない理由が知りたくなってきていた。

「まぁ、、、そうだな！」

「俺たちに言ってみたら、すっきりして決断できるかもしれないな。。。」

与助も銀次郎同様、理由が知りたくなっていた。

そして、周りにいた3人のカエルもまた、ここから出れない理由を知りたそうに見つめていた。

「そうだな。。。。」

「お前たちに、俺がここから出れない一番の理由を聞いてもらうってのも、、、まぁ、いいかもしれないな。。」

アルビノのトノサマガエルが皆を見渡して、少しすっきりした顔をしていた。

・
・
・

「俺が、ここから出れない一番の理由はなぁ、、、、

「お＝＝＝＝＝＝＝い、銀次郎ぉ～～～、、、与助ぇ～～大丈夫か＝＝＝＝＝＝」

井戸の上から小太郎が心配して大きな声をかけてきて、トノサマガエルの声を遮った。

「え！！え！！聞こえなかった！！大事なところが聞こえなかったよ！！聞こえた？」

銀次郎が与助を振り返って聞いた。

「いや、、俺も小太郎の声でまったく聞こえなかったよ。」

「君たちは聞こえたかい？？」

周りにいた3人のカエルもまた渋い顔をして、首を横に振った。

「あのさぁ、、、アルビノトノサマさん。。。大事なところがね。。僕たちの友達の小太郎の声でさぁ、、聞こえなかったんだよね。。ごめんね。。もう一回、教えてくれない？？」

銀次郎が申し訳なさそうにアルビノのトノサマガエルに話しかけた。

「ん？？せっかく意を決して言ったのに、、、ちゃんと聞いとけよ！！」
アルビノのトノサマガエルが少し怒って銀次郎に言った。

「ごめんね、、さっきの声はね。井戸の外で僕たちを待っている小太郎ってヌマガエルなんだけどね。僕たちのことを心配して声をかけてきてくれたんだよ。ごめんね。。。」

「まぁ、そういうことなら、、、仕方ないか。。」
「じゃ、次はちゃんと聞いといてくれよ。。あまり言いたくはないんだ。。」

「うん！わかったよ。ごめんね。。」

・　・　・

「ゴホン！」「俺がここから出れない、一番の理由はなぁ、、、、
「お＝＝＝＝＝＝＝＝い、銀次郎ぉ～～～、、、与助ぇ～～返事しろよ＝＝＝＝＝＝＝＝、、、大丈夫なのか＝＝＝＝＝＝」

またちょうど、アルビノのトノサマガエルが大事なことを言うタイミングで小太郎が声をかけてきて、かき消されてしまった。

「アルビノトノサマさん、、ごめんね。。。本当に、、ごめんね。。。もう一回、もう一回お願い。。」
「間を開けずに言ってくれたら、今度は小太郎の声と被らないと思うから、お願い！」
銀次郎がアルビノのトノサマガエルに頼み込んだ。

トノサマガエルも状況は分かっていたし、銀次郎と同じように思っていたので、何も言わずにもう一度間を開けずに言った。

「俺がここから出れない、一番の理由はなぁ、、、
「お＝＝＝＝＝＝＝＝い、返事してくれよーーーーん＝＝＝＝＝」

また、小太郎の声でかき消されてしまった。

・
・
・

そして、井戸の中にいた皆が少し沈黙した後、声を合わせて言った。

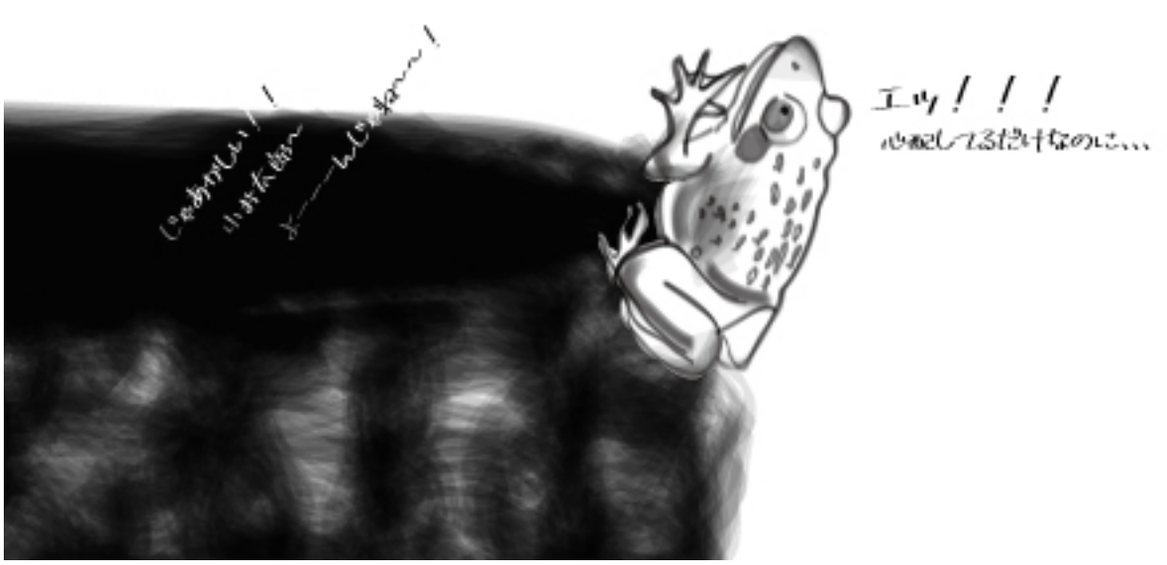
「じゃかあしい！！！小ぉ太郎＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝！！！！！」
「よーーーーん、じゃねーーーーー！！！！！！！」

その声が井戸の中に響き渡った。

妄想アマガエル日記（７６）－１１月９日（土）晴れ

井戸の中は小太郎に文句を言った後、少し沈黙していた。
なんだか、皆 少し疲れていたのである。

銀次郎が少し気まずそうに、アルビノのトノサマガエルに話しかけた。
「あのさぁ～、、、、たぶんさぁ～、、、もう小太郎は邪魔しないと思うからさぁ～ここから出れない理由を話してくれないかい？」



与助もそれをフォローするように話しかけた。
「小太郎は俺たちを心配してくれて、声をかけてくれたんだけどね。。。なんかあんな言い方して悪かったけど、たぶんもう声かけてこないと思うんだよ。。」

「あ～、、わかったよ」
アルビノのトノサマガエルはうつ向いたまま返事をした。

与助は振り返り、銀次郎に小声で話しかけた。
「小太郎には帰ってから事情を話して、謝らないといけないな。」
「心配してくれたのに、あんな言い方してしまったからな。。」

「ほんとだね。あれはよくなかったよ。。。」

「じゃ、俺がここから出れない一番の理由を皆に話そう。今度こそは。」
アルビノのトノサマガエルが顔を上げて、皆を見渡しながら言った。

「うん、頼むよ。」
銀次郎が唾を飲んで返事をした。

「俺がここから出れない、一番の理由はなぁ、、、

「こらぁ＝＝＝

＝＝！！！　返事しろ＝＝＝＝＝！！」

井戸の外からの花子の声が井戸中にこだまし、何も聞こえなかった。

銀次郎、与助、そしてほかのカエルたちも、肩を落としてシュンとした。

「返事しなさぁ＝＝＝＝＝い！！！」

花子の声が井戸中にこだましていた。

「ごめんよ＝＝＝＝＝＝！！」

「ごめんよ＝＝＝＝＝＝＝！！」

銀次郎と与助が大きな声で返事をした。

「反省しろ＝＝＝＝＝＝＝！！！」

花子がまたそれに答えて声をかけてきた。

「はい＝＝＝！！！反省しま＝＝＝＝す！！」

銀次郎が答えた。

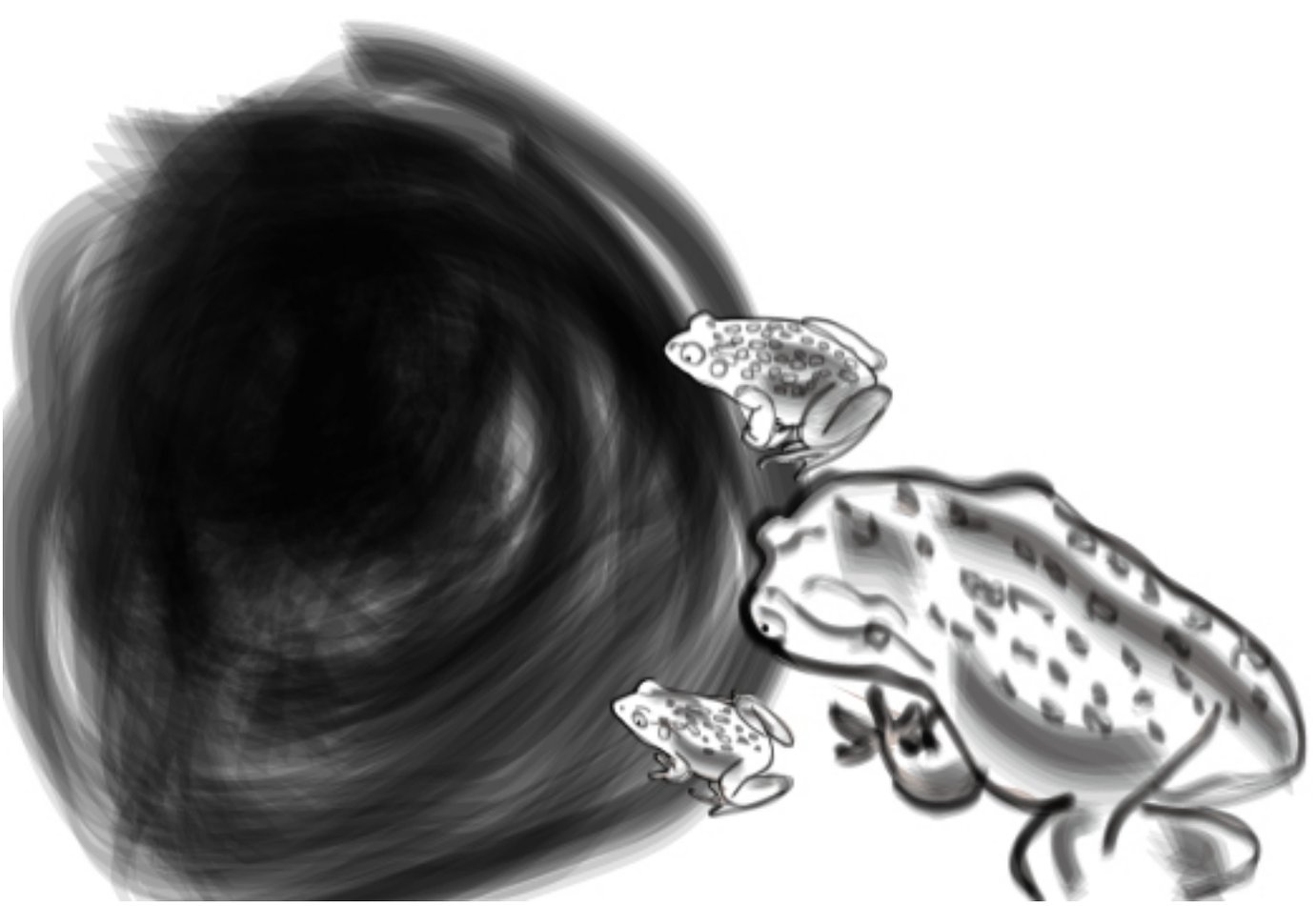
「よし！！なら、許してあげるわ＝＝＝＝♡」

「気を付けて帰っておいでよ＝＝＝＝！！」

「へ＝＝＝＝い」

銀次郎が頭を掻きながら返事をした。

「オイオイ！！今のはなんだ？？」



アルビノのトノサマガエルがうろたえながら聞いてきた。
「ん？？今の？？今のはねぇ、、僕たちの友達のツチガエルの花子だけど？？」
銀次郎が返事をした。
「あれは、、、女だろ？？」
「うん。そうだよ。ツチガエルの花子」
「・・・・・・」
「どうしたんだい？？アルビノトノサマさん？？」
「俺がここから出れない、一番の理由はなぁ。。。。女なんだ。。」
「ん？？どういうこと？？」
・
・
・
「俺はこんなにかっこよすぎるだろ？」
「外の世界には女のカエルがいるだろ？そしたら、どんなことになると思う？」
「ほら、、、俺はモテすぎてしまうから、外の世界が大変なことになってしまうだろ？」
「はぁ～、、そうですかね。。」
銀次郎が少し呆れて返事をした。



「おい！緑。お前はまったくモテないだろうから、俺みたいな心配は微塵も考えなくても呑気に生きていけると思うけどな。。。俺を見てみろよ！！こんな美しいカエルが地上に降り立ったらどうなると思う？？」

銀次郎がさらに呆れて返事をした。

「はぁ～、、、アルビノのトノサマガエルだと思うんじゃないですか？」

「お前はなんて馬鹿なやつなんだ！！」

「こんな美しいカエルが地上にいるか？いないだろ？そしたら、地上の女カエルがみんな俺のところに来てしまうだろ？もし、この井戸に戻ったとしても女カエルが井戸に入って来てしまうだろ？そしたらどうなると思う？」

「はぁ～、、、賑やかになりますかね、、？」

銀次郎はもうどうでもよくなってきた。

「緑、お前はなんて馬鹿なやつなんだ！！」

「この井戸が女カエルでいっぱいになってしまって、もしかしたらあふれてしまうだろ？そしたら、俺はその重みで潰されてしまうかもしれないだろ？？」

「はぁ～、、、この井戸かなり広くて深いですけど、、、？」

「まったく、、、お前ってやつは。。。」

「何千、何万という女カエルが来るだろ？？そしたら、こんな井戸くらいギュウギュウにいっぱいになってつまってしまって、あふれてしまうさ！！」

「少し想像したらわかるだろ？？」

「はぁ～、、、」

銀次郎はアルビノのトノサマガエルとのやり取りに疲れてしまっていた。
また、井戸から出れない理由を聞いた与助やその他のカエルたちも一気に疲れてしまっていた。

「なんか、、一緒に井戸を出ようなんて変なことを言って悪かったね。じゃ、、、君はここに残って頂いて。。。ほかのカエルたちもここに残ったらいいよ。」
「では、俺たちは帰りましょうかね。。銀次郎さん。皆も心配してくれているようだしね。」

「そうですね、与助さん。なんか、疲れたですね。」

「ほんとですね、銀次郎さん。俺もなんか疲れました。」

そう言って、背中を丸めながらその場を去ろうとすると、
「ちょっと待てよ！！俺は悩んで悩んでここから出れない一番理由をお前たちみたいなはじめて会った奴に言ってやったんだぞ！！」
「ここまでさせておいて、はい、さよなら！じゃ都合がいいだろ？？」

「まぁ、そう言われてもですね。。。すみません。。」
あんなクソみたいな理由とは思いませんでしたから、、、と思いながら、銀次郎が謝った。

「俺は決めたぞ！！ここから出るぞ！」

妄想アマガエル日記（７７）－１２月３日（火）晴れ

「俺は決めたぞ！！ここから出るぞ！」

「えっ！！」
「いやいや、、、無理にここから出なくていいと思うよ！ね？与助？」
「あぁ、、、そうさ！君がここから出たら、外の世界が大変なことになるから、ここに彼らと一緒にここにいたらいいさ！」
与助はアルビノのトノサマガエルの横にいる3人のカエルを指さして言った。
「いや、、俺は決めたんだ！」
「お前たちのお陰だ！」
アルビノのトノサマガエルは与助と銀次郎の肩を強く握りながらお礼を言った。
与助と銀次郎は顔を見合わせて、困ったなとアイコンタクトを取った。
「まぁ、すぐに決めなくていいんじゃないかい？君が外の世界にでたら大変なことになるかもしれないからさ。なぁ？銀次郎ぉ？」
「んん？？そうだね！そうだよ！」
「大変なことになっちゃうよ！！今夜一晩くらい考えてみたらどうだい？？」
「まぁ、そうか！お前たちみたいなモテない奴らからは想像できない事態が起こるかもしれないからな。もう少し作戦を練ってから、外に出るというのも必要かもしれないな！！」
アルビノのトノサマガエルは納得して答えた。
それを聞いて、ほっと安心した与助と銀次郎はゆっくりと近づき、小声で話しあった。
「おい？どうする？アイツと一緒に出てみろよ。。。花子とか小太郎たちに偉そうなことを言うぞ。。。」

「あの変な3人のカエル以上の奴だから、また花子とか小太郎たちに文句言われるぞ。。。」

「確かにね、、、与助のいう通りだよ。。。」

「あの3人のカエルの時で僕はもう懲りたよ。。。」

「でも、もしあの4人を連れて外に出たら、、、いろいろな面倒なことになるのは間違いないけど、、、でも、ここに置いていくのは可哀そうだよね。。。？」

「確かにな。。。。」

「あの偉そうな黄色いアマガエルは足に吸盤あるから自分で出ることができるからいいとして、、、ナルシストのトノサマガエルと見栄っ張りのツチガエルは自力でここから出れないから、出してあげた方がいいかもしれないな。」

「まぁ、あのアルビノトノサマさんは、ずっとここで暮らしていたようだから、別に出なくてもいいとして。。。。」

「そうだね。。。じゃ、とりあえず、あのナルシストトノサマさんと見栄っ張りツチガエルさんにどうしたいか聞いてみようか？」

「そうだな。」

そう言って、アルビノのトノサマガエルに気づかれないように、ナルシストのトノサマガエルと見栄っ張りのツチガエルが並んで立っているところにゆっくりと近づいた。

「あのさぁ～。。君たちはここから出たいのかい？」

与助が手前にいたナルシストのトノサマガエルに声をかけた。

「ん？そりゃ、出たいに決まっているだろ。ふっ」

トノサマガエルが髪をかきあげるような仕草をしながら言った。

「そうなんだね。わかったよ。」

与助と銀次郎がうなずいた。

「おいおい！俺には聞かないのか？」

見栄っ張りのツチガエルが身を乗り出して言ってきた。

「ん？君もでたいんだろ？違うのかい？」

与助が少し驚いて聞いた。

「あぁ、出たいに決まっているだろ！！」

なんなんだ、、？このやり取りは、、、

与助と銀次郎は少しめんどくさくなってしまった。

「あぁ、、、わかったよ。じゃ、君たちはどうにか外に出そうじゃないか！君はどうなんだ？」

与助が少し離れているところにいた黄色いアマガエルに聞いた。

「あぁ、、、まぁ、俺はいつでも自分で出れるからな、、、」

「お前たちの力なんて借りなくていいさ。へっ」

「あぁ、、そうかい。」

与助と銀次郎は感情なく、同時に答えた。

そうだったな、、、こいつらも面倒な奴だった。

与助と銀次郎は、２人同時に思った。

妄想アマガエル日記（７８）　１月９日（木）曇り時々雪

「Hey!! そこの緑と青、何コソコソ話しをしているんだ？？」
アルビノのトノサマガエルがコソコソ話している銀次郎と与助を指さして口をとがらせながら言ってきた。
「あっ、すまないね。君が外の世界に出たら大変なことになるだろうなってことを銀次郎に話していたのさ。」
「なぁ？」

「ん？？そ、そうなんだよ！なぁ、与助。うんうん。」

「あ～そうか！そうだよな～。。」
「ほんと、お前たちみたいなモテない奴にはわからない苦労があるんだよ。。そんな苦労、想像できないだろうな～」
アルビノのトノサマガエルは腕を組んで、眉間に皺を寄せながら見下しながらつぶやいた。

「あ～そうだね！ほんと、そうだよ～。。」
「ほんと、君のような人を連れて外に出たら、外で待っている友達になんて言われるのか。。想像しただけで苦労しそうだよ。。。」
銀次郎も腕を組んで、眉間に皺を寄せながら見上げながらつぶやいた。
与助は銀次郎が言うことに同調して、同じように腕を組んで見上げながら想像していた。
そして、二人とも同じことを考えていた。
あの変な３人だけじゃなくて、このスゴイのも連れて外に出たら、小太郎と花子になんて言われることだろう～？

なんでこんなの連れて来たのか？って文句言われるのは間違いない。
また初めての外だろうから、しばらくの間このスゴイのと一緒に暮らさないといけないだろうから、その間　小太郎と花子にチクチク文句を言われるだろうな～。。いや～それは困るな～～。

銀次郎と与助は腕を組んで、眉間に皺を寄せながら顔を見合わせた。

「おい、どうする？」
「そうだね、、どうしようか？」

「まぁ、とりあえず、ナルシストのトノサマガエルと見栄っ張りのツチガエルだけはどうにかしよう！」

「そうだね。いつまでもここにいるわけにはいかないからね。」

そう言って、ナルシストのトノサマガエルと見栄っ張りのツチガエルに近づいていった。

「君たちは今から外に連れて行くけど、いいかい？」
与助が二人に声をかけた。

「ん？今から、あぁ、、いいさ。ふっ」
ナルシストのトノサマガエルが答えた。

「あぁ、俺もだいぶここには長居したから、もう出るぞ！腹も減ったしな！」
見栄っ張りのツチガエルも答えた。

与助が振り返って、アルビノのトノサマガエルに近づいて小声で言った。
「じゃ、アルビノトノサマさん、これからあの二人をまず外に連れて行ってくるからさぁ、君はもう少し じっくり考えといてく

れないかい？」

そして、さらにぐぃと近づいて耳元で小声で言った。

「君はあの２人なんて、比べ物にならないくらいスゴイから、君が外に出たらあの２人と違って外の世界が大変なことになるからさぁ～。じっくり考えてくれよ！」

「あぁ、そうだな。じっくり考えないとな！」

返事を聞いた与助はニコッと笑って、銀次郎の方に近づいた。

「よし！じゃ、あの二人を連れて、外に出よう！」

「あっ！そうだね。」

「アルビノトノサマさんはいいのかい？」

「あぁ、すべて丸く収まったよ！」

与助はニヤッと笑って返事した。

そして、与助を先頭に銀次郎、ナルシストのトノサマガエル、見栄っ張りのツチガエルの順に歩いて井戸の底に繋げてあったクズのツルのところまで連れていった。

そして、井戸の底から上を見上げると光が刺していたが、小太郎や花子の姿は見えなかった。

「じゃ、いいかい？」

「まずはトノサマガエルさん、このツルにこんな感じで掴まってくれるかい？」

与助がクズのツルを持ちながらナルシストのトノサマガエルに説明した。

「あぁ、こうかい？これでいいか？ふっ」

「あぁ、それでいいよ。じゃ、そのツルを3回引っ張ってみてくれよ。」

「こんな感じかい？1、2、3。ふっ」

しばらくすると、スゴイ勢いでクズのツルが引っ張りあげられて、トノサマガエルの姿が光の中に吸い込まれていった。

「おい、、！スゴイな、、あれは。。。」

見栄っ張りのツチガエルがその様を見上げながら驚嘆していた。

「まぁね、上には日出夫がいるからね。」

銀次郎も見上げながら嬉しそうに説明した。

しばらくすると、上から小太郎が身を乗り出して言ってきた。

「一人無事上がってきたぞ＝＝！！」

「またクズのツル落とすけど、いいか＝＝＝？」

「あ＝＝、お願＝＝＝＝い！！」

銀次郎が手を振りながら言った。

クズのツルがスルスルと落ちて来たので、それを銀次郎がキャッチしてそれを見栄っ張りのツチガエルに手渡した。

「さっきの見てたから、やり方はわかるよね？」

「あぁ、こうだろ？」

「あぁ、それでいい。じゃ、３回引っ張ってくれよ。」

すると、またスゴイ勢いでクズのツルが引っ張りあげられて、ツチガエルの姿が光の中に吸い込まれていった。

それを見届けて、銀次郎と与助は壁を登り始めた。

そして、しばらくして２人も井戸から外に出た。

「ふ～～、やっと戻って来れたな！」

「ほんと、そうだね。なんか長く感じたね。」

与助と銀次郎は外の世界を見渡しながらつぶやいた。

そして、花子と小太郎と日出夫が嬉しそうに２人に近づいてきた。

「おかえり！」

「ただいま！」

妄想アマガエル日記（７９）－１月１０日（金）曇り

「なかなか戻ってこないから、心配したよ！」

小太郎が嬉しそうに二人に話しかけた。

「あぁ、、、ごめんね。下で色々あってね。。」

銀次郎が申し訳なさそうに答えた。

「色々ってのは、あいつらとか？」

少し離れたところにいるナルシストのトノサマガエルと見栄っ張りのツチガエルを指さして聞いた。

「まぁ、彼らもなんだけどね、、、彼らなんかよりスゴイのが下にはいてね。。。。」

「へぇ～、、、あれよりスゴイってのは、何がスゴイんだ？」

「いやね、、、彼らはそれぞれがナルシストとか見栄っ張りとか偉そうとかだったでしょ。。。下にいたのはね。。にしたようなのでね。。。ほんと、スゴかったんだよ。。」

「へぇ～、、そりゃ～～スゴイな！！」

「そういえば、もう一人はどうしたんだい？黄色いアマガエルは？」

「あぁ、、彼は自分で壁を登れるから、僕らの助けなんていらないって言っていたから、置いて来たんだよ。」

「そっか。アマガエルなら、登って来れるもんな。」

小太郎は腕を組みながら、銀次郎の話をうんうん頷きながら嬉しそうに聞いていた。

その横で与助も嬉しそうに話しを聞いて、花子や日出夫もその様子を嬉しそうに見ていた。

「おい！！俺は腹減ったから、帰らせてもらうけどいいか？」

見栄っ張りのツチガエルが後ろから声をかけてきた。

「あぁ、もちろんさ！その奥に行くと小さな虫が多い雑木林があるからそこに行って餌を食べたらいいさ！じゃな！」

与助が雑木林を指さしながら与助が言った。

「あぁ、そうさせてもらぜ！じゃな。。。。。」

「いろいろありがとな。。。」

見栄っ張りのツチガエルが、少し恥ずかしそうにボソッとお礼を言って雑木林に走って行った。

「じゃ、俺もあの雑木林に行ってみるか。じゃ、サンキューな。」

「そこのツチガエルのガール。俺に惚れているようだけど、、、またな。ふっ」

そう言って、ナルシストのトノサマガエルは、見栄っ張りのツチガエルの後を追った。

「ふ〜〜〜〜〜、やっと、あの変なカエルたちと、おさらばできたな。。。」

与助がすっきりした顔で皆に言った。

「ほんと、、あの人たちはすごかったね。。」

花子が雑木林に走っていく2人のカエルを見ながら言った。

「ほんと、、、。でもね、、、さっきもちょっと言ったけど、井戸の中にはもっともっとスゴ、、、」

銀次郎がそう言いかけたとき、井戸の中からぴょんと黄色いアマガエルが登って来て顔を出した。

「えっ！もう出てきたのかい？？」

与助が驚いて話しかけた。

「あぁ、一旦な。」

「あの方が色々と考えられてな。ついに！外に出ることに決めたようなんだ。だから、手伝ってほしいんだ！」

「えっ！！」

「えっ！！」

それを聞いて、与助と銀次郎は顔を見合わせた。

与助は思った。

最後に、あれだけおだててあげたから、一晩くらい考えると思ったんだがな。。。。そしたら、そのまま逃げれると思ったんだけどな。。

甘かった。。。困ったな。。

銀次郎は思った。

与助は、丸く収まったって言っていたから、何か策があるんだろうな。。。。これも、たぶん想定内のことなんだろうな。。

さすが与助だ。。。頼もしいな。。

２人は顔を見合わせたまま。

妄想アマガエル日記（８０）－１月１１日（土）曇り

「おい！早く来てくれよ！！」

黄色いアマガエルが井戸の中に体を残して手だけだして、２人に手招きしながら言ってきた。

「わかった、わかった。」

与助が振り返り黄色いアマガエルに返事をした。

「銀次郎、、どうする？」

「えっ、どうするの？」

「仕方ないから、とりあえず降りてみるか。。」
そういいながら、与助はいろいろと考えた。
どうしらいいかな。。。？？　まぁ、彼もあそこにずっといるのは可哀そうだからな、、。とりあえず、外に出してあげて、あとはこの黄色いアマガエルがどうにかしてくれるだろうから、いいっか。

「あっ、そう？じゃ、そうしようか。」
銀次郎は与助は何か考えがあると思って返事をした。

小太郎と花子、日出夫はその様子を少し心配そうに見ていた。

「じゃ、とりあえず、また井戸の底に行ってくるよ。またツルを3回引いたら引っ張り上げてくれる？」
与助が皆に声をかけて、クズのツルを井戸の底に落とした後に、井戸の壁を降りて行った。そして、その後を銀次郎も追った。

しばらく、壁を降りていくと井戸の底にはアルビノのトノサマガエルが見上げて待っているのが見えた。光がその真っ白い体に当たり、真っ暗な井戸の底に光輝いているカエルが浮き上がっていた。

「Hey!!　青、遅かったな。」

「あっ、悪かったね。一晩くらい考えるんじゃなかったのかい？」
そういいながら、井戸の底に降り立った。

「あの後、いろいろと考えてな。お前があの2人と比べると俺が偉大すぎるみたいなことを言っていただろ？」

偉大なんて言ってないけどな。。。

「あぁ、なんかそんなことを言ったかな。。」

「あれを聞いて決めたんだ。」

「あんな奴らが外の世界に行っているのに、この偉大な俺がここにずっといるのは世のためにならないってことにな。外の世界に出たら、大変なことになるかもしれないけど、世のために何かやらないといけないだろ？それが偉大な者の宿命だろ？」

「だから、外に出てやることにしたんだ。」

「はぁ、、、」

与助は後悔していた。

ふつうの奴ならあんなこと言われたら調子に乗ってその気になって一晩くらい考えてくれると思ったんだけどな。。こいつは、、想像以上だったんだな。。

「おっ、ここで待っていたんだね。」

銀次郎も井戸の底に降り立ってアルビノのトノサマガエルに声をかけた。

「あぁ、この偉大な俺様がお前たちを待ってやっていたんだからな、ありがたく思えよ。」

「はぁ、、」

与助は、いったいどんな考えがあるんだろうな～？？さすがに、こんな人を外に連れて行ったら小太郎とか花子とかが怒っちゃうと思うからな。。

「与助、、これからどうするんだい？」

銀次郎が与助に近づいて小声で聞いた。

「まぁ、この人もずっと一人でこの井の中にいたわけだから、このままここにいるのは可哀そうだろ？たぶん、外に出してもあの黄色いアマガエルがどうにかしてくれるだろから、俺たちは、すぐにおさらばすればいいだろ？」

「そういうことか！！」
「さすが！与助だな。ここまで読んでいたんだね！」

「ん？？　読む？」
「あ、あぁ、、まぁ、、、そうだな。すべて俺の想定通りってわけさぁぁぁ。」

「さすが！与助だよ。ほんと、これですべて丸く収まるってわけだね！！」

「ん？？　丸く収まる？」
「あ、あぁ、、そうだろ。。そうなんだよ、、。」
あとに引けなくなった与助は、狼狽しているのがばれないように取り繕いながら答えた。

「Hey!! 緑と青、コソコソ話していないで、外に出る方法を教えろよ。」

「あぁ、ごめんごめん。じゃさ、こうやって、このツルを体と手に巻いてくれるかい？」
・
・
「いや、いや、、そうじゃなくて、こうやって、こうだよ。」
・
・
「おい、銀次郎手伝ってくれないかい？」

「まったく、、お前は教え方が悪いんだよ！！」

「はいはい、、よし、これでいい。じゃ、銀次郎離れてくれ。」

「じゃ、そのツルを3回引っ張ってくれないか？」

「こうか？1、2、3回」

すると、スゴイ勢いでツルは引き上げられて、光の中にアルビノのトノサマガエルが吸い込まれていった。

その姿を見届けた後に、与助と銀次郎、そして黄色いアマガエルは壁を登って井戸の外に出た。

井戸の外に出るなり、小太郎が走って近づいてきた。

「オイオイ！なんかすごいのが出て来たけど、あれか？さっき、銀次郎が言っていたのってあれのことだろ？あれは、スゴイな。。」

「そうだろ？まぁ、でも、俺たちはここで彼らとはおさらばしてお別れするから大丈夫・・・・・」

与助がそう言いかけると、最後に井戸から出てきた黄色いアマガエルが皆を見渡して、話しかけた。

「じゃ、俺は自分のところに帰るとするよ！！　腹へったしな。あの方のことは頼んだぞ！またいつか会えたらいいな！」

「じゃ、いろいろありがとうな！青色のお前も、まぁ、黄色のいや金色の俺よりは珍しくないけど、それなりに珍しいから頑張れよ。」

そう言って、ぴょ～んとジャンプして草むらの中に一瞬で消えていった。

その姿を与助と銀次郎は立ちすくんで眺めていた。

妄想アマガエル日記（８１）－１月２８日（火）曇り

井戸の縁に立ちすくむ与助と銀次郎を小太郎は下から見上げていた。

与助も銀次郎も黄色のアマガエルが消えて行った先の草むらを遠い視線で眺めていた。

「おい！！与助、銀次郎？？どうしたんだ？」
立ちすくむ2人を見上げながら心配になって声をかけた。
しかし、彼らは返事もしないし、こちらを向こうともしない。そこで、井戸の縁によじのぼり、与助の右腕のあたりを人差し指でツンツンしながらもう一度声をかけた。
「おい！！どうしたんだ？？あの変なのはどうするんだ？？」

「あっ！！ごめんごめん。ちょっと我を忘れていたよ！」
与助が小太郎の方を向きながら返事をした。

「あっ！！そうだね。僕も我を忘れていたよ！」
銀次郎もはっとして、小太郎の方を振り向いて言った。

「なにがあったのか知らないけどさぁ。。あのスゴイのどうするんだ？なんであんなの連れて来たんだ？？」

そうだよね。。
やっぱり、そういわれるよね。。
黄色いアマガエルに任せようと与助は言っていたけど、一瞬でいなくなっちゃったからね。。。
銀次郎はそう思いながら、与助の横顔をちらっと見て、さらに顔を覗き込んだ。
すると、与助は何かを考えているような表情をしていた。

そうだよな。。
やっぱり、そういわれるよな。。
黄色いアマガエルに任せようと思ったのに、一瞬でいなくなっちゃうんだからな。。。驚いたよ。。たぶん、銀次郎はどうするんだ？って顔でこっちを見てくるんだろうな～。。。
与助はそう思いながら、ちろ～と顔を動かさず目だけを銀次郎の方に動かした。
ほらなぁ、こっち見てる。。。見てる、見てるぅ。。うわぁ、覗き込んできやがった。。。

「なぁ、与助、、、何か考えがあるのかい？？」
顔を覗き込んだ銀次郎が与助に聞いてきた。

「あぁぁ、、まぁ、、な。。」

「さすが！与助だな！！黄色いアマガエルが消えたから、どうするんだろうと思っていたけど何か考えがあるんだね！！」

「あぁぁ、、、まぁ、、な。。。これも、、想定内かなぁ。。」

「さすが！与助だよ。じゃ、どうするんだい？」

「そうだな。。。。」
与助が返事に困っていると、少し離れたところからノソノソと日出夫が近づいてきた。うわっ、、、日出夫からも文句言われるよ。。。

「あのさ、、、、、与助ちゃん、、」
井戸の傍にヌぅ〜と立って、日出夫が井戸の縁に立っている与助を見下げながら声をかけてきた。

与助は逆光で表情が見えない大きな大きな日出夫を見上げながら、ゴクッとと唾を飲んだ。
「ん？？？どうしたんだい？？」
声を震わせて返事をした。

「あのカエルはなんなの？」

「あっ！！！あのカエルはね。。。」

「あんな綺麗な美肌で、可愛いカエル見たことないわよ〜ん♡♡♡♡♡♡？？」
「なんなの♡♡♡♡♡？あのカエルは♡♡♡♡♡♡？？」
「これから、一緒に暮らすの♡♡♡♡♡♡？？」

「えっ！！！」
「んあぁぁ、そうだな。。そうなるかもしれないけど。。。」

「えっ♡♡　そうなの♡」
「あんな綺麗で美肌で、可愛くて、そして、あの憎ったらしい子と一緒に暮らせるの♡♡♡♡？？」

「まぁ、、、そうだね。。」
与助は少し驚いて返事をした。

「うれしいわぁ↗↗↗↗　あんな綺麗で可愛くて、そして、あの憎ったらしいところがたまらないわね♡　もう♡♡♡♡♡」
日出夫がキャピキャピしながら嬉しそうに顔を上げた。

「あっ、、そう？？じゃ、一緒に暮らしてもいいのかい？？」
顔を上げてさらに大きく見えた日出夫を見上げながら少し安堵して答えた。

「もちろんよ！！♡」

「あっ、、、じゃ、そういうことで！」
与助が戸惑いながら返事をすると、日出夫がこちらに背を向けて尻を振りながらウキウキしながら花子とアルビノのトノサマガエルがいるところに戻っていった。

その後ろ姿を井戸の縁に立ちすくむ3人のカエルがぼ～と眺めていた。

妄想アマガエル日記（８２）　－２月９日（日）曇り

アルビノのトノサマガエルはこちらに背を向け、左に花子、右に日出夫がキャピキャピしながら騒いでいた。
銀次郎と与助、小太郎はその3人に少しずつ近づいた。

銀次郎はちらっと花子に目をやった。
とてもうれしそうにキラキラした目をして拍手したり、両手を前でもみながらなんとも楽しそうにはしゃいでいた。
何がそんなに楽しいのかな、、銀次郎は思った。

小太郎は見るともなく、大きな体の日出夫が視界に入った。
大きな体を上下に動かしながら、モジモジしていた。そして、とても楽しそうにはしゃいでいた。
何がそんなに楽しいのだろうか、、小太郎は思った。

「なんだか、楽しそうだな！」
与助が3人に声をかけた。

アルビノのトノサマガエルが振り返りながら返事をした。
「おっ！青。この美しいレディーたちが、いろいろなことを教えてくれていてな。これから、お前たちと一緒に暮らすことになるからこの辺りのことを聞いていたところなんだ。」

「あっ、、、そうだったのか。。」
一緒に暮らすことは、どうやら決まったんだな、、、と、与助は少し困りながら思っていた。ただ、花子も日出夫も頬を赤らめながら、とても楽しそうに話しているから、まぁ問題ないのか、、とほっと安心していた。

「ところで、君はなんて名なんだい？」

「ん？名？」

「そんなものないな。俺はずっと井戸の底に一人でいたからな。」

「名を呼ばれることもなければ、名を伝えることもなかったから。」

それを聞いた花子と日出夫がうっとりした顔で、アルビノのトノサマガエルを見つめていた。

その二人の様を見た銀次郎と小太郎は少し口がとがりはじめた。

「そうかい。。。でも、一緒に暮らすんなら、名がないと困るだろ？」

「そうか。そういうもんか。。。。」

「なんかいい名はつけてくれよ。」

「名をつけるって言われてもね。。。。銀次郎なんかないかい？」

与助が振り返ると、口をとがらせて拗ねていた。

「ん？？どうしたんだい？？銀次郎？？」

「いや、、、なんでもないさ。」

口をとがらせながら小さく返事をした。

「じゃ、、、小太郎なんかないかい？」

与助が銀次郎の後ろにいた小太郎に声をかけたが、小太郎も口をとがらせてすねていた。

「ん？？どうしたんだい？？小太郎まで？？」

「いや、、、なんでもないさ。。」
口をとがらせながら小さく返事をした。

まったく、、銀次郎も小太郎もどうしたんだろ？？なんですねてるんだろな。。。？まぁいいや。。
「じゃ、白い体してるからさ～、、、白太郎ってのどうだい？？」
与助が嬉しそうに提案した。

すると、花子が怒りながら文句を言ってきた。
「なんてダサい名を提案しているの！！まったく、、、与助はセンスがないわ！！」

「じゃ、どんな名がいいんだい？？」

「そうね～～、、とてもエレガンスだから〝エレガン助〟とか、とても美しいしずっと一人でいたようだから、、〝ビューティフル一郎（いちろう）〟とかがいいんじゃないかしら？？」

「そんな名は言いにくいだろ？」
「なんだい？ビューティフル一郎って。。？？売れないマジシャンかなんかみたいだろ？？」
「どうなんだい？アルビノトノサマさん？」

「んあぁ。まぁ、俺は白太郎でもエレガンなんちゃらでもなんでもいいぜ。」
「名なんて、この美しい俺にとってはどうでもいいものだからな。」
小指で鼓膜の掃除をしながら言った。

「でも、エレガンなんとかは言いにくいよな？銀次郎？？」
与助が銀次郎に声をかけても、まだ口をとがらせてすねていた。

まったく、コイツもなんなんだ？？

「じゃ、日出夫はなんかいい名はないのかい？君は一番年長さんだしさ、いろいろよく知っているからさ。。」

「そうね～～、、團十郎とか、権三郎とかがいいんじゃないかしら？」

「まぁ、別にいいかもしれないけど、、」

「どうだい？君の名だし、自分で決めなよ！」

「んあぁ？お前はどっちがいいと思う？團十郎か？それとも権三郎か？それともエレガンなんちゃらか？」

「俺に聞かれてもな、、、」

「名というのは、一方的に決められるものだろ？自分でつけるものではないだろ？」

「だから、お前が決めていいぜ！青」

「そうだな、、、まぁ、確かに名は一方的に付けられるものなのかな。。。」

「じゃ、、俺が決めていいのかい？」

「あぁ、いいぜ！」

「それじゃ、、、、」

与助が名を言うのを遮るように

「ちょっと待った！！僕は一緒に暮らすのは反対だね！」

銀次郎が後ろから大きな声で言ってきた。

「あぁ、俺もだ！！」

小太郎も銀次郎に同調して言った。

「ん？？どうしたんだい？？別に、花子も日出夫も良いって言ってるんだぜ？」

与助が少し困りながら二人に言った。

「いや、僕は嫌だね！なぁ、小太郎？？」

「あぁ、そうだな。」

口をとがらせた2人のカエルが腕を組んで並んで言った。

「なに、言ってんの？？地上での暮らしたことないんだから、色々と教えてあげないといけないでしょ？」

花子が銀次郎に言った。

「そうよ。そうよ。」

日出夫も花子に同調して言った。

花子と日出夫もまた並んで言った。

両者に挟まれる形になった与助は仲裁をとろうとして声をかけた。

「まぁ、まぁ、、、どうしたんだい？？まったく、、、銀次郎と小太郎はなんで嫌なんだい？？」

「そりゃ～、、あまり言いたくないよ。。なぁ、小太郎？？」

「まぁ～そうだな。。嫌なものは嫌だってことだな。」

なんだい？？そりゃ～。。。

与助は困ってしまった。

「まったく、よくわからないけど、、、青、俺はどうしたらいいんだ？」

「そうだな、、、困ったな、、」

「まぁ、とりあえず、、、名だけは決めておこうじゃないか？」

「わかった、じゃ、早く決めてくれよ。」

「そんな言われてもな～、、、君の情報をほとんど知らないから名をつけにくいんだよ。」

「そうか。そうだな。」

「俺のことは、美しいってことしか知らないもんな！」

「俺は女でな。あと、ミミズが好きでな。あと、、、水に入るのがあまり好きではなくてな。あと、、、」

「ん？？？女？？」

「君は、女なのかい？？」

「あぁ、見たらわかるだろ？」

「わからないよ。ずっと俺って言ってたし、女にモテるとか困っていたろ？？あと、トノサマガエルは体の色の違いで雌雄が区別できるけど、君はアルビノだろ。。。」

「自分のことをなんて呼ぼうが別に決まりはないだろ?あと、女にモテるのはほんとだからな。」

それを聞いた銀次郎も小太郎も花子も日出夫も顎が外れるほど驚いて、あんぐりしていた。

「じゃ、、、亜里沙ってのはどうだい?」

「亜里沙か。じゃ、それでいいぜ!」

「で??どうするんだい?銀次郎、小太郎??一緒に暮らすのは嫌かい?」

与助が振り返りながら声をかけた。

「いや、いいです。一緒に暮らしていいです。。」

銀次郎と小太郎がうつ向きながら同時に返事をした。

ん??いいのか?さっきのはなんだったんだ??与助は二人の様子を見ながら思った。

「じゃ、一緒に暮らすことになったからね。」

与助が花子と日出夫にも声をかけた。

「うん、、わかったわ。。。」

あんなにはしゃいでいた花子と日出夫は、意気消沈してうつ向きながら同時に返事をした。

まったく、、、なんなんだい??コイツらは。。。

与助は深いため息をついた。

妄想アマガエル日記（８３）　－３月１６日（日）曇り

「じゃ、とりあえず亜里沙の名前も決まったし、俺たちの住処に戻ろうか！」
与助が皆に声をかけた。
すると、銀次郎、小太郎、花子、日出夫は少し元気なさそうに小さく頷いた。

「まったく、、、どうしたんだい？？」
与助は皆に声をかけた。

「ん～？？どうもしてないよ～？？」
銀次郎が感情のない声で返事をしてきた。

まったく、、、なんなんだろな？？こいつらは？？
まぁ、いつものことか。
与助はそう思いながら住処の方に歩き出した。

草むらの根際を草をよけながら進んだ。後ろに続いて歩く亜里沙も同じように草をよけて歩いていたが、その後ろを歩く日出夫は草をよけることなく大きな体で草を踏みつけて歩き、バキッ、バキッ、バキキと聞こえてきた。そして、日出夫の後ろに花子や銀次郎、小太郎が日出夫が作った道をトボトボと続いて歩いていた。

少し歩くと、大きなコンクリートの塀があった。与助はその塀の真下からそれを見上げて、全体を見渡した。
さて、どうするかな。。。

俺たちアマガエルにとってはこんな壁くらい手足の吸盤で貼りついて超えられるけど、ほかのカエルには難しそうだな。
どこか登れるところはないかな？？

すると、塀の右奥の下が一部崩れていて、隙間ができていた。

塀の下を右奥まで進み、その隙間のところまでやって来て、再びその周囲を見渡した。確かに塀に隙間はあるものの、その隙間までにはちょうど日出夫の背丈ほどの段差があった。

う～ん、、どうしたもんかな？？
俺たちだったらこんな段差なんて、なんてことなく簡単に登れるけど、、、花子とか小太郎には難しそうだな。。。
まぁ、ちょうど日出夫の背丈ほどの段差だから日出夫の背中を借りたら登れるけど、、そしたら、、日出夫が登れないな。。。
与助がその隙間を見上げながら、顎の下を右手で撫でながら考えていた。

すると、銀次郎まで皆もぞろぞろやってきた。

「この隙間からなら僕らの住処に行けそうだけど、問題はこの段差だね。」
銀次郎が大発見したように言ってきた。

「あ～そうなんだよ。今、どうしたらいいか考えていたところなんだ！」
与助が横に来た銀次郎の方を見ることなく、隙間を見上げながら返事をした。

「そうだね。日出夫の背中を借りたらあの隙間まで行くのは出来そうだけど、日出夫をどうやって登らせるかを考えないといけないね！」
またまた銀次郎が大発見したように言ってきた。

あ～そうなんだよ。今、どうしたらいいか考えていたところなんだ！と返事するのも面倒に思って簡単に返事をした。

「そうだね。」

「日出夫はこの段差登ることできる？」

与助が日出夫に聞いてみた。

「そうね～♡、、さすがに無理よ。」

「そうだよね。。。でも、君の背中を登らせてくれたら他のカエルは登れると思うんだよね。」

「そうね♡　それは全然問題ないわ♡」

「じゃ、日出夫が登れるようにする方法をどうにか考えないといけないね。」

「この辺りには草しかなくて、小石みたいなのはないから。。。なんか踏み台みたいなのでもあればいいのだけどね♡　あの上のところに前足が届けばどうにかいけると思うんだけど。。私、前足の腕力には自信があるの♡」

「踏み台か～、、どれくらいの高さがあればいいんだい？？」

「そうね♡　ちょうどあの段差の真ん中あたりに脚をかけれる出っ張りでもあればいけるわ♡」

「出っ張りか～。」

与助はその壁面を見ながら考えた。

「よし！じゃ、俺と銀次郎がその出っ張りになるから、それで登ってみようか！」

「ん？？？どういうことだい？」

銀次郎は訝しい顔をして聞いてきた。

「まず、日出夫の背中を借りて花子、小太郎、亜里沙が登るだろ？そして、俺とお前があの壁の真ん中に貼りついて日出夫が脚をかける出っ張りになるんだ。そして日出夫が登ったら俺たちは普通に登るってことさ！」

「あの大きな日出夫の体の踏み台になるってことかい？？」

「まぁ、そういうことだな。でも、ほんの一瞬だろ。少し踏み台になって上に日出夫が手をひっかけられたらいいのさ。」

「そうかな～～。。。」

銀次郎は後ろにいた日出夫を見上げた。

そこには、山のようにそびえ立つ日出夫が見下ろしていた。改めて見るとその体とその脚の大きさに驚いた。なんで、、同じカエルなのに、こんなに大きさが違うんだろ？？食べてるものもそんなに変わらないのにな。。。

そして、後ろ脚にまじまじと目をやった。

こんな大きな脚の踏み台になるってことか。。。。

「踏みつぶされて、、ド根性ガエルみたいにペラペラになっちゃわないかな～～、、」

「ゴクッ、、」

妄想アマガエル日記（８４）－３月２３日（日）晴れ

「じゃ、とりあえず日出夫はここに来てくれるかい？」

与助が日出夫を手招きして、穴の下を指さした。

「うん♡　わかったわ♡」
「ここでいいのね？」

「うん、あと、、、もう少し頭を上げてくれるかい？」
与助が少し後ずさりしながら塀の穴と日出夫の頭の位置を確認しながら言った。

「こうかしら？」

「うん！それで完璧」
「じゃ、花子と小太郎と亜里沙さんはさぁ、日出夫の背中を登ってあの穴まで登ってくれるかい？」
振り返って3人に声をかけた。

「ん？？与助と銀次郎は自分で登れるだろうけど、日出夫はどうするんだ？」
小太郎が心配そうに聞いた。

「あぁ、心配ないさ！俺と銀次郎で壁に貼り付けて日出夫の足場になるから。」
けろっとした感じで与助が答えた。

それを聞いた小太郎も与助のその返事を聞いてすんなり受け入れた。
「あぁ、そうか。」
「じゃ、先に行かせてもらうよ！」

そう言って、小太郎が手慣れた感じでスルスルと日出夫の背中を登り塀の穴を通り抜けていった。次に亜里沙がそれを真似してスルスルと登り、最後に花子もスルスルと登って塀の穴を通り抜けていった。

塀の穴の中から花子が顔を出して、下にいる3人を見下ろしながら聞いてきた。
「なんか手伝うことある？」

「いや、大丈夫さ！」
与助がけろっとした感じで手を振りながら答えた。

「あっそう？」
与助のけろっとした返事を聞いて、穴から頭をひっこめた。

「じゃ、銀次郎やるぞ！」

「うん、わかったよ。。。」
「どうするんだい？？」

「さて、どうするかな～～？？」

「ん？？何か考えがあるんじゃないのかい？？」

「いや、何もない。」
「だって、こんなことやったことないだろ？？」

「えっ！！！」
さっきまでのあの自信に満ちた感じはなんだったんだ？？銀次郎は横目で与助を見ながら思った。

「まぁさ、、、とりあえず、やってみようじゃないか。」

「うん、、まぁそうだね。」

「とりあえず、塀のあの辺りに先に俺が貼りつくからさ、、その上に銀次郎が貼りついてさぁ～。俺が銀次郎を下に落ちないように踏ん張るよ。」

「うん、わかったよ。」

「じゃ、日出夫。俺がOKって言ったらさぁ、片足を俺たちに引っかけてあまり体重をかけないようにして、ひょいっと上の穴に手をかけて登ってくれないかい？？」

「うん♡　わかったわ。」

与助が塀を少しだけ登り頭を上にして貼りついた。そして、与助の体の上をスルスルと登り、与助の肩に足をかけて頭を上にして塀に貼りついた。

「銀次郎、、、準備はいいか？？」

「うぅぅん？？たぶん、、、いいよ。」

「じゃ、日出夫」

「ＯＫ」

日出夫の大きな大きな体が二人を覆うように近づき、右足を持ち上げて銀次郎の口の先と塀の隙間にかけた。

「いくわよ♡」

「1，2の3で登るからね♡」

「うん、わかった。」
2人が同時に返事した。

「1，2の3。せいの！」
掛け声と同時に日出夫が右足に体の重さをかけた。

すると、ぐにゅ～と銀次郎の顔にこれまで経験したことがないような重さがかかり、塀に貼りつくのが耐えきれなくなってはがれ落ちた。そして、銀次郎を支えていた与助もまた銀次郎の後ろ足で頭を挟まれていたので身動きできず塀からはがれて背中から落ちた。

日出夫もまた右足がすっぽ抜けて地面に倒れた。

「ズドーーーーーン」

3人が地面に倒れて、しばらくの沈黙の後に
「おいおい！！頭もげそうだったよ！！」
銀次郎が首を抑えながらが倒れた与助に慌てながら言ってきた。

「ほんとだな～。」
倒れながら見上げて返事した。
「頭が曲がっちゃいけない方向に曲がってたのな～　笑」
その光景を思い出して、爆笑しだした。
「アッハハハハハッハ」

「いやいや、、、、笑いごとじゃないよ。。。。」

「背中と頭がくっつくところだったんだよ～～～」
「ぷっ、、背中と頭がくっつくって、、、」
笑い上戸の銀次郎は与助が笑っていると移ってしまうので、自分で言ったことで爆笑してしまった。
「アッハハハハハッハ」

そして、その2人を見ながら日出夫も爆笑していた。
「アッハハハハハッハ」

しばらく3人で爆笑していると塀の穴から花子が顔を出して声をかけてきた。
「あなたたち、、、、何、、爆笑しているの？？早く登ってきなさいよ！」

「あぁ、それがなかなか難しくてね。。。銀次郎の頭が背中にくっつくところだったんだよ！」
与助がようやく笑い終わって、笑い涙を拭いながら花子に返事をすると、それを聞いた銀次郎がまた笑いだした。
「ひぃひぃ、、もう、、それを言わないでよ。。」
「笑い過ぎて腹が痛いよ。。。」
銀次郎が笑い涙をぬぐいながら言ってきた。

「まぁ、とりあえず、もう少し方法を考えないといけないな！！」
与助が笑いが収まって、銀次郎にまじめな顔で言ってきた。
「ひぃひぃ、、、うん、、そうだね。。」

「じゃ、、、次は頭を上にするからいけないから、体を横にするってのはどうだい？」
「ん？？どういうこと？」

「さっきは塀に俺もお前も貼りついてたけど、今度は俺は地面に立って、塀に貼りついている銀次郎を支えるからさぁ、お前は塀に体を横にして腹に足をかけて日出夫を登らせるってことさ。」

「ん？？なんで腹なんだい？」

「今度は腹がつぶれてしまうんじゃないかい？？」

「いや、こうやって腹を膨らませることができるだろ？」

「ん？？あぁこうやって口閉じて腹とか喉を膨らませるってことかい？」

「そうそう！そしたら、ある程度弾力もあるし、重さを分散できるんじゃないか？」

「できるかな～～？？」

「まぁ、やってみようじゃないか！」

「うん、、まぁやってみるか」

「日出夫はさぁ、、、塀のあの小さな凹みに爪で引っかけて銀次郎の腹の弾力を使って上の穴に上ってくれないかい？？」

「うん♡　わかったわ！」

銀次郎がスルスルと塀の真ん中辺りの塀のわずかな凹みの下まで登り、体を横にして右腹を上にして準備した。そして、与助は地面に腰を落として踏ん張り、銀次郎の首と腰を両手で支えた。

「じゃ、日出夫」
「ＯＫ」

日出夫が銀次郎の腹に右足をかけた。そして、銀次郎は腹と喉をパンパンに膨らませた。

「まぁ、、、とても気持ちのいい腹ね♡」
「でも、今はそんなのどうでもいいわね。。なんか行けそうな気がするわ♡　１，２で弾力を使わせてもらうわね♡」

「じゃ、行くわよ。１，２の３」
すると、ぼよ～んと銀次郎の腹の弾力を利用して、日出夫の大きな体が上に飛ぶように移動して、塀の上の穴に右手の先をかけることができた。
「やったわ♡」
日出夫が喜びの声を上げるのと同時に銀次郎の体から
「ゲーーーーーーーーーーーーーー」
という聞いたことがない音が出た。

聞いたことがない音が出たので銀次郎の体を支えていた与助は驚いて音の鳴る方を見上げた。
日出夫が塀の上の穴に消えて行くのを確認した後、銀次郎が塀の下にゆっくりと降りてきた。

「与助～～、、なんか変な音出たよね？？」

「あぁ、、、聞いたことない音だったな。。。」

「僕は、、どこかつぶれたりしてないかい？？」

「いや、、、どこもおかしくはなっていないけどな。。。」
「自分ではどうなんだい？？どこか痛いとかないのかい？」

「いや、、、それがどこも痛くないし、日出夫が乗った時も体を膨らませていたから、重さもほとんど感じなかったんだよね。。。」
「じゃ、、、さっきの音はなんだったんだろ？？」
「もう一回膨らませてみなよ。。。？」

「うん、、わかったよ。」
銀次郎の膨らんだ腹を与助が軽く押してみた。
すると、さっきよりは小さい音で
「ゲーーーー」と音が出た。

「出た！出た！」
「銀次郎、、自分で腹を動かしてみなよ！」

与助に言われるように銀次郎は腹と喉を膨らませたり、しぼませたりしてみた。
「ゲーーーー」
「ゲーーーー」
「ゲーーゲーー」

「おっ！！音でた！！」

「与助もやってみてよ！！」

そういわれて、与助も銀次郎のように腹と喉を喉を膨らませたり、しぼませたりしてみた。

「ゲーーーー」
「ゲーーーー」

「おっ！！音出た！！！」

与助は神妙な顔でつぶやいた。
「俺たち、、どうしちまったんだ？？」

心配そうな顔で二人で見つめていると、２人の額に春の暖かい雨が1粒ずつ落ちてきた。

ポチャン

妄想アマガエル日記（８５）　－４月６日（日）晴れ

「おいおい、遅かったな、、、お前たち何してたんだ？」
小太郎がようやく登ってきた銀次郎と与助に近寄って話しかけた。

「・・・・・」

「ん？？どうしたんだい？２人とも。。？？」
雨に濡れて俯いて元気がない２人の様子に心配になってきた。

「・・・・・」

「おい！銀次郎、与助、、、下で何があったんだ？？」
「なんか怖いものでも見たのか？」

「いや、、、そういうことではなくてね。。。」
「俺たち、体が変になったみたいなんだ。。。」
与助が雨にびっしょり濡れながら俯いてぼそりと呟いた。

「ん？？体が変になった？？」
そう言って、二人を舐めまわすように見まわした。

「どこも変じゃないぞ？」

「いや、、、見た目ではないんだよ。。。」

「ん？見た目じゃない？？じゃ、どこなんだよ？？」

与助と銀次郎は顔を見合わせて、言うかどうか少し悩んでいた。

「おい、言ってみろよ！」

2人は言いにくそうに悩みながら、しばらくして与助がぼそりと呟いた。
「変な、、、、音が出るようになったんだ。。。」

「音？音ってのはどんなだい？」

2人はモジモジして音を出すか困り始めた。

「おい、その音ってのを聞かないとわからないだろ！」

「んぁ、、わかったよ。。じゃ、銀次郎鳴らしてみてくれ。」

「あぁ、、、わかったよ。。みんな引かないでくれよ。。。」

そう言って、足を踏ん張り、息を大きく吸い、腹を膨らませて音を出した。

「ゲーーーー　ゲーーーーー　ゲーーーーゴケ！　ゲコ！」

「ほら、、、こんな変な大きな音が出るようになったんだ、、銀次郎だけじゃなくて、、俺も出るようになってしまって。。。」

「なんか変な病気かなんかかもしれないだろ。。。。」

与助が俯きながら小さな声で説明した。

すると、奥からニコニコしながら日出夫が近づいてきた。

「あらま♡　あなたたちも立派なカエルになったのね♡」

「ん？？どういうことだい？？」

「あなたたちも一冬超えてある程度成熟したということよ♡」

「去年はまだオタマジャクシからカエルになったばかりだったから鳴けなかったけど、大人のカエルになったということなのよ♡」

「えっ！！そうなの？？これって病気じゃないの？？」

与助と銀次郎が目を輝かせて日出夫を見上げた。

「うん、そうよ♡」

「じゃ、みんなカエルになると鳴けるのかい？？」

「いや、、、鳴けるのは男だけだから、花子とか亜里沙とかは鳴けないけど、小太郎ちゃんとか、、まぁ、私も心は女だけど体は男だから鳴こうと思ったら鳴けるのよ。。。」

「へぇ～～、、男しか鳴けないか！！」
銀次郎が嬉しそうに納得して日出夫を見上げた。

「どのカエルも同じような声で鳴くのかい？？」
与助が日出夫に興味津々で聞いた。

「いや、カエルによって声とか、鳴き声とか違うのよ！」

「へぇ～そうなんだ～。。」
「じゃ、俺たちアマガエルはゲーー　ゲーー　ゴケッて鳴くけどほかのカエルは違うんだね！！」
与助がうんうん頷きながら返事した。

「まぁ、でも鳴いてみて思ったけど、、、あまりカッコいい声じゃなかったな。。。」
「なぁ、銀次郎？」

「そうだね、、、もっとカッコいい声とかさぁ、、、メロディーというか、、、そんなのだったらよかったよね。。。あの音とメロディーしか出せないみたいだしね。。。。」

「ほんとだな。。。」
「でも、まぁ、病気じゃなくてよかったよ。なんか遠くから俺たちと同じ声で鳴いてるのも聞こえて来たな！」
「ほんと、、、まぁ、あまりかっこよくはないけど、、仕方ないか。。。」
遠くから聞こえてくるアマガエルの声を聴きながら呟いた。
「まぁ、、そう落ち込むなよ。。それなりにいい声だと思ったぜ！」
小太郎が慰めるように声をかけてきた。
「じゃさ、、もしかして、小太郎も俺たちと同じころにカエルになったし、男だから声出せるんじゃない？」
銀次郎が小太郎の肩に手を置きながら提案した。
「ん？？そうか？」
「さっきお前がやったみたいに腹膨らませたら声でるのかな？」
「あぁ、そうだと思うよ。やってみてよ！」
「俺はたぶん、、、お前たちより皮膚が柔らかくて伸びるし、お前たちより口がとがってるから綺麗な声が出そうな気がするな。。。」
「こうか？」
そう言って、銀次郎がやっていたのを思い出しながら小太郎が足を踏ん張り、息を大きく吸い、腹を膨らませて腹と喉を動かした。
「クキョ！」
すると小さく高い音が出た。

「おっ！！出た出た！！やっぱり、俺の声は高くて綺麗っぽいな！！」
小太郎が銀次郎に自慢げに言った。

「まぁ、とりあえず何度も音だしてみてよ！」
銀次郎が少し悔しそうに言った。

「あぁ、、わかったわかった。。。」
「お前たちみたいなゲコゲコって汚い声じゃなくて、俺の美声を聞かせてやるよ！」
銀次郎を横目で見ながらニヤッとして鳴く態勢に入った。
「ちゃんと聞いとけよ！俺の美声を！！」

「クキョ！クキョ！キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～」

「ん？？なんだい？？その変な声は、、、ふざけてないでちゃんと美声を聞かせてくれよ！」
銀次郎が小太郎に口をとがらせて言った。

いや、、、おかしいな。。。ちゃんとやっているんだけどな。。。
「じゃ、もう一回、次は本気で出してみるぞ！」
「ちゃんと聞いとけよ！」

「あぁ、わかったよ。聞いてるよ！」

「クキョ！クキョ！キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～」

周囲に甲高い、奇妙な声がこだました。

「おいおい、、なんか、、踏みつけられたカエルみたいな声だしているよ?ふざけてないでちゃんと美声を聞かせてくれよ、、」

「おかしいな～、、、」

小太郎が足の踏ん張りの仕方に問題があると思って踏ん張りの仕方を試行錯誤していた。

その様子を見下げていた日出夫に与助が話しかけた。

「どうやったら、ちゃんとした声がだせるんだい??」

「そうね、、、さっきから、、教えてあげようか悩んでいたんだけどね、、、♡」

「言いにくいんだけどね、、、、ヌマガエルの声って、、、あれなのよ♡」

「えっ！」

「そんなわけないだろ??あんな首を絞められたニワトリみたいな声なわけないだろ??」

「何かの間違いさ、ちゃんと足を踏ん張って鳴いたらちゃんと出るさ！」

「クキョ！クキョ！キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～　キョェ～～」

暖かい雨が降る中に、小太郎の声が響き渡った。

妄想アマガエル日記（８６）－５月８日（木）晴れ

小太郎、与助、銀次郎、その後に花子と亜里沙と日出夫が、住処の穴に向けて雨の中トボトボと歩いていた。

雑木林の中は相変わらず、地表を草が覆い、黄色のキンポウゲの花が雨粒が当たる度にお辞儀をするように上下に動き、その

上を覆うクヌギや桜の新緑の葉は、雨に濡れてみずみずしく輝いていた。

「元気だしなよ～小太郎～～」

与助が先頭を歩く小太郎の背中を擦りながら声をかけた。

「そうだよ！小太郎の声も、、、なかなか愛嬌あって、よかったよ！」

銀次郎がニコニコしながら声をかけた。

「ふん！愛嬌ってなんだよ、、、変ってことだろ？」

小太郎が振り返って銀次郎に恨めしそうに呟いた。

「いやいや、そんなことないよ、、、最初のクキョってとこは美声っぽかったしさぁ～、、その後のキョェ～～　キョェ～～ってところは、、、ほらっ、、、ね？与助、、、よかったよね。。。」

「んん？あっあ、、、そうだよ。よかったよ。」

銀次郎に突然振られて驚きながら相槌を打った。

「お前ら馬鹿にしてるだろ！」

「そんなことないよ。ねぇ？与助？」

「あぁ、、そうさ。馬鹿になんかするわけないだろ？」

「俺たちアマガエルなんて、ゲコゲコとか、ゲーーゲーーとかだよ？」

「俺たちの方が変さ！なぁ、銀次郎？」

「そうそう、、僕たちなんてゲコゲコだよ。。。」

「あんなキョェ～～　キョェ～～なんて高い声出せないもん！」
「ね？与助？？」

「あぁ、そうそう！キョェ～～　キョェ～～なんて出せないよ。」
「キョェ～～　キョェ～～なんて、、、ぶっ！」
自分で言って吹き出して笑ってしまった。
「ハハハハハハハ、、ごめんごめん、ハハハハハハハハ、、ごめんごめん」

「与助、、、ダメだよ、、、笑ったら、、、キョェ～～　キョェ～～って愛嬌あって、とても男らしい美声じゃな、、、、、、ぶっ！」
「ハハハハッハハハッハハ、、ごめん　ハハハッハハ、、ごめん。」
「ヒぃヒぃ、、、ごめん。」

「お前たち、、、、、やっぱり馬鹿にしてるじゃないか！！」

「いや、、、ほんと馬鹿にしてるわけじゃないんだよ。。。キョェ～～　キョェ～～って自分で言うと面白くて、、、ヒぃヒぃ。」
「ほんと悪気はないんだ！本当に変なんて思ってないんだよ。。。」
与助が笑い涙を拭いながら小太郎に弁明して、謝った。

「ほんと、僕も与助と同じ、、、ほんとに馬鹿にしたり、変だと思ったわけじゃないんだ、、、ヒぃヒぃ。」
「キョェ～～　キョェ～～って自分で言うとなんか面白くてね。。ごめんね。」
銀次郎もまた笑い涙を拭いながら小太郎に謝った

「まぁ、、、いいさ。」
「俺はヌマガエルだから、あの声しか出せないわけだからな。。。」
「まぁ、最初のクキョってとこは美声っぽくて気に入ってるし、、、その後の部分は調子が乗った時しか出ないみたいだから、、、まぁあまり出すこともないと思うからな。。」

「ん？？後の部分ってどこのことだい？」
与助が小太郎にさりげなくきいた。
「んぁ？？後の部分は後の部分だろ？」
「お前はさっき聞いたからわかるだろ？」
「ん～？どこのことかわからないよ。。。」
「まったく、、、、、、」
「キョェ～～　キョェ～～って、、ところだろ、、ぶっ！ハハハハッハハハハハハハハッハハハハハッハ、、、ヒィヒィ」
「キョェ～～　キョェ～～って。。。。ぶっ！ハハハハッハハハハハハハハッハハハハハッハ、、、キョェ～～　キョェ～～って。。。。ぶっ！」
小太郎の笑い声につられて与助と銀次郎も爆笑した。
「ぶっ！ハハハハッハハハハハハハハッハ、、、ハハハハハハハハハッハハハハハッハ、、、ヒィヒィ」
先頭を歩く小太郎、与助、銀次郎の爆笑の中、久しぶりの住処の穴の入り口が見えてきた。
「ヒィヒィ、、、あっ、見えてきた。あれだよあれ！あの草の隙間から見えるあの穴が僕たちの住処なんだよ！」
銀次郎が振り返って、笑い涙を拭いながら後ろの花子と亜里沙に穴を指さして説明した。
そして、少しずつ穴に近づき、穴が完全に見えた時、小太郎、与助、銀次郎、そして日出夫が、久しぶりの住処を見て驚いた。
そして、与助が呟いた。
「これは、、、、どういうことだ？？」

そして、与助が呟いた。
「これは、、、、どういうことだ？？」

「おいおい！僕たちの住処の入り口が土の山で塞がれているよ。。。どうしよう？なぁ、与助？」
銀次郎が困ったように言った。

「ほんとだな、、、なんで俺たちの住処の入り口がこんなこんもりとした土で塞がれてるんだ？？」
小太郎が不思議そうに近づいていった。

「どうだい？その土どけて穴の入り口を出すことできそうかい？」
与助が小太郎に後ろから聞いた。

「どうだろうな。。まぁ、俺はヌマガエルだからお前たちアマガエルなんかより土を掘るのは得意だからな！」
小太郎が少し偉そうに与助に答えた。

「さすがだな！！小太郎！！じゃ、ちょっと掘って入れるようにしてみてくれよ！」
銀次郎が嬉しそうに小太郎に頼んだ。

「まぁまぁ、、仕方がないな。。」
「この中じゃ、俺か日出夫が土を掘るのは得意だろうから、まずは手始めに俺が見せてやるか！」
小太郎が両手をポキポキ鳴らして、首をコキコキ振って、脚をブラブラ振って準備運動をして掘る準備に入った。

「おっ！さすが小太郎だな！やってくれそうだ！」
与助が頼もしい小太郎の仕草を見ながら嬉しそうに言った。
「まぁ、そこで見ていなよ！！アマガエルちゃん。」
「あぁ、頼むよ小太郎！！」
小太郎は与助の声を背中で聞きながら、その土の山にゆっくりと近づいていった。
そして、住処の入り口があるであろう場所の土を掘り始めた。
「おりゃ、おりゃ、おりゃ、おりゃ」
小太郎が声を出しながら土を掘り始めた。
「お～スゴイな！！土をどんどん掘っていく！」
「さすが、小太郎だ～」
銀次郎がその掘る姿を見ながら感嘆した。
「おりゃ、おりゃ、おりゃ、、、、、」
「ふぅふぅ、、少し疲れたな。。。もう少しだと思うんだけどな。」
小太郎は皆の応援を一身に受けて、雨の中、全身泥だらけになりながら土を掘った。
「おい、日出夫～。俺は少し疲れてしまったから、あとはやってくれないか？あと少しだと思うんだ。」
小太郎が振り返って日出夫に頼んだ。その振り向いた姿はとても清々しく爽やかなものであった。
「そうね。。。♡」

「私も穴を掘りたいんだけどね、、、♡」
「ちょっと、、私には無理なのよね、、♡」
「ごめんね♡」

「えっ！！なんでだい？」
「どっか、怪我でもしているのかい？」
与助が心配そうに聞いた。

「いや、、、そんなことはないんだけどね、、、♡」

「じゃ、なんで掘ってくれないんだい？？」

「それがね、、、小太郎ちゃんが掘ってる途中くらいに気づいたから止めるに止めれなくてね、、、♡」

「ん？？とめる？なんでなんだい？」

「いや〜♡」
「ほら♡　雨降ってるし、あまり視界もよくないでしょ。」
「ほんと、最初は土と思ったのよ。。ほら♡　雨で匂いもよくわからないでしょ。」
「でもね。小太郎ちゃんが掘った土を後ろに投げた時に私の近くに落ちた土を見て気づいたのよね、、、♡」

「ん？？何を気づいたんだい？？」

「、、、言っていいのかしら、、、？？」
日出夫はとても悩んだ様子で小太郎と与助を交互に見た。

「いいよ。言ってくれよ。」
「この土が毒が入った土かなんかなのか？でも、大丈夫さ！俺は冒険家だから。そんな危険があっても心配ないさ！言ってくれよ。」
小太郎が凛々しい顔でまっすぐ日出夫を見つめて言った。

「わかったわ♡」
「さすが、小太郎ちゃんね♡」
「、、、、、」

「、、、この土はね、、、アナグマの、、、うんこ、なのよ♡」

「ん？？うんこ？」

「そうなのよ、、、アナグマってイタチの仲間はね、、、いつも同じところにため糞するのよ～♡」
「ほんと、困ったもんよね、、、♡」
「あと、アナグマのうんこってとっても臭いのよ～～♡」
「まったく、、、ね～～♡　アハハハハハハッハ」

皆、日出夫を見つめながら棒立ちになり、小太郎の方を振り向くことはできなかった。

そして、雨が止んだ。

妄想アマガエル日記（８８）　－７月２４日（木）晴れ

「小太郎、、、君はよくやってくれたよ！！」
与助が小太郎の方を振り向いて声をかけた。
「ほんと、小太郎のお陰で入り口があと少しで見えそうだもん！！」
銀次郎も与助の横から声をかけた。
「お前たち、、、そういうんなら、もっとこっちに近づいて言えよ！！」
「遠いだろ、、そこは。ほらっ、もっとこっちに来て言いなよ！！」
「ん～、、そう？？じゃ、、、ほらっ、ここまで近づいて来たらいいでしょ？なぁ、与助？？」
「ん～、、あぁ、俺も、、ほらっ、ここまで近づいてきたしさぁ。。。文句ないだろ小太郎？？君はよくやってくれたよ！！」
「お前たち、、鼻をつまんでいるその手はなんだ？？その手は？？」
「ん～、、鼻をつまんでなんてないよ？なぁ、与助？？」
「ん～、、あぁ、鼻をつまめるほど、俺たちアマガエルは鼻の先が出てないからつまむのは無理なんだよ～」
「いやいや、お前たちのその前脚の吸盤の膨らんだ指先で鼻の入り口をふさいでいるじゃないか！！いや、、よく見たら銀次郎、、おまえなんて、鼻の穴に指の先入れてふさいでいるじゃないか！！」
「ん～、、、そう？？僕たちはいつもこんな感じで、前脚は鼻のところに置いているよ。アマガエルってそういうカエルなんだよ。ねぇ？与助～ 僕たちそうだよね？？」

「ん～、、そうそう。俺たちはいつもこんな感じさ。」

「まったく、お前たちという奴は、、、、」

小太郎はプンプン怒りながら、与助と銀次郎にいろいろと文句を言った。

「まぁまぁ、小太郎ちゃん♡」

「小太郎ちゃんは、ほんとよくやってくれたわよ♡」

「でも、、早いうちに体を洗った方がいいわよ♡　アナグマのうんこってほんと、、、臭いのよ♡」

「そっかぁ。じゃ、水路まで行って体を洗って来るよ！銀次郎と与助も手伝えよ！！」

「ん～、、うん、わかったよ。じゃ、行こうか！」

「ん～、、そうだな、俺たちも体を洗うの手伝うよ！」

「お前たち、、、そろそろ、、その前脚の吸盤の指先を鼻の穴からどけろよ！！」

小太郎がぶつぶつと文句を言いながら、３人は水路に走って行き、その後ろ姿を日出夫と花子、亜里沙は見送った。

そして、亜里沙がぽつりと呟いた。

「ところで、、、なんであのうんこまみれになったツチガエルは俺のことを見て、もっと驚いたり、羨んだりしないんだ？？」

「ふつうだったら、、、お前たちみたいに、俺のこの真っ白い体とか美しい姿を見たら目が離せなくなって俺に興味を持つだろ？？」

「そうね、、、まぁ、私たちも最初あなたを見た時は驚いたわね。。」

まぁ、男だと思って見ていたんだけどね、、、まさか女だったなんて、、女だと最初から分かっていたらあんなにときめかなかっ

たけど。。花子は思った。

「ほんとね～♡　なんで小太郎ちゃんはあんなにあなたに興味ないのかしらね。。♡」

水路に駆けてゆくうんこまみれの小太郎とその後ろを前脚で鼻を押さえて付いていく与助と小太郎の後ろ姿を見つめながら、3人が不思議そうに見つめた。

妄想アマガエル日記（89）－8月22日（金）晴れ

「いや～、、なかなか汚れが取れなくてな～、、大変だった。。」
小太郎が頭をぼりぼりかきながら、日出夫を見上げて話しかけた。

「そうよね♡　あんなに汚れがついていたからね♡」
日出夫が優しく応えた。

「ん？汚れじゃなくてうんこでしょ？」
花子が日出夫の横から問いただした。

「いや、、、汚れでいいじゃないか。なぁ、銀次郎？」

「ん～、、、うん、汚れでいいさ！なぁ、与助？」

「ん～、、、あ～そうさ！汚れさ！」

「まったく、、、お前たちは、、、いい加減その鼻を覆う指をどけろよ！」

「ん～、、、僕たちはいつもこんなんだからね～。なぁ、与助？？」

「ん～、、、あぁそうさ。俺たちはいつもこんな感じさ！」

小太郎が自分の体を少し嗅いでからあきらめるようにつぶやいた。

「まったく、、、まぁ、まだ少し匂いはするからな。。。仕方ないか。。」

「オイ！うんこまみれ。」

小太郎の後ろから亜里沙が声をかけてきた。

「ん？？もしかして、俺のことか？」

「あぁ、そうさ。」

「まったく、、、お前は、、、まぁ、そういう奴だから、、、仕方ないか。。」

「なんだい？」

「お前は、、、なんで最初に俺を見たときに、この美しい姿を見て何も言わないし、驚いたりしなかったんだ？？」

「ん？？何か言うことあるかい？」

「いや、、、普通はなぁ。」

「この女ツチガエルとか、女みたいなヒキガエルみたいにな、俺の美しさに驚いて、ひれふすもんなんだよ。」

「これまで俺が出会ったカエルは皆そんな感じだったんだ。」
「まぁ、そこの緑と青も驚かなかったけどな。。」

「へぇ〜そういうもんなんだな〜。すまなかったね。」
「正直、ほんとに、なんとも思わなかったんだよ。。。」

「まったく、、、お前は、、、」
「でも、ほら、今俺をじっくり見てみろよ！どう思う？？」

「どうって言われてもね。。。まぁ、白っぽいトノサマガエルとしか、、、」

「いや、、、美しいとかは思わないか？」

「そうだね。。。まぁ、白いな〜とは思うけど。。。」

「まったく、、、お前には美しいとか思う美的なセンスがないのか？」

「いや、、、俺も綺麗だと思って驚いたことくらいあるさ！」

「へぇ〜、、それは何を見た時なんだ？？」

小太郎は少し言いにくそうに悩みながらポツリと言った。
「そうだな。。。やっぱり、、、与助の全身青色の姿を初めて見た時は、、、なんて綺麗なんだ〜と驚いたな。。」

「与助？？あの青か？」
そう言って、与助の方に目をやった。

「あぁ、最初見た時は暗い隙間から出てきて、そこに日の光が差し込んで与助の全身を照らして。。。あの時は本当に驚いたな～。」
「こんな美しいカエルがいるのか～って」
それを聞いた与助がモジモジしながら小太郎に近づいて、小太郎の肩を叩きながら声をかけてきた。
「小太郎、、、、お前って奴は、、、わかっているな～　くぅ～」
「なんだ？お前、、、さっきまで俺に触れようともしなかったし、指で鼻を押さえていたじゃないか。なんで今は手を放しているんだ？」
「鼻を押さえる？そんな失礼なことをするわけないだろ？美的センスの塊の小太郎さまに対して。。」
「まったく、、、お前ってやつは現金な奴だな～。」
「ほら、銀次郎はまだ指で鼻を押さえているだろ？お前もさっきまであんな感じだっただろ。」
銀次郎の方を指さして与助を問いただした。
「まったく、、銀次郎さん。そんな手、早くどけてしまいなさいな。美的センスの塊の小太郎さんの前ですよ。美的によくありませんよ！」
「ね？美的太郎さん？」
「あぁ、、そうだな。」
なんだ？美的太郎って。。。
「まったく、、、与助は自分が褒められたからって、、」
銀次郎が口をとがらせながらつぶやいた。

「あぁ、、、でも、銀次郎の緑も綺麗だと思ってるんだぞ！なぁ、与助もそう思うだろ？」

「そうですね。美的の塊の美的太郎さんがそうおっしゃるのなら、まぁ、少しはそう思いますね。」

「そうなのかい？？美的センスの塊の小太郎さんにそんなことを言われると、、なんだか、、僕もうれしくなってきたな。。」

銀次郎が照れながら鼻を押さえていた手を放して頭をぼりぼりかき始めた。

「まったく、、、お前たちは二人とも現金な奴らだな～。。。」

小太郎がニヤニヤしながら、二人を見ながら言った。

そして、ニヤニヤしながら見られた銀次郎と与助もまたモジモジしながら照れ笑いをしていた。

その３人の様子を目を細めながら亜里沙は見て、思った。

そうか、、、この３人は美的センスがまったく欠如しているんだな！

じゃ、まぁ、俺のこの美しさに気づくことはできなくて当然だな。

なんて、、可哀そうな奴らなんだ。。。。

妄想アマガエル日記（９０）－９月２３日（火）曇り時々雨

「美的太郎さん、、ちなみに、俺のどのあたりが綺麗だと思ったんですかい？？」

手をスリスリしながら与助が小太郎に聞いた。

「美的太郎さん、、僕のどの時の緑色がよかったですかい？？」

銀次郎も与助と同じように手をスリスリしながら与助に聞いた。

「まったく、、、お前たちは、、、」
「もういい加減にしろよ。。」
ニヤニヤしながら小太郎が二人の肩を押して、じゃれあっていた。
「おい、美的センス０のそこの３ガエル。」
「お前たちはいつまでそんなくだらないことでじゃれあっているんだ？？これからどうするんだ？」
亜里沙が腕を組んで不満そうに吐き捨てた。
「まったく、、、君はいつもそんなことばっかり言って、、このじゃれあっているのが、楽しいんじゃないか！」
「君も一緒にやってみるかい？？」
「青、お前は馬鹿か？」
「俺様みたいな美しいカエルがなんでお前たちみたいな美的センス０のカエルどもと一緒に遊ばなきゃならないんだ？」
「まぁまぁ、、、そう言わずさぁ。。」
「一緒にやってみようじゃないか。やってくれたら、穴の中を案内してあげるからさぁ。」
「緑、お前まで。。。」
「俺様がそんなことに付き合うわけないだろ？」
「そうかな～？？そんなことをいいつつ、実は一緒にやってみたいと少しは思ってるんだろ？」
「思うわけないだろ？俺様がお前たちを褒めるってことだろ？？」
「そうさ！俺のことを褒めてみなよ！ほらっ」

「・・・」

「そうだな、、、褒め方がわからないよな。じゃ、この青い体を褒めてみなよ。」

「・・・」

「ほらっ、勇気を出して、俺のことを褒めてみなよ！ほらっほらっ～」

「ちっ・・・・・・青が綺麗だな。」

「ほらっ、もっと大きな声で、そんなよそ向いて言うんじゃなくて、ちゃんとこっちを見てさぁ。」

「・・・青が、綺麗だな！」

「そうかな～～。照れるな～」
後頭部をポリポリかきながらモジモジした。

「オイオイ！この俺が褒めてやったのに、お前が照れるだけじゃないか！！」

「まぁまぁ、ほらっ、じゃ、、、次は俺の、この長い脚を褒めてみなよ～！」

「脚の長さを褒める？？」
「アマガエルだからお前たちはみんな脚が長いだろ？」

「まぁまぁ、、、今は、ほらっ、褒める練習だからさぁ。」

「そうか。そうだったな。」
「お前は脚が長いな～」
「そうかな～～。照れるな～」
「オイオイ！さっきと一緒じゃないか！」
「じゃ、次は僕のことも褒めてくれよ！」
「なんで緑、お前まで褒めなきゃいけないんだ？」
「まぁまぁ、、、練習練習♡」
「そうか。そうだったな。」
「緑が綺麗だな。」
「そう？なんか、、照れるな～」
後頭部をポリポリかきながらモジモジした。
「オイ！お前も青と一緒じゃないか！」
「まぁまぁ、、、じゃ、僕の、運動神経の高さを褒めてみなよ～」
「まったく、、、アマガエルなんてみんな一緒だろうが、、、」
「お前は運動神経が高いよな！」



「そう？なんか、、、照れるな～」

「じゃ、次は俺のことも褒めてくれよ。」

「なんでうんこまみれのお前のことを褒めてやらないといけないんだ？？」

「まぁまぁ、、、練習だからさぁ。」

「そうだな～。。じゃ、うんこまみれになってカッコいいな！」

「いや、それ褒めてないから。」

「じゃ、変な声でかっこいいな！」

「いや、、それも褒めてないから。」

「まったく、、ほらっ、美しい腹をしてますね？とか、キリリとした鋭い目をしてますね？とか、たくましい腕をしてますね？とかいっぱいあるだろ？」

「はぁ、、、、」

「キリリとした鋭い目をしてますね。」

「ほらっ！もっと感情を込めてさぁ！！」

「キリリとした鋭くてカッコいい目をしてますね！って感じだよ！」

「キリリとした鋭い目をしてますね。」

「まぁ、いいでしょう。」
「照れるな～」
後頭部をポリポリかきながらモジモジした。

「まったく、、、俺はこの三馬鹿ガエルに何をやらされているんだ？」
亜里沙はつぶやいたが、はじめてほかのカエルとじゃれあうことができて、少しうれしくなっていた。
その様子を日出夫はニコニコと嬉しそうに上から眺め、その脇にいた花子もまたくだらないその様子を嬉しそうに眺めた。

妄想アマガエル日記（９１）－１０月２１日（火）曇り

「おい！青、お前の言う通り、褒めたくもないのに褒めてやったんだから、そろそろ住処とやらを見せてくれよ！」

「あぁ、わかったわかった！」
「でもね、、、まだ穴の入り口がちゃんと開いてないから入れないんだよ。。」
そう言って、ちらっと小太郎を見た。

「オイオイ！与助。なんで俺を見るんだよ！！」
「俺はさっき穴を塞いでいる土を掘ったろ。あと少し土を掘ったら穴の入り口なんだ。あとはお前たちがその土を掘ればいいだろ！！」

「でもね。。。ほら、、、俺たちの手は吸盤だろ？？うんこなんて、、あっ土なんて掘れないんだよ。。。」

両手を見せながら与助が小太郎に説明した。
そして、与助の横で銀次郎もまたそれに賛同するようにうんうん頷いた。

「でも、ほら、銀次郎は脚の力がスゴイだろ？」
「手は吸盤があって使えないなら、その力強い脚を使って、土を押しのけるようにしたらいいんじゃないのか？？」

銀次郎が少し慌てて答えた。
「いやいや、、、うんこ、、、いや土か、うん土だね。」
「土を後ろ脚で押しのけるっていってもね。。。僕たちは手だけじゃなくて、脚にも吸盤ついているからね～」
「吸盤にうんこがつまったら、、、いや、土だね。うん土、土。」
「吸盤に土が詰まったら壁とか登れなくなっちゃうんだよ！！」

「まったく、、、お前たちは。。。吸盤吸盤って。。。」
「じゃ、手足が無理なら、ほらっ、口先のところで土を掘ったらいいじゃないか！！」

「いやいや、、、うんこを口先で掘るなんて、、いや、土だね。うん土だよ、土。。」
「土を口先で掘るなんて、そんなこと僕たちにはできないよ。」
「ほらっ、僕たちは口先が君たちツチガエルと違ってとがってないだろ？？僕たちアマガエルは口先がとがってないから、口先で土を掘ったりなんてできないんだよ！！」

「まったく、、、お前たちは。。。」
「じゃ、こうしようじゃないか。俺が穴を塞いでいる土をこの棒でほぐすから、それをお前たちが外に運びだせばいいんじゃないか？？」

「いや、、、、ね？？与助。。。」
銀次郎が困った顔で与助を見つめた。

「そうだな。。。」
与助は腕を組んで考えこんだ。
「どうするんだよ？俺だって、あの土を掘るのは嫌なんだぞ！」
「そうだな。。。」
与助は考え込んだ。
「ほらっ、早く決めろよ！」
「でもな、、、」
「まったく、、、、俺が手伝ってやるって言ってんのに何が嫌なんだ？」
・
・
・
与助と銀次郎が同時に答えた。
「うんこだよ！」
「ん？？」
「小太郎はさっきから土だ土だっていうけどな、、うんこだろ！！あれは！」
「まぁ、うんこみたいな土だな。」

「いやいや、土みたいなうんこだよ！！」

「でも、アレを除けないと入れないだろ！」

小太郎、銀次郎、与助が穴の入り口でもめていると穴の入り口から音がした。

ギシっ、、、ギシっ、、、ズゥズゥズーーーー

「ん？？なんか音したな？？」

与助が穴の方を見て言った。そして、３人が音のする穴の入り口を見つめた。

すると、穴の入り口をふさいでいた土みたいなうんこが動き始めた。

ズシッ、、、ズゥズーーー

「えっ！！！」

３人は驚いて後ずさりして、尻もちをついた。

ズズーーーン

入り口をふさいでいた壁が穴の中から外に動いて、塞いでいた土みたいなうんこを押し出した。

ズズーーーン

そして、日出夫がひょこっと穴を塞いでいた壁の奥から顔を出した。

「どう？？これなら入れるでしょ♡」

「ん？？日出夫？？どうやって中から押したんだい？」

「いやね、、、忘れたの？」

「この穴には上から入れる入り口があったじゃないの♡」

「さっき、３人がもめている時にそれを思い出して、穴の上から入って中から押したのよ♡」

「なるほど～！！さすが！日出夫だ～」

与助が膝を叩いて感嘆した。

「小太郎ちゃんがあらかた掘ってくれたからできたのよ♡」

小太郎を見下げながら言った。

褒められた小太郎はモジモジしていた。

「あぁ、よかった！」

「これで俺たちの住処に入れるよ！小太郎と日出夫のお陰だ！ありがとう！！」

「さぁ、これでやっと俺たちの住処を紹介できる！」

「じゃ、中に入ろうか！」

与助が振り返りながら花子と亜里沙に嬉しそうに言った。

「いや、、それがね、、、♡」

「穴の中が少し困ったことになっていたのよね、、、♡」

「えっ！！」
妄想アマガエル日記（９２）　－１１月２３日（日）晴れ

「えっ！」
「どういうことだい？？」
与助が日出夫に聞いた。

「いや、、、それがね～♡」
「まぁ、見てみたらいいわよ♡」

そして、ぞろぞろと日出夫の後に続いて穴の中に入っていった。

「えっ！！」
与助と銀次郎と小太郎が目を大きく見開いて驚いた。

遡ること数日前　＠水路----------

「オイ！知っているか？金色のトノサマガエルの話し！！！」
八助が興奮しながら話しかけた。

「あぁ、、聞いたさ！本当なのかな！！」
六助も興奮しながら顔を八助に近づいて小声で言った。

「あぁ、、俺も聞いた聞いた！」

七助も鼻をふんふん言いながら言った。

「まさか、金色のトノサマガエルがいて、それが夜になると光輝くなんてな～！！」

八助がつぶやいた。

「ん？？違うだろ！金色のトノサマガエルが光るなんて聞いてないぞ！」

「確か、金色のトノサマガエルが銀次郎たちの住んでるあの住処の近くの井戸の底にいて、井戸を塞ぐくらい馬鹿デカイ！って聞いたぞ！」

六助がつぶやいた。

「いやいや、全然違うぞ！！金色のトノサマガエルが銀次郎の住処のところの井戸にいるというのは同じだけど、そのトノサマガエルは超能力を使ってものを浮かせたり、願いをなんでも叶えてくれたりするって聞いたぞ！！」

七助もつぶやいた。

3人は腕を組んで頭をひねった。

どういうことなんだ～？？

「ところで、その話は誰から聞いたんだい？？」

八助が2人に聞いた。

「えっ！俺は黄色の体をしたなんか偉そうなアマガエルに聞いたけど？」

六助が答えた。

「俺は水路を歩いている時に、水面に写る自分の姿をずっと見ているナルシストのトノサマガエルに聞いたけど。。」

七助が答えた。

「へ～、俺はなんか見栄っ張りっぽいツチガエルに聞いたんだよ。。。」
「あいつはなんか自分の話しばっかりしてきて、、たぶん、ほとんど嘘っぽかったから、嘘というかだいぶ盛った話だったと思うから、あまり信用できないかもな～」
八助はその時の様子を思い出すように腕を組んで上を向きながらつぶやいた。

「じゃ、そのツチガエルが言っていたことは嘘だとすると、馬鹿デカイか、願いをなんでもかなえてくれるってことになるな！！」
七助が嬉しそうに言った。

「たしかに、、、そうなるな！」
六助と八助が同時につぶやいた。

「じゃ、行ってみるか！その井戸に！なんでも願いを叶えてもらえるぞ！」
七助が提案した。

「よし！！そうしよう！」
「銀次郎たちも誘って一緒に行けたらいいな！久しぶりに会いたいし！」
六助も嬉しそうに答えた。

3人の話し声を木の陰から鼓膜を開いて聞いていたトノサマガエルが小さな声で口を押さえながらつぶやいた。
「なんでも願いを叶えてくれる金色のトノサマガエルだって！！！」
「これは、大変だ！！みんなに教えてあげないと！！」

そして、3人は銀次郎たちの住処に向けて穴の中を進んだ。

真っ暗な穴の中には3人の足音だけが響いた。
ぺたぺたぺた

妄想アマガエル日記（９３）－１２月１６日（火）晴れ　～トノサマガエルの八助たち編～

ペタペタペタ

真っ暗な穴の中は八助と七助と六助の足音だけが響いていた。

「そろそろ銀次郎たちの住処に着くんじゃないかね～」

八助が前を歩く七助と六助に声をかけた。

「確かに、、そろそろ着く頃だよな。。。」

六助が先を見ながら言った。

「ところでさぁ、、後ろの方からなんか気配を感じないか？？」

七助がちらちらと後ろを見ながら言った。

「やめてくれよ～、、、気持ちわるい。。。。」

八助が嫌そうに顔をしかめて言った。

「ほんとだよ。。。やめてくれよ、、、七助～、、」

「幽霊でもいるっていうのか？俺たち以外の足音なんて聞こえないだろ？」

シーーーーーン

穴の中はとても静かで、ほかに何も音はしなかった。

「ほらぁ」

「そうか。そうならいいんだ。。。。何か俺たちの足音が3人だけの音に聞こえなくてな、、、」

ペタペタペタ

「ん？？そういわれたら、、確かに俺たち3人の足音にしては大きいな！」

「六助もそう思わないか？」

「確かにね。。。すごく反響するのかね？？」

「でも、今は静かだし、、、幽霊は足ないだろ？？なんか足音が反響させるお化けかなんかなんじゃないか？？」

「そんな、、お化けいるんか？？」

七助が少し呆れて言った。

「まぁ、もう少しで銀次郎たちの住処に着くから、、、音をあまり立てずに抜き足、差し足、忍び足って奴で歩いてみるか！足音反響するお化けいたら気持ち悪いし！」

八助が提案した。

「そうだな！じゃ、やってみよう！」

七助も納得して返事した。

「じゃ、いくよ～」

八助の掛け声でゆ～くり足を地面に付けながら慎重に歩いた。

ビチャン！

「痛った～！！足つった！！足つったーーー」
「こらっ！！！　しー　しー、、ばれるぞ！」
「あっわりぃわりぃ」

「ん！！！」
後ろの暗闇から声が聞こえて3人は驚いて振り返った。

「なんだい！！今の声は！！！！！」
「足つったーーーっていってたぞ！！！」
七助が慌てて言った。

「誰かがいるんだ！！」

アマガエル日記（９４）－１２月２１日（日）曇り　～トノサマガエルの八助たち編～

「誰かいるのか？？」
七助が暗闇に向けて叫んだ。足はブルブル震えていた。
六助と八助は七助の後ろに隠れるように身を寄せ、恐る恐る顔だけ出していた。

「ほらぁ、、、お前のせいでばれたじゃないか。。。」
「あと、少しだったのに」
そう言って、見知らぬトノサマガエルが後頭部をポリポリ掻きながら闇の中から近づいてきた。

「おい！お前は誰なんだよ！！」

七助が声を震わせながら声高に聞いた。

「いや、、、すまないな。。。君たちの会話をこいつが聞いてさぁ、、、」

そう言って後ろに隠れていたトノサマガエルを指さした。

「いや、、、君たちがちょ～デカイなんでも願いを叶えてくれるっていう金色のトノサマガエルの話しをしていたろ？偶然それを聞いちゃってさぁ。。。。」

「それを言いふらしていたらさぁ、、、、」

「みんなで隠れて君たちについて行って願いを叶えてもらおう！！なんて話になっちゃってさぁ。。。ポリポリ」

右手の人差し指で右の頬を掻きながら申し訳なさそうに言った。

「じゃ、君たちは金色のトノサマガエルに会いたいからついてきたわけか？」

「まぁ、そういうことさ。。」

「なんだ～　そんなことか。。。」

「うろんなことしないでさぁ、最初っから言ってくれたら君たち二人くらい増えたって問題ないのに、、」

「なぁ～六助と八助ぇ？」

「あぁ、、そうさ。」

「変に隠れたり、うろんなことするから俺たちがこんなに怖い想いをすることになったんだ。。」

八助が口をとんがらせて言った。

「いや、、、、それがね。。。。俺たち二人だけではないんだよね。。。ポリポリ」

「ん？？どういうことだい？」

「ちょっと、、、言いづらいんだけどね。。。。ポリポリ」
そう言って、後ろの暗闇から続々とカエルが出てきた。

ゾロゾロ

ゾロゾロ

ゾロゾロ

「おいおい！！ちょっと待てよ。。。。いったい何人付いてきてんだよ！！」
八助は穴の奥から奥から出てくるカエルを見ながら呆れていた。

「いや～～、、、、ほんと悪いと思ってるんだけど。。。」
「水路中のカエルに願いを叶えてくれる巨大な金色のカエルのことを伝えていたらさぁ、、、、」
「水路中のカエルが付いてきちゃって、、、ポリポリ」

「えっ！！！水路中のカエルがついてきたっていうのか？」
八助が驚いて聞き返した。

「あぁ、、、全部ではないかもしれないけど、、、この数だろ？たぶんほとんどついてきていると思うんだよなぁ。。ポリポリ」
後ろを振り返りながらポツリと答えた。

「どうするんだよ？？」

「どうするって言われてもね。。。もうついて来ちゃってるし、、とりあえず、君たちが言ってた住処というところまで行ってみるしかないと思うんだよね。。ポリポリ。」
「どうだい？」

「まぁ、、、それしかないよな。。。こんな狭いところじゃ、、この数だとUターンもできないだろ。。。」
渋々受け入れて、七助と六助も納得して、住処に進むことにした。

ゾロゾロ

ゾロゾロ

「さぁ、着いたぞ！」
七助が後ろを振り返って皆に言った。

住処は天井の隙間からわずかに光が入り薄暗いので、ようやく付いてきたカエルをなんとなく見渡すことができた。付いてきていたのはトノサマガエルだけでなく、ツチガエルやヌマガエル、アマガエルも来ていた。

「お～なかなかいい住処だな！」
言いふらしたトノサマガエルが呑気につぶやいた。

「おいおい！とりあえず、ここでUターンして帰れるだろ？」
「じゃ、、そろそろみんな帰りなよ、、、ムギュ、、ギュ、、、苦しい、、、押すなよ、、、押すなよ。。。」
八助がついてきたカエルたちに言いかけた時、住処に入ってきた水路中のカエルたちで住処の中がギュウギュウになって通勤時の満員電車みたいな状態になってしまった。

「う、、、動けない、、、、」
「おい、押すなよ！！」
「こらっ、俺の背中に吸盤貼り付けるなよ！！」
ギュウギュウになった住処の中では苦悶の声がそこかしこから聞こえてきた。

ハァ、ハァ、、苦しい～～

グぅ～　ギュ～～

ヒィ、ヒィ、、　暑い～～

そして、皆が、思っていた。

あぁ、、、神様、、、お助けを！！！！

ちょうどその時、穴の奥の上の隙間から大きな足音が聞こえてきた（穴の位置図は３８話の挿絵を参照ください）。

ズドン！ズドン！
ノシっノシっ

そして、穴の奥の上の隙間から差し込まれた一筋の光を逆光で受けた大きな大きなカエルがと皆で詰まった住処が入ってきたのである。

ノシっノシっ

ヌぅ～～

その神々しい大きな大きな姿を見たカエルたちは皆思ったのである。

あぁ、、、このカエル様が、、、噂に聞いていた、、、なんでも願いを叶えてくださる、、、神様だと。ありがたや。

妄想アマガエル日記（９５）　１月２３日（金）曇り　～トノサマガエルの八助たち編～

はぁ～～　なんて大きさだ～～
なんて大きくてカッコいいご尊顔をしているんだ～～
逆光でシルエットしか見えないが、住処にいたカエルたちはその大きな大きなカエルを見ながら、ただただ感嘆した。
中には拝んでいるカエルもいた。

ヌ～～
日出夫は少しずつ穴の中に脚を進めた。

ズシン、ズシン、、、
日出夫の歩く度に住処中に腹に響く低い音が響いた。

ズシン、ズシン、、、
ギュウギュウになっていたカエルたちは皆が力が抜け、押し合うこともなく、ただただその場に立ちすくんでその大きな大きなカエルを口をあんぐりとあけて眺めた。

穴の上から差し込む一筋の光のところに日出夫が近づき、少しずつ日出夫の顔を照らした。

はぁ～～　なんてカッコいいんだ～～
なんて、強そうな体をされているんだ～～
まさに、男の中の男って感じだ～～
どんな、カッコいい声をしているんだろ～～
皆がうっとりとした顔で日出夫を見て思った。

ん？？俺たちに気づいたぞ！！
なんか言ってくれるんじゃないのか！！
カエルたちは、唾を飲んだ。

「ゴクン、、、、」

「あっらーーーーーーーーー♡」
「なんなの？？　このカワイ子ちゃんたちはーーーーーーー♡」
「なんで、こんなところにこんなにいっぱいいるのーーーーー♡」
日出夫がキャピキャピしながら、体を嬉しそうにクネクネしながら言った。

「えっ！！」
カエルたちは皆、呆気に取られた。

「おーーーい！」
「日出夫～～　ここだ～！！　ここだよ～～！　八助だ～～！！」

八助が壁側のギュウギュウの中から手を振りながら日出夫に声をかけた。
「あらっ♡　八助ちゃんじゃないの！！」
「どうしたのよ♡」
「まぁまぁ、、説明するから、俺をここからひっぱってくれ～～」
「ん？？わかったわ♡」
「ちょっとごめんね♡　上を通るわよ♡」
そう言って、左手を壁に付けてギュウギュウのカエルたちの上を乗り越えるように大きな右腕を伸ばして八助をヒョイと持ち上げて足下に置いた。
「ふ～～、、、いや～苦しかった～～　助かったよ～～ありがと！！！」
「あそこに六助がいて、あそこに七助もいるから同じように助けてくれよ」
「あらぁ、、ほんとね～♡」
「大丈夫かしら六助ちゃんなんて、、押しつぶされて顔変になっているわね～♡」
そういって、ヒョイ、ヒョイと六助と七助も足下に置いた。
「いや～～危なかった～、、もう少しで押しつぶされるかと思ったよ！助かった、、ありがとう日出夫」
六助が安堵して御礼を言った。
「ほんとだよな～、、、俺も隣のアマガエルの吸盤の手が鼻の孔を塞ぐように貼りついててさぁ、、窒息するところだったよ～～ありがとう！」
七助も顔を擦りながら御礼を言った。

「ところで、このカエルちゃんたちはなんでこんなところにこんなにいるのよ♡？？」

「それがね、、、、」

八助がこれまでの事のあらましを簡単に説明した。

「あらまぁ♡　そんなことがあったの～～♡」

「まぁ、とりあえず、、みんな苦しそうだから、早くあの入り口を開けて外に出れるようにしましょうね♡」

「そうだね！」

「とりあえず、あそこまで日出夫が行けるように道を作らないといけないね！」

八助が提案した。

「そうね♡」

「でも、道なんて作らなくても大丈夫よ♡」

「はい、ちょっとあなたたちごめんね。少しだけ持ち上げるわよ♡」

そう言って日出夫がカエルたちのところに進み両手で１０人くらいを掬いあげてそっと持ち上げて、自分の後ろに置いた。

それを繰り返して、少しずつ穴の入り口に進んだ。

カエルたちはその力強く大きなカエルの一挙手一投足にただただ感嘆していた。

日出夫が入り口に辿り着き、入り口を塞いでいた板を押し始めた。

ギシっ、、、、ギシっ、、、ズゥズゥズーーーー

ズシッ、、、ズゥズーーー

ズズーーーン

ズズーーーン

大きな音が住処の穴の中に響き渡り、少しずつ外の明るい光が穴の中に差し込み、光の環が日出夫の大きな大きな背中を取り囲むように覆った。
その姿はまさに神のように見えた。

日出夫が外に出た後もカエルたちは、しばらく呆然と立ちすくんで穴の入り口を見つめていた。

そして、少し高くなっている穴の入り口にカエルが姿を現した。
穴の底にいるカエルたちはそのカエルたちを見つめた。

最初に緑色のアマガエル、次に青色のアマガエル、その後に男のヌマガエルと女のツチガエル。

そして、最後に金色に光輝く 目が赤いトノサマガエルが現れた。

その光輝く金色のトノサマガエルを見て、皆が思った。

はぁ～～、、、、なんて神々しい。

妄想アマガエル日記（９６）－２月２１日（土）晴れ

白い体をした亜里沙を夕日が照らし、その姿は黄金色に光輝き、逆光と重なり、真っ暗な穴の中にいたカエルたちにはあまり

に神々しく、まぶしく、美しく、皆が口をあんぐりとあけて、呆然とした。
なんて美しさだ、、、、

「えっ！！！」
「なんなんだい？？このカエルたちは？？」
与助が振り返って日出夫に聞いた。

「いや～～♡」
「私もよくわからないのだけどね、、、♡」
「あそこに八助ちゃんと六助ちゃんと、七助ちゃんがいるでしょ？」
そう言って、八助たちを指さした。

「あっ！！ほんとだ！八助たちだ！！」
小太郎が嬉しそうに覗き込んだ。

「みんなが言うにはね♡」
八助から聞いたことを簡単に説明した。

「へ～～、、そんなことがあったのか～。」
「亜里沙が金色のカエルで願いを叶えてくれるって思われているのかね？？」
与助が首をかしげながら聞いた。

「まぁ、そうなるのかしらね～♡」
「でも、亜里沙ちゃんはそんなに大きくはないから、大きい体というのは私のことなのかしらね～♡」
日出夫が考え込んで与助に答えた。

「あぁ、、そうなるのかね～、、まったく、、あのアマガエルとツチガエルとトノサマガエルたちは余計な嘘を言いふらしやがって、、、助けてあげた恩みたいなのは感じないのかね～」
与助が少し怒りながらブツブツ言った。

「まぁ、今はとりあえずあの穴の中にカエルちゃんたちを助けないといけないから、この入り口から外に出してあげましょう♡」

「あぁ、、そうだね。早くここから出してあげないといけない」
「でも、こんなにいるから、この入り口から出すにしても慎重に誘導しないと危ないね。どうしたらいいかな～？？」
与助が安全に誘導する方法を考えて、腕を組んで頭をかしげた。
そして、銀次郎と小太郎と花子と日出夫もまた同じように腕を組んで頭をかしげて考え込んだ。

すると、亜里沙が一歩前にでて、穴のカエルたちに声をかけた。
「お前たちは、なんだ？」
「俺のファンか？」

穴のカエルたちは、一瞬沈黙した後に、皆が声を合わせるように大きな声で返事をした。
「はい！！！！！！！！」

「そうか。そうだろうな。」
「じゃ、俺の言うことを聞け」

「はい！！！！！！！！」

「じゃ、そこのアマガエル、お前からその後ろのトノサマガエルまでまずはこの入り口から出ろ。そして、その次にそこのツチガエルからその後ろのヌマガエルが出ろ、その次は、、」
亜里沙がカエルたちに指示を与えて、穴の中のカエルたちは混乱することなく穴の外に出て行った。

その様子を与助たちは羨望の眼差しで見つめていた。

「よし、だいたいこれで全員出て行ったな。」
「あとは、お前たちトノサマガエル３人だけだ。」
「はやく、出ろ。」

「いや、、、彼らは僕らの友達なんだよ。」
銀次郎が亜里沙に説明した。

「そうか。じゃ、これで余計なカエルたちは全員出ていったんだな。ようやくゆっくりできる。」

「はぁ～～、、、なんなんだい？あの白いトノサマガエルは、美しいだけじゃなくて、なんてカッコいいんだい？」
「男が惚れる男って感じだな！！！」
八助が銀次郎にコソコソと聞いた。その横で七助と六助もうんうん頷いていた。

「そうかい？でも、亜里沙は女だよ。」

「えっ！！」
「えっ！！」
「えっ！！」
トノサマガエル３兄弟が口を揃えて驚いた。

妄想アマガエル日記（９７）　－３月１９日（木）晴れ

「えっ！！」
「女？」
八助が目を大きく見開いて、亜里沙に聞こえないようにコソコソと銀次郎の耳元で言った。
「そうさ！亜里沙は女の子なんだよ。まぁ、僕らも最初は男と思っていたから、女と聞いたときは驚いたんだけどね。。。」
銀次郎もまた亜里沙に聞こえないように３人にコソコソと小さな声で言った。
「そうだろ！そうだろ！お前たちも最初は驚いたろ！」
「そうだね。最初会った時は井戸の底にいてね。。。」
「えっ！！」
「井戸の底？井戸とは聞いていたけど、まさか井戸の底？」
「そうさ！亜里沙は井戸の底にいたんだよ。まぁ、僕らも最初は井戸の底にカエルがいるなんて思わないからさ～驚いたんだけどね。。。」
「そうだろ！そうだろ！」
「ほんとだよ～、、井戸で生まれて井戸で育って全身真っ白い体して目が赤いトノサマガエルなんて見たことないからね。。。」
「えっ！！」
「井戸で生まれて井戸で育った？」

「おい！銀次郎、、、いい加減にしろよ！」
「なんでそんなスゴイ情報を小出し小出しに出してくるんだよ！」
「最初っからバチ～と言ってくれよ！バチ～と」
六助がしびれを切らして、思わず口に出した。

すると、銀次郎の後ろから与助が銀次郎を脇に押しやって六助の前に出てきた。

「まぁまぁ、、、六助さん。」
「銀次郎という奴はわざとやっているわけではないのですから、そう目くじら立てないでくださいな。」
水戸黄門のような涼しい顔をして六助の肩を叩きながら言った。

「あぁ、、、まぁ別に俺は目くじらなんて立ててないけどな。」
「俺は温厚だから目くじらなんて立てたことないし、立て方もしらないんだ。」
「ただ、銀次郎が言う情報がなんか驚く情報ばかりだったもんでな。。。」
「すまないな、銀次郎。」
そう言って、銀次郎の方に片手をあげた。

「まぁ、そういうわけでね。そんな亜里沙はこれからこの住処で一緒に暮らすことになったんだ。」
「そこで、冬の間、君たちが使っていた部屋のどれかを亜里沙に使わせたいのだけど、どの部屋を使ったらいいかい？」

六助が与助に小声で言った。
「そりゃ～、、俺の部屋を使ってもらっていいのだけど、、、俺の部屋は、、ほらぁ、、銀次郎の隣だろ？」
「あんなところに、あんな美しい方に寝てもらうのは悪いだろ？」

「そうだな、、、そういえば、亜里沙だけでなくて、あそこにいるツチガエルの花子の部屋も用意しないといけないんだ。。。」

「そう考えると、、、七助の部屋と八助の部屋ってことになるな。」
「そうなるな。問題はどっちがどっちの部屋を使うかだな。」
「確かにな、、」
銀次郎が、六助と与助がコソコソと話しているのが気になって近づいてきた。
「なんの話しをしているんだい？六助が僕に目くじら立てたことかい？僕は全然気にしてないよ！大丈夫だよ、六助！」
「あぁぁ、、、そうなんだね。ありがと！」
「じゃ、そろそろ亜里沙と花子にこの住処のことを説明しないといけないね！」
銀次郎は嬉しそうに振り返って亜里沙と花子に言った。
「ここが僕の部屋でね、あそこが小太郎、その向かいが日出夫、その隣が与助の部屋なんだけどね。。。六助たちは水路に戻るんだろ？」
※部屋の配置は４７話の位置図をご覧ください。
「あぁ、もう少ししたら戻るよ。」
六助がすぐに返事した。
「じゃ、六助たちの部屋が空いているからね。僕の隣の六助の部屋とその隣の七助の部屋とその向かいの与助の部屋の隣の八助の部屋が空いているから、好きなの選んでいいよ！」
花子はぐるりと見渡して、少し迷ってから、
「じゃ、私は一番広いようだから、与助の隣の八助という人の部屋を使わせてもらうわ。」

八助は花子に見られて、少し照れながら嬉しそうに答えた。
「あぁ、どうぞどうぞ使ってください！」

「じゃ、亜里沙はどの部屋がいいんだい？」
銀次郎がニコニコしながら嬉しそうに聞いた。

「そうだな。どこでもいいんだが、、この穴の真ん中に近い方がいいからな。」
「お前の隣りの部屋にする。」
そう言って、銀次郎の隣の部屋を指さした。

それを聞いて、与助が慌てて
「いや〜、、、この七助の部屋も真ん中に近いからこっちの部屋の方がいいんじゃないかい？？」
「ほら、見てご覧よ。ほらっ！」
「七助は綺麗好きだから、こんなに綺麗だよ。でも、六助はだらしないから、部屋がこんなにちらってるでしょ！七助の部屋がいいんじゃないかい？？」
与助が七助と六助の部屋を行き来しながらぎこちなく説明した。

「まぁ、俺は掃除するのは嫌いじゃないから問題ない！ここでいい。」
そう言って、六助の部屋を指さした。

「いや〜、、、六助の部屋は、六助の匂いが溜まっていて、、、ほら臭いよ！うんこみたいな匂いがするよ！」
六助の部屋に頭を突っ込んで指で鼻を押さえながら、顔をしかめて言った。

「まぁ、大丈夫だ。俺は井戸の底にいたから、臭いのには慣れている。」

「いや〜、、、六助の部屋は、、、」

そう言いかけた時に、六助が与助の肩を掴んで耳元で言った。

「こら与助ぇ、、、」

「亜里沙さんのために銀次郎の隣の部屋を選ばせたくないのはよくわかるんだがな、、そのために、、あの美しい亜里沙さんに俺の評価を下げるようなことをこれ以上言うんじゃねぇ。。。。」

「あぁ、、、ごめん。。」

「目くじら立てないで。。。」

妄想アマガエル日記（９８）－４月１９日（日）晴れ

「まぁまぁ、、、どうしたんだい！六助～そんな怖い顔して、、」

銀次郎がニコニコしながら与助と六助の間に割って入った。

「あぁ、、まぁ、なんでもないんだ」

六助が我に返って冷静に答えた。

「じゃ、いいんだけどね。亜里沙は僕の部屋の隣ってことでいいんだね？」

亜里沙の方を振り向いて嬉しそうに聞いた。

「あぁ、、まぁお前の隣だろうが、別に関係ないけどな。」

「まぁまぁ、そんなこと言っちゃって、、僕の隣がよかったんだね！」

「お前は馬鹿か？なんでお前の隣がいいんだ？ただ、この穴の真ん中に近いからここを選んだだけなんだ！」

「まぁまぁ、、、そんなこと言っちゃって、、だってそこは六助の部屋だったんだよ、、」
そう言って、部屋の中を覗き込んだ後に振り返って続けた。
「ほら、こんなに汚いんだよ！」
「見てごらんよ！」

「あぁ、まぁ俺は掃除は嫌いじゃないから別に問題ない」

「ほら、こんなに臭いんだよ！」
「嗅いでごらんよ！」

「あぁ、まぁ俺は臭いのには慣れているから別に問題ない」

「ほら、ベタベタするなんかよくわからない液体が壁についているんだよ！」
「触ってごらんよ！」

与助が銀次郎に近づいて銀次郎を壁に押しやった。
「銀次郎、、、悪気がないのはわかってるんだけどな、、、その辺でやめておくれ、、六助が可哀そうすぎる。。。」
そういわれて銀次郎が六助をちらっと見ると、六助が頭から湯気が出ているように静かに怒っているのが見えた。

「あぁあぁ、、そんなことはないね。」
「部屋もよく見たら汚いというよりは色々なものがオシャレにディスプレイされているし、匂いもよく嗅いだらとても香ばしくていい匂いのような気もしてきたし、この壁のベタベタするのもたぶん体によさそうな液体だしね！！」
「ね？与助？そうだよね？？」

「あぁ、そうさ！そうさ！体によさそうだ！！」

「そうなのか？じゃ、お前そのベタベタする液体を舐めてみろよ！」
亜里沙が好奇心で聞いてみた。

「そうだ！そのベタベタする液体は俺は関係ないけど、体にいいのか？」
「じゃ、舐めてみろよ！！」
六助が、ここぞとばかりに問いただした。

「えっ！！！こんなベタベタする気持ち悪い液体を舐める？？」
銀次郎が困ったような顔で与助を見つめながら言った。

「まぁ、今はほらっ、、、」
「とりあえず亜里沙の部屋を決めて、その準備をしないといけないから、また今度にしようよ。時間ないよ！ね！！」
与助が慌てて皆に言った。

「いや、俺たちはもう少ししたら水路に戻らないといけないし、亜里沙さんがその部屋を使うんなら、その液体がなんなのか教えてあげないといけないだろ？」
六助がニヤニヤしながら腕を組んで2人に言った。

「わかった、わかった。じゃ、銀次郎、舐めてみなよ！」
与助が銀次郎の方を見ないでつぶやいた。

えっ！！与助、、ずるいな～
銀次郎は与助を見ながら思った。

すまないな銀次郎！でも、体にいいなんて言い出したのはお前だからな。

与助もまた横目で銀次郎を見ながら思った。

まったく与助め、、、まぁ、仕方ないか、、、

恐る恐る指を伸ばして、その壁から出ているベタベタする液体を触ってしばらく指の先で液体を少しこねくりまわしながら見ていると、ちょうど光が差し込み、その液体を照らした。

液体は粘りがあり、透明で、とても綺麗に見えた。

そして、どんな味がするのか、逆に気になりはじめた。

しばらく指先の液体を見つめていると、好奇心で無意識に指先を舐めていた。

「あっ、、、、」

「大丈夫か？？変な味がするんならすぐ吐き出せ銀次郎！！」

「俺たちカエルは胃を反転して洗えるから心配するな！！」

与助がとても心配そうに近づいてきた。

「大丈夫か？」

六助もまた少し責任を感じて心配して近づいてきた。

「あっ、、、、」

「大丈夫か？？？」

与助と六助が心配して同時に声をかけた。

「あっ、、、、」

「甘い！」

銀次郎が驚いた顔をしてつぶやいた。

「ん？？甘い？どういうことだ？」
与助が呆気にとられて聞いた。

「いや、僕もよくわからないけど、、、なんか甘いんだよ！」
舐めた指先を眺めながら言った。

「そんなわけないだろ！こんなところに甘い液体なんて出るわけないだろ！」

「いや、、、でも本当に甘いんだよ！ほらっ」
そう言って、もう一度液体を指でとって舐めながら言った。

「そんなわけないだろ？」

「与助も舐めてみなよ！」

「まぁ、、、そんなに言うなら1回舐めてみるか。」
そう言って、恐る恐る指を伸ばして液体を指先に付けてしばらく観察した後に、恐る恐る舐めてみた。
「ほんとだ！甘い！」

「ほんとか！！お前たち、騙そうとしているんじゃないのか？」
六助が疑いながら2人を問いただした。

「じゃ、六助も舐めてみなよ！」
銀次郎が進めた。

「まぁ、、、そんなに言うなら1回舐めてやるか！」
そう言って、既に舐めてみたくなっていたが自分からは言い出せないので仕方ない素振りを見せながら舐めた。
「ほんと！甘い！」

そして、日出夫、花子、七助、八助も興味津々で舐めた。
「ん！甘い！！」
皆が甘さを感じて感嘆の声をあげた。

「亜里沙は舐めないのかい？」
銀次郎が不思議そうに聞いた。

「そんなもん舐めるわけないだろ！」

「そう？甘いよ！」

「いや、そんな壁から出ているわけわからない液体なんて舐めるのはおかしいだろ！」

「そう？舐めてごらんよ！甘くておいしいよ！」

「まったく、、、銀次郎がそんなに言うなら、、、仕方ないな～」
「どうしても、舐めて欲しいのか？」

「うん！舐めて欲しいよ、だって甘いんだ！！！」

「仕方がないな～」
「そんな壁から出ている液体なんて俺は舐めたくなんてないんだが、、、」

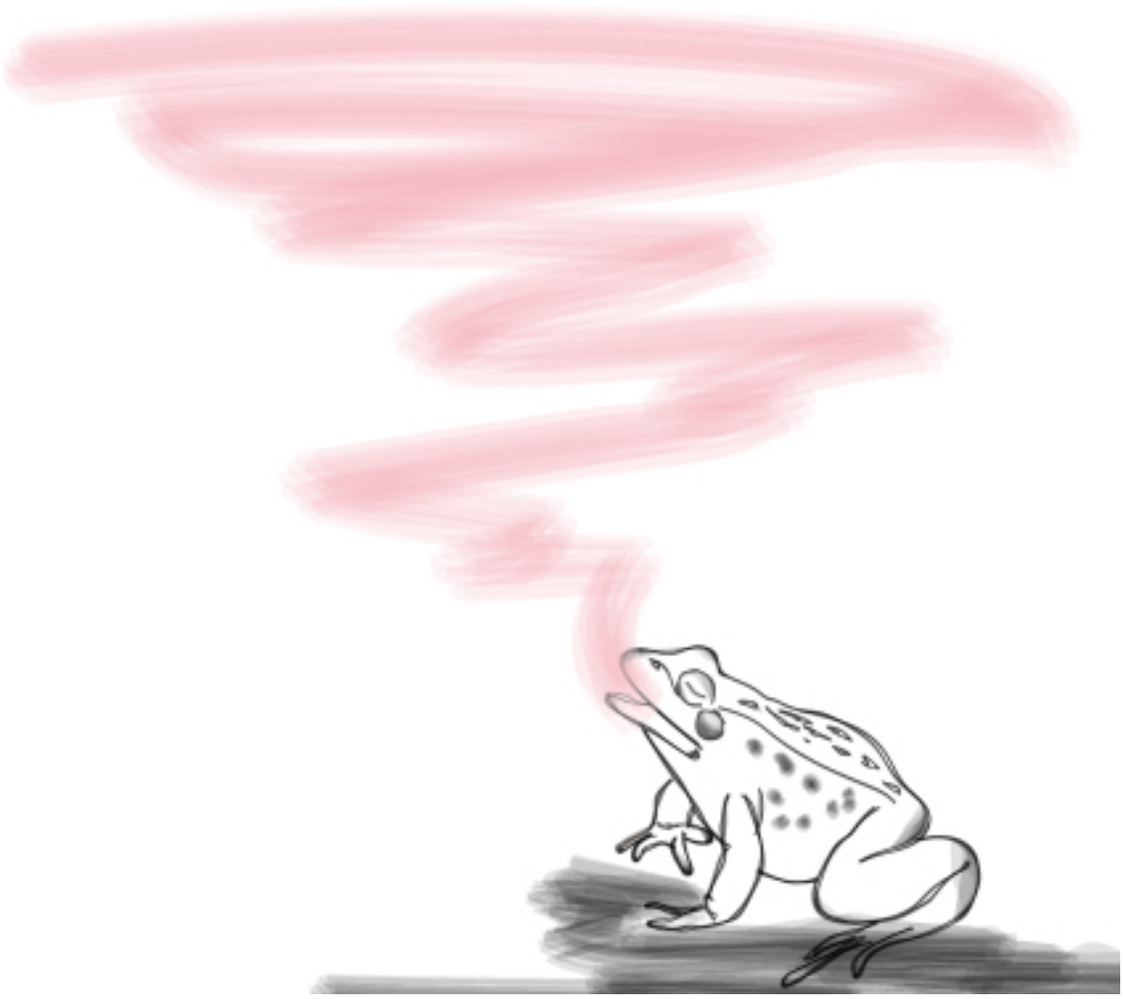
「お前がそこまで言うなら仕方ないな、、、一回だけ少しだけだからな！！」
そう言って、恐る恐る指先で液体をとって、嫌そうな素振りをしながら仕方なさそうに液体を舐めた。

はっ！！！！！！！！！なんだこれは～～～！！！！

恍惚とした顔をして見上げた。
井戸の底では得ることができなかったものが口いっぱいに広がった。
甘いという感覚を初めて味わった。

これが甘さという感覚なのか！！
なんて美味しいのだ！！

そして、平静を取り繕いながらぼそりと言った。
「んんん、、やっぱり、俺は、この部屋でいいぞ！」



妄想アマガエル日記（９９）　－５月１３日（水）晴れ

「本当に、その部屋でいいのかい？」
与助が少し諦めたように聞いた。

「あぁ、もちろんだ！最初っから俺はこの部屋でいいと言っていただろ！」
亜里沙が自信たっぷりに答えた。

「そうか、まぁ君がそう言うんなら仕方ないな。」
「ところで、この甘い液体はなんなんだろうな？」
与助が壁に付いた透明な液体を腕組み、頭を傾げながら見ながら呟いた。

「確かにな～、、、俺がこの部屋を使っていた時にはこんな液体なかったと思うんだけどな、、」
六助もまた与助の横に並び、腕を組み、頭を傾げながらぼそっと呟いた。

「なんなんだろうね？？この液体は？？」
そう言いながら銀次郎は、液体を下から覗き込むように顔を近づけて見上げて言った。

「あっ、、なんか液体の根本にあるよ！」
液体の根本を指さしながら言った。

「ん？？どこだい？」
与助もまた同じように覗き込んだ。
「ほんとだな！なんか白いのがあるな！」

「どれどれ？？」

六助もまた同じように覗き込んだ。
「ほんとだな、なんか白いのがあるな！」

「何があるっていうんだよ！銀次郎、、その白いってのを取り出してみなよ！」
小太郎が後ろから声をかけた。

「そうだね！取り出してみようか！」
そう言って銀次郎が甘い液体の根本を掴んで取り出そうとした。すると、つるんと千切れて液体とその白いのの先端が取れた。

「えっ！！」
この白いのはなんなんだろうな～？？
銀次郎は指先に残った白いのと液体を眺めながら言った。

そして、銀次郎のその指先を皆が輪になり覗き込んだ。

「これは、、あれだな、、」
小太郎が腕を組んで知った感じで話しはじめた。
「これは、以前冒険していた時に、遥か南の地で聞いた白い妖精って奴かもしれないな！」
「白い妖精は甘い何かを出すかもしれないと、話している人を、見たという人から聞いたことがある！」

「へ～、、、小太郎は物知りだな～　さすがだよ！」
銀次郎が尊敬の眼差しで小太郎を眺めた。

それを聞いた与助が疑いながら聞いた。
「なんだい？？白い妖精って？？じゃ、この白いのは妖精なのかい？」

「妖精なんだろうさ。俺は聞いただけだから見たことなんてないから詳しいことはわからないけどな！」

そうしていると、銀次郎の指先の液体が指先に広がり、白いのがむき出しになった。

「見てみなよ！これはただの植物の根の先端だよ！」

与助が銀次郎の指先の白いのを指さしながら言った。

「あっ、ほんとだ！これはただの植物の根の先端だったんだね！！」

「植物の根の先端ってこんな透明でヌルヌルする液体を出すんだね！」

銀次郎が嬉しそうに呟いた。

「植物の根ってのは、根の先端からこのヌルヌルする液体を出せるからこんな硬い土の中を掘り進めることができるのかもしれないな！」

与助が腕組みながら感心して言った。

「ほんとだね～～、、よく出来ているね～～。」

「根の先端ってこんな透明な液体が出るんだね～」

「ほんと～～、、よく出来ているもんだな～。。」

「いや～、、ほんとよく出来ているもんだな～～。。」

小太郎も並んで呟いた。

「ほんとだよな～　なぁ？」

与助が小太郎に話しかけた。

「あぁ、、ほんと、植物ってよくできるもんだぜ！！スゴイもんだ！」

「って、、、お前、白い妖精って言ってたじゃないか！」

与助が隣に並び腕を組んでいる小太郎を問い詰めた。

「ん？？なんのことだい！白い妖精ってなんのことだい？」

小太郎が知らないふりをした。

「白い妖精って、、、、、なんだい？？」

与助がさらに問い詰めた。

「まぁ、遠い南の地ではな、、、たぶん、ただの根の先端のことを白い妖精って言うんだろうよ。」

小太郎が遠くを見つめながら呟いた。

「小太郎はまったく、、、いい加減なことばかり言うもんだよ！」

与助が少し怒りながら言った。

小太郎と与助の話しを聞いていた亜里沙がぼそっと呟いた。

「白い妖精の話しは、以前俺も聞いたことがあるぞ。」

妄想アマガエル日記（１００）－６月４日（木）雨

「えっ！亜里沙は白い妖精のことを知っているのかい？」

与助は驚いて振り返って亜里沙に聞いた。

「見たことはないけどな。前にどこかのアマガエルが井戸に落ちてきてな。俺を見るなり言ったんだ。」

「本当にいたんだ！白い妖精って」

「へ～、、、まぁ、亜里沙は白いからな」

与助はボソッと呟いた。

でも、性格は妖精って感じじゃないよな、、、と思いながらまじまじと亜里沙を見た。

「それで？白い妖精のことは他になんて言っていたんだい？」

「あぁ、それがな、、、白い妖精ってのはさっき そこのうんこまみれが言っていたように、なんか甘いのを出すらしいんだ。それで、俺に甘いのを出してくれと言ってきてな」

「へ～～、、、出したのかい？？」

与助が興味深々に聞いた。

「んなもん、出るわけないだろ？だから、そんなもん出るわけないだろ！と突っぱねてやったんだ」

「へ～～、、、そのアマガエルはどうしたんだい？」

「どうしたも、こうしたもないだろ。すぐに井戸をよじのぼって出ていったさ」

「そうか～、、、でも、小太郎が言っていた白い妖精ってのは、まんざら嘘じゃないんだな！！」

「そうだろ？俺は遥か南の地で聞いたんだよ！」

小太郎が胸を張って、自信たっぷりに言ってきた。

「あぁ、そうだな」

与助は渋々認めながらも、さっき亜里沙にうんこまみれって言われたのは気にならないんだな～と目を細めながら思った。

「甘い何かを出す白い妖精ってのは、本当にいるんだな！いったい、どんな姿をしているんだろうな！！」

銀次郎が目を輝かせて見上げながら想像した。

「そりゃ～、白くてだな、、羽根が生えていてだな、、金髪の子供みたいな姿なんじゃないか？」

小太郎が自信たっぷりに答えた。

「いやいや、それは、天使だろ！」

「天使と妖精は違うだろ！！それと、天使は甘いのなんて出さないだろ！」

与助が小太郎につっこんだ。

「じゃ、妖精ってのはどんなのなんだい！」

「そりゃ～、白くてだな、、小さくてだな、、帽子被った小さな人みたいな姿じゃないか？」

与助もまた自信たっぷりに答えた。

「いやいや、それは、小人だろ！小人と妖精は違うだろ！」

「いやいや、小人は妖精だろ！！」

「じゃ、小人は甘いのだすのか？」

「ん～～、、出さないか。。じゃ、甘いのを出す白い妖精ってどんなのなんだ？？」
与助が考え込んで、腕を組んで頭をかしげた。
小太郎もまた与助と並んで腕を組んで頭をかしげた。

亜里沙がはっと思い出して呟いた。
「あっ、そういえば、そのアマガエルが変なことを言っていたな。。。」
「たしか、、、」
「白い妖精って大きな黒い建物にいるって聞いていたんだけど、こんな井戸にいるんだなって。」

「へ～～！！黒い建物って、小太郎が登ろうとしているあの建物だろ！」
与助がはっと思いついて手を叩いて言った。

「そうだな！間違いない！あれしかないよ！！」
銀次郎も嬉しそうに手を叩いた。

「お前たちは黒い建物ってのを知っているのか？」
亜里沙が少し驚いて聞いた。

「あぁ、小太郎がその建物に登りたがっていてね。僕たちはその夢を叶えてあげようと去年はいろいろと練習したし、小太郎は日出夫の頭の上に乗って高いところに慣れる練習もしているんだよ！」
「でも、寒くなって、越冬しないといけなかったから、去年は登れなかったんだ！」
銀次郎が小太郎をちらっと見ながら言った。
小太郎も腕を組みながらうんうん頷いた。

「へ～～、、黒い建物ってのは本当にあるんだな～、、あのアマガエルが言っていた白い妖精ってのは本当にいるのかもしれないな。。」

亜里沙が少し考えてポツリと言った。

「じゃ、明日にでも黒い建物を見に行こう！」

「ただ、今日は色々とあって疲れたし、、、亜里沙の部屋も掃除しないといけないから、ちゃっちゃっとやって、早く寝よう！」

与助が皆に提案した。

「そうだな。」

亜里沙もはじめての井戸の外の世界で色々とあって疲れていた。

「よし！やろう！」

ただ一人、元気なのは銀次郎だけ。

妄想アマガエル日記（１０１）－６月２１日（日）曇り

外が暗くなり、六助たちを見送ったのち、皆が自分の部屋に入って静かな時間を過ごしている。

亜里沙の部屋では、亜里沙が寝床に仰向けで寝転び、両手を頭の下に置き、脚を組みながら天井を見あげていた。

今日は色々なことがあったな、、

はじめて井戸から出て、色々な物を見て、色々なことを知った。

真っ暗な天井を見ながら亜里沙は今日一日を思い出していた。

井戸の中はジメジメしていて、臭くて、光がほとんど入らなかった。

でも、生まれ育った場所だから、全然嫌ではなかった。

外に出てみて、
風というものをはじめて感じた。
案外、体が乾くというのも気持ちがいいものだと知った。

日の光をはじめて浴びた。
日の光というのは暖かくて、ずっと当たっているとヒリヒリして痛くなるものだと知った。

外の世界は井戸の中の世界とは随分違うものだ。

これまで、俺は何も知らなかったのかもしれないな。

明日は、また知らないことを色々と知ることができるのだろう。

そんなことを考えて、なかなか眠れず、静かな暗闇の中一人でしんみりしていた。
すると、壁の向こうから何やら音がし始めた。

ズズーーー、ズドン！ズドン！

ん？？なんの音だ？

ズズドドドン！！ズズドドドドンン！！

なんだ？どんどん音が大きくなるぞ！！

バコーーーーン！！！ドゴーーーーン！！

なんだ？なんだ？？

亜里沙が上体を起こし、真っ暗な暗闇の中であたりを見渡した。

すると、入口から与助がヒョコっと顔を出して声をかけてきた。

「亜里沙、起きたかい？？」

「あぁ、、なんなんだ？あの音は？？なんでお前はこんな夜中に俺のところに来るんだ？」

色々と考えていて、寝れなかったとは言わなかった。

「あぁ、まぁ、君が怖がってはいけないと思ってね。たぶん、この音を聞かないと信じてくれないと思ったから待っていたんだよ。」

「なんなんだ？この音は？工事でもしているのか？」

「いや～これはね。銀次郎が寝相が悪くてね。。。」

「それで、こんな感じで部屋の中で転がっている音なんだよ」

「ん？？寝相の悪さ？？銀次郎の？」

「そうさ。銀次郎ってのは、寝相がとっても悪いんだ。だから、寝るとこんな感じで部屋の中を転がっているんだ。力が有り余っているんだな。それで銀次郎が壁とかに当たってこんな音が出るんだ。」

「スゴイ寝相の悪さなんだな。しかし、、こんなにうるさかったら皆 寝れないだろ？」

「いや、、、俺はこの音に慣れているし、ほかのみんなも慣れているから大丈夫なんだ。花子なんて銀次郎と初めて会った時に、この寝相の悪さを知ったくらいだからね。。。」

「へぇ〜〜、、、よくこんな音が出るもんだな！」

「まぁ、慣れるとこの音があると外敵が気持ち悪がって近づいてこないから、頼もしいんだよ」

「そうなんだな〜。。。しっかし、スゴイ音だな。。。」

「ところで、君はどうする？もう一つ部屋は空いているから、そっちに移動するかい？それとも、この部屋で寝るかい？」

「そうだな。。これだけ大きな音だったら、ほかの部屋に行っても同じだろ？俺はここでいいよ。」

「そうか。じゃ、俺の部屋は向かいの真ん中だから、なにかあったら聞いておくれ！」

「じゃ、おやすみ」

「あぁ、、、おやすみ」

ドッゴン！！！ドッカーーーーーン！！！

部屋の中には銀次郎の部屋から工事現場のような音が止まることなく鳴り響いていた。

その音を聞きながら、仰向けに寝転び天井を見上げながら亜里沙は思っていた。

はじめて、

おやすみって言葉を使ったな。

妄想アマガエル日記（１０２）－７月１６日（木）晴れ

「いやーーーーー！！よく寝たーーーーー！！！」
銀次郎が両手を上に、体を伸ばしながら、ハツラツとした顔で部屋から出てきた。

「あれ？？まだみんな起きてないんかな？」
そう言って、隣の小太郎の部屋の前に近づいて声をかけた。

「おーーい！！小太郎ぉ～～！！もう朝だよーーーー！！」

「シーーーーーン」
返事がない。

「あれ？？おかしいな～。。。」
「まだ寝ているのかな～～。。」
そう言って、向いの与助の部屋の前に近づいた。

「おーーい！！与助ぇ～～！！もう朝だよーーーー！！」

「シーーーーーン」
返事がない。

「あれ？？おかしいな～。。。」
「与助もまだ寝ているのかな～～。。まだ日は出てないから、こんな朝早くに外に餌を食べに行っているわけないだろうし、、、」
少し心配になって、ほかの部屋の前でも声をかけて回ったが、どの部屋からも返事がなかった。

おかしい、、、これまでだったら誰かが返事をしてくれたのに、、
まだみんな寝ているのだろうか？？

さらに心配になって、恐る恐る小太郎の部屋に入ってみた。

すると、そこには小太郎の姿はなかった。

おかしい！！そう思って、ほかの部屋にも入ってみたが、与助も花子も亜里沙も、そしてあんな大きな日出夫の姿もなかった。

なんてことだ！！みんないなくなってしまった。。

どうしてしまったんだ！！
もしかして、ヘビでも入って来て食べられてしまったのだろうか？？
そう思って、地面に這いつくばって、ヘビが歩いた跡を探した。

ん〜〜、、、

そして、気づいた。

そうだ！僕はヘビが歩いた跡を見たことがないから、見てもわかりはしないいんだ！

でも、何かいなくなった手がかりを探さないといけない。
そう思って、小太郎の部屋の中を探した。

ん？？これはなんだ？？

壁に白い粉みたいなのがついていた。

もしかして、この白い粉は小太郎を連れ去った動物か何かが残していったものかもしれないぞ？？

そう思って、その白い粉を人指し指で触って、こねくり回しながらその粉をまじまじと眺めた。

ん～～、、、

そして、気づいた。

そうだ！僕は白い粉を見たってそれが何なのかなんてわかりはしないんだ！

まったく、、、僕は何も知らないんだな～。。

そう思って小太郎の部屋をとぼとぼと肩を落としながら出て、穴の中央で途方にくれていた。

僕がもっといろいろと知っていたら、、、

小太郎とかを助けにいけただろうに、、ごめんよ、、、小太郎、、与助、、、みんな、、、

悔みながら、天井を見上げた。

すると、穴の入り口からワイワイ声が聞こえてきた。

「おっ！銀次郎、、起きたのか！」

ニコニコしながら小太郎が右手を挙げて、声をかけてきた。

「ん？？みんな、、、、無事だったのかい？？」

「ん？？無事も何も、、、みんなで少し体を動かしてきただけだぜ？」

「体を動かす？？」

「あぁ、そうさ！お前が夜中中動き回っていたろ？」
「その音を聞いていたら、なんか体を動かしたくなってな、、」
「そして、外に出たら、既にほかのみんなも俺と同じで体を動かしたくなったみたいで外にいてな、、」

「そうなんだ！！僕にも声をかけてくれよーーー心配したんだ！」

「あぁ、、まぁ、偶然みんなに外で出会ったんで、示し合わせて出たわけではないからな、、」

「いや～よかったよ～。。。皆が無事で～～」
「僕は、自分が知らないことが多いことを思い知って、悔んでいたんだよ！」

「ん？？知らないことが多いことを思い知って、悔む？なんだいそりゃ？」
小太郎の後ろで話を聞いていた与助が不思議そうに聞いた。

「まぁ、、、僕が知らないことが多いってことを改めて思い知ったということさ！」

「そうか！まぁ、気にするなよ。」

「あぁ、そうだね。」

そして、与助の後ろにいた亜里沙が銀次郎に近づき、銀次郎の肩に右手を置いてぽつりとつぶやいた。
「お前は、俺よりは、いろいろと知っているぞ。」

「亜里沙の様子がおかしくない？」
銀次郎が与助に近づいてぽつりとつぶやいた。

「そうか？なんでそう思うんだ？」

「さっきね、、、僕にね、、、お前はなんて博識なんだ！なんて褒めてくれたんだよ！」

「ん？？そんなこと言っていたか？」

「そうさ！僕にね、、、お前はなんて天才なんだ！みたいなことを言ってきたんだから！！」

「ん？？天才？銀次郎のことを？そんなこと言うわけないだろ？」

「いやいや、、言ったよ！お前みたいな頭のいい奴見たことない！みたいなことを言ってきたんだよ！！」

「そんなこと言っていたか？」
本当に亜里沙がそんなことを言ったんかな～。。。

「言っていたさ！！」

まったく、、仕方ないな。。。じゃ、とりあえず小太郎に聞いてみるか。。。
「お～～い、小太郎ぉ～～」
右手を上に伸ばして左右に振りながら、日出夫と花子と楽しそうに話している小太郎を呼んだ。

「ん？なんだ？」
そう言って、小太郎が与助と銀次郎のところに歩いてきた。
「さっきさ～、、亜里沙が銀次郎になんか言ったの聞いていたかい？」
「亜里沙が銀次郎に？？」
「あ～　なんか、お前は変な奴だな？みたいなことを言っていた奴か！」
「ん？？変な奴？そんなことを言っていたのかい？」
「あぁ、そうさ、亜里沙が銀次郎に近づいて行ってな、肩にこんな感じで手を置いてな。お前は俺より変なこと知ってる変な奴だな！って言ったのさ！」
「そんなこと言われてないよ！！」
銀次郎が少し怒って反論した。
「どっちが合っているんだい？俺はその時亜里沙の後ろにいたから、なんて言ったのかは聞こえなかったんだ」
与助は少し困ったように言った。
「銀次郎はなんて言われたと思っているんだ？」
小太郎が銀次郎に不思議そうに聞いた。
「僕のことを天才だな！みたいな褒めることを言ってくれたんだよ！」
「天才？亜里沙が銀次郎のことを天才って？？ハッハハハハハッハア、、、ヒィヒィーーーー」

「銀次郎、、亜里沙がお前のことを天才なんていうわけないだろ～～」

「そんなことないさ！じゃ、亜里沙に聞いてみようじゃないか！！！」

銀次郎が怒って、言い返した。

「まぁまぁ、、、小太郎、、もしかしたら本当に亜里沙は褒めてくれたかもしれないから、笑ったらだめだろ、、」

与助が小太郎を諭して、亜里沙の方に近づいて行った。

「ちょっといいかい？亜里沙」

「ん？？なんだ青」

「さっきさ～、君は銀次郎の肩に手を置いてなんか呟いたろ？」

「銀次郎は褒められたって言っていて、小太郎はけなされたって言っているんだけど、君はなんて言ったんだい？」

「さっき、、、？？あぁ、、さっきあの緑に言ったことか～」

そう言いながら顎に手を置いて上を見上げて考えた。

銀次郎と小太郎が息を飲んで亜里沙の返答を耳を澄まして聞いた。

「あんな奴でも、今の俺に比べたら、色々なことを知っているぞって言ったんだ！」

「ん？それは褒めているのかい？それとも、けなしたのかい？」

与助が不思議そうに聞いた。

「褒めるも、けなすもないだろ。ずっと井戸の底にいたから、俺がこの中で一番何も知らないってことさ！」

「そうか！君は少し変わったんだな！」
そう言って、少し微笑んで亜里沙を見つめた。
そして、銀次郎と小太郎もその様子を嬉しそうに見つめた。

妄想アマガエル日記（１０４）－９月２６日（土）雨

「おい！俺のどこが変わったっていうんだ？」
「外に出てからまだ1日くらいしか経ってないのに、そんな変わるわけないだろ？？」
亜里沙が不思議そうに聞き返した。

「ん？君は井戸の底にいた時はもっとこう自分が一番よく知ってるみたいな感じだっただろ？まさか、自分が一番何も知らないなんて言うなんて、外に出て変わったんだな～って思ったのさ。」

「そうか？」
「井戸の底にいた時だって、自分が一番よく知っているなんて感じてはいなかったぞ。ただ、俺は誰よりも美しいってことだけはわかっていたのは間違いし、それは今も変わらないけどな。」

「そうか、そういうことか。。。。」
「じゃ、君はなんでそんなに自分は美しいって思うんだい？」

「ん？？だって、どう見ても美しいだろ？」
「見てみろよ。そこのうんこまみれのヌマガエルなんて、薄茶色で背中にダサいイボがあるだろ？俺を見て見ろよ。こんな純白でツルツルした肌をしているだろ？」

そういいながら、与助に両腕を伸ばして見せた。

「いやいや、君だって小太郎と同じように背中にはイボがあるじゃないか！」

「ん？？この俺の背中にイボ？？そんな、うんこまみれと同じもんがこの美しい俺の背中にあるわけないだろ？」

「なぁ、緑？俺の背中にそんなのないよな？？」

そういいながら、背中を銀次郎に向けた。

「いや、、、君の背中にも小太郎と同じようなイボなのか、コブなのかわからないけど、、、あるよ。。」

「おいおい！嘘だろ？そこのうんこまみれと同じダサいイボがあるだって？？」

「そうさ！俺のイボと同じ感じで、お前の背中にも同じのがあるぞ！」

小太郎がニヤニヤしながら亜里沙の背中のイボを指さして言った。

「おいおい！！そんなわけないだろ？？この美しい俺の体にこのうんこまみれと同じイボがあるなんて！！！」

亜里沙が肩を落としてうなだれた。

「まぁまぁ、亜里沙、、、落ち込むことなんてないよ。」

「君は体が白いからそのイボ目立たないしさぁ～背中に一本白い線が入っていてカッコいいしさぁ～」

銀次郎が落ち込む亜里沙を励ますように言った。

「背中の白い線ってなんのことだ？？」

亜里沙がはっと顔をあげて聞いた。

「ん？？知らないのかい？君の背中にはね。お尻の先から口の先まで背中の真ん中に白い線が1本入っているんだよ？」

「そうそう、小太郎の背中にも入っているあの線みたいなのがね。」
そう言って、小太郎の背中の線を指さしながら説明した。

「ん？？うんこまみれのあの背中の線と同じ線が俺にも入っているというのか？」
「そんなわけないだろ？」
「あんなダサい線がこの俺の背中にあるわけないだろ？」
「なぁ、青？嘘だよな？緑が嘘ついているんだろ？？」
すがるような目をして与助に聞いた。

「いや、、、それがね。。。銀次郎が言うのは嘘ではないのだよ。。。確かに君の背中には小太郎と同じような白い線があるんだ。。。」
そう言いながら、亜里沙の背中の線を指さしながらいった。

「そんな、、、俺の背中には、あのうんこまみれと同じダサいイボがあって、あのダサい線があるというのか。。。。」
亜里沙はさらに肩を落として落ち込んだ。
それを見た小太郎が神妙な顔をしながら亜里沙に近づいて、肩を叩いて呟いた。

「まったく、、、、」
「君は、俺によく似ているな。」

つづく。



続きは当館公式note（https://note.com/toyotahotarum/m/m8542c0036333）で配信予定です。

※当館の受付で「妄想アマガエル日記読んでます！」と言って頂けたら、挿絵のポストカードをプレゼント中です！！

妄想アマガエル漫才（1）－5月9日（土）晴れ

与助ーどーもーこんにちは～！青色のアマガエルの与助です！

銀次郎ーどーもーこんにちは～！緑色のアマガエルの銀次郎です！

与助ーオイオイ！緑色のアマガエルって紹介はおかしいだろ！

銀次郎ーなんでだい！ほらっ僕は緑色をしているじゃないか！

与助ーいや、それは今は緑色だけど、コンクリートの壁にいる時は灰色に体の色が変わるし、茶色のところにいたら茶色くなるだろ！

だから、常に青色の俺はいつも青色なんだから、自己紹介で青色って言ってもいいけど、お前はいつも緑色というわけじゃないから使ったらダメだろ！！

銀次郎ーじゃ、なんて言ったらいいんだい？

与助ーそうだな～　今は緑色だけど、コンクリートの壁にいる時は灰色で、茶色のところにいる時は茶色の銀次郎です！ってのがいいんじゃないか？

銀次郎ーいやいや、それじゃ長すぎるでしょ！もっとこう短くて僕の特徴をみなさんに覚えてもらえるような紹介じゃないと覚えてもらえないじゃないか！

与助ーそうだな！じゃ、こういうのはどうだい。小さなころはオタマジャクシで今はカエルの銀次郎です！てのは。

銀次郎ーいや、それはカエルみんなそうじゃないか！！もっとこう僕のこの素晴らしさを皆さんに知ってもらえるような自己紹

介だよ！

与助ーそうだな～　じゃ、手に吸盤が付いていて、後ろ脚がこんなに長い銀次郎です！てのは。

銀次郎ーまぁ、さっきのよりはまだましだけど、それじゃアマガエルみんなそうじゃないか！！もっとこう、アマガエルの中の僕の魅力を知ってほしいんだよ！

与助ーだって、お前はもっとも標準的なアマガエルなんだから仕方ないじゃないか。それがお前の魅力だよ。

銀次郎ーそうかい、まぁ、体の色が青色のアマガエルの標準から離れた君から見たら僕の魅力はそこなんだね。

与助ーそうそう、ほんと羨ましいよ。どこにでもいるアマガエルの色してさ、どこにでもいるアマガエルの大きさしてさ、どこにでもいるアマガエルの、、

銀次郎ーどこにでもいるどこにでもいるって、、、いいすぎだよ！与助に聞いたのが間違っていたよ。じゃ、自己紹介の時はこう言うことにするよ。
どこにでもいるアマガエルの銀次郎です！って。

与助ーあっ！それが一番特徴掴んでいて、みんなに覚えてもらえるな！

銀次郎ー覚えてもらえるわけないだろ！もういいよ。どーもありがとうございました。

妄想アマガエル漫才（２）－５月１０日（日）晴れ

与助ーどーもーこんにちは！　青色のアマガエルの与助です！

銀次郎ーどーもーこんにちは！　だいたい緑色のアマガエルの銀次郎です！

与助ー最近さ～　暖かくなってきただろ？

銀次郎ーそうだね～　暖かくなってきた。そろそろ田んぼに水が入るから忙しくなるよ！

与助ーん？？なんでお前が忙しくなるんだ？関係ないだろ？

銀次郎ーなんでだよ！田んぼに水が入るってことは僕らは田んぼに移動して色々なことをしないといけないだろ？

与助ー色々なことってなんだい？

銀次郎ーそりゃ～　餌を食べて 寝たり、ギャギャって鳴いて 寝たり、水の中泳いで 疲れて寝たりだよ！

与助ー寝てばっかりじゃないか！どこが忙しいんだよそれの。

銀次郎ーそんなことないよ。寝る時間をこれまでよりだいぶ短くしないといけないんだから！

与助ーそんなに寝て、どこが短いんだよ！

銀次郎ーだって冬の間は数か月も寝ていたからね！

与助ーそっか、、、確かにな。冬に比べたら寝る時間は短くなったな。お前の言うとお、、って、言ってるそばから寝てるじゃないか！
もういいよ！どーもありがとうございました。

妄想アマガエル日記

2026 年 10 月 11 日　更新

著　　者　川野敬介
イラスト　　〃
発 行 者　　〃
発 行 所　豊田ホタルの里ミュージアム
山口県下関市豊田町中村 50-3　電話 083-767-0350
印　　刷　豊田ホタルの里ミュージアム事務所印刷機

ⓒ豊田ホタルの里ミュージアム　落丁・乱丁本もあるかもしれません。

